

年報

令和5年度（2023年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

2023 年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長 麻原きよみ

大分県立看護科学大学は、1998（平成 10）年に開学以来、2024（令和 6）年 3 月で 25 年と四半世紀になります。その間、草間朋子前々学長、村嶋幸代前学長の下に、全国に先駆けて様々な取り組みを行ってきました。2023 年度までで、学部卒業生は 1,860 名、大学院博士前期修了生 340 名、大学院博士後期修了生 35 名を数えます。

新型コロナウイルス感染症も昨年の 5 月に感染症法の 5 類となり、今まで人との交流等が制限された教育研究、社会貢献活動、イベント等も 2023 年度は対面や対面とオンラインの併用で実施されるなど、活発さを取り戻しました。コロナ禍を経て、それ以前に戻るのではなく、ICT の活用など、教育研究の実施方法や参加・交流方法について新たな展開ができるようになりました。学生や教員、地域の人々との交流の促進や多様な教育研究方法の展開によって、本学の活動の発展につながっていくことが期待できます。

本学の内部質保証体制において、2023 年度、法人組織に内部質保証推進会議が位置付けられました。全学的な計画、最終的評価は内部質保証推進会議が行いますが、本学の教育研究、社会貢献、組織運営について、各活動・部署の点検・評価を実際に行い、PDCA サイクルを駆動させて、質保証と改善・向上を継続して行う核となるのが自己点検・評価委員会です。

本年報は、毎年教員や職員が取り組んできました教育研究等の実績をまとめたものですが、年度の実績とそれを分析し、次年度に向けた課題や計画についても記載しております。本学の年報は実績の報告だけでなく、本学の目的および使命を果たすために本学が絶えず改善・向上に取り組んでいることを社会に対して説明し、示す意味もあります。

年報をお読みいただき、忌憚のないご意見、ご指導賜りたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2023 年度 大分県立看護科学大学 トピックス

村嶋理事長・学長が退任、後任に麻原氏

2012 年 4 月から 12 年間、理事長・学長を務めた村嶋幸代氏が退任し、後任として、麻原きよみ氏の就任が決定しました。



村嶋幸代 氏



麻原きよみ 氏

初代学長・草間朋子名誉学長が フローレンス・ナイチンゲール記章を受章

本学の初代学長である草間朋子名誉学長が、放射線看護に関する活動や NP の養成教育の功績が認められ、第 49 回フローレンス・ナイチンゲール記章を受章されました。本学講堂で、9 月 16 日（土）に受章記念講演会を開催しました。



国家試験合格トリプル 100%

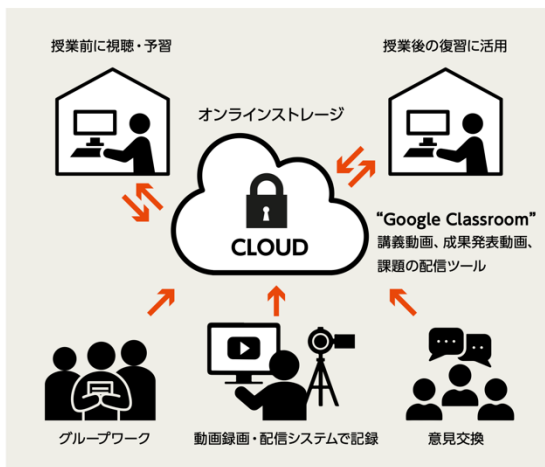
看護師・保健師・助産師国家試験の受験生全員が合格しました。NP 資格認定試験も 3 年連続全員合格でした。



患者情報を確認しながら意見交換



「看護技術オンライン教育ツール」の
手順動画と、動画収録・データ管理システムで
配信する「学生の成果発表動画」は、
繰り返し視聴できるため、授業前だけでなく
グループ活動中や授業後の自己学習にも、
教材として学生が主体的に活用できます。

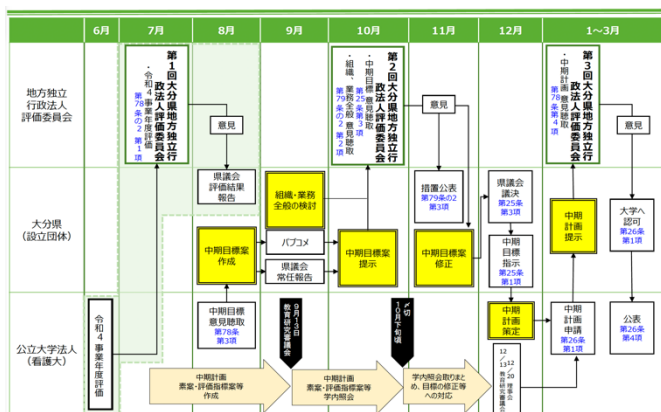


学生の主体性を高めること、臨床判断ができるようになる基礎能力を育成するため、「ICT」を活用した授業構成にするとともに、実習室の環境を整備しました。例えば、実習室で行われる基礎看護技術を学ぶ授業では、「看護技術オンライン教育ツール」や、「Google Classroom」に配信された講義動画を、自宅など場所を選ばずに繰り返し、自主的に視聴・予習することができます。これらは、授業中や授業後にも同様に活用することができます。学習教材をオンラインで配信することで、学内の授業では、学生が技術習得のために時間を費やすことができます。学生が行う看護技術の展開は、複数のカメラ・マイクで多角的に撮影し、「動画録画・配信システム」で録画します。録画した映像を参考に、授業中に参加者全員が各々視聴し、学生間で意見交換を行いながら自らの技術展開を振りかえり、反復練習につながるなど効率的に技術習得ができます。授業はグループワークを中心に展開するため、グループ内で「いつ」「なに」を行うかを学生が自主的に考えて取り組めるようになりました。このように自宅での予習・大
学での授業・自宅での復習という流れを習慣化して、主体的に学修全体に取り組
めるシステムを構築しました。

DX・シミュレーション教育を推進

第4期中期計画を策定

1年をかけて本学の第4期中期計画・目標（2024-2029）を策定し、大分県及び大分県地方独立行政法人評価委員会に提出し、認可されました。今期から、新たに具体的な数値目標を設定しました。



学生の国際交流を再開

8月21日～25日の5日間、本学の学生6名と教員2名が、韓国の蔚山（ウルサン）大学を訪問しました。また、2月12日～16日の5日間、韓国の仁荷（インハ）大学校医科大学看護学科の6名、教員1名が来学し、テレビ大分や大分朝日放送で、その様子が紹介されました。



第25回看護国際フォーラムを開催

第25回看護国際フォーラム「看護の未来を拓く起業という視点—地域における看護実践から—」を大分県看護協会との共催で10月28日（土）にオンラインで開催しました。

プログラム

13:00～13:05 【開会挨拶】 村嶋 幸代 大分県立看護科学大学 理事長・学長

13:05～13:50
「自由に看護し暮らすための選択肢としての起業・複業」
 キーワード 複業、プライマリ・ケア、ヒューマンソフ
 LIVE 講師：吉江 悟 一般社団法人 Neighborhood Care 代表理事

13:50～14:35
「日本の看護を世界に輸出しよう！」
 キーワード 訪問看護、産業保健、スポーツ看護、在宅治療、民間救急
 LIVE 講師：川添 高志 ケアプロ株式会社 代表取締役

14:45～15:35
「高齢者ケアの変革：在宅ケア組織の看護師が導く、エイジフレンドリーな環境でのパーソンセンタードケア—地域との協働を通して—」
 キーワード 協働実践、在宅ケア組織、看護の質、地域のニーズをつかむ、ステークホルダーをまきこむ
 REC 通訳あり 講師：Sarit Orlofsky ベース大学校看護学部 准教授、在宅医療サービス Sterling Care, Director

NP 研究室を新設

日本の大学で初めて NP（診療看護師）研究室を設置しました。また、成人・老年学研究室を成人看護学研究室と老年看護学研究室に分けました。

NP研究室【実践者養成NPコース】

診療看護師(NP)とは
(日本NP教育大学院協議会)

NP教育課程を修了し、NP資格認定試験に合格した者で、患者のQOL向上のために医師や多職種と連携・協働し、倫理的かつ科学的根拠に基づき一定レベルの診療を行うことができる看護師

診療看護師(NP)に
必要とされる7つの能力

1. 包括的健康アセスメント能力
2. 医療処置・管理の実践能力
3. 熟練した看護実践能力
4. 看護マネジメント能力
5. チームワーク・協働能力
6. 医療保健福祉制度の活用・開発能力
7. 倫理的意思決定能力

本学における
NP教育課程
修士課程NP教育
(55単位以上)

演習 強化される基礎科目 統合力
 理論 Physical Assessment (フィジカルアセスメント) Pharmacology (薬理学) Pathophysiology (病態生理学) 臨床実習
 医学知識

本学における
NP教育課程
厚生労働大臣指定
特定行為研修 指定研修機関

特定行為研修
在宅パッケージ
救急パッケージ
その他 19行為のオプション
17区分 31行為

若葉祭を4年ぶりに開催

第23回若葉祭を5月20日（土）～21日（日）に4年ぶりに開催しました。



売店を無人化・キャッシュレス化

生協による売店の閉鎖が決定し、2024年4月よりキャッシュレス決済や交通系ICカード等が利用できる無人のセルフレジを導入することになりました。



2023 年度年報・目次

トピックス

1. 学内行事	1
2. 入学試験等	5
3. 学生の状況と進路	13
4. 授業等	18
5. 研究室活動	114
6. 研究助成・事業助成等	139
7. 研究業績	146
8. 社会貢献	159
9. 教学・事務組織	179
10. 名簿	227

1 学内行事

1-1 学年暦

令和5年度 学 年 暦

前期

4 月

7	入学式
10	全学オリエンテーション
10,11	新入生オリエンテーション
11	2～4年次生授業開始
11～21	履修登録
12	1年次生授業開始
19～	予防的家庭訪問実習開始
25,26	健康診断

5 月

15～6/9	在宅看護学実習, 地域看護学実習 (4年次生)
17	キャンパススクリーンデー
20,21	若葉祭

6 月

19	開学記念日
19～7/7	総合看護学実習(4年次生)

7 月

15	オープンキャンパス
16	夏期休業開始(1年次生、2年次生)
19	大学院特別選抜
21	夏期休業開始(3年次生、4年次生)
19～31	小児看護学(保育所)実習(3年次生)

8 月

23	大学院入学試験
----	---------

9 月

2	夏期休業終了(1年次生、2年次生)
5	夏期休業終了(3年次生、4年次生)
6	二学期授業開始(1年次生、2年次生)
4～11/24	老年看護学実習, 成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習(3年次生)
23	公開講座

後期

10 月

2	後期授業開始
28	看護国際フォーラム

11 月

22	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
25	学校推薦型選抜試験および社会人選抜試験
28	卒業研究論文提出締切(4年次生)

12 月

1	三学期授業開始(1年次生、2年次生)
1,4	卒業研究発表会
5～18	看護アセスメント学実習(2年次生)
24	冬期休業開始

1 月

7	冬期休業終了
12	大学入学共通テスト準備 (1,2,3,4年次生休講)
13,14	大学入学共通テスト
16～27	基礎看護学実習(1年次生)
26	大学入学共通テスト追試験準備 (2,3,4年次生休講)
27,28	大学入学共通テスト追試験

2 月

未定	看護師国家試験
26	進級試験(2年次生)
25	一般選抜試験(前期)および私費外国人留学生選抜試験
29	後期授業終了

3 月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験(後期)
18	卒業式・修了式

1-2 オープンキャンパス

7月15日(土)に対面開催した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業、キャンパスツアー実施した。開催に先立ち、事前に朝日新聞と読売新聞に広告を掲載し、広報活動を行った。当日は高校生他 234 名、保護者 141 名、合計 375 名の参加があった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。しかし、キャンパスツアーについては「ひとつの場所にもう少し時間をかけて説明して欲しい」等の意見もあり、本学の魅力が伝わるように方法を検討していく必要がある。また、予約開始後すぐに定員に達してしまったため、当日参加できない方に向けて、キャンパスツアーは随時行っていることを、大学ホームページや SNS (Facebook、Instagram) でお伝えした。来年度は定員を増やすことを予定している。

1-3 看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催で第 25 回看護国際フォーラムを令和 5 年 10 月 28 日(土)に Zoom ウェビナーで開催した。テーマを「看護の未来を拓く企業という視点 一地域における看護実践から」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。講演後の総合討論には、国内講師 2 名がライブ参加し、活発な質疑と討論が行われた。参加者は 227 名と大盛況であり、参加者背景は高校生、看護職、教員の他、企業からの参加もあった。参加者アンケートの結果では講演内容について 97%、質疑応答について 94%が「満足」と回答しており、全体として参加者の満足度は高かった。

1-4 国際交流

MOU 締結校である韓国の蔚山大学、仁荷大学、およびインドネシアのムハマディア大学と以下の国際交流を実施した。

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護過程学生受入れと交流

蔚山大学から学部生 6 名と同行教員 2 名を 7 月 17 日から 7 月 21 日までの 5 日間受入れ、県内 2 箇所の施設訪問や学内での学生交流を実施した。令和 5 年度の学内交流では、学生が日本の文化や看護教育についてプレゼンテーションする等新たな試みを組み込んだ。実施後の蔚山大学学生へのアンケートでは、施設見学や学生との交流について、全員が「満足」と回答していた。

2) 蔚山大学校医科大学への本学学生派遣と交流

4 月～5 月に学部 2・4 年次生から派遣希望者を募集し、6 名を選出した。令和 5 年度は COVID-19 感染拡大予防の観点から、9 月から実習を開始する 3 年次生の募集は控えた。

8月21日から8月25日までの5日間、本学の学部2年次生4名、4年次生2名の計生6名が同行教員2名と共に韓国の蔚山大学校医科大学看護学部を訪問した。現地では大学での講義や周辺地域の施設見学等に参加し、プログラム全体を通しての経験について、全員が「満足」と回答した。参加学生は学生交流プログラムの目的、および派遣前に学生自身が立てた目標を達成できた。

3) 韓国の仁荷大学校医科大学看護過程学生受入れと交流

今年度はCOVID-19感染拡大の影響で令和3年度から延期となっていた韓国インハ大学医学部看護学科の本学訪問が実現し、インハ大学の学部生6名と教員1名を2月12日から16日の5日間受入れ、県内3箇所の施設訪問と学内での学生交流を実施した。本学全学年から交流希望学生を募集し、2～4年次生計13名の学生が交流に参加した。本交流ではテレビ局と新聞社から取材を受け、本学の国際交流活動について県民に向けて情報発信する機会となった。双方の参加学生は交流内容について全員が「満足」と回答していた。

4) インドネシアのムハマディア大学とのオンライン学生交流

インドネシア ムハマディア大学と、国際交流の一環として国際看護学演習の授業時間を活用し、9月21日（木）にオンライン学生交流を実施した。本学から2年次生41名、UMYから42名が参加し、双方の大学で2名ずつのペア、4名ずつのグループに分かれてオンライン交流に臨んだ。互いの文化や看護について学ぶ貴重な機会となった。

1-5 若葉祭

5月21日（土）～22日（日）に大学祭である若葉祭を実施した。令和2～4年度は新型コロナ感染症予防のため開催を中止したため3年ぶりの開催であった。2年生、3年生の実行委員および運営委員が中心となって企画運営し、大学祭のテーマは「和輪笑」であった。今年度の目標は3年ぶりの大学祭の開催ができることであり、小規模で学生自身が楽しめることをコンセプトとして準備企画した。しかし、当日は、学生だけではなく地域や外部の方々の参加もあり講堂内でのステージイベントは盛況であった。また、サークル・教職員のほか実習関係の事業所による模擬店も複数出店された。来場者は約500人名程度であり、コロナ禍以前の大学祭よりも少なかったが、今年度の大学祭開催の目標は達成し成功裏に終了した。次年度も大学祭に参加したいという地域の方々の声もあり、次年度の開催にむけて、学生自身も意欲と達成感を得られた。

今年度は若葉祭を運営した経験のない学生の運営であり、学生生活支援委員会の教職員によるサポートが必須であった。次年度にむけて学生が主体的に運営できる体制を整えていきたい。

1-6 公開講座

9月23日（土）に対面（大分県立看護科学大学講堂）とオンライン（Zoom）で同時開催した。今年度のテーマは「睡眠と健康－豊かな人生のために－」と題して、琉球大学教育学部保健体育専修准教授の笹澤吉明氏が「元気で賢い子どもを育てる沖縄の眠育の実践例」について、本学精神看護学研究室教授の影山隆之氏は「高齢になっても快適睡眠を」についてそれぞれ講演した。告知のチラシは、県内の小学校、中学校、高等学校、保育施設、病院や各種施設等に配布した。また、大分合同新聞と SNS 広告にも記事を掲載し広報した。参加者の年代は 10 代から 60 代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者に限らず、高校生、会社員、大学教職員など様々で、総勢 179 名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が 97%と高い評価が得られた。参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く 95%であり、情報源は「大学からの案内」、「チラシ」、「本学の HP」、「SNS」の 4 つで約 8 割を占めた。中でも「SNS」は 60 代以上の集客につながっていた。今後の開催方法としては、対面希望とオンライン希望がそれぞれ 60%と多かったため、次年度も対面とオンラインの同時開催を計画する。また、大分県民に関心の高いテーマを選定して開催できるよう企画する。

1-7 アニュアルミーティング

アニュアルミーティングは、教員相互の研究内容を知る機会とすると同時に研究活動のスキル向上を図ることが目的で、学内競争的研究費を受託した全教員とその他の助教以上の教員は 3 年に 1 度以上の発表をすることになっている。

今年度の開催は、3月15日（月）13:00～16:45 に実施された。発表は 21 演題、参加者は発表者 21 名含め 53 名であった。発表の要旨集は、図書館に所蔵された。今年度は昨年度と同様オンライン（Zoom）による発表形式とし、全体を 2 群に分け、途中休憩を入れ、1 演題あたり 8 分（演者による発表 2 分、質疑応答 6 分）とした。演者による口頭説明が短いため、2 日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧し、当日の質疑を行う方式とした。11 月に発表予定者に日程を、1 月に演題登録、2 月に発表要領の連絡、2 月下旬に要旨〆切とした。発表時は、画面共有するデータ（形式自由）を用いてディスカッションし、活発な意見交換が行われた。

次年度は、今年度の発表方法を振り返り、オンラインか対面による形式を検討する。

2. 入学試験等

2-1 学部入試

令和6年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験結果の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員				
			一 般 選 抜		特 別 選 抜		
			前期日程	後期日程	学校推薦型	社会人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人の「若干名」は学校推薦型の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

入学者選抜試験結果の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県内 (率)	男性 (率)
特 別	学校推薦型	74	74	31	2.4	31	31 (100.0)	0 (0.0)
	社会人	0	0	0	—	0	—	—
	私費外国人留学生	0	0	0	—	0	—	—
	計	74	74	31	2.4	31	31 (100.0)	0 (0.0)
一 般	前期日程	69	68	46	1.5	42	28 (66.7)	3 (7.1)
	後期日程	105	26	11	2.4	7	4 (57.1)	0 (0.0)
	計	174	94	57	1.6	49	32 (65.3)	3 (6.1)
合 計		248	168	88	1.9	80	63 (78.8)	3 (3.8)

試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	学校推薦型	総合問題 面接	令和5年 11月25日(土)	令和5年 11月1日(水)～11月9日(木)
	社会人			
	私費外国人留学生	総合問題 面接	令和6年 2月25日(日)	令和6年 1月22日(月)～2月2日(金)
一 般	前期日程	総合問題 面接	令和6年 2月25日(日)	令和6年 1月22日(月)～2月2日(金)
	後期日程	総合問題 面接	令和6年 3月12日(火)	

2-1-1 特別選抜

① 学校推薦型選抜

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接等	計
学校推薦型	200	50 注1) 段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	250

注1) 面接等 50 点に、出願書類（活動報告書）の評価点 20 点を含む。

② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を設けているが、志願者はなかった。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合は、総合点にかかわらず不合格とする	240

③ 私費外国人留学生選抜

日本国籍を有しない者であって、所定の要件を満たした在留資格を有する者に対して、私費外国人留学生選抜を設けているが、志願者はなかった。

「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
私費外国人留学生	200	段階評価を行い、その評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

2-1-2 一般選抜

① 前期日程

令和 6 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1 科目	5 教科 7 科目 または 5 教科 8 科目
地理歴史 ・公民	「世界史 A」 「世界史 B」 「日本史 A」 「日本史 B」 「地理 A」 「地理 B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から 1 科目 2 科目受験した場合は、いずれか高得点の科目を合否判定に利用	
数学	『数学Ⅰ・数学 A』 『数学Ⅱ・数学 B』	2 科目	
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記科目から次の A または B を選択	
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」	A 理科①から 2 科目及び 理科②から 1 科目 B 理科②から 2 科目	
外国語	『英語』	1 科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	100 注 1)	50 注 2)	100 注 3)	100 注 4)	200 注 5)	—	—	550
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	100	50	100	100	200	200	30	780

注 1) 「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「地理歴史」「公民」50 点は、1 科目 100 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 3) 「数学」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。

注 4) 「理科」の配点は、計 200 点を 100 点に換算する。

注 5) 「外国語」の「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

② 後期日程

令和 6 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目			教科・科目数
国語	『国語』	1 科目	3 教科 3 科目 または 3 教科 4 科目 を選択 4 教科を受験した場合は、 高得点の上位 3 教科を合否 判定に利用 地理歴史・公民、数学、理科において複数科目を受験した場合は、 高得点の科目をその教科の 得点とし、合 否判定に利用	5 教科 7 科目 または 5 教科 8 科目
地理歴史 ・ 公民	「世界史 A」 「世界史 B」 「日本史 A」 「日本史 B」 「地理 A」 「地理 B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から 1 科目		
数学	『数学Ⅰ・数学 A』 「数学Ⅱ」 『数学Ⅱ・数学 B』	左記科目から 1 科目		
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」 ② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」	左記科目から次の a または b を選択 a 理科①から 2 科目 b 理科②から 1 科目		
外国語	『英語』	1 科目		

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・ 公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	(100) ^{注 1)}	(100)	(100)	(100)	200 ^{注 2)}	—	—	500
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	300				200	200	30	730

注 1) 「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2) 「外国語」の英語は、「英語」は、「リーディング」及び「リスニング」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-2 令和6年度大学院看護学研究科博士課程（前期）

2.2.1 特別選抜

概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コース、に特別選抜を設定して実施している。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 （前期）	看護学専攻	実践者 養成	広域看護学コース	3名程度
				助産学コース	3名程度
				NPコース（老年・小児）	若干名

試験の概略

（単位：人）

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
修士課程	8	8	8	1.0	8	8(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
小 論 文 面 接	令和5年 7月19日（水）	令和5年 5月30日（火）～6月19日（月）

2.2.2 一般選抜

概要

大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 （前期）	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	NPコース	10名 （うち5名は 地域枠、特別 選抜枠を含 む）
				広域看護学コース	10名 （特別選抜枠 を含む）

				助産学コース	10 名
				看護管理・ リカレントコース	2 名
		健康科学専攻			2 名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和 5 年 8 月 23 日 (火)	令和 5 年 7 月 24 日 (月) ～7 月 28 日 (金)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	32	32	22	1.5	19	9(47.4)	4(21.1)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

(二次募集)

概要

8 月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に 12 月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		2 名
			実践者 養成	広域看護学コース	3 名
				看護管理・リカレン トコース	1 名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和 5 年 12 月 7 日 (木)	令和 5 年 11 月 8 日 (水) ～11 月 15 日 (水)

試験の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	4	4	4	1.0	4	3(75.0)	1(25.0)

2.3 大学院博士課程（後期）

2.3.1 進学審査

募集人員

研究科名	課 程 名	専 攻 名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名
		健康科学専攻	若干名

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
研究発表 面 接	令和 6 年 2 月 (論文審査時に併せて実施)	令和 5 年 12 月 22 日 (金) ～ 令和 6 年 1 月 6 日 (金)

審査の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	0	0	0	0	0	0(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

2.3.2 一般選抜

概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課 程 名	専 攻 名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名
		健康科学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
総合問題 口頭試問	令和 5 年 8 月 23 日 (火)	令和 5 年 7 月 24 日 (月) ～ 7 月 28 日 (金)

審査の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	2	2	2	1.0	2	1(50.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

(二次募集)

概要

8月実施した試験の結果、12月再度募集を行なった。

募集人員

研究科名	課 程 名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査科目等

試 験 科 目	試 験 期 日	出 願 期 間
総合問題 口頭試問	令和5年 12月7日（土）	令和5年 11月8日（水）～11月15日（水）

審査の概略

（単位：人）

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	0	0	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)

3 学生の状況と進路

3-1 在学生の状況（令和5年4月1日現在）

学生総数 418 名（学部生 331 名、院生 87 名）

（単位：人）

学 生 数	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	83	58	25	6	77
2 年 次 生	86	58	28	2	84
3 年 次 生	87	58	29	5	82
4 年 次 生	75	56	19	5	70
計	331	230	101	18	313
割 合（％）	100.0	69.5	30.5	5.4	94.6
大学院博士前期（1年次生）	28	17	11	2	26
大学院博士前期（2年次生）	36	21	15	10	26
大学院博士後期（1年次生）	1	0	1	1	0
大学院博士後期（2年次生）	4	4	0	1	3
大学院博士後期（3年次生）	18	16	2	6	12
計	87	58	29	20	67
合 計	418	288	130	38	380

3-2 奨学金・授業料減免

■日本学生支援機構奨学金実績 （人）

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	102	75	57
大学院	9	3	-
合計	111	78	57

■その他奨学金実績

- ・ 壽崎育英財団奨学金 学部生 4 名 大学院生 2 名
- ・ 三和酒類地域文化振興会奨学金 学部生 3 名
- ・ 大分県看護師等修学資金 学部生 1 名 大学院生 1 名

■修学支援制度授業料・入学金減免実績（学部） （人）

	前期	後期	入学金
全額免除	27	27	13
2/3免除	14	11	4
1/3免除	9	10	3
合計	50	48	20

修学支援制度減免額計 24,595,300 円

■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績（学部・大学院） （人）

	学部		大学院	
	前期	後期	前期	後期
全額免除	1	1	4	3
2/3免除	1	2	0	1
1/3免除	1	0	1	2
合計	3	3	5	6

本学制度授業料減免額計 3,482,700 円

3-3 卒業生・修了生の進路

3-3-1 学部卒業生

1 卒業生の状況（74名）

出身地別	県内	55 名	74.3 %
	県外	19 名	25.7 %
進路希望別	就職	59 名	79.7 %
	進学	15 名	20.3 %

2 進路決定状況

就職	決定	58 名	98.3 %
	未定	1 名	1.7 %
進学	決定	14 名	93.3 %
	未定	1 名	6.7 %

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	30 名 (県内出身者27名＋県外出身者3名)	51.7 %
大分県外	28 名 (県内出身者15名＋県外出身者13名)	48.3 %
計	58 名	100.0 %

(2) 就職先

独立行政法人等	24 名	41.4 %
都道府県	9 名	15.5 %
市町村	2 名	3.4 %
民間	21 名	36.2 %
その他	2 名	3.4 %
計	58 名	100.0 %

大分県内	大分大学医学部附属病院(13)、大分県立病院(7)、厚生連鶴見病院(2)、大分県教育委員会(2) 西別府病院(2)、大分赤十字病院、大分岡病院、湯布院病院、他
大分県外	九州大学病院(3)、福岡大学病院(2)、虎の門病院(2)、日本医科大学附属病院、東京慈恵会医科大学附属病院、東邦大学医療センター大橋病院、東京医科大学病院、河北総合病院、関西青少年サナトリウム、山口労災病院、福岡市立こども病院、久留米大学病院、浜の町病院、福岡県済生会二日市病院、福岡赤十字病院、湘南美容外科クリニック、DIOクリニック、長崎医療センター、佐賀大学医学部附属病院、熊本赤十字病院、熊本大学病院、宮崎大学医学部附属病院、京都市教育委員会 他

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 9名（広域看護学コース4名、助産学コース5名）
 宮崎県立看護大学大学院 1名
 岡山大学看護教諭特別科 1名
 宮崎県立看護大学助産別科 1名
 熊本保健科学大学助産別科 1名
 兵庫県立総合衛生学院 1名

3-3-2 大学院博士課程（前期）修了生

1 修了生の状況（修了生 29 名）

出身地別	県内	13 名	44.8 %
	県外	16 名	55.2 %

2 進路決定状況

就職	決定	27 名	96.4 %
	未定	1 名	3.6 %
進学	決定	1 名	100.0 %
	未定	0 名	0.0 %

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	10 名	37.0 %
大分県外	17 名	63.0 %
計	27 名	100.0 %

(2) 就職先

独立行政法人等	14 名	51.9 %
都道府県	3 名	11.1 %
市町村	6 名	22.2 %
民間	4 名	14.8 %
大学	名	0.0 %
その他の	名	0.0 %
計	27 名	100.0 %

大分県内	研究者	なし
	広域看護学	大分県、大分市(2)
	助産学	大分大学医学部附属病院(3)、別府医療センター
	N P	大分医療センター、南海医療センター、曽根病院
	看護管理・リカレント	-
大分県外	健康科学専攻	なし
	研究者	なし
	広域看護学	熊本県、福岡市、小倉記念病院
	助産学	武蔵野赤十字病院(2)、横浜市立病院、名古屋市立病院、九州大学病院、小倉医療センター
	N P	福岡東医療センター(2)、名古屋医療センター、関門医療センター、九州労災病院、長崎大学病院、長崎県老岐病院
	看護管理・リカレント	-
	健康科学専攻	筑紫野市

※既に就職している施設名も併せて記載。

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院看護学研究科博士課程（後期）健康科学専攻

3-3-3 大学院博士課程（後期）修了生

1 修了生の状況（修了生 3 名）

出身地別	県内	3 名	100.0	%
	県外	0 名	0.0	%

2 進路決定状況

就職	決定	3 名	100.0	%
	未定	0 名	0.0	%

進学	決定	0 名	0.0	%
	未定	0 名	0.0	%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	2 名	66.7	%
大分県外	1 名	33.3	%
計	3 名	100.0	%

(2) 就職先

独立行政法人等	0 名	0.0	%
都道府県	0 名	0.0	%
市町村	0 名	0.0	%
民間	1 名	33.3	%
大学	2 名	66.7	%
その他	0 名	0.0	%
計	3 名	100.0	%

就職先	大分県立看護科学大学、活水女子大学、西田病院
-----	------------------------

※既に就職している施設名を記載。

4 授業等

4-1 学部

コミュニケーション論

1 年次 1 学期

関根剛

本科目は、コミュニケーションの基礎となる情報の発信・理解・受信をキーワードとした内容の講義を行った。一昨年度は 9 月に講義が集中していたが、昨年度からは週 1 回の講義であったことに加えて今年度は、対面講義が再開することができたため、講義を通じて新入生同士のコミュニケーションや交流の促進にもつなげることができた。また、遠隔講義で用いたチャットによる質問の受付等は対面講義では行うことは難しかったが、講義と関連する動画や Homepage 情報を講義前後に示す方法は有効に継続することができた。本科目は教室における座学ではあるが、遠隔講義の際のメリットを活かすことで、よりアクティブな学習経験を促進する方法を次年度も導入していきたい。

人のこころの働き

1 年次 1 学期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する人間の脳の機能、2 年次開講科目「行動療法論」の理解に必要なオペラント条件づけの基本的知識について、反転学習課題、講義時間内の小実験、協働学習の技法を援用した話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。対面講義時間中に、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を提示し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供すると同時に、適宜フィードバックを行った。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

大学ナビ講座

1 年次 1 学期

福田広美、安部眞佐子、稲垣敦、小野美喜、甲斐優子、影山隆之、杉本圭以子、関根剛、濱中良志、村嶋幸代

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基

本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学カリキュラムの方針・考え方」「大学で学ぶということ」「メモ・ノートの取り方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「心の健康維持増進・健康な生活維持向上」「伝える技術：文を書く、レポートを書く」「伝える技術：話す、プレゼンする」「学生生活の送り方」「看護と将来の進路」について授業を行った。今年度は大学における学びを効果的に行う上で欠かせない、大学生生活の送り方について新たに授業を行った。学生が、大学における学習方法や学生生活の送り方を学び、将来の進路を考えることができた。学生がどのような点に留意しながら学ぶべきか、早期から対策がとれるよう必要な知識を教育できた。ICT や DX などさまざまな情報ツールを活用した教育場面も増えている。このため次年度は、情報リテラシーについて新たに講義を加え、学生の大学における学習を効果的にできるよう授業内容を充実させることとする。

英語 I-A1

1 年次 1 学期

宮内信治

英語母音について発音記号の認識、習得を目標に記号の確認と発声法を教授し確認した。英和辞典での新出語確認の際に応用することを意識させていきたい。講読では文の要素分析と品詞分類を確認し英文法を理解させた。音声面では音源 CD を活用して発音の英語らしさを意識させた。今後はイントネーションの含意と役割を意識させたい。英文書写、音読暗唱を課題とした。程よい新鮮味と緊張感を持って取り組ませることができた。多読では、英語で物語を読んで理解する楽しみを体験させた。既知の物語との対比から知恵を引き出すなど、興味関心を惹起していきたい。

英語 I-B1

1 年次 1 学期

G.T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

環境保健学概論

1 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

世界保健機関（WHO）レポートに沿って、WHO が定義する環境保健とその基本的な考え方について教示し、環境中の様々な有害因子が人間の健康に及ぼす影響を理解するための方法を中心に講義している。健康障害や疾病発生を予防し、健康増進に寄与するための方策について、最新の知見や技術などを取り上げ、講義を進めることで疫学研究に必要な知識を修得できるよう努めた。今年度より対面授業の再開により、学生からの質問に適宜対応することができ、オンライン講義で好評だった相互作用の要素を継続しつつ、学生の思考能力を養う環境を提供できた。また、試験成績において顕著な差は見られず、全体として安定した学習成果が得られた。学生のより積極的な学習を促進するため、学生自身が関心を持った環境保健問題とそれに対する具体的な解決策を考案する課題を課すなど、多角的な視点でアプローチできる能力を養うことを継続したい。

健康情報処理演習Ⅰ

1 年次 1 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

看護師に求められる ICT 活用能力のベースとなる基本技術（ワープロ・プレゼンテーション・表計算ソフト、画像処理、データベースの利用）について教授した。授業では、「①事前学修→②授業→③事後学修」の流れが明確に伝わるように Google Classroom を最大限に活用し、①事前学修用の資料や動画、②講義・演習で使う資料・データファイル、③事後学修用の課題と解説、を各回で提示した。提出課題や実技試験の結果から判断すると、各アプリケーションの活用能力については大部分の学生について、身に付いており、授業の到達目標はおおむね達成できたと言える。しかし、現在様々な環境下で利用できるアプリケーションの影響によりファイル管理に対する意識の低下が見受けられた。今後は、高校までに学ぶ ICT 活用の基盤となる部分の振り返りも意識しながら進めていきたいと考えている。

生体構造・機能論Ⅰ

1 年次 1 学期

濱中良志

今年度は対面形式で循環器や呼吸器や消化器などの、人体の構造（解剖学）と機能（生理学）を教授した。事前学習および事後学修として動画配信を行った。

生体構造・機能論Ⅱ

1 年次 1・2 学期

濱中良志

今年度は、神経や内分泌や腎臓などの人体の構造（解剖学）機能（生理学）通して教授した。動画配信を行い事前学習・事後学習に役立てた。

健康運動ボランティア演習

1 年次

稲垣敦

昨年度は COVID-19 のため、ボランティアの参加は 7 つのイベントのみであった。今年度は COVID-19 が 5 月 8 日付で 5 類移行し、また、新規のボランティアが 4 つ加わったことにより、11 のイベント（13 回）で、延べ 194 名の学生がボランティアに参加できた。しかし、この 13 回という回数は COVID-19 以前の約半数である。次年度も、イベントの再開状況を見ながら、ボランティアのできるイベントの新規開拓を進める。

今年度、学生が参加した 11 のボランティアは以下の通りである：①大分市地域おこし協力隊文化芸術振興部門「ななせ美術館事業」『春のアート縁日♪』（6/4）、②大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（9/2、12/2、2/3）、③富士見が丘連合自治会主催「夏まつり」（7/22）、④河川協力団体ななせ交流会主催「ちっちゃなちっちゃな花火大会」（9/2）、⑤富士見が丘団地わかば老人クラブ主催「わかば会サロン」（9/23）、⑥大分トリニータ「大宮アルディージャ戦」（9/30）、⑦野津原商工会・大分市主催「ななせの里まつり」（11/5）、⑧大分県教育委員会・大分県スポーツ協会主催「総合型地域スポーツクラブ交流会」（11/23）、⑨河川協力団体ななせ交流会主催「親子凧あげ大会」（1/27）、⑩九州陸上競技協会・大分県・大分県教育委員会・別府市・別府市教育委員会・大分市・大分市教育委員会・毎日新聞社・RKB 毎日放送・OBS 大分放送主催「別府大分毎日マラソン」（2/4）、(11)富士見が丘連合自治会・大分市主催「森林探検ウォーキング」（3/30）。

スポーツ救護（救護法を含む）

全学年

稲垣敦

昨年は COVID-19 の影響で講習会が開催されなかったが、今年は 9 月 30 日、10 月 1 日の 2 日間にわたり、J:COM ホルトホール大分で開催された。この科目は選択科目であるが、72 名が受講し、認定試験に合格した。但し、日本赤十字社の救命救急の基礎講習等の実技が含まれており、また、他に看護職等も受講するため、受講を希望した学生全員が受講することはできなかった。次年度は、スポーツ救護スキルアップ研修会の受講も検討する。

生命科学入門

1 年次 1 学期

小嶋光明、定金香里

看護学を専攻する学生が身につけておくべき基礎教養として生物の基本的事項を講義した。医療の分野で利用されているバイオテクノロジーも紹介し、生物学を学ぶ必要性を理解できるよう努めた。

2023 年度はオンラインから対面での講義に戻し、学生と直接対話することで、理解が深まるよう心がけた。また、高校までに生物を十分に習得できなかった学生にも配慮して、毎回講義で確認テストを行うことにより学生の理解度を把握しながら講義を進めた。次年度も同様の取り組みを継続していきたいと考えている。

看護サイエンス入門

1 年次 1 学期

吉田成一、恵谷玲央、岡田悠希

看護学を学修するにあたり身につけておくべき物理、化学および数学に関する基本的な事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった内容を再学習すると同時に看護学との関係についても意識を向けるよう努めた。61 名が履修登録を行い、61 名が成績評価に関する試験を受験し、61 名全員が単位修得に至った。

物理、化学、数学の各領域間で平均点に大きな差は生じなかったが、物理分野を苦手とする受講生が多かった。また、個人毎の成績では 3 領域間で学修度合いに大きな差が生じた学生もいた。特定領域の学修習得状況が悪かった学生が、その後の科目履修に障害が生じるかについて今後評価する必要がある。また、講義で使用する資料について、教員作成の資料で十分という意見があげられたため、次年度は、テキストを用いず、教員作成資料で講義を行い、学修取得状況に影響が生じるか確認する。

看護学概論

1 年次 1 学期

秦さと子、廣田真里

本科目は、看護を原理的、本質的に理解することで看護を探究し、創造していく基盤を養うことを目的としている。看護学を学ぶ最初の科目として、看護への興味や看護学への学習動機となるように、得られた知識を振り返り、活用する時間を設けたり、ミニレポートを課すなどをした。授業資料や講義では、なぜ看護の歴史を振り返る必要があるのか、対象である人について何を理解し、考えなければならないのか、看護とは何か、どのようにして看護は提供されるのか等、授業におけ

るテーマ設定の意図を理解し、必要性を認識したうえで授業に主体的に参画できるように工夫した。10回の講義を通して、看護学の基盤となる学問の習得の必要性にも言及し今後の学習の動機づけとなっていることが感じられた。次年度は、概論で学んだことが他の科目ともつながっていることをさらに強調して、知識としての定着を図っていききたい。

身体観察技術論

1 年次 1 学期

石丸智子、神矢恵美、亀山真由美、秦さと子、田中佳子

看護の展開につながる身体的な情報を収集する方法について、人が生きていくために必要な「恒常性の維持」と「日常生活行動」を枠組みとし、解剖生理に基づいた身体所見の理解と身体観察技術の習得を目指して技術演習を行った。この授業をとおして学生の主体性を高めるためにグループ活動を取り入れ、事前学習が求められる環境をつくった。事前学習については、授業範囲の「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課した。事前学習で自分の考えをつくり上げたのち、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。これにより、可能な限り演習時間をグループ活動や技術練習にあてることができた。また、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制を取っており、学生は概ね目標達成できた。今後も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

予防的家庭訪問実習Ⅰ

1 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、新型コロナウイルス感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を行った。今年度は 4 年ぶりに休止期間を設けることなく全実習期間において訪問を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の拡大による休止期間中に実施した地域関係者による講話を、今年度も 1 年次生を対象に実施した。これにより訪問地域の特徴や課題を学ぶ機会を持った。1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。上級生との訪問を通して、情報を得たり、信頼関係を築くうえでコミュニケーションが重要であることを学んだりできていた。最終レポート等より本実習での学びや経験を当該学年の施設実習で活かしていることがわかった。

カウンセリング論

1 年次 2 学期

関根剛

本科目はカウンセリングの理論およびカウンセリングの基礎となるコミュニケーション・スキルについて解説した上で、学生同士のロールプレイを実施することで、体験的にコミュニケーション・スキルを習得することを目標にしているものである。昨年度は講堂で講義を行うこととなったため、本来 4 人グループで行うべきロールプレイを 2 人組で実施せざるを得なかった点に問題があった。しかし、今年度は教室および食堂での講義・演習が可能となったため、話し手・聞き手に加えた観察者役割を行うことで、他人のスキルを見る機会を得ることができた。また、Google フォームを用いた小テストについては、提出ミスなどの問題もあったため、可能な限り講義時間内での提出ができるように講義の時間配分を行うことが望ましいと考えられる。

英語 I-A2

1 年次 2 学期

宮内信治

子音の発音記号を教授し、英語正書法には出現しない記号の存在とその構音法を認識させた。発音の不明な語を英和辞典を用いて正確に発音できるように意識させていきたい。講読ではシェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使い、「国際人」に求められる教養と思考の一端に触れさせた。日本語訳の理解が英文音読に反映されるよう指導していきたい。多読では活動にも慣れ、記録様式を感想のみとして記録時間が短縮された分、読む分量が増加した。古典的名著の多読版への興味関心を喚起するよう、英文文学作品を中心に紹介していきたい。

英語 I-B2

1 年次 3 学期

G.T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

言語表現法

1 年次 3 学期

松田美香

小論文を書ける文章力および社会人としての適切な言語表現を身につけるため、論文で使用する日本語、データの引用、定型文などを実践的に学んだ。評価はレポートとし、適切にデータを引用し、文を組み立てて、テーマに沿った小論文を書くことができた。単位認定者数は 81 名であった。

韓国語

1 年次 3 学期

黄昞峻

ハングル（文字）の発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 69 名であった。

社会学入門

1 年次 3 学期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は 4 名であった。

法学入門(日本国憲法)

1 年次 3 学期

二宮孝富

市民としての基本的な法的素養を身につけるために、日本国憲法について、歴史的意義と人権に重点をおいた講義を行い、また、民法について契約・不法行為・家族についての講義を行った。単位認定者数は 81 名であった。

生物統計学

1 年次 2 学期

佐伯圭一郎、岡田悠希

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義を行った。前年から開始した Google Classroom の活用や、授業内容の精選によってある程度の授業効果の向上をみたと評価している。授業アンケートの全項目（5 段階評価）の平均評点は前年の 2.9 から 3.2 へ、「この科目に満足している」は 2.5 から 3.0 へと、まだ十分な高評価とは言えないが改善がみられたことから、今後も更に改善を継続していきたい。ただし、今年度も不合格者が一定数存在することから、理解が不足する履修者、特に数学を中心とした基礎学力が不足している学生への対応策を検討することが今後の課題となっている。

健康情報処理演習 II

1 年 2・3 学期

品川佳満、岡田悠希、佐伯圭一郎

健康情報処理演習 II では、前半は、医療職者に必要な情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報倫理に関すること、病院情報システムの役割等について講義形式で教授した。後半は、看護や医療分野におけるデータ解析に関するスキル修得のための演習を行った。前半は、筆記試験での評価を行い、結果としておおむね授業の到達目標をクリアしていた。後半は、毎時間コンピュータを利用する解析課題を課し評価を行ったが、結果として十分な修得には至っていなかった。原因としてはデータ解析に利用するソフトウェアについて、プログラム言語の記載が必要なことが難易度を高めたと考えられる。次年度は、データ解析用のソフトウェアを使いやすくするためのツールを利用することで教育を行っていききたいと考えている。

生体代謝論

1 年次 2 学期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論を生体分子の側面から思考できるように、生体分子を分類し、基本的な性質と代謝をあつかった。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達とすすみ、エネルギー代謝を臓器の協調の結果として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食時における代謝の違いを講義し、恒常性の維持について考察できるようにした。生化学部分は、レポート課題を課し、生体の機能と構造を自ら整理し文章化できるようにした。続く栄養学では、各栄養素の生体での役割、食品の特性の理解、食事摂取基準について説明し、生化学の知識が応用できるように心がけた。資料は毎回、紙媒体を印刷して配布した。講義終了後、毎回問題を

課し、試験はそこから出題することとし自己学習をしやすいようにした。講義後の出題時に、疑問点を書くように促し、次回の講義の時には疑問が解決するように解説した。改善点としては、自己の日々の食習慣の振り返りをする機会を設け、より深い栄養学の理解に促すことも有効かもしれない。

病理学総論

1 年次 2 学期

定金香里

シラバスに即して、疾病の成り立ちや修復過程について組織レベルから講義した。看護師国家試験新出題基準で加わった項目は、講義内容にも反映させた。教科書の他、各成書を参考にした講義スライドを作成し、資料として学生に配布した。この際、希望者のみ紙媒体で配布し、それ以外は PDF の形式で配布した。また、講義終了後、毎回、自作の事後学習用確認問題を Google Classroom を利用して全員に配布した。学校保健安全法に定める感染症による欠席者がいた際は、対面とオンラインのハイブリッド講義を実施した。講義資料についてはキャンパススクエアに PDF ファイルをアップロードすることで配布し、事前に調査した希望者のみ紙媒体の資料を受け取れるようにしたが大量に余っていた。

講義初回、講義については学生から説明が丁寧、スライドが見やすいなどの評価を得た。昨年度、課題であった時間配分のまずさに関しては、本年度は改善できた。小テストを実施する時間は取れなかったが、学生に考えさせる時間を設けたりするなど、一方通行の講義にならない工夫を行ったが、学生の反応は総じて薄かった。また、昨年度の計画通り、小テスト代わりに試験前に配布した演習問題を、毎講義後に復習課題として配布できた。授業を受けていれば、わかるような問題作りを意識し、あえて解答は配らなかった。授業アンケートでは、93.7%の学生が勉強に活用したと答えており、復習課題として有効であったことがわかった。授業アンケートでは、解剖学、生理学の復習ができたとの解答もみられたことから、正常と異常の両方を提示した講義が学生にとって理解しやすいのではないと思われる。

来年度は、本講義内容と関連する科目を担当する教員と連携や調整を図り、講義内容を精査していきたい。また、資源節約のために紙媒体を希望者のみに限定したが、大量に余ってしまった。来年度は主旨説明を徹底し、無駄な印刷物を減らしたい。

病理学各論

1 年次 2 学期

定金香里

シラバスに即して、器官系統別に様々な疾患の成り立ちに関する講義を逆転授業の形式で行った。また、看護師国家試験新出題基準に照らし、講義内容をアップデートした。学生は、事前に講

義動画を視聴し、質問がある場合はメールを教員に送る。講義では、学生は教員が作成した確認クイズを解いた後、自己採点をする。残りの時間で、教員が解説および質問に対する回答を行う形式だが、本年度は学生からの質問が無かった。講義動画および講義資料は、Google Classroom にアップロードし、希望者のみ講義資料を紙媒体で配布した。

講義については学生から図が多くてわかりやすいなどの評価を得た。時間がないときには、事前に講義動画を視聴するのがきつい時があった、という意見が1件、アンケートの回答であがった。視聴してきていない学生に関しては、確認クイズを解く時間帯に視聴しても良いとした。これは、FD/SD 委員会の研修を受講して得た示唆であり、周りに感化されて次第に皆、事前視聴してくることが期待されたが、残念ながら、本学の学生に関しては、期待した結果は得られなかった。昨年、配布物が多すぎるという学生からの意見については、配布物を減らしたこともあり改善された。総論の学習内容と連携した各論の講義ができた。

来年度は、教員から確認クイズを解く時間帯に視聴しても良いといった指示は事前に行わないことにする。そのために、逆転授業の意義を、さらに強調して説明する必要がある。また、講義内容、教授の仕方がまだ稚拙と感じるところも多々あり、講義動画を作成し直すこととする。その際、できうる限り、講義動画の時間を短くする努力を行う。

微生物免疫論

1 年次 3 学期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

試験の平均点等は昨年度とほぼ同程度であったが、昨年度より、記号選択問題の正答率が低くなり、記述式問題の正答率が高くなった。また、記号選択問題について同一問題を使用した再試験においても、正答率に変化がなかったことは、試験の振り返りなど、基本的な学修が不足していることも懸念される。一方、本講義から、事後学修として、各回のまとめを行い、Google Classroom で提出することにしたが、提出率は従来のメールでの提出と比較すると高かった。また、提出率の高い受講生において、学修習得状況も高い傾向にあったことから、本科目に限らず、科目担当者の主催科目において同様の事後学修を求めることで、学修習得状況の向上を図る。一方、提出した内容に差異があること、また、適切とは言えない状況の受講生に対し、修正の連絡をする必要があるが、1 週間間隔での講義では、次回講義までに修正が完了しないこともあることは改善したい。履修者（再受験該当者を含む）90 名中、85 名が単位を取得した。

健康スポーツ

1 年次 2 学期

稲垣敦

この科目は昨年より「健康運動」から名称変更された。この科目では、運動の楽しさや素晴らしさ、運動の必要性を体感するため、これまでに学生がしたことのないような多くのレクリエーションやニュースポーツ（フライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3 オン 3、バドミントン、ドッジボール等）を行なった。今年は COVID-19 が 5 月 8 日付で 5 類移行したため、コロナ禍以前の方法で授業が進められ、学生の表情や態度からも、体を動かすことの楽しさ、素晴らしさ、必要性を感じたことが伺われた。

次年度は、和太鼓等、COVID-19 で取りやめていた種目についても再開を検討する。

看護理論入門

1 年次 2 学期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、荒木庸輔

看護現象を科学的に理解する力や看護の基盤となる看護観を養うことを目的とした。講義により看護理論の読み解き方を教授し、実際に模擬事例を用いて理論の活用方法を理解する機会を提供した。看護理論は、考える中心が看護活動自体である理論と対象である理論を中心に選定した。講義時間内で模擬患者電子カルテ（Medi-EYE）を活用して理論に基づく情報整理の仕方を学習させ、他の学生とのディスカッションの時間を設けることで看護現象を科学的に思考する力の強化を図った。授業時間内に 3～4 人の教員による個別およびグループ指導を行うことで、理論の活用方法の理解を促進するように工夫した。提出されたレポートにより学生全員が到達目標を達成していた。次年度は、看護理論の実践への活用について、限られた時間内で効率よく理解できる方法の工夫が必要と考えている。

身体安楽援助論

1 年次 2 学期

秦さと子

実践で遭遇する機会の多い身体症状とその発生機序を理解し、症状が日常生活に与える影響を考察したうえで、対象に必要な援助を判断する力を養うことを目的に実施した。身体の異常を示すサインに気づくための観察の視点や、発生のメカニズムを理解しながら必要な援助が導けるように講義内容を工夫した。また、昨年度は Zoom による講義であったが、今年度は対面による講義であったことから、ワークシートを用いて、学生の理解度を確認しながら補足説明や、直接指導など

を行った。筆記試験では、対象の異常を示すサインに気がつき、メカニズムから必要な支援を導けていることが、学生の記述から確認できた。今後は、継続して、異常のサインに気がつけること、身体症状が発生するメカニズムに基づいて、必要な支援を考察できるように授業内容の工夫を行っていく。

生活援助技術論

1 年次 2 学期

石丸智子、荒木庸輔、神矢恵美、秦さと子、田中佳子

学生もしくはモデル人形を対象とし安全、安楽に配慮した技術が実施できることを目標に授業を行った。1 学期の身体観察技術論と同様に、「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課し、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。同じ授業構成にすることで、実技練習時間の確保とともに、学習行動の習慣化を図った。また、グループ演習では、身体安楽援助論で学習した症状をもつ患者に設定し、授業で扱う看護技術は、可能な限り同週の身体安楽援助論で学習した症状に対する援助を選択し、学習間の連結を図った。学生は概ね目標達成できた。また、今年度より習得した技術力を評価する方法として、撮影した動画データでの実技評価を試みた。今後も継続して新しい評価方法の検討を行っていく。

看護疾病病態論 I

1 年次 2 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

本科目は新カリキュラムの 2 回目の運用である。疾病論や病態の理解を目標におき、病態のメカニズム、障害により起こる症状は生の機序などを各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら丁寧に教授した。また、障害をもつ対象に対して「人」をイメージできる工夫も行い、看護職としてどのような観察をする必要があるのかの理解が深められるようにした。2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行った。消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、内分泌・代謝疾患、血液・造血器疾患の講義を対面で行うことができた。試験は筆記試験とし、各系統の試験を中間試験と最終試験に分散させ、知識の整理ができるよう配慮した。試験形式はオンラインで実施した。正答を速やかにフィードバックできるため、学生は何ができて何ができなかったかがすぐわかり、教員も全体的な傾向や誤答が多い問題などがすぐに把握できて非常に効率的である。

今年度の課題として、一部の学生であるが、2 コマ目の授業を無断欠席する学生がいた。オリエンテーションで授業の重要性を説明する必要がある。また人間科学系との既習学習との連動を考慮して、授業の単元の進行を部分的に考慮し進められた。授業アンケートでは概ね満足度は高かつ

たが、解剖や生理学などの既習学習をどう積み上げながら疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくか検討していく必要がある。

看護疾病病態論 II

1 年次 3 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

本科目は平成 27 年度カリキュラムでは 2 単位 20 コマであったが、新カリキュラムで 1 単位 10 コマと変更し、目標は、障害をもつ対象に対して看護職としてどのような観察をする必要があるのかの理解ができることを追加した。疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行った。腎・泌尿器疾患、脳・神経系疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患および生殖器系疾患の内容で、各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。試験は筆記試験とし、各系統の試験を中間試験と最終試験に分散させ、知識の整理ができるよう配慮した。試験形式はオンラインで実施した。正答を速やかにフィードバックできるため、学生は何ができて何ができなかったかがすぐわかり、教員も全体的な傾向や誤答が多い問題などがすぐに把握できて非常に効率的である。

授業アンケートでは概ね満足度は高かったが、10 コマの中で、教授する内容を精選し基盤となる知識を修得し、疾患や病態、観察ポイントの理解に繋げていくか検討していく必要がある。

教職概論

1 年次 2・3 学期

吉村匠平

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。本年度は、養護実習を終えた 4 年次生、3 年次生との交流の機会を提供することができた。

人間関係学

1 年次 3 学期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。反転学習課題、協働学習の技法を援用した話し合

い活動等を通して学習する機会を構築した。毎時座席を抽選で指定し、学生同士が様々な学生と交流する機会を提供した。対面講義時間中には、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を作り、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

哲学入門

1 年次 3 学期

西英久

哲学は、様々な事象を対象として概念化し考察する過程と定義されるため、保健・医療・福祉および一般社会で重要と考えられる概念である「権利、人権」、「自由、自己決定、自立」、「障がい」、「尊厳」、「優生思想」を考察のテーマとして取り上げ、論じた。また看護職者の行動の拠り所とすべき実践の哲学である生命倫理、看護倫理について、その基本的な考え方、原則を教授した。単位認定者は 73 名であった。

健康情報学

1 年次 3 学期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、健康情報処理演習 I,II において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

本年度から新カリキュラムに移行して 2 年目となり、昨年度の授業アンケート結果を受けて、講義は内容をさらに絞り込んでスピーディーにすすめ、質問や補足は Google Classroom をより活用する方向に修正を行った。その結果、授業アンケートによる評価では全項目の 5 段階評価での平均が前年度 2.7 から今年度 3.6 へ、「この科目の授業の内容を理解できた」では 2.3 から 3.5 へ、「講義の進め方や速さは適切だった」は 2.6 から 3.8 へ、などまだまだ改善の余地はあるものの大きな評価上昇であった。ただし、授業アンケート結果に改善は見られるものの、最終的な不合格者数については例年並みとなり、授業内容の学習・理解が不十分な一部の履修者への教員側からの働きかけをどう強化するかが今後の課題である。

基礎看護学実習

1 年次 3 学期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、神矢恵美、荒木庸輔、藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、佐藤栄治、矢野亜紀子、橋本志乃、岩下恵子、森崎久美、徳丸千恵、

実習期間は、2024 年 1 月 15 日から 1 月 26 日とし、臨地実習は 7 施設で実施した。当初 8 施設の予定であったが、1 施設において COVID-19 やインフルエンザによる感染者の急増に伴い受け入れ困難となり、他 7 施設にご高配を賜り全員が臨地実習を実施することができた。日々の実習における体験を学びにつなげる方策として、特に実習指導者や教員による直接の対話による学生との振り返りや実習記録を活用した指導を実施した。学生の多くは、患者とのコミュニケーションについて当初は困難さを実感していたが、指導教員や看護師の関わりにより具体的な対策を思考することで行動につなげられるなど学習していた。本年度から患者理解のツールとしてヘンダーソンの基本的欲求の枠組みを導入した。記録様式は 3 種類とし、実習 1 週目、2 週目で使い分けることで効率よく適切な思考のプロセスの育成を目指した。その結果、受け持ち患者の疾患や治療による身体的影響とそれが生活に与える影響については、概ね理解し情報に基づいた記述ができていた。一方で、患者の不安や心理的状态の理解は身体的影響に対し不十分であった。この点については段階的に継続して育成していく必要があるため、次の実習への引継ぎを行った。また、初めての臨地実習であること、初学者であることを考慮し、基礎看護学実習における患者の精神面の理解に関する達成度を再検討し、学生および指導者で共通認識できるように取り組んでいく。

健康支援概論

1 年次 3 学期

加藤典子、篠原彩

健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。対面で講義とグループでの演習を行った。人々の健康に関する定義や潮流を学ぶとともに、健康に関する基礎的なデータ及び支援に活用できるモデルを活用した演習を行った。また、学習を通じて学生が生活習慣に関して振り返りを行う機会とした。学生は、演習・プレゼンテーションをとおして、健康の概念や健康に影響する要因について理解を深めることができた。次年度は、健康に関する基礎的なデータから読み取れる課題について事前課題を出すなど授業の準備性を高める取り組みを行いたい。

英語 II-A1

2 年次 1 学期

宮内信治

医療関連語彙の増強を図ることを目的に、ギリシャ語・ラテン語起源の語源知識を習得させる *Word Power Made Easy* を用いた。長期記憶定着を念頭に、歴史的事象との関連を意識的に提示していきたい。1 年次既習の英文要素分析を活用し、看護に関する英語原著論文の緒言を文法解析、和訳させることで、読解時の語彙の重要性と文法解析の有効性を認識させた。原著で扱われている研究の背景知識を適宜提示し、日本とは違う医療看護の現場を意識させていきたい。

英語 II-B1

G.T. Shirley

2 年次 1 学期

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

保健ボランティア

2 年次

加藤典子

保健・医療・福祉・介護に関するボランティアの体験を通じて、保健・医療・福祉・介護に関わるボランティアの意義について深めることを目的としている。学生自らが関心のあるボランティア内容が体験できるボランティア施設を探し、ボランティアに参加し、レポートを作成する一連の過程をとおして、自主性や行動力の向上につながっている。今年度は、57 名が履修した。ボランティアの内容は、子育て支援、認知症予防、小児糖尿病サマーキャンプなど多様であり、充実していた。

放射線健康科学

2 年次 1 学期

小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学は現代医療に必要な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理学、化学的、生物学的な特性及び健康への影響、そして放射線防護の基本事項を広範にわたり講義している。また、医療現場における放射線の利用、放射線診断や放射線治療に焦点を当て、具体的な事例と検査画像を用いた教育を行なっている。

2023 年度には、講義を対面形式に戻し、具体的な放射線事故事例の紹介や検査画像等を活用した教育を継続した。試験成績は全体として安定しており、目立った差異は見られませんでした。今後も、学生が自発的に興味と関心を持って学習に取り組むことができるよう、時代に合った内容への講義更新を心がけ、放射線健康科学の重要性を深く理解してもらうための取り組みを継続する。

薬理学 I

2 年次 1 学期

吉田成一

薬理学 I は昨年度までの生体薬物反応論 I から名称変更となった科目であるが、その内容に大きな変更は生じていない。薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学修範囲が絞られているため、理解度が高い受講生が多い状況であった。特に、総論分野に関しては例年、苦手とする受講生が多かったが、一定程度改善していた。しかし、医薬品の体内動態に関しては、昨年度までと同様に、理解が進みにくい状況であった。

講義後に、本科目の学修について事後学修を行うように求め（メールにてノートなどの提出）、質問事項の記載があれば回答する、あるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなどの対応を継続的に行っているが、提出状況が年々悪化している。次年度以降は Google Classroom を用いて状況改善につながるか検討したい。なお、提出状況が高い学生と低い学生を比較すると、高い学生の単位修得率が高かった。

試験の平均点は、昨年より向上した。また、薬理学 I の初回受講生の単位取得率は高かったが、過年度履修生の単位取得状況は極めて低かった。また、過年度履修生は再履修科目であり、講義に出席できる時間割となっているが、事後学修の提出が低い状況を鑑みると、学修状況が不十分であることが推察される。これらの受講生が 4 年次に進級した場合、再受験科目となり、講義出席は不要となることを考えると、より計画的な学修が行えるよう、適宜案内する必要があると考える。履修者（再受験該当者を含む）103 名中、94 名が単位を取得した。初回履修者に限ると 79 名中 76 名が単位を取得、2 回目以上履修者については、24 名中 6 名が単位取得に至った。

健康運動学

2 年次 1 学期

稲垣敦

1 年次の健康運動では運動の楽しさや素晴らしさ、必要性を体感した。2 年次の健康運動学では、さらに科学的知見に基づいて運動の重要性や必要性を講義した。はじめに科学について考え、その後、バイオメカニクスや生物の進化の視点を取り入れて、加齢や不活動・運動による身体機能の変化や健康との関連性を講義することで、運動の重要性を教授した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義した。今年も引き続き、Zoom で行った。次年度は対面での授業の再開を検討する。

診療補助技術論（基礎編）

2 年次 1 学期

石丸智子、神矢恵美、亀山真由美、秦さと子、田中佳子

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。初めて見る医療機器の取り扱い方や、対象および自己の安全のために必要な行動や技術について、学習効果を考えて授業展開を行った。また、1 年次の身体観察技術論や生活援助技術論と同様に、「講義動画」のオンデマンド配信等を教材とし、学生がグループ演習で取り組む課題事例に基づいて事前学習を課し、授業でのグループ活動に取り組むような授業構成とした。この方法により 1 年次からの学習方法を継続し、主体的な学習行動の習慣化を図った。学生は概ね目標達成できた。また、今年度より習得した技術力を評価する方法として、撮影した動画データでの実技評価を試みた。今後も継続して新しい評価方法の検討を行っていく。

ヘルスアセスメント

2 年次 1 学期

藤内美保、石田佳代子、内倉佑介、山田貴子

新カリキュラムで初めての本科目の内容を変更して、初めて教授した。本科目では、目標をヘルスアセスメントでは、身体観察技術論（基礎看護学研究室科目）で学んだ正常編となる基礎的知識・技術を活かし、障害をもつ対象に対するヘルスアセスメントの意義を理解できること、また障害をもつその対象に必要な観察視点や根拠が理解できること、観察した結果を解釈して健康問題を予測できることとした。この健康問題の予測には対象者の日常生活にどのような影響を及ぼすかも考えることを組み込んだ。教育内容として、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについてシミュレーション教育を行い、事前学習したことを授業でディス

カッションし、深め広げていくようにデブリーフィングして学生が自ら気づく、学ぶ、理解することを意図した授業を展開した。実習室の DX 化により、学生の主体的な学びができた。試験は、知識を問う筆記試験とし、形式はオンラインで行った。平成 27 年度カリキュラムでは実技試験を実施し確実な技術習得を目標としたが、身体観察技術論で実技試験を行うか検討課題とすることを基礎看護学研究室と話し合った。

課題としては、身体観察技術論から 1 年経過した時期に行うため、正常編のヘルスアセスメントの知識・技術が定着していないこと、e ラーニングの事前学習を課したが修得に限界があったこと、基本を押さえつつディスカッションする十分な時間を確保が困難なことなどが挙げられた。

次年度は、各系統別で担当する教員と今年度のフィードバックしながら、授業案についてさらに検討し、学生の学びを深められるように努力する。

看護アセスメント学概論

2 年次 1 学期

石田佳代子、内倉佑介、藤内美保、山田貴子

本科目の目的は、「対象者の健康問題と看護の必要性をアセスメントし、問題解決を踏まえた看護過程を展開するための基礎理論を学ぶ」ことである。講義では、看護過程の意義や目的、看護過程の基盤となる考え方、看護過程の各ステップ、臨床推論の考え方などを解説した。看護過程をアセスメント・看護診断・計画立案・実施・評価の 5 つの構成要素からとらえ、展開方法としては NANDA-I (North American Nursing Diagnosis Association International : 北米看護診断学会) の 13 の看護診断分類をアセスメントの枠組みとして活用した。看護過程の展開を学ぶことがクリティカルシンキングの訓練の場ともなるように、問題解決型アセスメントの方法（つまり、体系的なデータ収集、演繹的推論プロセスに重点を置いたアセスメントの基本的な考え方）を、学生一人ひとりが身につけられるように指導した。また、講義と事例展開（事例に基づく看護過程の展開）による個人ワーク（時間外学修を含む）を並行させながら実施した。この個人ワークは、アセスメントから（実施を除く）評価までの看護過程の一連の流れにおいて、学生が個別に所定の記録様式に記録を書いて思考を整理するものである。講義と個人ワークを並行させる目的は、講義で解説した考え方を事例課題に対して活用できるようにするためである。このような方法で、学生一人ひとりが基本的な思考の型を習得できるようにしている。しかし、学生は、実習経験がまだ少なく、患者についてのイメージや印象が混沌としているために概念化が困難な面があるので、DVD や動画を活用してイメージ化を図るような工夫を行っている。また、理論や看護専門用語の理解がまだ不十分なので、文献（『NANDA-I 看護診断 定義と分類』など）を活用しながら指導した。記録の書き方については記載例を示した。今年度は肝硬変症患者の事例を用いた。本科目の評価はレポートと小テストによって行った。なお、学生個々の課題が明確になるように、本研究室で考案したルーブリック評価表を用いて評価し、結果を個別にフィードバックした。肝硬変症は多彩な症状を呈することなどから、学生全体の傾向として、疾患・病態の一般論の理解がまだ不十分であり、目標の達成が困難な学生が多かったが、「看護アセスメント学演習」の時間を一部活用して補足したこと

で、概ね目標を達成できたと考える。

基礎力を備えたうえで応用力のある人材を育てるためには、単に手順を覚えるのではなく、思考の仕方を身につけることがまず重要と考えている。しかし、それを着実に身につけるためのプロセスでもある記録を書くことそのものの訓練に費やす時間は学生にとって限られており、また、費やす時間にも個人差がある。そのため、個別に応じた学生への指導に悩むこともあるが、学生が一つずつ理解して、習得度を高めていけるように、今後も学生とコミュニケーションを図り、個別に応じた指導を工夫していきたいと考える。

成人看護学概論

2 年次 1 学期

古賀雄二、森加苗愛

今年度は新カリキュラム初年度であり、成人期に特徴的な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶことができるよう講義を系統的に計画した。5 月の新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行後は、オンライン授業から対面授業に変更して実施した。講義内容は、人間のライフサイクルにおける成人期の特徴を、発達課題、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や理論を教授した。看護理論の講義では、事例を通して講義を展開し、看護実践を意味づけして理解できるように工夫した。また、本科目は成人看護学の導入科目であるため、大分県医療計画を紹介した。大分県における医療提供体制の現状と課題を成人看護学の視点から考えることで、本科目と成人看護学援助論 I～IV とのつながりを具体的に示し、関連科目への関心を高める工夫を行った。また、看護実践の具体例では講師の臨床経験を交えつつ、看護実践がイメージできるように工夫するとともに、感想フォームに質問記入を促し、教員との交流機会を確保・対応した。

次年度も、学生が成人看護学への関心を高め、主体的に参加できる工夫を行っていく。

成人看護援助論 I（急性期）

2 年次 1 学期

古賀雄二

本科目は成人看護学概論に続いて受講する科目であるとともに、旧カリキュラムでは 1 科目であった内容を今年度より成人看護学援助論 I～IV に分割して教授する科目である。そのため、特に関連の深い成人看護学援助論 II（回復期）との連動の視点を踏まえて講義編成を行った。急性期や重症な状態にある人および周術期にある人と家族への支援について教授した。学生が主体的に学び、理解を深められるようにワークシートと予習・復習の視点を提示するとともに、授業各回に対する感想・質問をふまえたフィードバックを次回授業で行い、受講者の反応を確認しながら知識の定着を図った。

次年度は、成人看護学実習で遭遇しやすい疾患・状態の内容について、より深く学習できるように、成人看護学援助論Ⅱとともに講義内容の調整を行う。

成人看護援助論Ⅱ（回復期）

2 年次 1 学期

古賀雄二、佐藤栄治

本科目は成人看護学援助論Ⅰに続いて教授する科目である。そのため、特に関連の深い成人看護学援助論Ⅰ（急性期）との連動の視点を踏まえて講義編成を行った。リハビリテーション看護の特徴とともに、代表的な生活機能障害の回復過程と移行を支える援助について教授した。学生が主体的に学び、理解を深められるように予習・復習の視点を提示するとともに、授業各回に対する感想・質問をふまえたフィードバックを次回授業で行い、受講者の反応を確認しながら知識の定着を図った。さらに、学生に理解しやすいように、視聴覚教材を取り入れ、臨床に近い場面を擬似的に体験ができるように工夫を行った。お互いの考えを共有しやすくするためにアプリケーションを導入し、視覚的に共感し、自己の考えとの違いを考えるようなこのアプローチ方法も取った。結果、学生間でのコミュニケーションが促進され、学習効果を高めることができた。最後のまとめで、脳卒中事例によるグループディスカッションを行い、術前・術後 2 週間・術後 3 か月と急性期・回復期の各時期の看護の特徴とともに移行期の看護について討議する機会を設け、患者の病期における看護援助について学びを深めた。

次年度は、成人看護学実習で遭遇しやすい疾患や状態に関する内容について、より深く学べるように講義内容の調整を行う計画である。これにより、学生が実践的な看護援助の思考を養い、臨床現場で直面する課題への対応能力を高められることを目指す。

老年看護学概論

2 年次 1 学期

小野美喜

人間のライフサイクルにおける老年期の特徴、生活を理解し、高齢者の健康生活を支援するための保健医療福祉制度、高齢者の健康問題、倫理的課題、看護理論など、高齢者の看護に必要な知識を教授した。今年度は全て対面での授業であり、各授業後に課題を提示し授業後の学修ができるようにした。履修学生全員が単位取得した。授業内では事例提示と小グループディスカッションにより検討と発表を実施した。意見交換は円滑であり、授業評価でも学生参加の満足度が高かった。高齢者理解と看護の理解が深まるよう今後もわかりやすい授業の工夫をし学生参加型の授業を継続する。

小児看護学概論

2 年次 1 学期

草野淳子、足立綾

本科目は、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的とした。小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向・小児看護の役割と重要性について教授した。媒体として DVD を使用してイメージ化した。特に重要な概念として小児の成長と発達については形態・機能的発達、小児看護で用いる理論、家族支援などに重点を置いた。最終的に自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。講義は対面で行った。評価は筆記試験（90%）・レポート（10%）とした。学生は筆記試験を受験し、こども観についてはそれぞれの考えを述べることで授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

母性看護学概論

2 年次 1 学期

林猪都子、永松いずみ

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。

対面による講義で、学生の反応を直接確かめながら実施した。また、講義終了後グーグルフォームにて、学びや感想、質問を学生に求めた。学生から活発な質問が見られ、次回講義の初めに学生に質問について説明し講義することができた。

国際看護学概論

2 年次 1 学期

桑野紀子、丸山加菜

①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮した看護について学ぶことを目的とし、内容構成した。海外での看護実践については外部講師の体験談を組み込み、開発途上国の保健医療に関する状況や健康課題への理解を深めるために適宜動画視聴を組み込むなど工夫した。また、昨年度に続き講義終了後に Google フォームで小テストを実施し、次の回で解説し、復習の機会とした。授業アンケートの結果では、内容理解、ねらいや目標の理解、講義の進め方や資料等は高評価であったが、予習復習を積極的に行えたかという項目は 4 以下であったため、講義内容に関する予習・復習を具体的方法と共に促し、学習効果向上をはかることが課題である。

国際看護学演習

2 年次 1・2 学期

桑野紀子、G. T. Shirley、丸山加菜、宮内信治

国際看護学研究室と言語学研究室の教員、国際交流アドバイザーが共同運営し、看護職として多様な価値観を尊重することの重要性について学ぶこと、自分と異なる文化・社会・言語背景をもつ人々と主体的にコミュニケーションを図る能力を身に付けることを主な目的として内容を構成した。演習前半は、WHO6 地域から各 1 か国を選択し、SDGs の取り組みに関連づけながらその国の健康課題と背景および対策について、国際機関ホームページ等を情報源として調べて考察し、発表するグループワークを行った。言語学研究室教員は、異なる文化・社会・言語背景をもつ人々とのコミュニケーションについて講義し、グループワークなどを行った。

演習後半は、対面で韓国の看護学生と交流するグループと、オンラインでインドネシアの看護学生と交流するグループに分かれて準備および交流を行い、最後に学びを共有した。英語でのコミュニケーションについては、実際の国際交流を通して自己の課題を確認し、改善行動につながるよう振り返りの機会を設けた。

授業アンケートでは、演習の内容理解、ねらいや目標の理解、予習・復習ができたという項目すべて高評価であり、学生は概ね目標を達成できた。今後は予習・復習や時間外活動をより効率的・有意義なものにできるよう工夫を重ねていく必要がある。

予防的家庭訪問実習Ⅱ

2 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、新型コロナウイルス感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を行った。今年度は 4 年ぶりに休止期間を設けることなく全実習期間において訪問を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の拡大により休止期間を設けなければならなかった 3 年間と異なり、訪問を重ねるたびにチームの親交が深まる様子がうかがえた。2 年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。学生なりのアセスメントを実践することを通して協力者の理解が深まり、協力者の生活から地域で暮らす高齢者の強みを捉えることができていた。また、協力者の生活や健康に地域や周囲の環境の変化が影響を与えることについて考えることができていた。

教育学概論

2 年次 1 学期

鈴木篤

教職課程を履修するまでに、受講者が有してきた学校教育や家庭教育での経験や理解を問い直し、それを受講者相互で交流することを通して、教育に関する本質的理念について、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

生徒指導

2 年次 1 学期

藤村晃成、関根剛、吉村匠平

教師として児童生徒を対象に生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

発達心理学

2 年次 2 学期

吉村匠平

今年度より、選択科目「発達心理学」としての開講になった。言語発達、運動発達、進化心理学、発達障害を取り上げた。定型発達を基準として発達を理解する構えを相対化する視点の獲得を主目的として講義を行った。毎時座席を抽選で指定し、学生同士が様々な学生と交流する機会を提供した。対面講義時間中には、アプリケーションを通じて、学生が疑問や意見を自由に表出する環境を作り、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、各回の講義終了時に、自らの学習到達状況を確認できるようにした。

音楽とところ

2 年次 2 学期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 26 名であった。

美術とところ

2 年次 2 学期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は 14 名であった。

英語 II-A2

2 年次 2 学期

宮内信治

幅広い科学分野に関連する英語語彙の学習定着を念頭に引き続き *Word Power Made Easy* を用いて語彙増強を図った。学習個所の音読により語彙や文法知識の安定的定着を促進した。自然や社会における自然科学の存在や意義を幅広く視点でとらえられるよう、その歴史的経緯を意識させたい。講読演習では看護に関する英語原著論文本体を、文法理解を促し和訳させた。論理的な文章構成と国際的な看護の現状の一端を理解させることができた。学生の興味を喚起するような内容を含む教材を探求していきたい。

英語 II-B2

G.T. Shirley

2 年次 2 学期

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These

activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

社会保障システム論Ⅰ

2 年次 2 学期

加藤典子

社会保障の全体像が把握できるよう内容を整理した。社会保障制度の意義と構造を説明し、その後で社会保険（医療保険・年金保険・労災保険・雇用保険・介護保険）、公的扶助、社会福祉、公衆衛生を各論で説明した。できる限り、看護職との関係性を理解できるようにつとめた。社会保障制度は、人々の健康にかかわるものであるが、学生には馴染みがなく、用語なども初見であることが多く、理解して知識として定着することが困難な学生が多かった。今後は、学生が身近に感じられるよう講義方法を工夫したい。

文化人類学入門

2 年次 2 学期

足立恵理

看護の現場で患者の多様な背景に目を向けられるよう、文化人類学に加えて医療人類学の視点を学び、医療の現場や歴史を文化的視点から捉えてみる講義を行った。また、医療現場における多文化共生の問題を扱い、学んだ視点や方法論を応用し、問題解決や改善について具体的・実践的に検討する演習を行った。単位認定者数は 9 名であった。

健康運動学演習

2 年次 2・3 学期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を自分で見つけ、これを解決するために、主体的に目的や目標を定め、1 学期の健康運動学で学んだ知識を動員して自分に合った運動メニューを作成して運動実施した。ベースライン測定（10/20）と効果判定測定（1/18, 1/23）を行い、運動の効果を判定し、レポートを作成した。今年度のベースライン測定と効果判定測定では、身体組成の計測で 3 密が生じるた

め、健康運動学研究室前で2週間測定できるようにした。なお、次年度は、行動変容理論の講義を充実させる。

健康科学実験

2年次2学期

濱中良志、安部眞佐子、吉田成一、定金香里、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは8テーマからなる実験を行った。1) 組織学実習(担当者: 濱中良志)、2) 血液検査(担当者: 定金香里)、3) 基礎微生物学実習(担当者: 吉田成一)、4) ラットの解剖(担当者: 吉田成一、定金香里)、5) 放射線(担当者: 恵谷玲央)、6) 染色体異常(担当者: 小嶋光明)、7) 呼吸循環器系持久力(担当者: 稲垣敦)、8) 食物栄養学実習(担当者: 安部眞佐子)

看護アセスメント学演習

2年次2学期

石田佳代子、内倉佑介、藤内美保、山田貴子

本科目の目的は、看護アセスメント学概論で学んだ看護過程の一連のプロセスの理解を深め、その基礎理論を活用し、事例展開を行うことで、実践に活用するための方法を学ぶことである。本演習の導入にあたり、看護アセスメント学概論で学生が個別に提出した事例課題レポートに対するフィードバックを全体および個別に行い、教員からのコメントに応じて必要な修正を求めた。これにより、看護過程における習得度が低い部分を一定レベルまで補強したうえで、グループワークが円滑に進められるようにした。本演習では、各学生が看護過程の展開に必要な既習の知識を使って、事例患者(今回は胃切除を受けた患者の看護事例)の看護過程の展開をグループメンバーとの意見交換を通して行うことができる、また、グループワークに主体的に参加し、自分の考えを持ち、深め、発展させていくことができるように、各教員がファシリテーターとなり指導・助言を行った。具体的には、病態や健康問題を推論する力を養うために、学生が必要な基礎的能力を習得できるように、自己学習内容や既習知識から重要な情報やデータを導き出し、病態メカニズムの探究などに関心が向くように方向づけるとともに、複数のデータや情報を関連づけたり、あるいは統合したり、さらには全体像を捉えるために共有シートを使って図解化しながら、多角的な視方、考え方を身に付け、人間を総合的に理解できる能力、問題解決能力、批判的思考能力を高めていくことができるようにかかわった。グループワークの中間・最終時点で発表会を行い、発表や意見交換を通して各学生が表現力を高め、自分のグループの不足部分に気づいて改善につなげられるような場となるように、学習環境を整えた。以上のグループワークと並行して、個別に看護過程の一連の記録(看護アセスメント学概論と同様)を進め、演習終了後に提出を求めた。なお、最終コマで

は、臨地実習に向けて、看護の視点で患者を捉え、気づきの思考を養うためのワークを行った。本科目の評価は個別およびグループレポートによって行った。学生の授業アンケートによれば、回答者（23 名）のほぼ全員が、本授業内容の目的や目標を理解でき、積極的に取り組めたと回答していたこと、全員が B 評価以上であったことから、科目の学習目標を達成できたと考える。

次年度に向けての課題としては、本演習の導入部分にあまり時間を費やすことなく、より円滑に進められるようなフィードバック方法の工夫などを検討したいと考える。本演習は看護アセスメント学概論による到達状況と関連が深く、看護アセスメント学実習への橋渡しとして重要なだけでなく、基礎看護学から段階的に積み上げ、今後の各看護学における看護過程の展開の基盤となるべき重要な位置づけにあると考えているので、関係領域と連絡を取りながら、引き続き学生の基礎力を高められるように取り組みたいと考える。

老年看護援助論 I

2 年次 2 学期

小野美喜、堀裕子

加齢に伴い機能低下や健康問題が高齢者の生活に及ぼす影響をとらえ、健康的な日常生活を支えるための看護援助を学ぶ。学習を通して、高齢者の尊厳を保ち、最期まで高齢者本人とその家族のもつ力を最大限に活かすことが考えられるよう授業構成をした。高齢者事例を提示し、事例の生活背景をとらえた日常生活援助をグループ検討し発表と意見交換の場を設けた。また認知症の知識を深め、認知症を持つ高齢者への援助について事例検討を行った。外部講師として認知症家族の会の代表者および訪問看護師を招聘し、高齢者と家族支援の実際を学ぶ機会を設けた。事例検討は学生が能動的に学習し思考を強化でき効果を感じている。しかし、授業時間内での事例検討であり、次年度は事例設定や討議の進め方の工夫が必要と評価している。

精神看護学概論

2 年次 2 学期

影山隆之

生物心理社会的存在としての人間の心理社会的健康について基本的理解を深めるために、健康日本 21、精神力動論、精神達論、ストレス論、リカバリ、及び国際生活機能分類などの考え方と、主な精神症状・精神疾患、アディクション、自殺予防などのトピックについて講義し、精神医療の歴史的文脈と法制の関係についても講義した。全資料を一括製本して授業前に配布し、演習問題について予習を求め、授業内でディスカッションをした。できるだけ自験例の紹介に努めた。出席確認を兼ねたリアクションペーパーで見る限り、説明不足や学生の誤解が少なくなり、授業で扱えなかった論点についての疑問・質問が増えた。今年もこれらに対して原則 2 日以内に応答し、学内ウェブに掲載した。この方式は好評であり、精神看護への関心を高め、スティグマを低下させる効

果があったと考えられた。

看護管理学概論Ⅰ

2 年次 2 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護管理学概論Ⅰは、看護職として働く上で必要な看護管理の基本的な知識を身につけるための講義である。看護を取り巻く社会や看護管理に必要な能力、安全管理など、臨床でスタッフの看護師も用いる基本的な看護管理全般について講義した。今年度はグループディスカッションを中心に講義を行い、看護管理の視点からの課題の抽出および改善策の提案まで思考させた。さらに、各講義後にリアクションペーパーを配布し、次の講義時に疑問については回答するなど、受講者の反応をみながら正しい理解に繋がるように取り組み、レポートにて理解度の確認ができたことから、全員単位取得できた。今年度はグループディスカッションによって討議する時間を確保することはできたが、討議した内容を他者に伝えるということまで実施の時間を十分に確保できていなかった。チーム医療が推進される中で、他者の意見を聞き、自分の意見を述べることは今後求められる能力であると考えられるため、来年度は他者に伝えることが意図的にできる環境を整えていく。

家族看護学概論

2 年次 2 学期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

看護の対象としての個人を取り巻く家族について、家族システムの視点から家族全体に対する看護を学ぶための講義を行った。家族看護学の理論や概念、家族機能や構造などの基礎的な知識を学習した。また、家族看護に関する主要な理論として、家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論について事例を交えながら講義を行った。講義で得た知識をもとに、学生は実習経験を題材にしてアセスメントを行い、家族を看護の視点から捉える学習を行った。次年度はアセスメントのフィードバックと学生間の協議の場を設けることで、学習内容の理解の深まりと、実践に繋がる振り返りの強化を図る。

養護概論Ⅰ

2 年次 2 学期

小野治子

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などを学ぶことを目的とした。具体的には、各学生が母校の養護教諭へのインタビューを通じて、養護についての本質や基本的概念、職業倫理などの理解を深めた。さらに、講義において、各学生のインタビュー内容の発表、ディスカッションにより学生相互間での学びを深めた。本年度は、夏休み前に母校へのインタビューの事前課題を提示し、講義は夏休みの集中講義とした。学生が主体的に授業に参加することができるよう、個人の発表、グループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用した。養護教諭養成課程の早い段階で母校の養護教諭にインタビューすることで、理想とする養護教諭像が明らかになり今後の学習意欲への高まりが期待できた。今後も、学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

教育相談

2 年次 2 学期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を深めるために、学校教育における教育相談の意義や役割について理解した上で、心理学の諸理論に理解の深化を試みた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

学校教育心理学

2 年次 2 学期

藤田文

心理学やに教職課程における教育心理学の位置づけについて解説したうえで、発達、知能、パーソナリティ、学習、グループダイナミクスなど、児童生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次 2・3 学期

今井航

教員として授業計画を立案する際に必要不可欠となる、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基盤となる力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった 2 点の問いを持って、授業を進めた

行動療法論

2 年次 3 学期

関根剛

本科目は、患者の健康行動の形成を促進する理論と方法について理解し、自己の健康行動形成のプログラムを作成・実施して体験的に理解を深めることを目的としている。理論の基礎は行動療法および多理論統合モデルである。講義は今年から「行動療法と発達心理学」が 2 科目に分かれることとなり、5 コマから 8 コマに講義時間数も増えることとなった。それに伴って、講義内容の変更を行い、プログラム作成などの実践面をより充実する構成となるように図った。また、昨年度は前期開講であったが、今年度は 3 学期開講となった。従来、学生自身の健康・生活習慣を改善するプログラムの開発を取り上げていたが、1 月からの開講となった今年度は、受講学生の多くが健康問題・生活習慣よりも 2 月に実施される進級試験対策のための学習習慣の形成などをテーマとすることとなった。健康行動ではなくテーマのバリエーションが少ない点はあるが、危機感の強いテーマという意味では行動変化の動機づけとして有効なものであった。次年度の学生のテーマ選択がどうなるかに応じて、開講時期や方法を検討していく必要があると考える。

看護アセスメント学実習

2 年次 2 学期

藤内美保、石田佳代子、石丸智子、岩下恵子、内倉佑介、神矢恵美、後藤成人、佐藤栄治、篠原彩、秦さと子、田中佳子、徳丸千恵、姫野雄太、丸山加菜、森崎久美、山田貴子

COVID-19 感染状況は 5 類となり、大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院の実習 3 施設は、12 月 6 日（火）～12 月 18 日（月）の 2 週間の期間で 85 名学生全員を計画通り実習を受け入れていただいた。しかし、免疫力が低下した患者のいる施設であるため、厳重な感染対策をして実習を行った。実習方法は実習施設により、ベッドサイド時間を 1 回に 15 分などの制限や 1 病棟の学生配置人数の制限はあった。そのうち 1 名は同居者の感染が続き学内実習に途中切り替えた。さまざまな制限があることにより、学生は意図的な関わりや何が必要な情報なのかを考えるなどの教育的効果もあった。また、限られた時間のなかで、学生も真剣に取り組む姿勢が

見られた。学生も実習指導者も、臨地実習で学ぶことがいかに貴重な体験であり学習につながるかを認識されており、学生の実習目標の達成度は、ほぼ例年以上の効果があったと思われた。実際の担当教員の評価は、アセスメントや実習態度などの評価は良かった。今年度は、卒論研究発表会のスケジュールの関係で火曜日始まりとなったため、中間カンファレンスや最終カンファレンス、帰学日のスケジュールを組むことに苦慮し、帰学日を1日しか取れなかったため、学生が思考整理する時間が十分でなかった点が反省点である。また、実習指導者からの実習終了後のアンケートでは、カンファレンスでの学生同士の意見交換をもっと活発にするとよいという意見もあった。その他、学生は健康管理に注意し、大きなトラブルやCOVID-19に感染することもなく、無事に実習を終えることができた。

次年度の看護アセスメント学実習は月曜日開始となり、通常の実習スケジュールが可能となるため、さらにアセスメント能力および自分の考えを言葉にして意見交換できる能力の向上に向けた臨地実習ができるよう努めたい。

成人看護学援助論Ⅲ（慢性期）

2 年次 3 学期

森加苗愛、岩下恵子、古賀雄二、佐藤栄治、森崎久美

2023 年度から新カリキュラムとなり、本授業が開始された。すでに学生は、成人看護学概論、成人看護援助論Ⅰ（急性期）、Ⅱ（回復期）の受講を終了している。内容は、成人看護援助論Ⅰ（急性期）、Ⅱ（回復期）を踏まえて看護の継続性を意識し検討した。慢性疾患の特徴および慢性疾患とともに生きる人の理解、また、慢性期に有用な行動変容の支援に活用可能な看護理論とその看護について系統的に理解できるように展開した。疾患別の看護の学習では、臨床経験の少ない学生が事例をイメージし易い様に事例示しながら、理論と実践を理解できるよう教授した。特に代謝・内分泌疾患看護では、自己の糖尿病患者への療養指導や糖尿病教室、患者会活動(サマーキャンプ含)の実践の様子を写真や事例を交えて紹介する等、関心を高める工夫を行った。また、今年は演習の時間の調整上、「血糖値測定」「インスリン注射指導」について講義内で実技演習を行った。学生が自己の血糖値測定を行うことで、血糖値と自己の身体をアセスメントして糖尿病の理解・関心を深められ、同時に「血糖値測定」「インスリン注射指導」を行う際の看護について学ぶことができていた。

今後も、学生が与えられる講義を聞くだけでなく、看護に対する関心を高め、自ら思考することや課題を見出す力を養う講義内容となるよう企画していく。

老年看護援助論Ⅱ

2 年次 3 学期

堀裕子、小野美喜、中釜英里佳

老年期の代表的な障害や疾病をもつ高齢者の健康問題、障害や疾病が生活に及ぼす影響、高齢者とその家族の生活の質を考えた援助方法や自立支援を学べるように、適宜グループワークを交えながら授業を行った。人生の終末期看護では、末期段階での看護や家族への配慮、看取り時の看護では、エンゼルケアやグリーフケア等をビデオ鑑賞や意見交換会を行い学びの共有をした。また、ミニテストや小レポート課題を課し、知識の定着化を図った。今後も事前の事例・課題提示のように学生が主体的に学習に取り組める機会を取り入れていく。

母性看護援助論Ⅰ

2 年次 3 学期

林猪都子、徳丸由布子、永松いずみ

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。今年度から妊娠期の異常を徳丸、分娩期の異常を永松が担当した。知識の定着を図るために、毎回講義の開始前に小テストを実施した。分娩の生理と経過は骨盤模型とベビーを使用して、分娩回旋が理解できるように努めた。対面の講義にて、学生の反応を確認しながら実施することができた。

精神看護援助論Ⅰ

2 年次 3 学期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護学概論に続き受講する科目として、医療的観点から精神疾患の症状や治療の基本について講義した。各疾患の学習は、教科書を参考にワークシートに記入してから講義に参加することを求め、講義時間での学びを追記することとした。視聴覚教材を多用し、学生がイメージを持ちやすいよう工夫した。毎時間、小テストで知識を確認した。前回の復習を兼ねて感想や質問のいくつかを講義の初めに紹介し科目全体のつながりを作り知識の定着を促した。次年度以降も、引き続き学生が主体的に学修に取り組める機会を取り入れる。

地域看護学概論

2 年次 3 学期

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代、藤本優子

地域包括ケアシステム推進を念頭に置き、この時代に応じた地域看護の視点や方法論を学ぶことを目的とした。具体的には、看護の対象は、地域で暮らす人々であり地域全体であることを理解するために、地域文化と健康との関連についても触れ、臨床実習における受け持ち患者の生活背景の理解へと視野が広がることを目指した。講義は、地域保健に従事する医師や保健師により、地域看護学の概念と機能や歴史、保健活動の実際などの具体的な事例を用いるとともに、一方的な講義とならないようにアクティブラーニングを積極的に活用する事で学生の学びを深めた。

基礎看護援助技術演習

2 年次 3 学期

石丸智子、足立綾、荒木章裕、内倉佑介、徳丸千恵

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムの第1段階目の位置づけである。演習目的は、学生が看護技術に関する自らの課題に主体的に取り組み、自己研鑽しながら、看護技術の定着と向上を図ることである。まず、学生が主体的に学ぶことができるように自ら課題を選択し、技術の根拠や手順を思考したうえで、グループワークに取り組むように設定した。その後、3～5人のグループで各自の考えや意見を共有・集約し、担当教員の指導内容を踏まえ適宜修正を行い、実技演習に取り組んだ。学生の実技演習の取り組み状況は良く、集中して練習に取り組み、概ね目標に到達できたと考える。来年度も学生が主体的に課題に取り組む仕組みを取り入れながら、授業展開を行っていく必要がある。

生体薬物反応論 II

3 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 II は疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。講義後に、本科目の学修について事後学修を行うように求め（メールにてノートなどの提出）、質問事項の記載があれば回答する、あるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなどの対応を継続的に行っているが、提出状況が年々悪化している。次年度以降は Google Classroom を用いて状況改善につながるか検討したい。なお、提出状況が高い学生と低い学生を比較すると、高い学生の単位修得率が高かった。過去に定期試験の問題と

して出題していない分野あるいは医薬品（今年度は脳梗塞、前立腺肥大症）の学修修得状況は低かった。しかし、事後学修を行った受講者は正答に至っており、また単位認定にも至っていることから、講義内容全体の事後学修の必要性を周知していきたい。

今年度も受講生の合格率は比較的高い状況ではあるが、本試験での単位認定者数は昨年度までと比較すると増加しており、再試験における単位認定者数は昨年度の3倍となった。本試験での単位認定は学修範囲が広がるが、毎回の講義において、事後学修を行うことで対応できることから、都度周知していきたい。

履修者（再受験該当者を含む）88名中、85名が単位を取得した。また、単位未取得者のうち1名は再試験を受験しなかった。

成人・老年看護学演習

3年次前期

小野美喜、岩下恵子、古賀雄二、佐藤栄治、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

あらゆる健康障害レベルの健康課題（問題）をもつ成人および高齢者を対象に必要な援助を検討し、看護過程の展開の思考と看護技術を学内で習得することを目的とした。発達段階（成人期、老年期）の特徴を踏まえた上で、健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、看護援助の実践がイメージできるよう視聴覚教材を取り入れ、看護技術面においては、e-learning システムを活用した。

演習前半は成人期の看護過程の展開と技術演習を行った。事例は、周手術期の看護から回復過程までの援助がイメージしやすく、臨地実習で担当することの多い直腸がん切除術を受ける患者とした。術直後の患者観察や看護援助のみでなく、術中・術後の患者の状況に応じて評価修正しながら看護援助ができるよう、事例情報の提示の時期や方法を工夫した。また、臨床の情報収集を再現した電子カルテシステムを用いて看護展開を行った。また、1名の教員で複数のグループを担当するため、グループディスカッションはオンラインシステムを介して行い、学生の意向や疑問点をその場で聞き取り、解決しながら、学習が進むよう支援した。成人期の技術演習（術後観察、気管吸引、血糖測定・インスリン自己注射、ストマパウチ交換）は全て対面で行い、一部の技術演習では今年度から導入されたシミュレーションシステムを活用し、学生の思考をリアルタイムでフィードバックしながら、学生間の討議を深められるよう支援した。

演習後半は高齢者の転倒予防について思考し援助を検討した。模擬事例に対する援助をグループディスカッションし検討した。また、高齢者の問題となりやすい皮膚障害、低栄養をとりあげ、褥瘡処置及び褥瘡予防のための援助として、経鼻経管栄養注入の技術演習を行った。技術演習の際は、紙面上の高齢者事例を提示し、対象者をアセスメントした上で看護援助が実践できるよう工夫した。技術演習の際は、感染症対策のため、少人数のグループで、使用ベッドの配置を工夫し、全員が援助を実践できた。また、予習や技術の確認にはナースングスキルや各ベッドサイドのモニターを活用した。さらにモデル人形を活用し、実際の対象者をイメージしてもらうことに加え、患者体験ができるようお互いに役割を交代しながら技術が修得できるように工夫した。

本科目は、今年度で終了し、次年度以降は成人看護学演習及び老年看護学演習の書く科目と移行する。成人看護学演習では、引き続き、実臨床を想定しやすい環境下で演習が行えるよう、電子カルテシステムやシミュレーションシステムの活用をすすめるとともに、先行する成人看護学援助論Ⅰ～Ⅲとの連動性を高めた授業構成としていく。老年看護学演習では、高齢者事例の看護過程の展開と引き続き実技演習を行う。高齢者をアセスメントする思考トレーニングが、紙面上のみで終わらず看護実践と連動できるように実技演習を組み込む。

老年看護学実習

3 年次

小野美喜、中釜英里佳、堀裕子

高齢者施設に入所している高齢者の健康生活を援助する実習であり、大分市内の介護老人保健施設 3 ケ所での実習を行った。COVID-19 感染症拡大以降、3 年間の臨地実習休止期間があったが、今年度は 1 グループ約 7 名の学生を 3 施設に受け入れていただいた。学生は入所高齢者（要介護者）を担当し、日常生活の理解と生活の維持・向上をめざした援助、多職種連携を学んだ。また実習最終日は全学生が実習施設をこえて交流し、高齢者の看護についてディスカッションを行った。当科目は実習期間が 1 週間のため、到達目標や学習内容と方法の改善を継続しているが、高齢者への看護介入や多職種連携の実践を深めるには課題を残している。老年看護の専門性や看護役割の学びがより充実できるよう実習施設と連携した実習プログラムの検討を継続する。

成人看護学実習Ⅰ

3 年次後期

古賀雄二、岩下恵子、内倉佑介、小野美喜、神矢恵美、佐藤栄治、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

新型コロナウイルス感染症 5 類移行後、初めての成人看護学実習であった。感染対策指導・健康観察を厳重に実施し、実習施設の協力の下、実習期間・時間の短縮は行わずに 81 名全員が臨地実習を行った。

本科目は第 4 段階の専門看護学実習に位置づけられ、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。教員は常駐し、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。制限がありながらも実習施設の協力のもと、目標達成ができたと評価する。

また、次年度は新カリキュラム移行後の実習となる。関連する成人看護学援助論Ⅰ（急性期）・Ⅱ

(回復期)および成人看護学演習は、実習状況をより反映した内容に修正しており、引き続き、科目間の連動性を高める工夫を行う。

成人看護学実習 II

3 年次後期

古賀雄二、岩下恵子、内倉佑介、小野美喜、神矢恵美、佐藤栄治、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

新型コロナウイルス感染症 5 類移行後、初めての成人看護学実習であった。感染対策指導・健康観察を厳重に実施し、実習施設の協力の下、実習期間・時間の短縮は行わずに 81 名全員が臨地実習を行った。

本科目は第 4 段階の専門看護学実習に位置づけられ、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、慢性期・終末期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。教員は常駐し、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。制限がありながらも実習施設の協力のもと、目標達成ができたと評価する。

また、次年度は新カリキュラム移行後の実習となる。関連する成人看護学援助論 III（慢性期）および成人看護学演習は、実習状況をより反映した内容に修正しており、引き続き、科目間の連動性を高める工夫を行う。特に、新カリキュラムでは成人看護学援助論 IV（終末期）は本科目後へと開講時期が変更されている。そのため、実習体験をもとにして、成人における終末期看護援助のあり方について具体的に思考できる工夫を行う。

予防的家庭訪問実習（3 年次生）

3 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、新型コロナウイルス感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を行った。今年度は 4 年ぶりに休止期間を設けることなく全実習期間において訪問を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の拡大により休止期間を設けなければならなかった 3 年間で異なり、訪問を重ねるたびにチームの親交が深まる様子がうかがえた。3 年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。長期施設実習での経験を通して、協力者の変化をしっかりと捉えるとともに疾病予防の視点を持って訪問活動を考えることができていた。実習終了近くなり協

力者の都合や学生自身の体調不良で訪問ができなかった学生に対し、地域包括支援センター職員による講話を聴講する機会を設けた。講話を通して学生は新型コロナウイルス感染症拡大による地域在住高齢者への影響や高齢化が進む訪問地域の課題を学び、訪問実習を通して自分たちができる活動について考えていた。

小児看護援助論

3 年次前期

草野淳子、足立綾、橋本志乃

本科目の目的は小児の行動を多面的にとらえ、発達段階に応じた日常生活の援助方法と保育技術を習得することである。また、小児期の主要な疾患・病態について理解し、健康障害をもつ小児とその家族の看護を学ぶ。講義方法は対面とした。評価は筆記試験（100%）とした。学生は筆記試験を受験し、講義中に考えを述べていたため授業目標は達成できた。次年度も同様の授業構成とし継続する。

小児看護学演習

3 年次前期

草野淳子、足立綾、橋本志乃

本科目は、小児看護学概論や小児看護援助論で学んだ知識を生かし、第4段階専門看護学実習で必要とされる内容について演習を行った。グループダイナミクスが生かせるようなグループワークを多く取り入れた。評価は看護過程の課題（40%）全体発表の発表状況（10%）、技術演習レポート（40%）・グループワークへの参加状況（10%）であった。学生はまじめに課題に取り組み、グループワークでは科目の目標に沿った発言が見られた。来年度も今年度と同様にグループダイナミクスを考慮した看護過程の展開や看護技術の指導を実施したい。

小児看護学実習

3 年次後期

草野淳子、足立綾、荒木庸輔、廣瀬福美、橋本志乃

小児看護学実習では、3日間の保育所実習を7月末から8月第1週まで実施した。乳児・幼児の保育経験が少ない学生は子どもとコミュニケーションをとり、健康な子どもを理解した上で子どもとの遊びを行い目標が達成できた。最終日には各グループで手洗い指導を行う課題を取り入れた。

病院での臨地実習において3か月間の実習を行うことができた。感染の問題はあったものの、感染防止に留意をし、グループ分けの工夫をした。大分県立病院と別府発達医療センターの2か所で

実習を行い、異なる施設での学びを最終カンファレンスで共有した。教員は学生の個性に合わせて指導を行ったが、積極的に実習できるように指導することが課題と考える。

評価は実習態度(25%)・実習内容(25%)・受け持ち患者の看護過程の展開(25%)・実習記録(25%)とした。来年度は感染状況や病院の対応の仕方に合わせて実習方法を調整する。

母性看護学援助論Ⅱ

3 年次前期

林猪都子、徳丸由布子、永松いずみ

分娩期の異常と看護、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。分娩時損傷、分娩期出血、産科処置、産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護について実施した。

対面講義にて学生の反応を確かめながら実施することができた。講義終了後に学生に Google フォームによる学び、感想を提出することを求めた。次回講義開始前に学生の質問に対して回答しながら実施した。

母性看護学演習

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

母性看護の実践に必要な知識を理解し、母性看護技術と看護過程を習得することを科目のねらいとした。母性看護学技術演習は、演習室にて、グループ人数を少なく 3 日間 6G に分けて、「妊婦計測」、「新生児計測」、「沐浴」の 3 項目について実施した。知識の習得と確認は、過去の国家試験問題を学生全員で解いて、それぞれ知識の習得状況を確認した。ウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の演習は、産褥期の 3 事例のうち 1 事例を用いて、グループ学習で看護過程を展開した。看護過程の発表会は、学生間の意見交換が活発で学習を深めることができた。

母性看護学実習

3 年次

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子、森崎久美

母性看護学実習施設は 5 施設で、実習期間は 1 グループ 2 週間（延べ 12 週間）であった。学生の配置人数は、臨地実習期間は、大分県立病院は学生 1 G5 名配置（合計 30 名）。堀永産婦人科は学生 4～5 名配置で（合計 28 名）。いしい産婦人科は学生 4～5 名配置（男子学生 5 名）で（合計 29 名）。担当教員は大分県立病院 1 名配置、堀永産婦人科医院は 1 名配置、いしい産婦人科は 1 名

の教員を配置した。

実習は学生 1 名につき妊婦または褥婦を 1 名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開とした。サロンリラ・どーなつ助産院の実習は Zoom 講義による学級活動に参加した。生野助産院の実習は今年度から開始した。助産院実習を行うことによって、地域における助産師活動について学ぶ機会を得ている。

精神看護援助論

3 年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神疾患の症状と治療の基本および看護について講義した。精神看護を実践するために必要な主な精神疾患に関する症状や治療の基本的事項を共通のワークシートにあらかじめ記入し、講義時間での学びを追記するよう求めた。視聴覚教材を多用することで、学生がイメージを持ちやすくなるよう工夫し、感想フォームに意見や質問を記入して提出することで教員とやり取りをする機会を設けた。毎時間講義の最後に小テストを行い、知識を確認した。次年度も引き続き、学生が参加できる機会を作る。

精神看護学演習

3 年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

前年度の紙上事例教材をリファインして、個人作業で事例検討をさせ、全体で振り返りを行った。実習中に対応する可能性がある事例については、SST 方式によるロールプレイを行い、実践の対応のイメージをつかむと同時に SST について理解できるようにした。さらに、事例演習のみではわからない精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの現状については、実習施設等から招いた外部講師による講話で伝えた。さらに、各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を実際に訪ね、実際の地域生活の支援について見学し、実習との接続を図った。教材や講師は、学生に概ね好評のようであった。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続してよいと考えられる。

精神看護学実習

3 年次後期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

COVID-19 による授業への影響が小さくなった中で、例年と同様に 3 箇所での病院実習と 4 箇所での障害福祉サービス事業所実習を計画したが、実習病院の一つで院内感染が発生して病棟実習ができなかったため、該当学生の実習は学内実習に振り替えた。病院では短い日数ながら受け持ち患者について全人的な理解と考察を深め、その個別性を考えた看護計画を考えて可能な範囲で実施した。学内実習では模擬患者を受け持ち患者として動画と電子カルテから情報収集し、全人的な理解とアセスメントができるよう環境を整えた。事業所では利用者と共にプログラムに参加し、地域で生活する精神障害を持つ方の様子や利用する社会資源を理解し、どのような支援が必要かを考え、指導を受けた。例年通り、最終日のカンファレンスで学びを統合した。実習病院の所在地や状況を考慮し、次年度からは 1 箇所を変更する予定である。

第 2 段階看護技術演習

3 年次後期

石丸智子、足立綾、徳丸由布子、堀裕子

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムの 2 段階目の位置づけである。演習目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることである。実施においては、学生が効果的な学びができるようワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考して実技をイメージできる形式とした。課題事例に対する技術展開について、学生 4～5 人でグループワークを行い、技術練習をした。教員はグループ毎に、課題事例の技術展開を行う上で必要な視点についての指導を行い、評価は個人及びグループのワークノート、技術練習状況に基づき実施した。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。本科目は平成 27 年度カリキュラムであり、新カリキュラムからは臨床看護技術演習に置換される。

在宅看護論

3 年次

福田広美、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子

疾病や障害をもちながら多様な場で生活する人々に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。学生が苦手とする本科目の課題である関連法規の理解については、事例を交えた講義内容や振り返りの機会を複数回設けることで、知識の定着を図った。次年度より在学看護学概論と援助論の 2 科目に分かれ、講義コマ数も減少

するため、社会保障制度を教授する他の科目と連携し、理解の効率化を図るとともに、援助論ではより実践的で具体的な講義展開を行っていく。

教育方法論

3 年次前期

佐伯圭一郎、麻生良太

教師による発問、それに対する児童および生徒の考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授過程や理論の実際を概説した上で、現行の学習指導要領の方向性に沿った形での学習指導案の作成を行った。同時に、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

特別支援教育論

3 年次前期

古賀精治、藤野陽生

特別支援学校、特別指導学級、通級指導学級だけではなく、通常の学級にも在籍する様々な障害（発達障害や軽度知的障害など）のある児童及び生徒に対し、学習上または生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識（法制度を含む）や支援方法について教授した。

養護概論Ⅱ

3 年次前期

小野治子

子どもの健康課題解決、危機管理などの学校保健における課題の歴史的変遷を捉え、具体的な養護活動を展開方法やこれからの養護教諭に求められる役割について理解することを目的としている。講義は、対面での夏期集中講義で実施した。学生が主体的に取り組むことができるよう、個人発表およびグループワークを多く取り入れ、意見交換を実施した。それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

道徳、総合的な学習及び特別活動

3 年次前期

鈴木篤

道徳教育、総合的な学習、特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

英語 III

3 年次後期

宮内信治

生物学的視点からみた人体に関連する語彙など、自然科学分野に関連する語彙を語源学の知見を基に習得させた。教科書内容に基づく語彙習得確認テスト、音読暗唱テストを毎時間課した。文学的要素を含む語彙について教授する方法も検討したい。文学作品簡略版 *Frankenstein* を講読させた。講義内容から自分で気に入った文章を選択させ、筆記体で書写したうえで暗唱することを課した。字体を意識することが正書法習得につながった。今回は問題なかったが、今後は受講人数を勘案しつつ、適切な分量と内容の文学作品を選択していく必要がある。

環境疫学・生物学演習

3 年次後期

小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習では、健康と環境の関連性を理解するため、疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を、演習と事例研究を通じて講義している。演習では、医療統計や疫学データを適切に処理し、考察する能力を養うことを目的としている。

学生にはデータ分析と課題レポートの作成を通じて、自ら問題意識を持ち、理解を深めるよう促した。一方で、Excel を用いた演習において困難を感じる学生がいることや、課題を時間内に完了できない学生もいた。これに対応するため、演習中は積極的に質問を促し学生の理解度を確認し、指導方法に工夫を凝らすことが求められる。事前に提供する分析の手順に関する資料の充実や、演習と講義の時間配分を適切に調整し、必要に応じて改善することを今後の課題として継続する。

地域生活支援論

3 年次後期

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛、徳丸千恵

地域で生活している人々のライフステージや健康課題別における地域保健活動について基本的な知識および実際の支援活動について理解することを目的とした。講義は、現場の保健師による講義を取り入れ行った。本年度は各講義の後に、ミニレポートを課し、講義内容の定着および思考力の向上を図った。また、4 年次での地域看護学実習での実習地について、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域の特性を理解する演習をグループワークの形式で実施した。グループワークでは、教員の助言を活かしながら、実習地域の理解を深め、健康課題を見いだすことができた。次年度も、各講義の振り返るレポートや地域看護学実習へと連動する講義演習を行う予定である。

健康支援論演習

3 年次前期

藤本優子、甲斐優子、小野治子、佐藤愛、徳丸千恵

人々が健康への関心を高め、健康行動が実践できるような健康支援の技術を修得することを目的とし、個人・集団の健康増進や疾病予防のための行動変容を促す理論やモデルを活用した健康教育の企画・実施・評価等の一連のプロセスを教授した。

学生の主体的な学習を促すため、6 名程度のグループによる演習とした。各グループが一つのテーマを決定し、実際に企画案の立案から健康教育の実施まで一連の演習を行なった。その際、対象観・指導観・教材観を健康教育の内容や方法に反映させることを意識づけできるように、ミニレポートや全体での振り返り会を取り入れた。最後に健康教育の発表会を実施したところ、各グループの発表に対して他グループからさまざまな意見や質問が交わされ、学生自身が新たな気づきを得たり、学びを深めたりする機会となった。本科目は新カリキュラムへの移行に伴い廃止となるため、次年度以降は新課程の科目の中で教授する予定である。

国際看護比較論

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

2 年次の国際看護学概論からのつながりを重視して内容を構成した。国際保健／国際看護の主要概念や世界の疾病構造の変化について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学ぶことを目的として講義を組

み立て、世界的に増加している難民の健康課題や、在外邦人の健康支援に関する実践的内容を組み込んだ。課題レポートや試験結果から、学生は概ね目標を達成できたと考えるが、学生がより主体的に予習・復習に取り組めるよう、テキストの該当頁や参考本・ウェブサイトを示し予習復習を促していく必要がある。また、基本的な知識の習得と共に、変化の激しい世界情勢とそれに伴う健康課題について学べるよう、英語で発信される情報含め、最新情報の収集力も向上させる必要がある。

国際看護学演習

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

国際看護比較論の講義で学んだ知識を実践に結びつけて具体的にイメージできるよう、演習前半は、貧困援助、難民の健康課題等のテーマを設定し、映画の視聴とその後のディスカッション・レポート作成を組み込んだ。文化・社会的背景が多様な在留外国人患者の看護について、実践経験豊富な外部講師をオンライン上で招聘し内容を補強した。演習後半は、或る国の健康課題と背景および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ、考察し、発表するグループワークを行った。学生 5・6 名のグループが海外の健康課題等について国際機関のホームページ等から英語で最新の情報を収集し考察した。学生は自ら選択した多様なテーマに取り組み、発表会とディスカッションを通して知見を広げ、概ね目標を達成できた。新カリキュラムへの移行に伴い、本科目は必須科目（3 年次）から選択科目（2 年次生）となる。

災害看護論

3 年次後期

石田佳代子、石丸智子、内倉佑介、福田広美、松久美

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。そのために、講義では、災害および災害看護の基礎的知識に重点を置いたうえで、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、DMAT の活動や避難所における災害支援ナースの活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とした。また、災害状況を設定したペーパーシミュレーションや DVD 等の動画を活用するなどして、災害時のイメージ化を図り、災害時の特徴の理解を促せるような工夫を行った。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）に重点を置いたうえで、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使った訓練や災害時のエコノミークラス症候群の予防のための医療用弾性ストッキングの着用体験などを行った。本科目の評価はレポートによって行った。講義で学んだことなどを基にレポートを書くことで、様々な場における災害時の

看護のあり方や自身の責務などについて、考えをより深めることができたと考える。講義が10日間程度の短期間に集中するため、各課題の提示時期や提出期限等を調整した。

本科目を通して学びたいことや身につけたい能力について、学生が自分の考えをまとめたレポートにおいて、「トリアージ」「臨機応変な対応能力」「正確な判断能力」を身につけたいと考えている学生が多いことから、そのような学生からのニーズや期待により応えられるように取り組みたいと考える。

看護科学研究

3 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、福田広美、杉本圭以子、石丸智子、恵谷玲央、森加苗愛、篠原彩、岡田悠希

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。また、講義以外にオンライン実施の卒業研究発表会の視聴を義務づけ、卒業研究に向けての理解と態度を養った。

Google Classroom の活用も担当教員、履修者ともに習熟したこともあり、講義資料の公開やオンラインでの課題提出などが効率的に行われた。

学校保健学

3 年次後期

草野淳子、小野治子、大渡文子、手嶋康深、吉田知佐子

講義回数は20回であった。目的は、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導の視点から理解し、主要な観点を説明できるようになることである。講義は養護教諭の実践経験がある非常勤講師によって、主に行われた。内容は根拠となる法律、学習指導要領、教育課程について取り上げ、意義や内容が理解できるようにした。演習は保健室経営計画、症状アセスメント、保健教育指導案の立案とし、課題提出後に全員で討議し教員が講評を行った。評価は、症状アセスメント・指導案作成の発表(40%)と筆記試験(60%)とした。今年度の方法は有効であったため、来年度も同様に実施する予定である。

教育制度論

3 年次前期

今井航

世界の主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

事前指導では、養護実習時の遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した上で、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定し、実習生間で交流させた。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。今年度は、実習前に、4 年次生と交流し、実習に関する情報を収集する機会を提供した。

養護実習Ⅰ

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

大分市立上野ヶ丘中学校、荏隈小学校、植田西中学校、大道小学校、滝尾中学校、植田小学校、長浜小学校、田尻小学校、佐伯市立下堅田小学校で、学校体験を中心とする実習を行った。

応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、吉田成一

今年度は、解剖生理学、病態生理学及び薬理学の思考過程を教授した。

総合人間学

4 年次後期

杉本圭以子、福田広美

看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるように、教職員の推薦から教育研究委員会での検討を重ね、様々な分野の第一線で活躍されている 8 名の講師とテーマを決定した。さらに、看護国際フォーラムへの参加を 2 回分の講義とし、全 10 回の講義を実施した。今年度は、対面と Zoom による講義を実施した。学生全員が 10 回の講義を聴講できた。講義を通して、1 人の人間としてももの見方や捉え方など視野の広がりを認識でき、レポートに看護職者としての学びや今後の課題について自己の意見を表現することができた。

本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第 1 回 9 月 8 日 私が演劇を通して学んだこと

俳優 山本健翔 大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授

第 2 回 9 月 15 日 人づくりと地域づくり「食育」と防災ボランティア

ボランティアグループ「暮らしつなぎ隊」代表 柴田真佑 元佐伯市役所職員

第 3 回 9 月 22 日 学ぶことは生きること―院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと―

院内学級教師ホスピタルクラウン 副島賢和 昭和大学大学院保健医療学研究科准教授

第 4 回 9 月 29 日 嘘をつかずに生きるとは〜クラリネットとともに〜

クラリネット奏者 倉堀翔 大分中学校大分高等学校非常勤講師

第 5 回 10 月 6 日 自然に対する畏敬の念を忘れない―地球温暖化、自然災害を俯瞰して―

気象予報士 花宮広務 防災アドバイザー環境教育アドバイザー

第 6 回 10 月 13 日 微酸性電解水アクアサニター開発から伝えたいこと

富田守 デイリーテクノ社長

第 7 回 10 月 20 日 起業看護師としてのやりがい・添乗看護・在宅看護・

看護師保健師 日本旅行医学会認定看護師 小野里春香 このみの空企業組合代表理事

第 8 回 10 月 27 日 理想の未来を手に入れるタイムマネジメントの基礎知識～時間の使いかたを変えると人生は変わる～

社会保険労務士 篠原丈司 大分県男女共同参画審議委員 大分県ワークライフバランス推進アドバイザー

第 9 回・第 10 回 10 月 28 日 看護の未来を拓く企業という視点～地域における看護実践から～
看護国際フォーラム

看護探求セミナー

4 年次前期

福田広美

4 年生に対し、実習で受け持った患者 1 名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディを行った。振り返りを行う実習の事例は、4 年間の実習で受け持った事例を振り返ることとした。各教員が、学生を担当し、テーマ決定からケースレポート作成までのプロセスを指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポートの作成を行った。また、自らの看護実践と理論を繋げて理解を深めることができた。今年度はレポートの作成が遅れる学生が一部に見られたため、次年度は学生が振り返りを行う事例を早めに選択し、レポートの作成に取り組めるよう指導を行う。

地域看護学実習

4 年次前期

甲斐優子、小野治子、加藤典子、佐藤愛、徳丸千恵、藤本優子

大分県下の保健所（保健部含む）、市町村保健センター等の公的機関において、地域で暮らす人々及び地域全体を対象とした看護の在り方を学ぶことを目的に 2 週間の実習を行った。指導については、あらかじめ学びたい事項を実習課題として提示し、それぞれの施設の保健師が学びたいことを含めて直接指導を行った。また、担当教員は各施設を巡回し指導を行った。毎週金曜日は学内日として、全員カンファレンスによる学びの共有の機会とした。学生は、地区踏査をグループで行ったり、施設が実施する会議や研修会、健康教育や家庭訪問などに参加して地域で暮らす人々の生活実態や健康支援の在り方を学んでいた。次年度も地域で暮らす看護の対象を理解し、自身の看護の視野を広げるための実習となるように実習施設と話し合って進めたい。

予防的家庭訪問実習（4 年次生）

4 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。実習を行うにあたり、新型コロナウイルス感染症対策として訪問前 1 週間の体調管理、および教職員による訪問前の体調確認を行った。今年度は 4 年ぶりに休止期間を設けることなく全実習期間において訪問を実施することができた。新型コロナウイルス感染症の拡大により休止期間を設けなければならなかった 3 年間と異なり、訪問を重ねるたびにチームの親交が深まる様子がうかがえた。4 年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。配偶者や親族の健康状態の変化が協力者の生活や健康に影響をもた

らすことを理解し、訪問活動において協力者や家族を含めた健康維持への支援を考えることができていた。また訪問活動を行うにあたり、チームリーダーとして創意工夫して役割を遂行していた。実習終了近くなり協力者の都合や学生自身の体調不良で訪問ができなかった学生に対し、訪問地域の老人クラブに参加する機会を設けた。老人クラブでは積極的に高齢者とコミュニケーションを図り、地域でのつながりが高齢者の健康に与える影響について理解を深めていた。

看護管理学概論Ⅱ（政策等含む）

4 年次前期

福田広美

看護管理のプロセスおよび管理の実際を通して、看護の質を高めるための理論や看護管理に必要な理論、経営に関する基礎的な知識および、看護政策について学習することを目的とした。本年度は対面で講義を行った。4 年次生が、看護管理学の基礎知識とともに、実習で経験した事例を通して、看護の質を高める看護管理の基本的な考え方を身につけることができた。学生が看護管理を主体的に学べるよう、次年度は、学生が看護管理の基礎知識を活用しながら看護の実践の場を改善していくための学習をグループワークや発表を取り入れながら行う。

第 3 段階看護技術演習（4 年次生）

4 年次前期

石丸智子、丸山加菜、吉村幸永

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムの 3 段階目の位置づけにある演習である。本演習の目標は、これまでに学んだ看護援助に必要な知識と技術を、e ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習し、総合的に看護技術力を強化することである。学生はナースングスキルによる反復学習を通して、自己にとって未熟な看護技術項目と定着している看護技術項目を再確認することができていた。また、レポート課題により自己の技術習得状況を振り返り、技術修得上の課題や今後の対策を明確にしていた。学生全員が概ね目標を達成できた。来年度も学生が計画的に課題に取り組む仕組みを取り入れていく必要がある。

在宅看護論実習

4 年次前期

福田広美、荒木章裕、桑野紀子、篠原彩、姫野雄太、丸山加菜、矢野亜紀子

COVID-19 の発生以来、すべての学生が臨地で実習を行うことができた。感染症分類が 5 類に移行して間もない時期であったため、感染管理はこれまでの基準を踏襲し、体調不良や実習施設の

都合等にも柔軟に対応できる体制を整えた。実習中数名の学生が体調不良等の理由で、短期間のみ実習施設への往来が不可となったが、動画教材や実習で担当した症例を使って該当期間の学習を補完することができた。また事前学習として在宅看護に関連する法律や制度の復習を取り入れたことで、学生のレディネスの向上を図ることができ、実習における学習の強化につながったものとする。次年度は新規実習施設が多くなるため、施設および実習生へのフォローアップを強化するとともに、引き続き在宅ならではの経験を十分に積むことができるよう支援していく。

総合看護学実習

4 年次前期

桑野紀子

4 年次生 75 名が県内 34 施設において、6 月 19 日（月）から 7 月 7 日（金）の 3 週間、実習を実施した。一部施設では COVID-19 感染状況に応じて、可能な範囲で実習を行った。本実習は 4 年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、学生が自ら主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自立性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価まで学生が自律的に取り組む点である。担当教員に適宜相談しながら、各自が実習目的・目標に沿って実習し、4 年次生全員が無事に実習を終了することができた。新カリキュラム以降に伴い、2025 年度から実習期間が 2 週間となるため、実習目的・目標や評価方法、実習前の準備等について検討していく必要がある。

卒業研究

4 年次

福田広美

4 年次生は、各研究室に所属し、開学以降行っている 1 人 1 テーマで研究に取り組むことを継続した。研究室配置は、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行う研究テーマ、これまでの卒業研究などをオンデマンド形式で紹介し、それを学生が各自視聴した上で、研究室の希望に沿って研究室配置を決定した。各研究室において、教員の指導のもとに、卒業研究のテーマを 3 月 31 日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。今年度は文献研究が多かったが実験研究や調査研究などもみられた。倫理審査を要する研究は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。4 年次生は、研究室の配属から約 10 ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。研究発表会は、Zoom で 3 分科会に分かれて実施した。3 セクションが同時進行のため、録画により発表を後日視聴できるようにした。今年も学生、教員ともにループリック評価を行った。卒業研究優秀賞は、視聴した教員全員が評価し、各セクションから上位 2 名、計 6 名を選出する方法とした。

原著講読

4 年次

福田広美

卒業研究で配属された研究室で、教員の指導のもとに原著講読を行った。目標は、専門領域の原著論文（英語論文が望ましい）を 2 本以上読み、その知見を述べるができること、卒業論文作成時に、原著講読で学んだ知見を活かすことである。ルーブリック評価を用いて、学生が段階的に自己の成長を確認するように評価し、担当教員は最終的な評価をルーブリック評価で行った。いずれの学生も一定のレベルに到達することが出来た。

養護実習 II

4 年次前期

吉村匠平、関根剛

大分市立松岡小学校、豊府小学校、植田東中学校、南大分中学校、城南中学校、臼杵市立臼杵小学校、佐伯市立上野小学校、別府市立山の手小学校、日田市立三隈中学校、宇佐市立駅川中学校で、学校保健活動を中心とする実習を行った。

看護スキルアップ演習

4 年次後期

石丸智子、足立綾、荒木章裕、丸山加菜、吉村幸永、渡邊一代

急性期、回復期、母性、小児、在宅領域の事例に対し、根拠に基づくアセスメントおよび適切な看護技術を提供できる実践能力を養うことを目的として実施した。1 グループを学生 6～8 名で構成し、各グループで課題に取り組み発表会を実施した。必要と考えられる看護の根拠や意図が伝わるように動画や写真、パワーポイント資料の作成を課し、要点をおさえた発表を行うことができた。2 つのグループが共通事例を担当したことでディスカッションが深まり、また看護系教員のみならず人間科学系教員からの助言を受けることで、患者や一般的な視点に立ち返る重要性を再認識したと学生から多数意見があった。指導教員が実習引率のため指導や発表会支障が出るという意見があったため、次年度は日程を調整し指導体制の充実を図る。

教職実践演習（養護教諭）

4 年次後期

吉村匠平、小野治子、中釜英里佳、関根剛

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。4 年間の教職課程の学びを振り返り履修カルテを完成させた。今年度は、実習機会のない支援学校で見学実習を行った。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、救急法の実技演習などを行った。

4-2 博士課程(前期)

助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、樋口幸

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会で期待される役割と重要性、さらに助産師活動に取り組む姿勢・態度や助産師の現状と課題、助産学研究の意義、方法と倫理について系統的に教授した。COVID-19 感染対策（換気や広い部屋）を行い、講義はパワーポイントを用いて教授した。2～3 名の学生グループによる事前課題のプレゼンテーションとディスカッションもマスク着用で実施した。「出産や助産の歴史」、「女性を取り巻く社会の変化と親子関係をめぐる問題」では、各グループともディスカッションを行い、発表への質問や意見交換がなされた。新カリキュラムとなりプレコンセプションケアの内容を追加した。また助産学領域の出産満足度に関する研究論文のクリティックやガイドライン等の資料を用いたディスカッションを通して、産婦が望む出産や助産師に求められるケアとはどのようなものか自己の考えを述べることができた。

周産期特論

1 年次前期

梅野貴恵、飯田浩一、後藤清美、小山尚子、佐藤昌司、豊福一輝

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得をめざして産科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその医学的管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、産婦人科診療ガイドラインに基づき、疾患の病態・検査・治療および NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は筆記試験を講師に作成依頼し、学内で実施し全員合格した。

母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、宇留嶋美弥、草野淳子、桑野紀子、佐藤敬子、平野亙、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける性と生殖の問題である不妊や出生前診断、生殖補助医療と生命倫理、社会的支援が必要な母子やその家族をとりまく様々な問題、夫婦・親子関係や国内外の子育て支援制度など助産師活動を実践する上での基盤となる内容を教授した。学内外の専門家を講師としたオムニバス形式で実施した。子育て体験は、夏期休業中に育児体験人形を自宅に持ち帰り、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。初めての子育ての困難さなど

母親の心理を理解し、支援者の重要性を再認識する機会となった。また、地域で活躍する開業助産師の活動を聴き、病産院以外の助産師の活動から地域における切れ目のない母子への支援について考える機会となった。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。

リプロダクティブ・ヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、穴井麻友美、宇津宮隆史、大神達寛、島本久美、花田克浩

講義内容は助産の基礎知識として、女性の性と生殖の健康における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得をめざして産婦人科医師と遺伝の専門家を講師とした。性・生殖器に関する形態機能から主な疾患及び検査・最新治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、HPV ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向や今後の展望についても教授された。評価は、筆記試験を講師に作成依頼し、学内で実施し全員合格した。

ウィメンズヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、小嶋光明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、吉田成一

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる国内外の心身の健康問題や生殖補助医療をうける女性のケア、環境・社会問題と母子の健康（免疫・アレルギー含む）を理解し、女性とその家族の健康相談や教育を実施するための知識や技術を教授した。講義は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術特論

1 年次

姫野綾、安部眞佐子、小嶋光明、吉田成一、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集やフィジカルアセスメントに必要な基礎的な知識と実践の手法、そして、薬理、栄養、放射線障害などの知識をオムニバス形式で教授した。オムニバス形式にすることで、助産学教員からは伝えることが出来ない知識や最新情報を提供することに繋がっている。

本科目では、正常妊婦だけではなくハイリスク妊婦への支援を思考する機会を設ける為、ハイリスク妊婦の支援に関する知識を提供すると共に、事例を用いた課題を提示することで必要な支援

を考察する機会を設けた。さらに、アセスメント力の向上、正常逸脱を予防する保健指導へとどのように繋げるかをイメージ出来るよう、妊婦役・助産学生役共に学生が実施する 5 分程度の保健指導場面をシミュレーションする場を設けた。学生は、保健指導の難しさや知識の重要性には気付くが、コミュニケーション力や行動変容に繋がる指導の難しさまでの理解には至らない。本科目を今後の演習・実習へと、効果的に繋げていくことができるような取り組みが今後の課題である。

分娩期診断技術特論

1 年次前期

樋口幸、生野末子、姫野綾

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的にしている。入学生 7 名中 5 名が分娩見学をできていなかったが、講義開始前に分娩見学を実施する機会も設けられなかった。そのため講義には DVD や視聴覚教材を取り入れ、臨床場면을想起しやすいように工夫し、場面を教材化してエビデンスに基づいた看護を教授した。さらにローリスク分娩、ハイリスク分娩、緊急時の対応について、模擬事例を用いたシミュレーション教育を取り入れた。学生は、母子の安全と満足のいく分娩介助には、対象理解と状況把握が重要であることを学んだ。また正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る助産師としての基本的な知識及び技術を学習した。しかし、コミュニケーション能力や想像力が乏しい学生もいた。講義終了後、分娩見学の機会を設けることで、講義内容の理解を体験として学習することができたが、これまで見学実習を行ってきた学生にとって実際にケアを行うことに対して戸惑いや不安も抱いている。助産師として、多様化する母子とその家族に対する理解や円滑に多職種と連携を図っていくための能力を養っていくことは、次年度以降も継続的な支援が必要である。

産褥・新生児期診断技術特論

1 年次

樋口幸、姫野綾

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、褥婦のセルフケア能力を高めるための支援や新生児の胎外生活適応過程のケア方法を教授した。また社会的な問題となっている身体的・精神的・社会的ハイリスク状態にある母子とその家族に対する他職種や地域との連携については、講義とグループディスカッションを組み合わせ現状と課題を明らかにした。学生は積極的に講義、演習に参加し、産褥期と新生児・乳幼児期の心身の生理的変化についての基礎知識とケア技術を習得した。退院指導では、産後 2 週間での家庭訪問の内容充実を目標に退院後の生活を意識した指導案を作成し、パンフレットを用いて、ロールプレイを実施した。また、産後

の悩みとして多い母乳育児支援や新生児のスキンケア方法についても、実際の事例や場面を想定し演習を行った。対象者が産褥期の生理的变化や退院後の育児・生活をイメージできるための工夫について、学生同士で活発なディスカッションとリフレクションができた。その中で、対象者の生活背景に関する情報を把握することの必要性や地域の保健師と連携し、妊娠中から退院後の生活に向けた準備と継続した支援の重要性を理解することができた。次年度は、実際に産後の家庭訪問の機会が得られる可能性が高いため、個別性のある支援と継続的なかわりがイメージできるように、産後ケア事業や社会資源の活用も含めた教材・事例の工夫を行っていく。

周産期診断技術演習

1 年次

樋口幸、安部真紀、梅野貴恵、軽部薫、佐藤昌司、姫野綾

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。今年度は、現状把握から今後の予測し予防的に行動するという、臨床での一連の思考と行動を意識して教授内容を構成した。自分の意見や気持ちを表現することが苦手な学生が多かったので、演習は学生間の学びの共有ができるようにリフレクションの時間を十分に設けた。妊娠中のマイナートラブルの緩和や出産・育児に向けた心身の準備・体力づくりのための方法として、マタニティーヨーガやマタニティービクス、骨盤矯正や産褥体操について、解剖生理も含めて学び、実際に体験した。胎児の健康状態の診断は、超音波診断機器と高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。妊娠週数によって胎児の成長を確認する観察や様々な指標を学び、胎児の健康状態を診断するために、実際の CTG 波形から児の状態を判読し、適切に対応できる能力を養った。新生児蘇生法は、アルゴリズムに沿って迅速かつ正確な蘇生処置が行えるよう、新生児シミュレーターを用いて、出生直後の処置、呼吸確立、胸骨圧迫に至るまで技術演習を実施した後、日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。演習を通して心身ともに変化していく母子に必要な支援を考えることができる学生と、手技や技術に視点が集中してしまう学生に分かれる傾向があったため、次年度はレディネスに合わせた課題の整理と対応ができるよう工夫していく。

助産保健指導演習

1 年次

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、渡邊一代

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。さらに、多様な性とセクシャリティ教育についての講義を開始し、多様な性について考察する機会を設けた。

妊娠期、産褥期及び育児期の保健指導は、模擬患者への個別指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。その際の工夫点として、模擬患者を学生が実施することで妊産褥婦の気持ちを考察する機会を設けることや、教員が助産師役となり、実際の臨床現場に近い保健指導のデモンストレーションを実施した。さらに、学生が実施しがちな一方的な保健指導と、臨床助産師が実践する対象者に応じた保健指導の相違を考察する機会を設けた。リフレクションを実施する中で、学生自身も指導の違いに気づき、対象者に応じた指導を実施することやコミュニケーションをとりながら指導をする必要性は理解できていたが、実習に出た際に、学内での学びを実践に繋げることは困難であった。そのため、今後は実習に出る前に、視聴覚教材の活用やさらにデモンストレーション時のリフレクションを充実させることで、実際の保健指導をイメージ出来るような取り組みを実施していきたい。

今年度は、昨年に引き続き小学校における性教育も時期をずらして実践することが出来た。性教育の実践においては、実践に至るまでの準備の大変さを知ると共に、実際の反応から得られる楽しさや達成感を感じる機会となっていた。学生自身が自己の成長を感じる機会にもなっていたため、次年度も引き続きこの機会を大切にしていきたい。

助産保健指導演習

1 年次

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、渡邊一代

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。さらに、多様な性とセクシャリティ教育についての講義を開始し、多様な性について考察する機会を設けた。

妊娠期、産褥期及び育児期の保健指導は、模擬患者への個別指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。その際の工夫点として、模擬患者を学生が実施することで妊産褥婦の気持ちを考察する機会を設けることや、教員が助産師役となり、実際の臨床現場に近い保健指導のデモンストレーションを実施した。さらに、学生が実施しがちな一方的な保健指導と、臨床助産師が実践する対象者に応じた保健指導の相違を考察する機会を設けた。リフレクションを実施する中で、学生自身も指導の違いに気づき、対象者に応じた指導を実施することやコミュニケーションをとりながら指導をする必要性は理解できていたが、実習に出た際に、学内での学びを実践に繋げることは困難であった。そのため、今後は実習に出る前に、視聴覚教材の活用やさらにデモンストレーション時のリフレクションを充実させることで、実際の保健指導をイメージ出来るような取り組みを実施していきたい。

今年度は、昨年に引き続き小学校における性教育も時期をずらして実践することが出来た。性教育の実践においては、実践に至るまでの準備の大変さを知ると共に、実際の反応から得られる楽しさや達成感を感じる機会となっていた。学生自身が自己の成長を感じる機会にもなっていたため、次年度も引き続きこの機会を大切にしていきたい。

分娩期実践演習

1 年次

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸、渡邊一代

今年度も引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止策を行いながら演習を進めた。

自己学習教材として教員間で作成した分娩介助場面の動画を活用し自己学習することで、デモンストレーションの機会を減らした。さらに、実習施設毎に時間をずらして練習を行う等、集団になる機会を減らす対応を行いながら、学習を深める対応を行った。自己練習時間は昨年同様の時間を確保したが、自己練習への取り組みの違いが影響したのか、分娩介助 OSCE は全員が 1 回で合格とはならなかった。学生からは、「自己練習時間をもっと確保してほしい、もう少し練習をみてほしい」という要望があったため、次年度以降、練習時間や教員が練習を見守る時間を今以上に増やし、質疑応答できる時間を確保する。

助産学統合実習に入る前に、分娩第一期に心音が低下するシミュレーションを実習室で実施した。産婦を演じる教員の演技力も長けていたため、実際の臨場感を感じながら演習することが出来た。助産学生役の学生は、どう対応するべきかを悩みながら実践していることは多かったが、考えながら行動することを体感し、さらに、リフレクションをすることで他学生の意見も踏まえながら、自己の行動を振り返ることが出来ていた。周囲で見守る学生も積極的に意見交換を行うことができたため、シミュレーションを通して実践に対するイメージを深めることが出来ていた。いかに、意見交換を活発に行い、思考を深めることができるかが今後の課題である。

その他、フリースタイル分娩介助・会陰切開縫合術の演習を 9 月に実施した。実習では経験できないが、演習を通して経験できたことで学生の関心を高める機会になっていた。これからの助産師には必要な知識・技術の為、引き続き演習で組み込むこととする。

助産過程展開演習

1 年次後期

樋口幸、梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開について、実際の事例を用いて実践に応用する思考過程を教授した。まず、講義形式で助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授した後、妊娠期の異常事例、分娩期の正常事例とハイリスク事例の 3 つの事例について助産過程を展開した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、2～3 名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションし発表した。アセスメントに必要な知識の定着が不十分な学生もあり、基本的な知識振り返りながらの思考・アセスメントを促したが、アセスメントした項目を統合して分娩の進行への影響に関連付けることが難しいようだった。分娩期の事例は、初期診断だけでなく数時間経過後の状態の情報（パルトグラム）を追加し、経過診断の修正と初期診断計画の修正を行い、ハイリスク事例は分娩進行中に医療介入（点滴誘発）が実施された場合の診断名、計画の修正を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。提出されたレポートから、妊娠期およ

び分娩期における母児の安全・安楽を保障するために、妊産婦の身体的・心理的・社会的健康状態、胎児の発育・発達および健康状態について判断し助産診断名を記述できていた。しかし、ローリスクおよびハイリスクの事例においても、アセスメントの統合が不十分で優先度を意識したケア計画立案が困難な学生も見られた。今後は、基本的な知識の定着を図りながら、母子と家族に対するケアの視点を強化することが課題である。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸高佐枝子

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために開業も含めた助産管理について教授した。講義は周産期領域における管理的視点を養う内容とし、資料やパワーポイントを用いて実施し、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題を教授しディスカッションした。また、新カリキュラム対応した助産に関する政策立案のプロセスについても昨年度の授業案を修正し実施した。評価は、発表内容や筆記試験から行った。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、小野治子、川井梨沙、佐藤由美子

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、母子保健上の社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。最後に、『子育てを取り巻く環境と助産師の役割』について、学生自身の地元や4月以降の就業先の自治体、実習の受持ち母子の自治体等の母子保健統計データ、ホームページや文献などをもとにプレゼンテーションを行った。それぞれの発表に対して意見交換を行い、母子保健をめぐる現状とこれから助産師として活動するにあたっての地域の母子保健事業を把握することの意味等の理解を深めることができていた。

助産マネジメント演習

2 年次後期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、渡邊一代

助産業務の行われる病産院において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。4 年ぶりに助産院管理を学ぶため、生野助産院に学生 2 名 1 組で 2 日間ずつ実習した。自分達が分娩介助や産後のケアを体験したことから、助産院院長の実際の業務の意味が理解でき、改めて助産師に求められることの責務を実感していた。第 6 回日本助産診断実践学会のオンデマンド講義（「胎児診断～画像診断の Point」「授乳支援」）を Zoom で聴講し学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、実習室でシミュレーション学習を行った。さらに周産期母子医療センターへの母体搬送事例 3 事例をもとに、受入れ施設助産師として求められる役割と助産ケアの実際についてグループでディスカッションを行い、模擬妊婦や模擬医師役を教員が行ってシミュレーション学習を行った。実施後、臨地での実習経験を生かしデブリーフィングによって、事前準備や報告・確認の重要性を発表した。演習後、助産師としての自己の課題と将来の目標をレポートし、それぞれが明確にすることができていた。次年度も、助産院助産師の自律した助産ケアの実際を学べる機会を検討する。

助産学統合実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、渡邊一代

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から分娩介助を通して産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケアの実践能力を養うことを目的に 4 施設で実習を行った。あおい産婦人科とアンジェリック浦田は 5 月 22 日から、堀永産婦人科医院は 6 月 5 日から開始し、9 月 12 日まで実習を行った。途中アンジェリック浦田に配置学生 2 名が別府医療センターに移動し、実習を行った（7 月 27 日～8 月 10 日）。分娩介助例数は、平均 9.1 例（8～10 例）の実施となった。実習期間中に COVID-19 に感染した学生 1 名は 5 日間自宅療養の後、半日実習を行い、体調を考慮しながら実習を継続した。教員が体調面の確認を毎日行い、臨地指導者も夜間の待機や呼び出しなど配慮をしてくださり、他に体調不良者はいなかった。各施設ともに臨地指導者の指導を受け、受け持ち妊産婦へのケアも 1 か月健診まで実施することができた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただき、後半は継続事例など経験を重ねるごとに学びが深まっていた。継続事例 3 例を妊娠期（1 例分娩期）から 2 週間健診、さらに産後 1 か月まで受け持ち、指導者の指導を受け、妊産婦個々の問題に寄り添い助産ケアを実践することができた。今年度は、各施設ともに分娩例数が減少しており、可能な限りの配慮の上で介助させていただいたが、1 名が 9 例に達しなかった。本学生は、分娩 I 期より受持ち 2 日目に分娩停止となり緊急帝王切開となるなど

し、その後 2 週間以上の待機を行ったが実習期間中に分娩機会に恵まれなかった。そのため、この緊急帝王切開事例（手術室で助産師とともにベビー受け実施）を 1 例として事例展開することとした。次年度は、全員が 10 例以上の分娩介助を実施できるように指導者と連携し、待機実習等を含めて指導体制を密にしていける予定である。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次前期

梅野貴恵、姫野綾、渡邊一代

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間×2 グループ、計 4 週間の実習を行った。COVID-19 感染防止のため実習中止が 3 年間あり、4 年ぶりの臨地実習となった。学生 2 名でハイリスク妊婦 1 名を受け持ち、感染対策を行いつつ指導者の助言を得ながら助産ケアを展開した。学生は、受持ち妊婦のニーズを把握し、少しでも安楽な入院生活が行えるようにと指導助産師に相談しながらケアを展開した。また、ハイリスク妊産婦の心の揺れ動きにも助産師のケアが重要であることを学び、指導者に相談し助言を得ていた。また、総合周産期母子医療センターに搬送されたハイリスク妊婦のスタッフ間の情報共有や多職種との連携の場面を見学させていただいたことで、助産師の役割の重要性などを再認識していた。臨地での経験が大きな学びになることを痛感した実習となったことから、次年度以降も感染対策を取りながら臨地での経験ができるように計画する。

妊娠期課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、姫野綾、渡邊一代

産科超音波装置を用いた助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が確認し科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い妊婦の生活に応じた保健指導ができる能力を身につけるための実習である。10 月 10 日から 11 月 10 日の期間に、1 学生が大分県立病院 2 日、わたなべ助産院 2 日、生野助産院 2 日の計 6 日間実習し、12 月 4 日から 2 月 9 日の期間に、堀永産婦人科医院（学生 5 名）、別府医療センター（学生 2 名）の 2 施設に分かれて実習した。大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来は見学後 3~4 例ずつ経腹超音波検査を経験した。施設の産科医師や助産師、助産院長、教員の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査 8~16 例と個別に応じた保健指導の実際 4~8 例程実施した。別府医療センターで実習した学生の経腹超音波検査の経験数が少なかったことから、2 月 13 日から 4 日間堀永産婦人科医院で補習実習を行った。2 月 13 日から 3 月 30 日の期間は、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科の 2 施設で、6~7 月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち妊婦健診日に実習した。継続事

例の経験を含めて実習目標は達成された。

NICU 課題探究実習

1 年次後期

樋口幸、渡邊一代

今年度は COVID-19 の感染予防対策のため、体調管理、入室人数と滞在時間の調整を実施し、大分県立病院総合周産期母子医療センターで NICU 課題探究実習を行った。2 週間の実習期間のうち、臨地実習は 5 日間であったが、ひとりの学生に 1 名ずつ対象児を受け持たせていただき、ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントした。また、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための看護計画を立案した。ハイリスク児の看護ケア技術は、臨地実習前に 2 日間の学内実習を行い、NICU 看護の特徴やハイリスク新生児への看護援助の視点を学習した後、実際のケアを見学した。その後、学内で受け持ち児の看護計画に基づく新生児の看護実践について、高機能シミュレーターや SimPad を用いてトレーニングをグループで実施し、臨地での学びを共有した。臨地で見学できなかった母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整や他部門との連携については、指導者から臨床講義をして頂いた。学生は、ケアの視点や具体的な方法、助産師として妊娠期から果たすべき役割について活発にディスカッションし学ぶことができた。実際に対象に対して看護実践を行う機会は設けられなかったことで、状況に応じた看護ケアの実践については課題が残っている。次年度も臨床との連携体制を強化しつつ、学内実習の充実も検討していく。

地域母子保健演習

2 年次後期

梅野貴恵、佐藤由美子、樋口幸、姫野綾、渡邊しおり、渡邊一代

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、全員が 1 歳 6 か月児健康診査に参加し、大分市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性や、健診状況から母親と子どもの関係性を理解し、問題解決へ向けた保健師の対応や多職種、他機関との連携を理解した。出産後 3～4 か月の母子の理解は、実践マタニティ診断の産後期の診断名等を参考に、情報収集計画を立案し実施した。堀永産婦人科医院で実習した学生 6 名は施設での 3 か月児健康診査に参加し、継続事例の母子の状態を把握し予防接種等の説明を行った。他 2 施設の学生 4 名は施設の許可を得て 4 か月児健康診査後の時期に継続事例に電話訪問を行った。3～4 か月頃の受け持ち母子の様子を対面や電話での聞き取りから、家族や地域の人に支えられ成長している母子を理解し、助産師として育児期までの支援の重要性を認識する機会と

なった。次年度は、4 か月頃の継続事例の家庭訪問を予定しているため、感染状況を注視しながら準備をすすめていく。

広域看護学概論Ⅰ

1 年次

甲斐優子、小野治子、川崎涼子、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代、藤本優子

公衆衛生及び公衆衛生看護の歴史、基本的理念、対象を理解することを目的としている。具体的には、地域社会におけるヘルスプロモーション及びプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法について講義を行った。さらに、個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、社会的脆弱性のある人々を含めた全ての健康レベルやライフステージの視点という広域的な公衆衛生看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。講義では、非常勤講師を招き、最新の情報を学生に提供しつつ、複雑化する行政機関における公衆衛生看護の役割・機能を具体的に理解できるように実施した。

広域看護学概論Ⅱ

1 年次

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、藤本優子

公衆衛生看護活動で活用可能な理論やモデルについて理解することを目的としている。学生が各自で選択した理論やモデルなどについて、その歴史的背景や機能をあらかじめ調べ学習を行い、その内容を発表し、それをもとにディスカッションを行った。その結果、理論の解釈だけでなく、実践の活用方法についても探究することとなり、学生間での活発な意見交換ができた。来年度も同様の形式を予定している。

広域看護展開特論

1 年次

甲斐優子、小野治子、川井梨沙、桑野紀子、佐藤愛、佐藤由美子、藤本優子、藤井涼子

健康課題に対する保健師の支援技術について基本的理論を習得することを目的としている。現役の保健師による講義を取り入れ、母子保健や歯科保健などのライフサイクルやリスクのある人々や外国人などを含め健康レベルの異なる人々への支援の実際と保健師の役割・機能を理解できるように実施した。また、学生間の発表や討議の機会をもち、個人を対象とした支援や地域社会全体を対象とした支援などの方法について意見交換を行い、実践的な活動方法について探究した。

広域看護管理特論

1 年次

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、藤本優子

公衆衛生看護管理の概念と基本的理論から、管理的な立場の保健師の機能と役割について理解するとともに、チームの一員としてチームの生産性向上に貢献する役割を理解することを目的とした。講義は、地域マネジメントと組織マネジメントの役割と機能を軸に、理論と実際を結びつけることを目指し、広域活動展開実習の中で学びたい内容を学生が考え、実習施設で具体的な説明を受けた。その具体的実践例をもとに、テーマに基づいた討議を行い考察を深めた。また、現役の中堅保健師や統括保健師に活動の実際を講義してもらい、保健師マインドや現実的な活動実態を学べるようにした。総合的には、公衆衛生看護の管理的機能と自らがめざす保健師活動との関係について探求した。

学校保健特論

2 年次

小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能を理解することを目的としている。現在の学校が抱えている子どもの健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況について各学生が調べ、発表、ディスカッションを通し、学びを深めた。また、特別支援学校の見学を実施し、学校保健活動と地域保健活動の実際の連携について考察した。次年度も支援学校の見学を取り入れる予定である。

健康危機管理特論

1 年次

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、玉井文洋、高橋香子、本山秀樹、藤本優子

地域社会における健康危機管理（災害保健活動・感染症保健活動を含む）に関する基本的な考え方の理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた事例検討を行い、学生の発表やディスカッションを通じて自己の考えを深めることができた。また、県の健康危機管理対策の経験者や大分 DMAT で活躍している講師、震災時の保健活動を経験した講師による講義を通して、大規模災害発生時の実際の対応について実践と応用ができるよう講義内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根剛、稲垣敦、安部眞佐子

3名の教員により、年間を通じて運動指導6回、栄養指導7回、心理相談8回の合計21回の講義を遠隔講義を中心に行った。講義内容は教員により重複しない領域であるため、それぞれが独立して講義・評価を実施した上で、総合的に評価を行った今年度の受講生は8名であった。講義にあたっては、講義内容にあわせた講義形態をとるなど遠隔講義と対面講義をおりまぜて実施することができ、グループエンカウンターや昨年の課題であった心理検査を実際に手に取る機会を作ることができた。

広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代、藤野里紗

地域看護診断を用いて地域（実習地）の健康課題を抽出する方法を修得することを目的としている。具体的には、地域の既存資料や地区視診を通じて、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出する演習を行った。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、保健師として活用できる国民健康保険データと KDB システムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、演習では「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断を行い、2回の中間報告で学生や教員との討議を重ね、活発な意見交換を行い、実習科目との連動を図った。来年度も、実習との連動を考慮し、演習を進めていく予定である。

健康教教育特論

1 年次

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛、加藤典子

個人と家族、集団が主体的に自らの健康の維持増進に取り組みことを目指し、そのために、必要な知識・方法を効果的に伝える技術について修得することを目的とした。健康行動の理論の活用した個人・集団・組織に教育的な働きかけと保健師の地区活動の展開方法について学びを深めた。また、母子の家庭訪問に必要な技術を修得するために、乳幼児の発達評価を含めた家庭訪問のロールプレイングを実施した。ロールプレイングの後は、学生、教員で振り返りを実施した。来年度もロールプレイングを実施していく予定である。

健康リスクアセスメント演習

1 年次

藤本優子、甲斐優子、小野治子、佐藤愛

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得することを目的に、事例を用いた演習を実施した。具体的には、結核の個別ケース、保育所および高齢者施設での感染症発生のケースについて 3 つの紙上事例をプレゼンテーションし、それをふまえて教員が指導した。事例への取り組みは、学生 2 名程度を 1 グループとし、全グループとも 3 事例全てについて事例の概要から保健師としての支援方策までプレゼンテーションを行った。グループごとの疑問点や発表内容の相違点についてディスカッションをすることにより、学生自身が気づき合って新たな調べ学習へつながるなど、学びが深まる演習となった。本演習は、保健所での実習終了後に実施されることから、次年度は、実習経験をふまえて事例を検討させるなど、学生の経験知を活かすことによりさらに効果的な学びにつなげたい。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。前年度よりも演習を多く組み合わせることで知識の定着をはかったが、後期後半開講となる「疫学・保健統計学演習」時点ではこの科目の復習から始める必要が生じてしまった。今後は構成や進行を更に検討する必要がある。

保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎

健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法をエクセルや R を利用した演習を交えて教授した。別科目である「疫学」における統計手法で重複する部分については、両科目のテキストを補足する形で演習を十分に行って、理解を深めた。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

疫学特論および保健統計学と連続した内容として、習得した知識を活用して実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。また、保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。対応する講義科目と開講時期が間隔が空いているため、演習の一部に対応する講義科目に前倒して実施したが、講義科目の復習はある程度必要となったため、対応する講義科目と演習部分と講義部分の一体化を更に進める形で調整を必要とする。ただし、今年度の様に広域コースだけでなく看護管理・リカレントコースの履修者も含まれる場合、当該履修者の準備学習が必要となることが予測され、その支援をどう行うかについて、十分な検討を行いたい。

保健医療福祉行政特論

1 年次

加藤典子

社会保障制度の理念と構造の理解に加え、保健師に必要な政策形成能力を養うため、保健医療福祉の行政・制度と保健師の活動を関連づけた上で、保健医療福祉の行政・財政の理念やしくみ、社会福祉・公的扶助、介護保険、公衆衛生、医療の制度などの理解及び保健医療福祉分野における生活習慣病対策や母子保健対策などの各分野の政策と動向の理解を目的とした。各分野の政策と動向については演習・プレゼンテーションを取り入れた。保健医療福祉の企画から実施、評価のプロセスについては、看護政策論でも学修するが、実習前に知識を着実なものとするよう、本科目においても充実させる必要がある。

疾病予防学特論

1 年次

池邊淑子、藤内修二、三浦源太

解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識の修得し、地域に生活する個人、家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけることを目的としている。特に、保健師として、疾病予防のために医学的エビデンスに基づいた健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、特定健診の検査結果を解釈するために必要な知識、および実践能力を取得できるように、医師の講義を取り入れ構成している。実際に事例を用いて、保健指導のロールプレイングを実施した。2 年次に行われる広域看護活動展開実習（産業分野）での保健指導・健康相談の実施への連動を図った。

実践薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。また、医薬品の治療効果に関する論文データの見方、意味を評価できるような講義も行った。

本年度は受講者が8名であったが、若干、受講者間で学修状況に差は生じたものの、8名全員が単位取得に至った。次年度以降はより理解しやすい講義を行いたい。

薬剤マネジメント学特論

1 年次

小野治子、井上真

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、必要な薬剤コンプライアンスの基礎知識、多剤投薬、国民医療費の高騰など医薬品に関する諸問題について理解し、その対策について考えることを目的としている。保健師活動に必要な服薬指導の知識を修得できるように、薬剤師の講義を取り入れ構成している。講義では、具体的な理解の定着を図るために講義ごとに小テストと振り返りおこなった。来年度も同様に小テストを取り入れ知識の定着を図っていききたい。

環境保健学特論

1 年次

小嶋光明

健康と環境（物理的要因（電離放射線、電磁界）、化学的要因（化学物質）、生物的要因（ウイルス））の関わりについて、基礎を整理した講義を行った。また、喫煙、食生活（摂取カロリー、飲酒）、mRNA ワクチン摂取、の健康影響に関する最新の学術論文を学生に割り当てて討論を行った。そして、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が理解できるように努めた。受講者からは環境因子による健康影響を根拠をもって理解することできたとの声が聞かれた。次年度は具体的な環境が起因する疾病の予防と健康増進につなげるための対策も取り入れたいと考えている。

地域生活支援実習

1 年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、佐藤愛、藤本優子、村嶋幸代

対象者と家族を継続的に訪問し、家族が支援と単位であること、地域で必要とする支援について考えることを目的としている。実習では、県内 8 か所の市町において保健師に同行あるいは学生が単独で訪問を実施した。5 月から 2 月までの 10 か月間に 4～6 回の訪問を行い、対象者とその家族の継続的な変化を捉え、必要な支援や保健師の訪問の意義について理解を深めた。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。実習終了後の 2 月 2 日に実習成果報告会を行い、実習地の実習指導者の助言を受け、各学生共に今後の課題を明確にできた。

健康教育演習

1 年次

小野治子、甲斐優子、加藤典子、藤本優子、佐藤愛

健康行動理論に基づき健康教育の技術と展開方法を修得することを目的としている。健康教育特論、地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱと連動させ、実習地の健康課題より対象者と健康教育のテーマを選定し、健康教育の企画案、指導案、媒体作り、実施のデモンストレーションを実施した。企画案、指導案、デモンストレーションと 3 回の発表を行い、学生と教員間で討議し、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。次年度も同様に行う予定である。

広域看護実践演習Ⅰ

1 年次

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛

個人・家族を対象とした公衆衛生看護活動について継続的な家庭訪問の計画立案・アセスメント・評価の演習を実施した。地域生活支援実習を通じての事例報告や家庭訪問のまとめを行い、学生間や教員と討議を重ね、共有する機会を持った。また、実習指導者からの助言を得て学びを深めた。来年度も同様に実施していく予定である。

広域看護実践演習Ⅱ

1 年次

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛

地域看護診断をもとに地域マネジメント実習Ⅰ・Ⅱで実施した内容について、公衆衛生看護活動に必要な理論に基づき整理・統合する演習を実施した。また、実習を通じてのまとめを行い、学生、教員、実習指導者での共有、討議する機会を持った。各学生のまとめを共有、討議することで、学びを深めることができた。来年も同様に実施していく予定である。

広域看護実践演習Ⅲ

1 年次

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛

組織を対象とした公衆衛生看護活動について、理論、政策、保険医療福祉システムの変遷を理解し、今後必要となる社会資源や健康政策を考察していく演習を実施した。広域看護活動展開実習を通じてのまとめを行い、学生間、教員、実習指導者で共有、討議する機会を持った。各学生のまとめを共有、討議することで、視野の広がりとして学びを深めることができた。来年も同様に実施していく予定である。

地域マネジメント実習Ⅰ

1 年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、佐藤愛、藤本優子、村嶋幸代

地域及び集団の健康課題を特定できる能力を修得することを目的として、広域看護アセスメント学演習、地域マネジメント実習Ⅱと連動させ実施している。本年度は、杵築市、津久見市、竹田市、佐伯市、玖珠町、豊後高田市、宇佐市、大分市において、7月の1週間の実習を行い、9月に実施する地域マネジメント実習Ⅱに向けて地域の健康課題の検討を行った。学生はそれぞれに地域の特性に応じた健康課題をテーマとすることができた。

地域マネジメント実習Ⅱ

1 年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、佐藤愛、藤本優子

地域及び集団の健康課題を特定できる能力を修得することを目的として、地域マネジメント実習Ⅰ、広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるよ

うに組み立てた。実習は、杵築市、津久見市、竹田市、佐伯市、玖珠町、豊後高田市、宇佐市、大分市において、実習施設の指導保健師の指導を受けながら 8 月～9 月のうちの 3 週間実施した。実習終了後 9 月 28 日の実習成果報告会では、実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分県支部等の方々の参加を得てオンラインにて開催し、実習の成果を共有と共に各市町の健康課題について意見交換を行った。学生それぞれに地域をしり、そこに住む人々に触れ、感性を磨きながら保健師活動の意義を実感する機会となった。

広域看護活動展開実習Ⅰ

1 年次

甲斐優子、小野治子、加藤典子、佐藤愛、藤本優子、村嶋幸代

個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動について研究的視点をもちながら実行できる能力を養うことを目的として県内 8 か所の保健所、保健部（東部保健所、中部保健所、南部保健所、豊肥保健所、西部保健所、北部保健所、北部保健所豊後高田保健部、大分市保健所）において 3 週間の実習を行った。各学生が考えた実習テーマをもとに、実習施設の指導保健師の指導を受けながら、保健師が関係機関と健康に関する仕組みづくりをする意義と方法について考察することができた。実習終了後の 12 月 14 日に実習成果報告会を開催し、実習施設指導保健師だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分県支部等からも参加を得て実習成果を共有した。また、実習期間中に、広域看護管理特論や健康危機管理特論について、課題をもって実習に臨み保健所指導者から説明を受けることで、保健師活動の実際について多面的に考える機会を得た。可能な範囲で保健師の機能と役割についての具体の説明や経験をし、講義や演習でリフレクションして意味づけを行うという方法ができることが分かった。

広域看護活動展開実習Ⅱ

2 年次

甲斐優子、小野治子、佐藤愛、藤本優子

本年度は、2 年次 6 月～9 月間に県内の企業 5 か所（大分キヤノンマテリアル株式会社、大分キヤノン株式会社、株式会社大分銀行、ソニー・太陽株式会社、旭化成メディカル MT 株式会社）、大分労働衛生管理センターで職域における産業保健実習を 1 週間行った。学生が実習施設ごとに実習課題を設定したうえで臨み、産業における健康課題と保健師の役割について学んだ。また、実習終了後に、全教員と全学生で学びの共有を行い、業種による産業保健師の役割の違いなどの意見交換を実施した。学生それぞれ、産業保健における保健師の役割について学びを深めた。

広域看護活動展開実習Ⅲ

2 年次

小野治子、甲斐優子、藤本優子、佐藤愛

2 年次前期に竹田市市地域包括支援センター及び由布市地域包括センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。高齢者の庭訪問や会議等に参加し、地域に暮らす高齢者の健康課題への支援の実際について理解を深めることができた。また、実習最終日でのカンファレンスでは、各学生の学びの共有を行い、学びを深めた。

NP 特論

1 年次

甲斐博美、石田佳代子、草野淳子、庄山由美、藤内美保、長谷川健美、村嶋幸代

入学直後の科目で 9 名が履修した。日本の医療社会情勢と Nurse Practitioner 教育の創設経緯と国内外の NP 教育の歴史的変遷や役割・活動について理解し、高度実践看護師としてのコンピテンシーを学び、日本の診療看護師（NP）に係る現状の課題や展望から今後の NP が果たすべき役割について考えた。創設に係る教員や実践者として活動する NP の講義を通じ、NP に必要な能力をプレゼンした。今年度は、管理職として活動する NP の組織作りや看護管理の視点での講義も組み込み、管理職としての NP についても学びを深めた。入学初期のこの科目がその後の学習や実習と修了後の活動をイメージすることにつながった。次年度も、NP に対する理解とともに、高度実践看護師としての NP の役割を見出していくスタートになる科目とする。

プライマリ NP 演習

1 年次

甲斐博美、上野聖子、大島操、清原小百合、草野淳子、佐藤健誠、藤内美保、谷山尚子、廣田真理、光根美保、吉村幸永

1 年次 9 名が履修した。学内での演習では、診療看護師（NP）の活動や特定行為の実践を含む活動における組織での医療安全体制を講義から学んだ。続けて自施設の組織分析を通じ、組織の強みを課題から NP の役割を全体で討論検討し文献学習で強化した。それらの学習をした後に NP の実践の場に同行して活動場面に触れ、1 日の同行実習であったが事前学習とつながり、履修者の達成感が高かった。同行は、診療所や訪問看護ステーション、介護老人保健施設などプライマリ領域で活躍する NP の協力のもとで実施できた。実際の活動の動向と学内での学びを統合して、NP に必要な能力と役割をプレゼンし他施設の学びを共有した。NP 特論の科目からの連動で、NP の役割について学びを深めることができた。次年度は、さらに事前学習を強化することで同行することによる学びが充実できるよう支援する。

NP 実践特論

1 年次

藤内美保、甲斐博美、甲斐優子、古賀雄二、後藤愛、草野淳子、菅谷愛美、庄山由美、高根利依子、光根美保

本科目は今年度より新たなカリキュラムとして、科目名も教授内容も改訂し、老年 NP も小児 NP も合同でともに学ぶ科目で 9 名が受講した。科目の目的として、1 つは診療看護師（NP）の役割や実践の本質的要素を考察するとした。看護だけではなく、診療看護師としての役割や活動として特徴や本質を考えていくことに焦点をあてた。2 点目は、対象者の発達段階や健康段階、取り巻く家族や地域といった環境面からも捉え、より質の高い看護実践を学び、現象を分析的に捉えることとした。実際に活動する診療看護師の講義を受けて、診療看護師の共通する役割、本質的要素を分析してほしいという意図である。プレゼンテーションのテーマとして、1 回目は診療看護師（NP）が行う臨床推論とは、診療看護師（NP）が行う医療チームとはなどの問いを文献等进行分析したプレゼンテーション及びディスカッション、2 回目は看護の中範囲理論を用いて自己の実践を振り返り、さらに診療看護師（NP）であればどのようなことができるかの考察を行った。授業評価は、診療看護師の本質を考えるうえで、時期としてもよかった。授業アンケートの評価も満足度が高く、今後活動する際は本授業を振り返り、原点に立ち戻るよい内容だったなどの意見もあった。

今後は、診療看護師としての本質となる研究も実際に行いながら、エビデンスに基づく診療看護師としての役割、活動を考察できるように努めていきたい。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、永瀬公明、加隈哲也、糸永一朗、安藤優、中村雄介、中村朋子、佐分利能生、溝口博本、宮崎美樹、西水翔子、藤谷直明、江口晴彦、長濱明日香、別府幹庸、草野淳子、足立綾

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって、老年系と小児系の専門医師による講義、演習を行った。

臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。本年度より、老年および小

児の共通科目として実施したが、特段講義の進捗等に影響が生じる事態ではなかった。しかし、学生間において学修習得状況に差があることが明確であったが、その状況が評価時まで継続し、結果として、単位取得に至らなかった受講生が生じた。また、9名の受講生のうち、本試験で単位認定に至った受講生は3名であり、再試験での単位認定に至った受講生が4名であった。前年度まではほぼ全ての受講生が本試験で単位認定に至ったうえで、その得点率も高かったことと比較すると次年度以降、対策が必要と考える。

今年度より、臨床薬理学特論が老年および小児分野共通としたほか、講義回数も削減となり、学修内容と学修時間の関係で修得状況が厳しい状況になったとも考えられる。次年度も、講義体制に変更はないため、事後学修についてより積極的に関わっていく必要があると考える。

医療安全実践演習

1 年次

甲斐博美、足立綾、大島操、加藤典子、草野淳子、佐藤博、谷山尚子、田村委子、藤内美保、平井健一、藤谷悦子、古川雅英、松久美、山本真、吉村幸永

3か月間の大学や病院などの施設での演習で9名が履修した。特定行為を含み高度な知識・技術を習得し、安全面に配慮した高度実践看護師としての能力を養うことと、特定行為により症状マネジメントのための技術を安全かつ確実に実施できる能力を養う目的で学んだ。特定行為に係る制度の講義から開始し、シミュレーターなどを活用して実際の原理原則から手技を学び、ナースングスキルも活用して学習の強化をした。講師は、その特定行為に精通している医師や診療看護師(NP)であり、臨床での症例からの指導もあり、演習とナースングスキルの学習を統合して習得に取り組んだ。11月に特定行為の筆記試験とOSCEを実施し、第3者評価も受け全員が合格した。次年度も実務家の指導者に協力を得て、特定行為が安全に実施できるように演習を組み立てていく。

特定行為実習

1 年次

藤内美保、大島操、甲斐博美、吉村幸永

NPコースの令和5年度からの新カリキュラムで新たに設けた実習である。1年次の9名の学生が履修した。大分大学医学部附属病院では、1月15日から1クール目3名が4週間、その後2クール目3名が5週間(休日が多いため)、厚生連鶴見病院では1月15日から4週間3名が実習した。当該施設で経験できる多くの特定行為を経験でき、指導体制も非常に協力的で学びが多かった。また、大分協和病院では新規の実習施設で気管カニューレの交換、胃瘻・膀胱瘻の交換を確実に実施できた。また大東よつば病院や大分岡病院でPICC挿入や創傷管理の特定行為の症例がある日に実習を組んでもらい、多くの特定行為項目を経験することができた。

学生は、特定行為レポートで実施前、中、後の経過のなかできちんとアセスメントするように努

力している。次年度は、特定行為管理委員会の評価でいただいたコメントをさらに強化し支援していく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、一万田正彦、財前博文、小坂聡太郎、佐分利能生、加隈哲也、塩月成則、木村成志

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病について病態生理学との関連性を学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年アセスメント学演習

2 年次前期

藤内美保、立川洋一、光根美保、宮川ミカ、濱中良志、石田佳代子

NP コースで老年の学生 9 名が履修した。小児 NP 学生も随時参加して、学びを共有していた。本科目は、既習の幅広い知識を集結させながら、臨床推論能力を高めることを教授目的としている。事例を用いたシミュレーショントレーニングを行い、各学生は事前学習をして臨む。当日のプレゼンテーション担当学生の発表を、他の学生とディスカッションや医師や診療看護師の助言により、さらに深め、広げることができ、気づきや発見の大きい演習である。成人を含む高齢者の事例、慢性疾患や様々な症状の症例に対して、幅広く臨床推論し、そこからキューとなる情報をつかみ取り、必要なフィジカルアセスメントや検査を考え、結果を読み取り、鑑別診断を絞り込め、ケアプランを考える思考プロセスを繰り返すことで、思考が整理されアセスメント能力の強化が図れ、学生の満足度も非常に高い。さらに、診療看護師 2 名の授業では、診療看護師としての対象者の生活や人生に関わる情報や臨床推論、ケアプランも捉えることの重要性を強調しており、診療看護師が行う臨床推論能力が確実に育つ科目となっている。

次年度は、事例を変更し、さらにブラッシュアップした臨床推論能力が高められるようにしていく。また、記録用紙を含めた思考整理を含めて検討していきたい。

老年薬理学演習

2 年次前期

吉田成一、甲斐博美、塩月成則、大仲将美

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を事例によるシミュレーションを通じて学ぶための演習とした。症例を通じて、病態の理解や検査や処方の判断、治療マネジメントも含めた薬理学の修得をディスカッションによる演習で強化した。NP が

活動する臨床に多く見られる症候や事例を組み込み、演習の質を上げた。特定行為に係る内容も多く含み、同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で受講生の到達度をあげている。事例に対する資料作成、ディスカッション時の理解度等、受講生は一定水準の学修習得状況に達した。今後も、臨床推論の学びと重ねて演習課題をプランしていく。なお、次年度は、小児分野と共通の演習とするため、担当者の変更および内容の調整を行う必要がある。

老年実践演習

2 年次

甲斐博美、足立綾、大島操、加藤典子、草野淳子、佐藤博、谷山尚子、田村委子、藤内美保、平井健一、藤谷悦子、古川雅英、松久美、山本真、吉村幸永

9 名が履修した。特定行為実習の期間に合わせて演習がスムーズにできるように工夫した。特定行為を含み高度な知識・技術を習得し、安全面に配慮した高度実践看護師としての能力を養うことと、特定行為により症状マネジメントのための技術を安全かつ確実に実施できる能力を養う目的で学んだ。特定行為に係る制度の講義から開始し、シミュレーターなどを活用して実際の原理原則から手技を学び、ナースングスキルも活用して学習の強化をした。講師は、その特定行為に精通している医師や診療看護師（NP）であり、臨床での症例からの指導もあり、演習とナースングスキルの学習を統合して習得に取り組んだ。特定行為の筆記試験と OSCE を実施し、第 3 者評価も受け全員が合格した。学生の経験領域やレディネスから演習に対する取り組みが非常に積極的であった。次年度も実務家の指導者に協力を得て、特定行為が安全に実施できるように各自の練習ができるスケジュールで演習を組み立てていく。

老年 NP 実習 I

2 年次

藤内美保、石田佳代子、大島操、甲斐博美、山田貴子、吉村幸永

老年 NP 実習 I は 8 週間の病院であり、9 名が履修した。非常にレベルの高い実習ができた。COVID-19 が 5 類に移行したこともあり、全ての実習施設で中断することなく予定通りに臨地で学ぶことができた。大分県立病院、厚生連鶴見病院、豊後大野市民病院、別府医療センター、大分医療センターに加え、今年度は新規施設として臼杵医師会立コスモス病院と津久見中央病院にご協力いただき 7 施設で 1～2 名を配置した。実習施設の医師か看護部の指導者からも「大変良い刺激をうけた。今後もぜひ実習を引き受けたい。」といった全体的に好評価をいただいた。実習では臨床推論能力や医療処置管理能力、チーム医療における連携の在り方を学んだ。2 週間に 1 度の帰学日でのカンファレンスや実習施設での医師や看護部の指導者とのカンファレンスにおいて、実習内容を振り返るとともにケースレポートなどについて助言をいただいた。NP 実習とは別に特定行為補講実習をしたことで、NP 本来の実習に専念することが可能であった。

次年度も、臨床推論能力や薬剤や検査、処置などの医療的管理能力を高める実習を行うことができるよう支援していく。

老年 NP 実習 II

2 年次

甲斐博美、大島操、濱中良志、吉村幸永

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ことをねらいとし、4 週間の診療所実習を 9 名が履修した。指導医からの丁寧な指導を受け、在宅での継続医療における包括的アセスメントを学んだ。ヒカリノ診療所と社会医療法人関東会大東よつば病院、めのクリニックが新規実習施設として加わり、合計 6 施設での実習になり、日々の指導やカンファレンスでのケースレポートの指導や在宅領域での医療看護の在り方を多くの指導者から学ぶことができた。この 4 週間はプライマリ NP としての基盤を形成する実習となる。次年度も、プライマリとしての NP の役割を学べるように支援する。

老年 NP 実習 III

2 年次

甲斐博美、石田佳代子、大島操、濱中良志、吉村幸永

2 週間の介護老人保健施設実習で 9 名が履修した。施設に入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。実習施設は、新規の実習施設のグリーンケアやまがを加えた 4 施設で実施した。COVID-19 が 5 類に移行したが、面会制限のある施設内での医療の在り方を学びながら、担当の対象者やご家族に対しての看護治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。老年 NP 実習 I（病院）、II（診療所）との統合で、プライマリ領域の NP に必要な能力を探究していける支援をした。学生のこれまでの教育・就業背景の違いを考慮して、在宅分野の看護実践能力を強化していくことを課題として次年度の実習計画を検討する。

老年 NP 探求セミナー

2 年次

甲斐博美、石田佳代子、大島操、藤内美保、山田貴子、吉村幸永

2 年次 9 名が履修した。老年 NP 実習 I・II・III の 14 週間の学びを通し、総まとめとしてケースレポートによる臨床推論や看護マネジメント、包括的健康アセスメントの学びを発表した。ま

た、実習全体を通じて学んだ NP の役割を別日にプレゼンテーション、全体のディスカッションで検討した。これらの発表には、担当教員だけでなく、実習施設の指導者（医師や看護部長）、診療看護師（NP）にも参加していただき、学びを共有できたことと実習の成果を履修者と指導者で確認することができた。また、学んだ知識と技術の強化のために特定行為などを含む技術演習も実施した。14 週間の実習を経て、総まとめとして思考の整理や知識の確認、NP の役割を探究することには大きな意義があった。今年度も、実習終了後の学びを整理探求することを強化し、発表の際には実際に指導して下さった医師や看護部の方々、NP の参加による学び方や指導の共有をしていく。

小児疾病特論

1 年次

草野淳子、井原健二、糸永知代、井上真紀、小栗沙織、久我修二、清田晃生、小林修、末延聡一、原卓也、福永拙、別府幹庸、保科隆之、前田知己、保科隆之、佐藤亮介、山本大貴、足立綾

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。地域の医療機関で小児の診察を行っている各専門領域の医師がオムニバス形式で講義した。評価は筆記試験（100%）で行った。各講義については専門性が高い医師の講義であり、小児 NP に必要な知識を学ぶことができた。来年度も同様の内容で実施する。

小児アセスメント学演習

2 年次

草野淳子、原卓也、足立綾、橋本志乃

小児期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シュミレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。臨床推論の考え方と記載方法を学び、次に紙上事例について 4 事例を展開した。学生は 4 事例についてプレゼンテーションを行い、それを踏まえて医師や教員が指導をした。この演習を行うことで包括的健康アセスメント能力を身に付けることができた。評価はレポート(40%)・プレゼンテーション(40%)・意見交換(20%)で行った。来年度はカリキュラム変更に伴い老年 NP コースと一体化するため、再検討する。

小児薬理学演習

2 年次

草野淳子、松本康弘、足立綾、橋本志乃

小児領域において必要とされる薬理学に関する高度実践能力を獲得するために、症例を用い演習を行った。症例を通じて、病態の理解や処方判断を強化した。知識修得と演習を行うことにより学生の理解は深まった。評価は筆記試験（100%）であった。学生の理解度はディスカッションで確認した。来年度は老年 NP と合同の科目となるため再検討を行う。

小児実践演習

2 年次

藤内美保、足立綾、大島操、甲斐博美、草野淳子、迫秀則、佐藤博、竹内山水、谷山尚子、田村委子、藤谷悦子、平井健一、古川雅英、堀裕子、山本真、吉村幸永、

各分野のスペシャリストの医師による集中演習によって演習を行った。シミュレータや実技を多用し、実際に近い形での実習に取り組めた。知識は Web プログラムを用いて確認した。評価は演習準備・参加態度(30%)・技術習得度、OSCE 試験結果(70%)で実施した。すべての演習終了後に学外の OSCE 試験官の下、試験を行った。来年度はカリキュラムの改定により、内容が変更する。

小児 NP 実習 I

2 年次

草野淳子、黒木雪絵、原卓也、足立綾

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。総合病院 8 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身につけ、医師より実習記録の指導を受けた。帰学日には教員にプレゼンテーションを行い、学生の実習目的の修得状況を確認した。評価は毎日の実習記録と 8 事例のレポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 実習 II

2 年次

草野淳子、福永拙、後藤愛、足立綾

医療型障害児入所施設で実践力を身に付けることを目的に、小児 NP 実習を展開した。4 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、適宜医師よりの指導を受けた。毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 4 事例の事例レポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 実習 III

2 年次

草野淳子、足立綾、長濱明日香

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習 III を展開した。診療所 2 週間の実習とし、小児外来にて診察技術や臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の診察に陪席・往診に同行して、医師よりの指導を受けた。毎日の実習記録を教員に提出し、目標の到達度を確認した。評価は毎日の実習記録と 4 事例の事例レポート(100%)とした。来年度も同様の指導方法と内容にする。

小児 NP 探求セミナー

2 年次

草野淳子、足立綾、橋本志乃

小児 NP 実習 I・II・III が終了後に、実習での包括的健康アセスメント、治療的看護アセスメントの総括として 5 日間で 1 事例のまとめを行った。パワーポイントに臨床推論の過程をまとめ、他学生や教員の前で発表し意見交換した。評価は事例のレポート (80%)・意見交換の活発性と態度 (20%) とした。次年度はカリキュラムが改定するため、老年コースと検討する。

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子

今年度は各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。動画配信を行い事前学習に役立てた。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、黒川竜樹

今年度は Zoom を駆使して、各臓器別の疾患の成り立ちに関する病態生理学を解剖生理学との関連性を重視して教授した。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次

藤内美保、石田佳代子、濱中良志

本科目は、NP コースの学生 9 名が受講した。授業の教育目的は、クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることである。適切なスキルのもと観察ポイントや根拠に基づいた判断できる能力を確実に身に付けるため、五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を基本に理論と実践を学ぶため、学生によるプレゼンテーションとディスカッション、最後に教員からの補足、ポイントの再確認を行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。理論は県外など遠方からの学生が多いため、オンラインで実施し、フィジカルイグザミネーションの技術は感染対策を徹底し演習室で対面で行った。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデルのシミュレーターを使用し、確実なスキルとその根拠を修得できた。試験は筆記試験および OSCE を行った。学生のプレゼンテーション内容はとても深く、ディスカッションも活発であった。学生の授業アンケートでは、満足度も高く、自分たちで調べてプレゼンテーションすることで学習が深まったとの意見が多かった。一昨年度の授業アンケートで教員の説明時間をもう少し確保してほしいという要望があり、改善したことで同様の意見はなかった。

次年度は、ディスカッションをもっと活発にできるようにプレゼンテーション担当以外の事前学習をさらに促進することを検討していきたい。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに科学、測定・評価について概説し、運動の強さと量の測定、歩行の運動力学的分析、歩行の筋活動と代謝、柔軟性、トレーニングの基本原則、レジスタンストレーニング、行動変容理論等について講義した。臨床での応用を考慮して、ストレッチングとレジスタンストレーニングを取り入れ、身体活動量計測の実習を行なった。また、栄養学の知識の整理、確認をした。生野菜摂取の利点や弊害についての文献を収集してまとめ、生野菜摂取について考察した。また、食事分析と

して、食事内容の振り返りを行い、分析の仕方、指導などを実践した。その後、関連する英語文献を読んで解説した。

人間関係学特論

1・2 年次

関根剛、吉村匠平

2名の担当教員により、関根8回、吉村7回の合計15回の講義を、例年のようにシラバスを基本として、参加学生の希望するテーマをとりいれて講義内容を構成した。受講生は10名であった。少人数であったため、理論だけではなく、事例や演習を組み込んでアクティブラーニング要素を取り入れ、遠隔講義では毎回1度以上の質問をチャットに書き込むという形で活性化を図った。今年度はZoomによる遠隔講義と演習的な内容では対面講義（Zoomを併用したハイブリッド）により行なうことができた。講義であれば対面とZoomの併用は難しくないが、演習やロールプレイの場合、受講生の急な所用等でZoomとの併用となった時の対応は、今後の工夫の必要が残る。

看護管理学特論

1・2 年次後期

福田広美、甲斐仁美

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成や経営等、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるよう、講義の内容を踏まえたグループワークとディスカッション、プレゼンテーションを行った。学生は質の高い看護サービスやマネジメント等について、実践と理論を結び付けながら看護管理に対する理解を深めた。来年度は、広域看護学コースの学生が新たに加わるため病院以外の多様な実践の場において役立つ看護管理を学べるよう教育を行う。

看護理論特論

1・2 年次

秦さと子、藤内美保、桑野紀子、杉本圭以子、石丸智子

看護理論の基本構造や理論評価の意義及び視点について理解し、看護実践への活用について検討することを目的に、教員による講義と学生によるプレゼンテーションで構成した。履修生10名であったため、1人の理論家に対し1～3名の担当を希望に基づいて決定し、理論の概説と看護実践への活用の具体例についてそれぞれ発表させた。夜間開講のため、授業はすべてオンラインで実

施した。5名の担当教員が各理論家の発表会にチュートリアル形式で支援した。それぞれの発表では、理論の解釈だけでなく実践への活用例についてもおおむねまとめられており、活発な意見交換につながっていた。次年度も同様の授業構成で実施予定である。

看護教育学特論

1 年次

藤内美保、梅野貴恵、小野治子、桑野紀子、秦さと子、山崎清男、吉村匠平

看護を担う人材育成には、質の高い看護教育学を学ぶ重要性があるという視点から、教育学の理論および技法を理解し、活用・応用できることを目標に教授し、7名（看護管理リカレントコース、NPコース、助産コース）が受講した。看護教育の歴史の変遷と看護教育制度の現状、看護基礎教育と継続教育、現任教育の在り方、看護学実習の在り方、看護教育方法論、自己教育力、海外の教育事情、保健師・助産師の教育、教育評価について、幅広くグローバルな視野で考えることを目指した。教育学に造詣が深い学部講師1名を招聘し、教育原理や教育方法の基盤についての内容を教授してもらった。最後は、学生の関心をもつ教育関係において「看護教育を考える」についてプレゼンテーションしディスカッションし、それぞれの立場からの広い視点で意見交換ができた。

次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

看護コンサルテーション論

1・2 年次

杉本圭以子、関根剛、竹村陽子、吉村匡平

看護におけるコンサルテーションの概念とプロセスについて講義した。組織に対するコンサルテーションについて文献を読み合わせ、現場でのコンサルテーションの実際を県内で活動する専門看護師による講義で学べるよう構成した。対象者を理解するための心理的アセスメント法や効果的な心理教育と心理的援助法についても学び、より臨床で活かせるように工夫した。後半は学生が経験した事例をお互いに提供し、コンサルテーションのタイプと目的をお互いに検討し、理解を深めた。次年度も学生自身の経験から看護コンサルテーションを考えられるよう授業を構成する。

看護倫理学特論

1・2 年次

関根剛、小野美喜、平野互

3名の教員により、関根3回、小野4回、平野7回の合計14回の講義、3名の教員のグループに分かれての受講生による事例報告レポート討論1回の、合計14回の対面と遠隔による講義を

行った。評価は提出された事例報告レポートおよび討論により行った。今年度の受講生は 19 名であった。遠隔講義が必要になってくる中、対面講義の機微を遠隔の中で活かす方策を共有することを検討する必要がある。

看護政策論

1・2 年次後期

加藤典子、甲斐優子、影山隆之、小池智子、小山明夫、立森久照、中西三春

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。国や大分県の対策立案の実際、政策立案方法、NPO の政策的関与、研究エビデンスの政策への反映などについて、演習の要素を取り入れて展開した。履修者の反応は好評であり、レポートでも自分の領域に照らし合わせて政策への関与について考察することができた。

健康社会科学特論

1・2 年次後期

加藤典子

本特論では、看護制度の課題に関して社会及び社会システムから深堀してその様相を捉える能力を養うことを目的とした。このため、個々の人間行動や社会構造、社会の抱える課題について解決のためのアプローチ方法について学習した。演習では、それぞれ 1 課題を設定し、課題を設定、分析、解決方策を検討した。成果として、履修者が県の関係する協議体に政策提言する機会を得た際に、演習で作成した資料を踏まえて提言を行った。今後は、政策提言先を見据えた上で、より具体的な提案となるよう演習を進めていきたい。

看護科学研究特論

1・2 年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、関根剛、桑野紀子、加藤典子、大田えりか

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、疫学研究、文献研究を専門的に行っている先生方から講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN e ラーニングも活用している。

保健情報学特論

1・2 年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、岡田悠希

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

生物統計学パートは、今年度から教員と受講者が分担して統計学の各トピックについて短いプレゼンテーションを行い、質疑応答や教員からの補足を行うという形式を導入した。今年度は履修者が少ないこともあり、教員と密にディスカッションを行うことができ、有効であったと評価する。次年度以降、履修者数の多寡に応じて進め方をどう調整するかは課題であろう。

英語論文作成概論 (Introduction to Writing Research Papers in English)

2 年次前期

G.T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This class was a workshop that helped students to write academic paragraphs and essays in English. It was not a translation class. The aim of this class was to help students write simple, logical English paragraphs. The class was a student-centered class that emphasized active learning and cooperative learning. Students practiced writing together through pair work and group work. The instructor monitored and give real-time advice and instruction to students during their practice in order to help them improve their ability to read and write in English.

薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

臨床薬理学を学修する上で基盤となる薬物についての作用機序、体内動態（血中濃度）、代謝経路、副作用、適応疾患、依存性などの基本的事項を理解し、処方にあたっての留意点、年齢や病態による薬物動態の変動、および薬物相互作用について修得するための講義を行った。本科目は、昨年度までの老年臨床薬理学特論および小児臨床薬理学特論の導入・総論分野に相当する選択科目である。両科目では6コマで行っていたが、本科目は8コマとなり、十分な学修時間を確保し、講義を構成することができたため、理解度は非常に高く、9名の受講生が全員単位修得に至るとともに、その学修習得状況も良好であった。

一方、薬理学特論の後に始まる、臨床薬理学特論まで期間が空いたことが起因するのか、臨床薬

理学特論における医薬品に関する学修習得状況は、薬理学特論ほど高くはなかったため、今後両者の関係を周知し、関連付けた学修が可能なような体制を取っていきたい。

看護アセスメント学特論

1 年次

藤内美保、石田佳代子、草野淳子、杉本圭以子

本科目は、2 名（看護管理・リカレントコース）が受講した。クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点は臨床推論や臨床判断に関する考え方、実際の事例の活かし方について、2 点目は小児のフィジカルアセスメント、家族看護とアセスメント及び看護の実際について、3 点目は災害看護における概念や理論の探求、災害看護の課題とその解決の探求など、4 点目は精神看護におけるアセスメントの講義および事例展開演習を行った。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。授業アンケートの結果、2 名とも大変興味深く参加した、満足度は高いとの評価が得られた。

次年度も学生の反応を把握しつつ、内容は継続的に進めていきたい。

精神保健学特論

1 年次

影山隆之

研究者・リカレントコースの履修者がいなかったため、広域看護学コースに特化した内容構成として、精神健康の基礎理論とモデル、精神保健医療福祉の主なトピックス、行政保健師によるインテイク、産業メンタルヘルス活動について講義を展開した。レポートから読み取る限り、実務的な内容に徹したことが好評であった。コースにより開講希望日が異なるので、次年度は最初から二通りの日程を公表し、コース別のニーズに対応する予定である。

基盤看護学演習

2 年次

藤内美保、伊東朋子、影山隆之、品川佳満

本演習においては、研究の方法についてさまざまな観点から、その手技方策を具体的に解説し、学生自身がその手法を理解することを目的としている。4 名の教員によるチュートリアル形式とし、担当教員の専門的な領域から演習形式で行った。1 名の学生が受講した。「生物生理学的測定

法」「アセスメントツールの開発」「精神健康測定法」「自律神経機能とその測定法」にそって、レポートや発表およびディスカッションにより評価した。授業形式はオンラインで行った。次年度も学生の反応を把握しつつ、現状の内容を継続的にしていきたい。

老年看護学特論

1 年次

小野美喜

高齢者の健康課題や看護実践を探究するために、エンドオブライフケア、高齢者の尊厳と倫理的課題、高齢者の QOL 等を焦点して、文献を講読して意見交換を行った。履修者は看護管理・リカレントコースの学生 1 名であった。教員とマンツーマンによる授業ではあったが、最新の文献知見を通して、実際に展開されている高齢者看護の実践について振り返ることができた。最終的に学生が自身の高齢者看護の実践をプレゼンテーションし、今後の実践活動につながるものとなったと評価している。次年度も文献講読を主とした学習活動を予定しており、文献選択・提示等を工夫する。

広域看護学演習

2 年次

桑野紀子、甲斐優子、加藤典子、福田広美

地域看護学、看護管理学、社会看護学、国際看護学研究室の教員が担当した。公衆衛生看護領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、具体的に理解できるように教授した。今後は学生の研究テーマも勘案しながら内容を構成していく必要がある。

看護管理学演習

2 年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床現場における組織の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画の立案、実践および評価に関する教育を行った。学生が、実践の場の組織分析を行い、改善に向けた実践計画を実践の場の組織員とともに立案を行った。さらに、立案した計画をもとに実践の場で、計画を組織員とともに実施し、実践に対する評価と次の改善に向けた計画立案を行った。学生は、組織分析から評価に至るプロセスで発表とディス

カッションを行い、各段階において、看護管理実践について理解を深めた。また、看護管理の実践を行うプロセスで文献を活用し、改善に取り組んだ。次年度は多様な管理経験をもつ学生が本科目を受講予定である。学生の特性をふまえて、それぞれの学生が看護管理の実践力を高めていけるよう指導を行う。

原書講読演習

1 年次

宮内信治

英語習得における基礎的要素の確認定着を目標とし、発音記号、英文法基礎知識と文法解析方法を教授した。演習として看護（Nurse Practitioner：NP）に関する英文原著を用いた文法解析と読解和訳に取り組ませその成果をレポートにとして提出させた。NP コース以外の受講生には、コース別、個人別に演習課題を指定し、文法解析と和訳を演習させた。英文読解能力の向上が見られた。演習用文献の内容と日本の臨床の現状とを関連付けて考察できるような機会を設けたい。

特別研究（研究者養成コース）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、修士論文に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（2/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、2 名が修士論文を提出したが 1 名が不合格となり、1 名が修了した。

課題研究（広域看護学コース）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1 年次生は研究計画報告会（2/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、6 名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（助産学コース）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1 年次生は研究計画報告会（8/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、10 名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（NP コース）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1 年次生は研究計画報告会（8/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度は、10 名が課題研究を提出し、修了した。

課題研究（看護管理・リカレントコース）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、課題研究に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（2/29）で発表した。今年度は、課題研究を提出した学生がおらず、修了者はいなかった。

健康生理学演習

2 年次

濱中良志、安部眞佐子

今年度は、心電図の実践の読み方および栄養学の実践を教授した。

健康栄養学演習

2 年次

安部眞佐子

栄養と疾患の関連について考えた。疾患の中で、特に履修者の研究テーマに近い呼吸不全を取り上げた。呼吸不全のメカニズムや重篤度の判定、呼吸と嚥下時の咽頭部の動きと高流量酸素が摂食時に及ぼす影響を学習した。さらに、慢性呼吸不全の低流量酸素が摂食に及ぼす文献をまとめ、文献の少ない高流量酸素流入時の摂食に与える影響について仮説が立てられるように学習を促した。文献を学生がサーチし、内容をまとめてプレゼンテーションを行うことによって、学生の研究の内容を深めることにつながった。

放射線健康科学特論Ⅰ

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

放射線の健康影響を理解するための物理的基礎から生物学的基礎までの基本的事項を教授した。また、医療被ばくや原子力災害の現状とそこから受ける放射線の健康影響・リスクについての最新の知見を取り上げることで、身近な問題として理解できるように努めた。

放射線健康科学演習

2 年次

小嶋光明、恵谷玲央

本演習の目的は、医療放射線によってもたらされる線量の理解及びその健康への影響の考察である。放射線防護の基本原則である距離、時間、遮蔽の深い理解を目指し、密封 γ 線放射線源、各種サーベイメータと解析ソフトを用いた実践的な演習を通して、放射線の散乱と減衰に関する重要な概念について講義した。距離が放射線散乱量に及ぼす影響の評価、放射線源への露出時間の変化が累積線量に与える効果の測定、および様々な材質の遮蔽材が放射線減衰に与える影響を比較検討し、放射線安全管理に関する防護策の重要性を検証すべく演習を展開した。提出されたレポートを通じて、受講生の理解度と実践能力を評価した結果、理論と実践の双方において高い教育効果を確認できた。

放射線リスク学特論

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

放射線防護の歴史、発がんリスク推定の現状と課題を中心に講義した。発がんリスクについては放射線発がん機構に関する最新の研究論文を用いて解説した。また、福島第一原発事故後の福島県の環境放射能の経時的変化や福島県内の野生動物（低線量・低線量率放射線被ばく）の生物影響に関する最新の知見を紹介し、福島県の現状の理解につなげた。

放射線生物物理演習

2 年次

小嶋光明、恵谷玲央

本演習の目的は、放射線の特性と線量の概念を理解し、それを物理的および生物的な線量測定を通じて深めることにある。今年度は人体を模した人体ファントムとガラス線量計を使用して、CT撮影による人体内の被ばく線量を評価し、実際の被ばく状況を再現した線量分布作成する演習と密封 γ 線放射線源と各種サーベイメータを利用して、放射線防護の基本原則である距離、時間、遮蔽及び遮蔽材の影響を調査する演習も行った。受講生が自主的に演習に取り組む環境を提供でき、提出されたレポートの質も高く、教育効果は非常に高かったと評価できる。

人間関係学特論

1・2 年次

関根剛・吉村匠平

2名の担当教員により、関根8回、吉村7回の合計15回の講義を、例年のようにシラバスを基本として、参加学生の希望するテーマをとりいれて講義内容を構成した。受講生は10名であった。少人数であったため、理論だけではなく、事例や演習を組み込んでアクティブラーニング要素を取り入れ、遠隔講義では毎回1度以上の質問をチャットに書き込むという形で活性化を図った。今年度はZoomによる遠隔講義と演習的な内容では対面講義（Zoomを併用したハイブリッド）により行なうことができた。講義であれば対面とZoomの併用は難しくないが、演習やロールプレイの場合、受講生の急な所用等でZoomとの併用となった時の対応は、今後の工夫の必要が残る。

健康科学研究特論

1・2 年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、関根剛、桑野紀子、加藤典子、大田えりか

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、疫学研究、文献研究を専門的に行っている先生方から講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN e ラーニングも活用している。

特別研究（博士課程前期 健康科学専攻）

1・2 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、修士論文に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（2/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、2 名が修士論文を提出し、修了した。

看護管理学特論

1 年次後期

福田広美

看護管理学の理論や最新の研究に関する動向について教授した。学生が看護管理について関心のあるテーマについて文献レビューを行い、発表とディスカッションを行った。学生が看護管理に関する理解を深めることができた。次年度は、看護管理に関する文献レビューに際し、クリティークや研究の計画についてもディスカッションを行う。

看護専門科学演習

1～3 年次

梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、草野淳子、藤内美保、林猪都子、福田広美

看護専門領域教員によるオムニバス形式で、学生 4 名の背景や研究領域に関連した以下に記述する内容の講義や学生による課題発表とディスカッション、研究論文の批判的検討を通して学びを深めた。全ての講義やディスカッションは Zoom を用いて実施した。演習内容（題材）は、看護管理に関する研究論文、老年看護に関連した論文（エンドオブライフなど）、Tanner の臨床判

断モデルを用いた看護経験事例と考察、看護における臨床推論・臨床判断を高める教育、父親の家事育児参加と育児休業取得の政策および現状と課題、障害児や医療的ケア児についての問題と課題、性や生殖の課題とプレコンセプションケア、女性の更年期症状と男性更年期、精神健康の定量的測定である。最終回は、受講生自身の研究課題に関する先行文献の知見と研究計画、研究中間結果のプレゼンテーションと教員とのディスカッションを行った。学生は、全ての課題を完了し単位を取得した。

特別研究（看護学専攻）

1～3 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、原書購読演習と博士論文に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（2/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、1 名が博士論文を提出し、修了した。

特別研究（健康科学専攻）

1～3 年次

稲垣敦

履修者が各自の主・副指導教員の指導を受けながら、原書購読演習と博士論文に取り組んだ。また、1 年次生は論文レビュー報告会（8/29）、論文計画報告会（2/29）で発表し、2 年次生は研究中間報告会（8/28）、研究成果報告会（3/1）で発表した。今年度は、2 名が博士論文を提出し、修了した。

4-4 その他の教育活動

大学生消防応援隊（Oita-NHS-team）

学生 22 名（4 年次生 11 名，3 年次生 3 名，2 年次生 6 名，1 年次生 2 名）

担当教員 石田佳代子、内倉佑介

1. 消防応援隊の活動目的

本学の消防応援隊は平成 26 年 3 月に結成された。活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することなどにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術の習得などに努めている。

2. 本年度の活動内容と今後の課題

学内の活動では、毎年 1 回実施される本学の防災訓練（11 月 22 日実施）の一部の企画・運営に携わった。本年度も訓練参加対象者は、1 年次生全員および訓練実施時間に学内にいる教職員と学生全員に縮小された中での活動であった。応援隊は 1 年次生の避難誘導・点呼（安否確認）・AED の使用訓練を担当し実施した。

また、学外の活動では、以下の各イベント等に参加した。

- ・普通救命講習（2 年次生 3 名参加）
- ・「救急の日」及び「救急医療週間」に伴う街頭啓発活動（4 年次生 5 名参加）

9 月 8 日（金）に、大分駅前広場において、大分市消防局や大分市消防団などと協力して、市民に対する呼びかけやリーフレット等の配布を行った。

- ・「消防フレンドパーク 2023」（2 年次生 5 名参加）

10 月 28 日（土）に、大分市中央通り歩行者天国において、大分市消防局や大分市消防団などと協力して、来場者に対して応急手当普及啓発活動などを行った。

- ・応急手当普及員講習（4 年次生 2 名参加）

11 月 18 日（土）・19 日（日）・20 日（月）に大分市消防局（大分市南消防署）において応急手当普及員講習が開催され、基礎医学（人体の構造、感染防止）と応急手当（AED の使用方法を含む）の実技や指導方法等を学んだ。3 日間の講習を修了し、応急手当普及員に認定された。

- ・令和 5 年度大分市消防団ビジョン検証会議（4 年次生 1 名が検証委員として参加）

2 月 27 日（火）に大分市消防局において大分市消防団ビジョン検証会議が開催された。「消防団ビジョン」とは、大分市消防団が中長期的に目指す将来像と諸課題を解決しながら将来像（地域に親しまれ、活力ある消防団）を達成するための指針となる基本施策のことで、年度末にその進捗確認のための検証会議が開催され、外部委員等からの客観的な意見をもとに次年度の取り組みに活かすしくみがつくりられている。当該会議には様々な分野の有識者の方々が参加されており、学生は若者の立場から消防団のイメージアップにつながるような提案などを行った。

今後の課題は、応援隊学生の増員と消防応援隊としてのスキルの継続的な習得と考える。消防本部等の関係機関と連携をとりながら計画的に取り組むたいと考える。

5 研究室活動

5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

看護疾病病態論との連携を密にしていけることが課題であったが、今年度は看護系教員と話し合いを行い解剖生理と看護疾病病態論の授業内容の確認を行った。

意欲の高い学生向けに動画配信を行い学生の事前学習・事後学習に役立てた。その結果、生体構造機能論ⅠとⅡの単位未修得者はいなかった。課題としては、学生に積極的に自ら疑問をもち、解決していく能力を養うことが挙げられた。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、動物や細胞を使用した実験を行い、卒業論文として、まとめることが出来た。2人の大学院生の修士論文の作成を指導した。学会活動は、現地でポスター発表を行った。課題としては、教員が1人減少したことにより、研究活動力が落ちたことである。

5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

生体反応学研究室の教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実

践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。また、大学院の教育に関しても病理学、薬理学に関する内容の教育を担当している。生体反応学研究室の研究活動に関しては外部の競争的研究費を獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

講義に関しては本年度入学生より新カリキュラムが施行されたことから科目名に一部変更はあったが、教授内容に変更は無かった。本研究室が担当している科目としては、学部 1 年次生を対象に生命科学入門(分担)、看護サイエンス入門(分担)、病理学総論、病理学各論、微生物免疫論を、学部 2 年次生を対象に薬理学 I、健康科学実験(血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験)、学部 3 年次生を対象に生体薬物反応論 II がある。大学院 1 年次生を対象に、実践薬理学特論、妊娠期診断技術特論(分担)、ウィメンズヘルス特論(分担)、薬理学特論、臨床薬理学特論、大学院 2 年次生を対象に老年薬理学演習を行った。学部試験終了後の成績不良者の対応としては解答状況や解答用紙および質問コメントに対する回答することで改善点を示すほか、面接等を行うと共に、一般の学生にも試験問題(正解付)や解答用紙を返却する等の対応を取った科目もある。解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。前述の対応を行ってはいるが、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べると悪く、科目によっては単位修得率が低い状況であった。また、大学院の科目において、大部分の科目は受講生全員が単位取得に至ったが、臨床薬理学特論に関しては単位取得に至らなかった学生が生じた。

来年度の学部教育において、事前事後学修について具体的な提示を行い、学修習得状況の向上を目指したい。

3 研究活動の現状と課題

外部の競争的研究費として、日本学術振興会の科学研究費補助金を教員2名とも獲得している。研究代表者として、基盤研究(B)「加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して」、基盤研究(C)「ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索」、挑戦的研究(萌芽)「胎児期加熱式たばこ曝露が胎児に与える影響と出生後に生じる影響の推定」を、研究分担者として、基盤研究(A)「東アジアを越境するバイオエアロゾル：日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価」を獲得している。卒論生に対しては外部研究費に関連するテーマで研究を進めることができた。次年度も継続する研究課題であるため、今後の課題としては、研究成果を積極的に英語論文として発表し、科学研究費補助金以外の競争的研究費も獲得して行くことを目指す。

5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

当研究室の教育目標は以下の 6 つである：①科学的なものの見方や考え方などを学ぶ。②実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感する、③個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。④健康・体力を維持・増進するための運動量、運動強度を確保する。⑤自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。⑥ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。研究に関しては、地域課題を解決できるような研究を重視している。また、社会貢献では看護職対象ではなく、地域住民や県民対象の活動を指向し、学生と共に参加することを重視している。

2 教育活動の現状と課題

1 年次の大学ナビ講座では、「大学の授業と試験の受け方」を Zoom で実施した。1 年次の健康運動ボランティア演習はコロナ禍のためイベントの開催が自粛され、昨年は参加できるボランティアがなかったが、今年度は、13 つのイベントに参加し、県民の健康・体力チェック等を実施した。天候及び主催者の都合で中止となったイベントが 3 つあったため、担当学生は、ボランティア参加した以前の学生のレポートを読み、ボランティアの意義を考え、レポートにした。1 年次の健康スポーツはコロナ禍以前と同様に実施できた。2 年次生の健康運動学は Zoom を利用し、動画等も配信しながら行うことができた。2 年次生の健康運動学演習では、80 名以上が同時に運動するため、引き続き自宅での運動実施を可として、運動の目標を立てて各自が運動に取り組み、ベースライン測定と結果判定測定で運動の効果を自己評価してレポートにまとめた。卒業研究では、2 名の学生がそれぞれサウナ入浴に関する研究テーマに取り組んだ。今年は昨年の反省を活かし、早めに取り組むことができた。

大学院に関しては、助産学コース 2 年次生を 1 名と 1 年次生を 1 名の主指導教員、健康科学専攻 2 年生の 1 名の副指導教員を務めた。助産学コース 2 年次生は父親の育児ストレスについての課題研究に取り組み、終了後、データ収集に協力して頂いた団体にお礼に伺い、結果を発表した。また、助産学コース 1 年生は任用性に関する研究テーマにし、昨年の反省を活かして、データ収集まで年内に完了させた。副指導教員を務めた健康科学専攻の学生の研究は臨床における研究であり、指導する機会が少なかった。また、提出直前の論文をチェックすることができなかった。

3 研究活動の現状と課題

今年度の実施を予定していた一本歯下駄を履いた際の腰部の 3 次元加速度データの分析と解釈は実施できなかった。代わりに、近年、注目を浴びているサウナ入浴が気分と睡眠に及ぼす影響を実験的に明らかにした。日本学術振興会の科研費は、「トレーニング目標最適理論」というテーマで挑戦的研究（萌芽）に申請したが、採択されなかった。次年度からの 3 年間で研究活動の集大成として、

これまでの研究を振り返り、さらに発展させたい。

4 その他

ボランティア活動

- ① 大分市地域おこし協力隊文化芸術振興部門「ななせ美術館事業」『春のアート縁日♪』（6/4）
- ② 大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（9/2、12/2、2/3）
- ③ 富士見が丘連合自治会主催「夏まつり」（7/22）
- ④ 河川協力団体ななせ交流会主催「ちっちゃなちっちゃな花火大会」（9/2）
- ⑤ 富士見が丘団地わかば老人クラブ主催「わかば会サロン」（9/23）
- ⑥ 大分トリニータ「大宮アルディージャ戦」（9/30）
- ⑦ 野津原商工会・大分市主催「ななせの里まつり」（11/5）
- ⑧ 大分県教育委員会・大分県スポーツ協会主催「総合型地域スポーツクラブ交流会」（11/23）
- ⑨ 河川協力団体ななせ交流会主催「親子凧あげ大会」（1/27）
- ⑩ 九州陸上競技協会、大分県、大分県教育委員会、別府市、別府市教育委員会、大分市、大分市教育委員会、毎日新聞社、RKB毎日放送、OBS大分放送主催「別府大分毎日マラソン」（2/4）
- ⑪ 富士見が丘連合自治会・大分市主催「森林探検ウォーキング」（3/30）

5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

自他の独自性及び個別性を尊重し、周りの人と喜びや苦しみを分かち合うことのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。加えて、本学における教職課程（養護教諭一種免許状）の運営も担当している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2 教育活動の現状と課題

今年度から、研究室が人間関係学①、②に分割した。学部講義は対面、大学院の講義はオンラインを中心に、部分的に対面での講義を併用し教育活動を展開した。オンライン授業では、Zoomの機能を援用し、学習者に参加、発言の機会を提供した。また、授業時間外の課題に関しても、オンラインのアプリケーションを利用して、課題の提示、提出、フィードバックを円滑に実施することができている。遠隔講義の環境下においても、学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジ

メントの下に主体的に授業に参加する機会を保障することができた。非常勤講師との事務連絡、養護実習Ⅰ、Ⅱ、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している。

3 研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士課程の学生の指導がメインになっている。博士課程の学生 1 名が学位を取得した。また博士課程の学生の投稿論文が 2 編受理された。大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が課題になる。

5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、WHO が定義する「Environmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を学部では「環境保健学概論」（1 年次）、「環境疫学・生物学演習」（3 年次）、大学院では「環境保健学特論」で行っている。また、現代医療に必要不可欠な放射線教育も、開学以来、全国の看護系大学の先頭に立って実施してきた。学部では「放射線健康科学」（2 年次）、大学院では「放射線健康科学特論」、「放射線リスク学特論」、「放射線保健学特論」、「放射線生物物理演習」で行なっている。2022 年に日本看護協会の専門看護分野に「放射線看護」が特定されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待される。その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成 30 年まで実施してきた。その後は、看護職者を対象にした放射線教育に移行し、現在も他大学と連携して進めている。

2 教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、多分野な内容を含むために、学部 1, 2 年次の段階では教育が難しい点がある。そのため、身近な社会問題（原子力災害、新型コロナウイルス・インフルエンザ感染症の危機管理など）を取り上げることで関心を持たせ、その理解には物理や生物、病理生理、免疫、生物統計といった関連科目の基礎的な知識が重要であることを認識させるようにしている。さらに、2 年次の「環境保健学詳論」、3 年次の演習「環境疫学・生物学演習」ではアクティブに関わる授業を実施し、主体的に理解を深めることを狙っている。プレゼン資料の作成、質問応答、課題レポート作成などを通して、できる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い講義・演習にしていくことを目指している。放射線教育に関しては座学だけでなく、「健康科学実験」（2 年次）でポータブル X 線撮影装置を用いて被ばく線量を実際に測定し、その実体験から放射線防護が理解

できるように努めた。学生による授業アンケートから講義・演習の目的はおおよそ達成できたと考えられる。次年度も現状を維持するとともに、最新の環境問題も取りあげていきたいと考えている。また、環境問題に対してお互いの考え方を共有し合うことができるような工夫（グループディスカッションなど）を取り入れていきたい。

3 研究活動の現状と課題

医療・環境放射線をテーマに研究を続けている。医療被ばくによる発がんリスクを生物学的に明らかにすることを目的とした研究では、白血病に焦点をあて、マウスに γ 線を繰り返し照射し、時系列を追って白血病関連遺伝子に変異を起こした造血幹細胞の蓄積の程度を評価し、より詳細な発がんモデルの構築を検討している。

放射線の医学利用に関する研究では、新しいがん放射線療法の一つであるマイクロビーム放射線療法（MRT）確立を目指し、高エネルギー加速器研究機構にあるX線マイクロビーム照射装置を用いた研究を行なっている。大学院生の指導では、CT画像診断に関する研究、原子力災害時の被ばく線量放測定に関する研究を進めてきた。令和6年度も放射線の健康リスクや医学利用に関する研究にさらに貢献していく。

5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

また、教育及び研究のみならず、本学のICT環境の管理と運用を通じて大学全体のパフォーマンスを日常的に支援することを実践している。

2 教育活動の現状と課題

学部新カリキュラムの2年目となり、科目間の連携や前年で検討したGoogle Classroomの更なる活用や受講者の興味関心を高めるなどの改善策についても、授業アンケートの結果からみて、一定の効果があったと評価しており、今後も改善を継続していきたい。ただし、生物統計学と健康情報学については数学分野を中心に基礎学力が不足している履修者が授業内容を十分には理解できていないと思われ、このような学生へのフォローを充実させることが今後の課題である。卒業研究は、品川

准教授、岡田助教の手厚い学生指導もあり、おおむね例年通りの水準の研究を進めることができた。

大学院における教育については、広域コースの担当科目については例年通りの成果だと評価する。保健情報学特論については、生物統計学パートの授業形式を大幅に変更した結果、履修者が少ないこともあり、受講者の積極的な自己学習を推進し、これまでよりも学習効果を高めることができたと評価する。次年度もこの形式を継続してさらに学習効果を高めたい。

3 研究活動の現状と課題

佐伯は分担研究者として参加している科研費による2課題が最終年度となり一応の完成をみた。品川は研究代表者、分担者として複数の科研費による研究を継続している。岡田助教は博士取得の最終段階に入っている。今後よりいっそう研究室内、学内学外と連携した研究活動を推進するとともに、学内への研究支援を充実させていきたい。

5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能である Speaking, Listening, Reading, Writing をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習した。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次生の講義内容は、看護英語であった。各話題について3~4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。発音の向上を図ることを念頭に、教員の発音を確認、反復させ、学生間で反復練習させる時間を以前よりも長く確保した。結果として発音を意識した英語での発話の機会が増え、発音の技術が改善したと考えられる。今後は語彙習得が未熟な学生を念頭に、生活において頻出する語彙を習得させる効果的な方法を検討していきたい。

日本人教員は授業前半では英文法の基礎知識、英文解析法、発音記号を教授しつつ、翻訳付き英文テキストの文法を解説した。音声面についてはネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認さ

せた。講義で取り扱ったテキストを次週までに暗唱できるようにしてくることを課題とし、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行った。過年の COVID-19 による行動制限の影響のためか、発声することに対する不慣れが見受けられた。また、手を使って字を書くこと、英語を筆記する経験が不足しているせいか、綴りに不正確な部分が散見された。基礎的な知識や技術の重要性を喚起する刺激を講義内容に盛り込んでいく必要がある。後半では、易しい英語で書かれた書物を辞書なしで読み、総読書語数増進を目指す多読を実施した。学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機の維持を図った。有名な文学作品を紹介することで文学への興味関心の惹起を図っていききたい。2 年次生では医療・看護に関連する語彙の増強を念頭に教授した。看護関連の英語原著を用いて英文解析と解釈を演習させた。医療関連語彙に多く見られるギリシャ語・ラテン語を起源とする英語語彙の歴史的背景などを紹介し、定着を図りたい。2 年次前期の多読では、語数の少ない図書が人気であった。より語数の多い図書を学生が選択できるよう図書の配置を工夫した結果、読書量の増加が見られたようである。文学作品の概略を紹介するなど、読書への意欲喚起を図りたい。

学生の英語学習に対する意欲の維持、継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索し、より魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習の促進をはかりたい。

3 研究活動の現状と課題

COVID-19の終息に伴い行動制限が緩和されつつあるが、マスク着用の習慣化が定着し、声を出す、発音するという活動に対する忌避感が払拭されたとはいえない教室の雰囲気が残っている。音声習得のための発音練習は言語学習には欠かせない要素であるため、今後のCOVID-19を含む感染症の状況を勘案しつつ、安心して声を出して意思疎通できる教室環境を復元していくことが課題である。ロシア・ウクライナ戦争に引き続き起ったイスラエルによるガザ地区への攻撃は地球規模で影響を及ぼしている。アメリカ大統領選挙の行方も含め、今後の社会情勢の変化が懸念される中にあって、人の本質を問いかける人文学の果たす役割を再確認し、文体論と19世紀英文学に着目して研究を進めた。成果として、Jane Austenの文体に着目した著書の書評を発表した。また、その知見を応用し、日英での言語教育における音読の扱いについて歴史的観点から考察した研究を2件発表した。今後はJane Austenの作品をより深く読み、21世紀の社会や人にも響く訴えを見出し提唱していく。感染症と戦争は人類の対応すべき永遠の課題と考えられる。その課題への対応としてのケアに注目し、看護の視点からケアの在り方を倫理的に考察する研究を人文知も融合させて展開していきたい。

5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

基礎看護学研究室は、人々の健康生活や QOL(Quality of life)の向上に向けて、現象を科学的にとらえ分析的に考察できる力、看護を遂行するための広い知識、原理原則に基づいた基本的な看護技術の習得と対象に合わせて適用できる力、人への尊厳や倫理観の基本的姿勢を身に付けることを目指して教育活動を行っている。特に、学生が学習に対し興味を持ち主体的に学ぶ姿勢や、学習への動機づけにつながるような授業の方法論に関しては、PDCA サイクルに則って研究室全体で協議、検討しながら作り上げていくことを方針としている。

研究活動においては、各教員の研究テーマに基づいて年間 1 本以上の研究論文の学術雑誌への掲載を目標に研究活動に継続的に取り組み、研究力を強化していくこととしている。

2 教育活動の現状と課題

昨年度末に基礎・成老年実習室の改装により ICT を活用できる環境が整備された。これに伴い、基礎看護技術の科目において 2022 年度から取り組んできた反転授業の内容をアップデートした。反転授業は学内演習時間の確保につながりグループ活動が促進された。これに伴い学生は事前学習の必要性を認識し、学習動機となり、よりグループ活動が活発になるというよい循環が生まれた。その結果、単年度の結果ではあるが、本年度の技術試験では、これまで合格率の低かった技術項目において不合格者が 0 人で、平均点も昨年度を上回った。また、基礎看護技術の修得度を評価するために行ってきた技術試験において、長年課題であった平等性や効率性について、学生の実践を録画記録する方法を新たに構築することで改善を図った。学生の授業評価においても高い満足度につながっていた。基礎看護学実習においては、感染予防の観点から受け持ち患者と接触する時間の制限や在院日数の短期化により患者と関われる時間の減少などの問題に対し、限られた時間を有意義で効果的な学習にするための対策の一つとして、患者理解を目的とした記録様式にヘンダーソンの枠組みを導入した。また、実習前に開講する看護理論入門ではヘンダーソンの理論を学生が理解できるようにグループ活動を取り入れ、担当教員を設定し個別指導を行うなど教育体制の工夫を行った。臨地実習では、学生の思考力を構造的に育成するために記録様式の 3 種類を計画的に活用するように設計し、実習指導教員への説明会を設けて指導方針の周知を図った。この結果、学生は患者の身体的特徴をとらえたうえで生活への影響を考えることは概ね達成できた。しかし、患者の精神面、心理面の考察が不足している傾向を認めた。次年度は、基礎看護学実習での到達目標の表現の見直しと、次段階の実習へ引きつぐなどの対策を検討する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

2名の教員が外部資金をすでに獲得しており、自律的に研究活動を推進している。また、卒業研究や大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士論文の指導、論文審査などを通して、研

究力を研鑽している。さらに、今年度2名が学術雑誌に論文が掲載されており、1名は査読中であるなど、積極的に論文執筆にも取り組んでいる。次年度は1名の科研費獲得に向けた支援と、1名の博士論文の審査申請の支援に取り組む。

5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的とし教育を実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1年次及び2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割がある。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を基盤にして障害をもつ対象者に対してヘルスアセスメントする意義や必要な観察視点を理解し、観察結果から対象者に予測される健康問題を考察する力を養う。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし、専門看護学領域の基盤とする。可能な範囲でシミュレーション教育を導入し、より自主的・自律的に学ぶ姿勢を身に付け、ディスカッションできる力を強化したいと考えている。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント学特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。大学院教育のNPは、3P（Physical Assessment, Pharmacology, Pathophysiology）の能力の強化は必須である。そのことから本研究室がNP教育に関わり、フィジカルアセスメントや臨床推論能力をさらに高めていくことを目指し、令和5年度から創設されたNP研究室と連携してNP教育を実践していく。

2 教育活動の現状と課題

学生の学びの達成度を研究室教員全員で共有し、フィードバックし、評価している。その際には次年度に向けて授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムの学修ができるよう工夫してい

る。学修評価の試験では、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならないよう、理解に重点をおくための試験問題を毎回新たに作成した。さらに「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もあるが、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をした看護過程の展開の工夫や、教員 4 名で個別に看護過程の基本的考え方や記録方法を丁寧に指導した。

看護学実習は 3 施設の全てで予定通り 2 週間の実習を受け入れ、臨地でしか学べない経験ができ、学生も充実した実習であったとの感想が多く達成感もあった。

課題は、症状から病態を探究していく力、観察をポイントの修得、臨床推論能力を育成などさらに強化していきたい。また人間科学講座の教員や基礎看護学研究室の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや連携、統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3 研究活動の現状と課題

それぞれの教員が、自分の専門的研究領域で研究を推進している。4名の研究室教員全員が科学研究費に採択されており自己の研究テーマで取り組んでいる。また、石田准教授が責任者となり、研究室全員でデジタル聴診器を用いた遠隔授業の有用性に関する研究に取り組み、日本看護研究学会及び日本看護科学学会で口演発表を行った。また、卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。また、学内競争的研究費の採択により、診療看護師（NP）に関する研究を実施しアニュアルミーティングで報告した。それぞれの教員は論文の公表も一部進めているが、さらに積極的に論文作成し公表に向けて推進することが必要である。

5-10 成人看護学研究室

1 活動方針

成人看護学は、成人期に特徴的な健康問題を学び、あらゆる健康段階の人へ看護を応用できるように看護の理論と保健、医療、福祉体制を教授することを目標としている。そのため、成人看護学概論、成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳ（急性期・回復期・慢性期・終末期）の講義科目に加え、成人看護学演習と成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの各教科を設定している。新カリキュラムに際して、成人看護学援助論は 1 科目から 4 科目に分割された。これにより、各健康段階に応じた看護の専門性を深めるとともに、各健康段階の移行期の支援について思考できる授業構成としている。また、本研究室は、老年看護学研究室と分割して今年度新設された研究室であるが、各健康段階の看護に専門性を有する教員で構成されており、成人看護学全体の統合的な視点を学ぶとともに、各教員の専門性を発揮した授業を展開することができる。そして、学生が学習に主体的に参加できる授業となることを目指し、授業の計画

と実施においては、PDCA サイクルに則って研究室全体で協議・検討を行うことを方針としている。

2 教育活動の現状と課題

今年度の2年次から新カリキュラム授業が開始され、上記の成人看護学援助論Ⅰ～Ⅳの専門性と連動を強調した授業を開始した。また、次年度より、新カリキュラム下での演習・実習が開始され、成人看護学援助論Ⅳ（終末期）は演習・実習後に開講することが特徴であることから、各科目の連動性を維持しつつ、専門性を深められるよう支援する工夫を行っていくことが課題である。

また、旧カリキュラム授業においては、3年次の演習・実習を行った。演習に際しては、今年度から導入されたシミュレーションシステムを活用するとともに、電子カルテシステムの利用など、ICTを活用して実臨床に近い環境を再現した授業を展開した。それにより、学生の思考をリアルタイムで可視化しフィードバックすることができたとともに、実習カンファレンスを想定したグループディスカッションを行うことができた。実習においては、感染症対策を厳重に行いながら、各実習施設の協力の下、学生全員が実習目標を達成することができた。しかしながら、看護展開や看護技術において課題を認めたため、新カリキュラムでの授業内容に反映していく。

3 研究活動の現状と課題

卒業研究生は5名を担当し、基本的な研究活動を支援し、全員が卒業論文を完成させた。また、各教員が専門性に即した研究を自律的に遂行し、3名の教員が科研費研究を行っている。今年度の研究実績としては、学術雑誌への掲載9件、学会発表4件である。

4 その他

複数の教員が各専門学会・大分県看護協会の委員・理事として、社会貢献を行っている。

5-11 老年看護学研究室

1 活動方針

老年看護学は、高齢者への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、老年看護学概論、老年看護援助論Ⅰ、老年看護援助論Ⅱ、老年看護学演習、老年看護学実習の各教科を設定している。概論は2年次前半に開講し、各発達段階の特徴や保健、理論について学ぶ。さらに老年看護援助論Ⅰでは、高齢者の日常生活を支援するための基本的知識と方法を学び、老年看護援助論Ⅱでは障害や疾病をもつ高齢者への看護を実践する力を養う。専門的知識の教授とグループワークによるディスカッション等を設け、学生が考える力を養う学習方法を展開している。さらに3年次前期には、成人・老年看護学演習において、模擬事例への看護について

考え学び進められるよう教材づくりと看護過程の展開を行った。意見交換、発表を通して実習にむけた看護実践につながった。さらに 3 年次前期・後期には実習科目をおき、老年看護学の学習成果を実践に反映できるように展開している。

2 教育活動の現状と課題

令和 4 年度まで成人老年看護学研究室として成人から老年期までの幅広い対象を学ぶ教育体制であったが、今年度から老年看護学研究室として老年期に焦点をあてた教育運営ができる体制となった。老年看護学は独立した研究室体制にて学生があまり交流をもたない要支援・要介護高齢者、障害や疾病治療を行う高齢者を主眼とした看護の教育活動を行っている。教育の現状では核家族化で脆弱な高齢者との交流機会のない学生が加齢変化をとらえ看護実践できるよう教育の工夫を必要としている。そのため高齢者の生活を感じとしてとらえられるように高齢者の疑似体験や視聴覚教材を導入し、効果的な学習の場を設けている。また臨地実習では、免疫力が低下している高齢者の施設での実習では、実習の休止が続いていたが、今年度は実施が可能となった。今後も感染症に対する留意が必要な状況であるが、高齢者の生活援助や多職種連携を学ぶため、学生が実践可能なことを拡大していくことを課題としている。学外の指導者と連携しながら教育活動を充実させていくことを目指している。

3 研究活動の現状と課題

老年看護学研究室では、高齢者の健康生活に寄与できるよう各研究室員が研究を行っている。共同研究として学内競争的資金を得て、向老期女性に対する認知症予防のための調査研究を実施した。また、高齢者施設や地域に居住する高齢者が安心して医療を受けられる看護活動を探求するため、地域医療機関と連携して検討会を開催している。学生の卒業研究指導として、高齢者のための適正な薬剤管理、認知症高齢者への対応、脱水症状への対応、看取り等の研究課題を取り上げて指導し、研究発表に至った。次年度は新研究室体制となり2年目を迎えるため、さらに研究室による研究活動を促進していきたい。

5-12 NP 研究室

1 活動方針

NP 研究室は、R5 年度に新たに創設され、専門看護学講座に位置付けられた。高度実践看護師としての診療看護師（NP）の育成を目的として教育している。エビデンスに基づく臨床推論のもと、特定行為を実施しながら症状マネジメントをタイムリーに提供できる看護師を育成することを目指し、カリキュラムの中で、特定行為研修（17 区分 31 行為）を含む教育をしていく。NP に求められ

る 7 つの能力を育むために、症状マネジメントに必要な、Physical Assessment, Pharmacology, Pathophysiology の医学教育を強化し、臨床推論能力を高め、症状の原因や緊急性や治療の必要性を判断できる能力を講義・演習・実習で強化している。講義・演習は医師だけでなく本学修了生の診療看護師（NP）も非常勤講師として実践的教育を行い、プライマリ NP 共通科目として「NP 特論」「NP 実践特論」「プライマリ NP 演習」「アセスメント学演習」「臨床薬理学演習」の教育を担い、大学と現場の連携に努めている。2 年次後半の総括的な NP 実習では、NP 育成を開始した当初から医師や看護部、NP 修了生の多大な協力により、臨地での実習指導を強化し、求められる 7 つの能力の修得を目指している。NP 教育と社会に発信する事業を含め、NP 教育・事業推進チームとしての重点活動として、改正カリキュラムによる教育運営及び特定行為研修の円滑な運営、新規実習施設の円滑な運営と施設開拓、プライマリ NP コースの広報強化、地域枠候補者の確保、スキルトレーニング充実のための NP 実習室の学習環境整備、修了生の臨床研修システム構築、NP 修了生の活動推進支援、遠隔診療などの活動推進を実践していく。また、次年度から NP 修了生が本研究室の教員として教育を担う。診療看護師（NP）自身が診療看護師（NP）を育成する教育を実践していきたい。

2 教育活動の現状と課題

研究室の新体制整備とカリキュラム内容の充実を図った。特定行為研修が安全かつ確実な認定につながるように実習施設を増やした。実習施設は、病院 2 施設、診療所 3 施設、介護老人保健施設 1 施設の合計 6 施設の開拓と準備運営を行った。実習施設が増えたこともあり、NP の活動をより理解していただくために NP 活動推進の交流会（実習施設の代表者向け）の開催や、実習や演習のまとめの発表会に招待して実習のプロセスと達成度を共有することで実習指導体制の強化を図った。NP コースの広報も含め、実習施設とリンクで繋ぐように大学の HP を更新するとともに、実習施設発信の広報協力も依頼し、徐々に発信の場（SNS）が拡大した。大分県内枠の進学推進のために NP 広報のパンフレットの大幅な見直しによりリクルート活動に活用した。臨床推論スキルアップに関しては、昨年度申請した地域医療介護総合確保基金の交付により、シミュレーターやエコーなどを設置できたことで演習やスキルトレーニングが充実し更に演習内容を充実していく準備をしている。更に今年度は特定行為研修のスキルアップのために（本学だけでなく県内看護職のスキルアップ目的）、特定行為を含む技術トレーニングに関係する教育強化に向けた申請をした。また修了生たちの課題であった大分県での臨床研修システムの構築に向けた会議を医師や NP と開始し、次年度には完成させる予定である。NP が遠隔診療にも活動を拡大しているため、地域での活動を推進していくために、「遠隔医療の仕組み作り情報交換会」を開催し、修了生や施設管理者、行政と連携を図り、次年度のプロジェクト研究につながる活動をした。その他として、NP コース新設の 3 大学院に対する設置準備のサポートも行った。課題としては、在学生のシミュレーション教育を含めたより臨床に近い学習プログラムの構築や修了生の活動支援とともに地域・行政との連携も強化していきたい。

3 研究活動の現状と課題

学内競争的研究の先端研究として、プライマリ領域の診療看護師（NP）の実践知から得られた

コアコンピテンシーの探求について研究した。昨年のインタビュー調査の結果を再度分析し、投稿準備を進めている。大学院生の課題研究指導では、診療看護師の初期診療に求められる能力や心不全看護に関する研究指導に携わった。学部生の卒業研究指導では、離島における看護学実習に関する研究指導をした。また、学外では、本学修了生の共同研究者として「日本NP学会」での遠隔診療に関する研究、シンポジウムやへき地医療推進会議の発表サポートなどを実施した。論文では、認知症関連の研究を学術誌に投稿した。次年度は、研究室としてプロジェクト研究でのNPの地域貢献につながる研究を計画しており、準備を始めている。研究室ができて2年目となるため更に研究活動を促進し、学術誌への投稿を進めていく。

5-13 小児看護学研究室

1 活動方針

学部における専門看護学小児看護学の教育活動は、主に学部2年次から3年次に行われる。1年次に行われた基礎科目の知識をもとにして、小児の成長・発達過程の特徴を理解できるようにする。小児看護学概論・小児看護援助論・小児看護学演習・小児看護学実習へと段階的に小児看護の役割を理解する。代表的な理論を学び、小児の発達段階、看護・保育について学ぶ。最終的に小児看護学実習にて、学んだことを生かしながら小児の看護過程を展開できるようになること、子どもへの倫理的態度やこども観を養うことが目標である。

小児NPコースでは、2年間で必要な科目を履修し、NPとしての知識や態度を身に付けていく。そして、段階的に行われる試験をクリアすることが目標である。

教員は各自の学内・研究室内での役割を全うする。研究課題に取り組み、学会や研修会に参加しながら自己研鑽し研究活動を行う。また、関連する社会貢献活動を行う。

2 教育活動の現状と課題

学部教育での講義は計画通り実施できた。講義では学生が小児をイメージできるようにDVDや事例を用いた。学生の理解を確認するために、一方的な講義だけではなく理解を確認する発言を促すことが必要であった。

大学院小児NPコースでは、学生は必要な科目を履修し、段階的に行われる試験に合格した。1年次生は進級試験に合格し、2年次生は修了試験に合格しNP資格認定試験を受験することができた。

学生の性質により学びの差があったため、それぞれの長所を生かしながら知識や技術を身に付けていくことが必要であった。

3 研究活動の現状と課題

各教員の専門性を生かしながら、それぞれの研究テーマを探究した。学会発表や論文投稿にも取り

組んだ。教員のテーマを卒論指導に生かすことができ、4年次生とともに取り組んだ。テーマはプリパレーションに関すること2題、医療的ケア児に関すること2題であった。

NPコースでは課題研究に取り組んだ。1年次生、2年次生ともにこれまでの臨床経験から、NICUに関することをテーマとして取り組んだ。NPコースの学生は実習の時期は課題研究についての時間がとりにくく、計画的に進めることが課題である。

4 その他

令和4年度大分県教育委員主催大分県医療的ケア研修会（教員）第2回7月31日・第3回8月1日、（看護師）第2回8月43日を小児看護学研究室が協力し、小児・NP実習室で行った。

5-14 精神看護学研究室

1 活動方針

例年通り学部教育の基本目標を、1)精神科領域以外の様々な場でも展開できる精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や“治療の人間関係”に留意した看護、及び 4)医療と保健・福祉サービスとの連携を意識した看護の修得と設定した。2年次から3年次にかけての講義－演習－実習が一つの流れとして接続するよう、教員間で連携を図った。ここ数年、卒業後に精神科への就職を志望する学生が出現してきたことには、上記教育活動の効果があると考えている。

2 教育活動の現状と課題

新カリキュラムへの移行を視野に入れて精選した講義内容で、基本概念の理解と、セルフケアに着目したアセスメントや、リカバリに焦点を当てた支援を重視する授業を行った。学部実習の一部は、実習病院内で新型コロナウイルス感染症が発生したため、学内実習に振り替えたが、前年度までに方法が確立していたので混乱はなかった。諸事情を考慮して新しい実習施設の開拓作業を始め、次年度から実習できることとなった。

卒業研究では5名の学生を教員が分担して指導した。できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで進められるよう配慮した。新型コロナウイルス感染症が5類に移行する中で、調査研究も可能になってきた。

大学院では担当授業の他に、研究室教員と指導学生によるゼミを月1回程度開催し、原著講読や研究発表予行を行った。学生が自主的に運営と進行を担い、互いに刺激し合って教育的効果を発揮している。

3 研究活動の現状と課題

自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション、更年期女性の更年期症状とマインドフルネス、依存症への看護等の領域で研究を展開した。これらに関連した科研費を研究代表者あるいは研究分担者として4件獲得し、大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働しながら進めた。これらの成果は順次、学会発表や投稿論文として公表しており、順調に進行している。

4 その他

日本精神科看護協会や大分県・複数の県内市町村の精神看護・精神保健活動に対して、委員等の形で協力することで、社会貢献に努めている。

5-15 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義、演習、実習は、今年度から Zoom 講義は中止となり、対面で実施した。学生の講義における反応は、講義終了後Googleフォームにて、講義における学びや感想、質問を提出してもらって確認し、次回講義の前に質問に対する説明を毎回実施した。

母性看護学技術演習は 3 日間演習室にて実施した。母性看護過程の演習は対面によるグループ学習にて実施した。最終日の講義室で開催した発表会は、学生から積極的な意見交換が見られた。看護過程の演習指導は、学生の取り組み状況が伺え、学生に直接指導することができた。

今年の母性看護学実習はコロナ禍による影響は見られず、通常通りに実施することができたが、大分県立病院は、実習期間中に一人 4 回検温を実施し、コロナ感染に注意した実習体制であった。今年の実習配置は、大分県立病院（30 名）、堀永産婦人科（28 名）、いしい産婦人科医院（29 名）であった。今年度から生野助産院での実習を追加して、病院実習と助産院実習の違いについて学ぶ機会を得た。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、女性の健康に関する研究、性教育・受胎調節・家族計画に関する研究、乳房ケアや産後ケアに関する研究、父親の育児参加に関する研究に取り組んでいる。今年度は大学院生の「妊婦における産後ケア事業の認知度および利用への意識」が、母性衛生 2023 年 12 月号に掲載され、「死産を経験した女性への退院後の継続看護と看護職者の困難感」が母性衛生 2024 年 4 月号に掲載予定である。他、大学院生の研究課題 5 題を投稿した。今後も母性看護学研究室での研究成果を論文投稿していきたい。

4 その他

日本助産師会九州・沖縄地区研修会 in oita が 9 月 16 日、17 日に Zoom にて開催された。九州・沖縄地区研修会の実行委員長として、運営に母性看護学研究室が協力し、参加者 286 名で成功裏に終了した。また、2023 年 11 月 12 日に開催された大分県母性衛生学会の学術集会を母性看護学研究室が大会長となり運営した。

5-16 助産学研究室

1 活動方針

本研究室は、大学院助産学コースの教育を主に担っている。大学院助産学コースでは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーション演習、ワークショップを取り入れた段階的 OSCE などの教授方法を教員で検討を重ね、COVID-19 感染症対策を継続しながら行っている。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、発表やグループによる交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め卒業研究や課題研究のゼミなどの指導をとおして研究力を高めること、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、オンライン研修や学会等に積極的に参加し自己研鑽を積み重ねている。

2 教育活動の現状と課題

助産学コース学生は、夜間に共通科目を履修し、1 年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があるため、課題の重複や体力・健康面の支援を継続して行っている。今年度の授業は、大学の方針に沿って感染対策を継続し対面授業を行った。夜間の共通科目は、Zoom によるオンライン授業が多いこと

から昼間の助産学コースの授業等を調整した。大分市内の小学校での「いのちの教育」は、学内で何度もリハーサルを重ね、11月に現地で経験した。1年次生の段階的 OSCE は、昨年度から変更したグループディスカッションを中心としたワークショップ形式とした。しかし、提示事例のイメージ化ができないため臨床の場での実際とは程遠い発表となった。発表後のデブリーフィングを通して、事例に応じた方法を理解する状況であり、他の場面を想像したり異なる方法をグループディスカッションするに至らなかった。1年次後期の NICU 課題探究実習は、臨地 5 日と学内 5 日の実習を行った。担当教員と専任教員が、実習前後に学内でグループディスカッションするなど学びが深まるようにした。妊娠期課題探究実習は、ほぼ計画通りの日数を実施した。外来受診妊婦数の減少から超音波診断装置を用いた妊婦健康診査の件数は施設による差がみられ、堀永産婦人科医院で 2 名が補習実習を行い経験数を得た。7 名全員が 2 月後半から継続事例 2 名を受持ち実習継続中である。

2 年次生の 4 月の分娩介助演習は、研究室作成の動画を活用し各自で事前学習を行い、2 グループに分かれて感染対策を行いながら練習し、OSCE も予定通り実施した。

分娩介助を伴う助産学統合実習は、施設との打ち合わせを入念に行い、防護物品などの感染対策を実施し 5 月から 8 月にかけて約 4 か月間の実習を行った。就職試験で県外移動のあった学生は抗原検査キットで陰性を確認して実習した。担当教員が睡眠・食事状況や体調面の確認を行い、適宜休息をとらせるなどして、学生間で協力して体調を崩すことなく実習した。教員は、学生個々の問題解決能力や対人対応能力に応じた指導を展開した。助産師国家試験受験に必須の分娩介助経験であるため、実習施設の協力を得て可能な限り経験できるように待機等を実施し、学生は直接分娩介助を平均 9.1 例（8～10 例）実施した。次年度も全教員で学生の体調管理に留意しながら支援する。

2 年次後期の助産所助産師の自律した助産ケアの実際は、2 名が 2 日間ずつ助産所実習を行った。院長の助産ケアの意味を考えながら実習し、各自が将来の助産師像を描くことができた。課題研究は指導教員の指導を受け、全員提出し成果を報告した。令和 5 年度修了生 10 名は県内に 4 名、県外に 6 名が病院に就職した。

令和 4 年度から実施しているワークショップ形式の OSCE の修正や教育内容・方法の検討を行い、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させる方法について研究室教員でディスカッションし改善を図っていく。

3 研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し、さらに他機関の支援を受け、各自の課題を探究し続けており、感染対策を図りつつ調査を進めている。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導し、優秀賞を 2 名が受賞した。卒業研究のゼミは、当初の予定通り原著講読会 3 回を含む計 6 回実施した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会誌に複数掲載されるなど成果を残している。定期的な大学院生のゼミを計画していたが、1 年次前半に数回実施したが、後期は実習があり、指導教員とのゼミにとどまった。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

5-17 看護管理学研究室

1 活動方針

学部教育については、看護管理学や在宅看護論に関する授業を通して、学生がマネジメントやリーダーシップ、在宅看護に関する能力を育成することを方針とする。大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめとした実践者を対象に、看護管理学に関する教育を行い、実践に役立つ授業を行うことを方針とする。特に、博士課程の教育では、看護管理に関する研究指導を行い学位取得にむけた支援を行う。さらに研究活動として、看護管理学や在宅看護学に関する研究を行い、研究の新たな知見を学部と大学院教育に役立て、教育と研究を通して地域社会に貢献することを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では看護管理学と在宅看護学の教育を行った。看護管理学は学部2年生に新カリキュラムの看護管理学概論Ⅰで基礎知識を教授した。4年次生は旧カリキュラムにおいて看護管理学に関する基礎知識に加え、実習経験をもとに看護管理を考える教育を行った。学生同士が自らの経験を看護管理の視点から振り返ることができた。次年度は、グループワークを含めて学生が主体的に学べる教育を充実させる。在宅看護学については、2年次に家族看護学概論、3年生に在宅看護論を開講し、基礎知識と支援方法について教授した。さらに、4年次の実習では実践を通して学べるよう、臨地指導者と協働して指導を行った。次年度は、3年生の在宅看護学が新カリキュラム移行に伴って概論と援助論に区分されるため、それぞれにおいて教育内容を充実させる。

大学院前期課程の看護管理学特論では、学生が看護管理学に関する主要なテーマについて、講義を受講し、自らの臨床経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションを行った。看護管理学演習では学生が実践に即した演習を展開し一定の成果を得られた。特論や演習により、学生の看護管理学に関する学習を促進できた。次年度は多様な管理経験をもつ学生が本科目を受講予定である。学生の特性をふまえて、それぞれの学生が看護管理の実践力を高めていけるよう指導を行う。

大学院後期課程の研究指導では、研究室の教員全員と大学院生によるゼミを通して支援を行った。各学生が研究計画の立案から調査へと研究を進めることができた。次年度は論文の投稿に向けて支援を行う。

3 研究活動の現状と課題

看護管理学や在宅看護学に関する研究として、令和6年度は、科研費の研究「中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討」「中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発」「中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発」が3年目、「中小規模病院における効率的かつ質の高い看護に向けた人材育成に関する理論の開発」が2年目に入る。計画に沿って研究を進める。また、今年度は大分県中小規模病院等看護管理者支援研修に加えて、西部地域と由布地域で支援を

行った。次年度は、西部地域に加えて、臼杵地域で支援を行う。

5-18 地域看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、地域包括ケアシステムの構築・推進を念頭に置き、看護の対象を疾患の有無にかかわらず地域で生活する人々と家族であると理解し、地域における様々な場での暮らしを健康の側面から支援する「地域看護」の思考を備えた看護職の育成を目指す。

大学院教育では、少子高齢化社会や住民ニーズの変化、災害や感染症による健康危機管理に多発など、保健師を巡る社会情勢の変化を踏まえ、未知の「健康や社会の脅威」に立ち向かう力や直面する課題解決を図り予防していく探求心と論理的思考をもつ保健師育成を目指す。また、卒業時到達度を用いた自己評価方法を検討し、専門性の高い看護職者として自ら学び育つ力の育成を図る。また、在学生の到達状況を踏まえ、新カリキュラムの評価を行ない、科目内容の充実を図る。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、新カリ学年である2年次生は3学期に地域看護学概論を、旧カリ学年である3年次生は後期に地域生活支援論及び健康支援論演習の講義・演習を対面で行った。講義では、毎回ミニレポートを課し、知識の定着と思考の拡がりを促した。また、現場の保健師を招き地域での具体的な保健活動による看護のあり方を学ぶ機会を創った。健康支援論演習では、グループワークによるグループダイナミクスを活かした教育活動を行った。教員が適時、介入したが、思考に基づいたテーマ設定や発表を主体的に行うグループも出てきた。来年度も学生の主体性を促しつつ、自由な発想を用いた看護活動ができるよう演習を組み立てる。地域生活支援論では、コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、4年次で実施する実習地のデータ等を用いるなど地域看護学実習と連動するように学習内容を強化した。4年次生の実習では、すべての地域で実習が行えた。週末の学内カンファレンスでは、他の地域が学んだことから自分の学びが深まるよう、学びの共有に力を入れた。学びを他者に話すことで自身の学びもより深く考えることができる学生もいた。学びのリフレクションの機会として継続したい。

大学院教育では、1年次は、日中はコースの講義・演習・実習、夜間は共通科目の履修があり、過密なスケジュールとなる。また、実習では、長期間一人で行うため精神的ストレスが多い。そのため、教員が随時、課題や精神面の支援を行っている。今年度は定期的に学生の状況を共有し心身の健康状態と学修の進捗を管理した。大きく心身の不調を訴える学生はいなかった。次年度も学生の心身両面についての支援を実施していく。

自ら育つ力を育成するため、厚生労働省が2019年改定した「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」の項目を用いた自己評価表を作成し、1年次と2年次の修了時に各自が記入するようにした。また、1年次に行う3種類の実習目標を項目とした自己評価表を作成した。これら

を一つのファイルに綴じ、1年次の年度当初に配布した。学生は到達度を意識しながら講義・演習や実習に取り組むことができ、適宜、教員面談をすることで自己を客観的に振り返ることによる成長が感じられている。また、その内容をふまえて次の実習での目標を学生自身が立案し、実習指導者とも共通認識を図ることにより、段階的に実践力や思考力が育成されていると思われる。令和6年度も継続して行いたい。

また、新カリキュラムでは、施策能力育成や実践力強化のための科目構成を行った。各科目に幅広い専門家や実践家の講義を配置し、保健師活動を多面的に見る視点を育成した。また、学生の到達状況から、事例を用いた演習やグループ活動、実習先で得た情報をもとにしたディスカッションを取り入れ、より実践活動に近い内容から考察できるよう充実を図った。学生の到達度にはばらつきがあるが、着実に保健師としてのアイデンティティが育ちつつあると考える。また、次年度も継続していく、

令和5年度修了生6名は、県内の保健所と市町村保健センターに3名と県外の自治体と病院に3名が就職した。希望する施設に就職できるよう相談支援も継続する。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究では、4名の学生に各教員が研究指導を行い、論文としてまとめ、そのうち学生2名が「大分県公衆衛生学会」で発表した。ポスター発表であったこともあり、公衆衛生現場の方々から質疑を受けるなど交流ができ貴重な経験を積むことができた。

大学院教育では、教員の指導の下、課題研究として4名が論文をまとめた。また、北九州で開催された「第12回日本公衆衛生看護学会」に大学院生全員が参加し、積極的に研究発表を拝聴し、学生自身の課題研究に対する関連情報の収集を行った。また、全国の大学院修士課程保健師養成コースの学生との交流会で研究活動の意義などの意見交換を行った。

教員は、研究成果の発表及び外部の研究費獲得を目指して、研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって各自努力を続けてきた。新たに2件の研究費が獲得できた。それぞれの研究成果は国際学会及び国内学会で発表、論文として投稿した。今後も、研究の継続と課題研究や実習成果を学会発表や雑誌投稿ができるように教育活動を行うとともに、フィールドワークを取り入れながら、地域の健康課題の抽出や分析など研究活動としても貢献できる方法を考えていきたい。

4 その他

地域連携プラットフォームの事業として国東市が提案する課題解決にエントリーし、①「健康づくり計画策定を通して行う保健師・管理栄養士の現任教育」及び「保健推進員と一緒に地域で歯の健康づくりをしましょう。」について連携して行うことになった。①については、保健所市町村の保健師・管理栄養士の研鑽の場である定例研修会の場を活用し、地域診断から健康課題を抽出する方法について講義と演習を行った。（令和5年9月27日と令和6年1月24日）参加者自身の考え方や活動を見直す機会になったなど好評であった。また②については、市役所が保健推進委員と共に行ったアンケート結果の入力集計と分析を支援した。これにより歯科保健対策と保健推進委員活動の充

実に寄与できる。

5-19 国際看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、国際看護学概論（2年次）、国際看護学演習（新カリキュラム、2年次）国際看護比較論・国際看護学演習（3年次）を、大学院では、国際看護学特論、広域看護学演習、その他助産学コース、広域看護学コース、全コース共通科目の講義で国際看護に関連する講義を担当している。学部・大学院共に、講義では世界の健康課題やその背景を理解するため複眼的な視点をもらえるよう、文化・社会・経済的側面等のも情報を盛り込むよう留意している。今年度は大学院科目国際看護学特論の履修者はいなかった。学部の講義・演習では、日本国内のみならず世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 在留外国人や訪日外国人の増加等により急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア（Transcultural nursing）について学ぶことを目的としている。次年度も引き続き、文化・社会・言語背景が多様な人々を対象とした看護実践に活かせるより実践的な講義・演習構築をめざす。

2 教育活動の現状と課題

当研究室では、グローバルヘルスに関する基本的な知識を獲得すること、また、講義や演習を通して多様な価値観に触れ、文化社会的背景が人々の健康に及ぼす影響について理解することをめざしている。今年度は、国際看護学演習（新カリキュラム、2年次）について言語学研究室と共同運営を開始した。また、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、演習の一貫として対面／オンラインの国際交流を組み込むことができた。講義の復習では、小テストや科目試験の準備として定着してきたが、予習は未だ不足していた。予習・講義／演習・復習を効果的につなげ、相乗効果が得られるよう教授内容や方法を工夫していく必要がある。

3 研究活動の現状と課題

教員は各々のテーマ「在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・講堂と文化社会的要因—結核に着目して」、「看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラム（オンライン国際交流）の検討」に関して科研費を獲得し継続的に研究に取り組んだ。両者のテーマに関連して、2名の卒論生と共に取り組んだ。また、卒業研究として、上記2名の他に、1名の学生が英国における移民への医療サービスの現状と課題についての文献調査を行った。大学院では、助産学コース、NPコース、研究者コース博士後期課程の主担当／副担当として指導にあたった。

今後は、タイムマネジメントに努めて研究に取り組む時間を確保し、研究を推し進めること、結果を遅滞なく論文としてまとめ発表していくことが課題である。

4 その他

大分県国際交流プラザ、JICAデスク大分、大分市国際課から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。また、大分市国際課が開催した「おおいた国際協力啓発月間」において、研究室活動のパネル展示を行った。

5-20 社会看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、看護の対象となる人々が生涯を通じて、健康や障害の状態に応じて社会資源を活用できるよう支援を行うため、それらに必要な知識と基礎的な能力を養うことを目的に、学生が保健・医療・福祉・介護に関する基本概念、関係制度などを法律上の位置づけや制度の背景とともに理解するために必要な能力を養うことを目指す。

大学院教育では、少子高齢化や人口減少などの社会的な背景のなかで、社会のニーズと制約を捉え、課題を社会の仕組みを踏まえて思考すること、さらには、課題に対してシステム化や変革していくために必要な能力を養うことを目指す。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、健康支援概論、社会保障システム論、保健ボランティアを担当した。実習では地域看護学実習及び総合実習を担当した。健康支援概論では、健康や障害について歴史とともに基本的な概念や活用できるモデルを説明した。また、健康や障害に関するデータは社会の状況により変化してくため、政府統計など出典を明らかにするとともに、それらを活用しながら講義をすすめた。社会保障システム論では、関係する法律などを用いて背景、理念、目的などを理解するよう講義をすすめたが、学生にとって身近に感じられず、講義内容も難しかったようであるため工夫が必要である。

大学院教育では、健康社会科学特論、看護政策論、保健医療福祉行政特論を担当した。この他、NPコースの講義などを一部担当した。保健医療福祉行政の制度の基礎的理解に加え、それらに影響を与える社会的な要因を理解できるよう事例などを用いて説明した。今後は、事例を踏まえた演習など思考が定着するための工夫が必要である。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究で2名の学生に研究指導を行った。がん患者へのインタビューや都道府県看護協

会へのWLBを推進に関するインタビューなどにより、学生は貴重な経験を積むことができた。

大学院教育では、NPコースの院生を担当した。

教員は、看護基礎教育における看護政策教育プログラムの導入の試みに関する研究、地方自治体の保健師確保に関する研究、健康危機管理に関する研究を行った。新型コロナウイルス感染症の保健所と市町村との連携の在り方に関する研究が終了したため、論文としていく必要がある。

6 研究助成・事業助成等

6-1 研究助成

6-1-1 日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

荒木章裕

中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討. 若手研究.
(代表)

石田佳代子

災害時における「黒エリア」の構成のための基本となる指標の作成とその普及. 基盤研究(C). (代表)

安部眞佐子

CKD 誘発オステオサルコペニア発症を防止する食事性タンパク質摂取のあり方. 基盤研究(C).
(分担)

内倉佑介

看護師による単純 X 線画像読影のための教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

梅野貴恵

離乳後女性のエクオール産生能と骨代謝プロフィール回復状態の推移との関連. 基盤研究(C). (代表)

恵谷玲央

放射線発がんの新たなリスクモデルを細胞間コミュニケーションの視点から考える. 若手研究.
(代表)

持続的な医療被ばく国民線量評価のためのデータ収集、線量評価法の構築. 基盤研究(B). (分担)

小嶋光明

マイクロビーム放射線療法の抗がん効果の仕組みを細胞間コミュニケーションから紐解く. 基盤研究(C). (代表)

小野治子

生活習慣病の服薬者の医療費削減に向けた保健指導の構築. 基盤研究(C). (代表)

小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究. 基盤研究(C).
(代表)

影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連. 基盤研究(C). (代表)
森林環境下でのリモートワークが労働者のメンタルヘルスと労働効率に及ぼす影響. 基盤研究(C).
(分担)

医療的ケアが昼夜必要な在宅療養児の生活に即した地域包括支援システムの構築. 基盤研究(C).
(分担)

ランダム化比較試験による自殺対策ゲートキーパー養成プログラムの効果と持続性の評価. 基盤
研究(C). (分担)

加藤典子

看護基礎教育課程における政策教育プログラム導入ガイドの開発. 基盤研究(C). (分担)

草野淳子

医療的ケア児を支える訪問看護師と専門支援相談員をつなぐ連携教育プログラムの開発. 基盤研
究(C). (代表)

桑野紀子

在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・行動と文化社会的要因—結核に着目して. 基盤研
究(C). (代表)

古賀雄二

注意力障害評価を軸とした神経認知障害群の同時スクリーニングに関する研究. 若手研究. (代表)
学習効果が排除可能なせん妄評価アプリケーションの開発と検証. 基盤研究(C). (代表)
集中治療後症候群患者(PICS)の潜在化を防ぐ地域医療連携支援モデルの開発. 基盤研究(C). (分担)

後藤成人

ランダム化比較試験による自殺対策ゲートキーパー養成プログラムの効果と持続性の評価. 基盤
研究(C). (代表)

Web を活用した依存症の偏見解消プログラムの開発と社会実装の普及効果検証. 基盤研究(C).
(分担)

佐伯圭一郎

看護学生のシビリティー (civility) を育むアクションリサーチ. 基盤研究(C). (分担)
看護系大学における臨床実習前の共用試験の検討. 基盤研究(B). (分担)

定金香里

ユズ果皮飲料中のフラボノイドが抗アレルギー作用を発揮する条件の探索. 基盤研究(C). (代表)
東アジアを越境するバイオエアロゾル: 日本本土への拡散・沈着とその生体影響の評価. 基盤研究(A). (分担)

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の試み. 若手研究. (代表)

佐藤栄治

自発的掛け声と立ち上がり時の体幹前傾動作が体幹及び下肢筋活動に及ぼす影響. 基盤研究(C). (代表)

品川佳満

看護学生の情報倫理統合力の修得を目的とした学習支援ポータルサイトと演習教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

ICT を活用した医療職との連携による新しい保育者実習プログラムの開発と評価. 基盤研究(C). (分担)

篠原彩、桑野紀子

女性外国人技能実習生のリプロダクティブヘルスニーズに対する支援の構築. 基盤研究(C). (代表, 分担)

女性技能実習生担当者等の健康支援コンピテンス醸成プログラムの構築. 基盤研究(C). (代表, 分担)

秦さと子

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンス P 濃度の基準値の検討. 基盤研究(C). (代表)
デジタル機器使用と嚥下機能との関連. 基盤研究(C). (代表)

田中佳子

シャント血流音から狭窄を評価する機器の開発に関する基礎的研究. 基盤研究(C). (代表)

藤内美保

看護基礎教育における臨床推論の看護の思考形成を導く教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

診療看護師 (NP) が患者・家族の症状マネジメントを高める教育支援モデルの開発. 基盤研究(C). (分担)

濱中良志

骨粗鬆症に対する新しい発症機序の解明と新規薬物開発. 基盤研究(C). (代表)

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

父親の育児参加と育児休業取得に関する現状と課題. 基盤研究(C). (代表, 分担)

樋口幸

新生児皮膚トラブル予防を目的とした胎脂の網羅的解析による予測バイオマーカーの創出. 挑戦的萌芽. (代表)

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発. 基盤研究(C). (代表)
スキンプロットティング法を用いた新生児の皮膚トラブル発症のメカニズム解明. 基盤研究(B). (分担)

樋口幸、吉田成一

妊娠期の高脂肪食摂取が出生児の皮膚に与える影響と増悪・感受性要因の解明. 基盤研究(B). (代表, 分担)

姫野雄太

中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発. 若手研究. (代表)

福田広美、村嶋幸代

看護師長による看護師の継続意思につながる基本的心理欲求支援プログラムの開発. 基盤研究(C). (分担)

中小規模病院における効率的かつ質の高い看護に向けた人材育成に関する理論の開発. 基盤研究(C). (代表, 分担)

藤本優子

乳幼児を持つ親への祖父母の育児サポートは、祖父母の世代性と健康の向上に関連するか. 研究活動スタート支援. (代表)

乳児期の子どもを持つ母親の特性および育児レジリエンスの特徴と促進要因に関する研究. 基盤研究(C). (分担)

丸山加菜、桑野紀子

看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討. 基盤研究(C). (代表, 分担)

森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証. 若手研究. (代表)

矢野亜紀子、福田広美、荒木章裕、村嶋幸代、姫野雄太

中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発. 基盤研究(C). (代表, 分担)

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発－新卒訪問看護師教育の開発に向けて－. 若手研究. (代表)

吉田成一

加熱式たばこによる雄性生殖系への影響および寄与因子の探索と影響の低減を目指して. 基盤研究(B). (代表)

胎児期加熱式たばこ曝露が胎児に与える影響と出生後に生じる影響の推定. 挑戦的研究(萌芽). (代表)

6-1-2 その他の研究助成

加藤典子

健康危機における都道府県内の自治体・関係部局・関係機関との連携構築のための研究. 令和 5 年度厚生労働科学研究費 健康安全・危機管理対策総合研究事業. (分担)

加藤典子、村嶋幸代

新型コロナウイルス感染症の更なる波に向けた保健所の体制整備の充実に関する調査. 公益社団法人日本看護協会 感染拡大に備える看護提供体制の確保に関する調査研究助成. (代表, 分担)

樋口幸

胎脂の脂質組成分析に関するプロトコルの開発. サラヤ株式会社共同研究費. (代表)

樋口幸、吉田成一

微酸性電解水を用いたディスポタオルの開発. 鳥繁産業株式会社 受託研究費. (代表, 分担)

姫野雄太

訪問看護師による別居介護者への支援に関する研究. なな一る訪問看護研究助成プロジェクト. (代表)

村嶋幸代、岡田悠希、小野治子、加藤典子

自治体保健師の計画的・継続的な確保に関する研究. 令和 5 年度厚生労働科学研究費 健康安全・危機管理対策総合研究事業. (代表, 分担)

6-1-3 学内の競争的研究資金

石田佳代子、藤内美保、山田貴子、内倉祐介

デジタル聴診器を使用したフィジカルアセスメントにおける教育効果の検討. 先端研究

甲斐博美、石田佳代子、藤内美保

プライマリ領域の診療看護師（NP）の実践知から得られたコアコンピテンシーの探求 ―経験年数別にみた重要性の分析―. 先端研究

甲斐優子、加藤典子、小野治子、藤本優子、佐藤愛、村嶋幸代

修士課程保健師教育の臨地実習受け入れにより実習指導者にもたらされる変化に関する調査. プロジェクト研究

佐藤愛

反射性咳嗽力の加齢性変化と関連要因の検討―咳衝動と血中サブスタンス P 濃度に着目して―. 先端研究

杉本圭以子、梅野貴恵

更年期女性の更年期症状とヨガ実施経験およびマインドフルネス傾向との関連. 先端研究

堀裕子、小野美喜、中釜英里佳、林猪都子

向老期女性の認知症予防・理解促進のための ICT を活用したプログラムの開発. 奨励研究

渡邊一代

大分県内の高校生における妊娠する力や不妊、からだ（生殖機能）に関する知識の実態調査. 奨励研究

6-2 事業助成

本年度実績なし

6-3 外部研究者受入れ

本年度実績なし

7 研究業績

7-1 著書

加藤典子：組織管理論 2023 年版，第 2 章 論点 3 地方自治体の看護職, pp170-174, 勝原裕美子編，日本看護協会出版会，東京，2023.4.

加藤典子：看護関係法規, 第 IV 章 2 健康の保持・増進に関する法・制度を理解する, pp170-174, 田中幸子, 野村陽子編，南江堂，東京，2024.2.

加藤典子：公衆衛生看護学.Jp, 第 2 章 IV 事業化・施策化, pp184-188, 鳩野陽子, 神庭純子編，インターメディカル，東京，2024.3.

勝又浜子，加藤典子，清水嘉代子，田母神裕美：看護法令要覧 令和 6 年版. 日本看護協会出版会，東京，2024.3.

草野淳子：わが子のケアの達人になる「医療的ケア児」のママたちの奮闘. 日本看護協会出版会，東京，2023.

7-2 原著論文・査読付総説

石田佳代子：災害時における黒エリアでの基本的な活動と訓練の重要性 ― 熊本地震で活動した看護師への面接調査より ―. 日本職業・災害医学会会誌, 71(6), 196-203, 2023.

石丸智子, 福田花鈴：A 市救急ワークステーションでの経験から得た救急救命士の学び. 日本救急医学会九州地方会雑誌, 23 (1), 5-12, 2024.

川上美咲, 梅野貴恵, 姫野綾：出産施設退院後の母親が乳房ケア専門助産院を受診した前後の心身の変化と助産サポートの必要性. 母性衛生, 163(4), 957-967, 2023.

江藤芳浩, 恵谷玲央, 品川佳満, 小嶋光明：救急医療における AI を用いた腹部 CT 画像診断支援の現状と課題に関する文献レビュー. 日本診療放射線技師会誌, 70(9), 869-877. 2023.

大下竜司, 篠原彩, 荒木章裕：大分県 A 市の郊外住宅団地に暮らす高齢者における COVID-19 対策に伴う活動自粛と地域への思いの変化との関連. ヒューマンケアリング学研究, 14(1), 14-22, 2023.

甲斐博美, 小野美喜, 生田有沙：自分らしい介護生活を再構築するために家族会から得られるピアサポート ―認知症高齢者を支える家族介護者の語りから―. 日本認知症ケア学会誌, 22(3), 583-591, 2023.

牧瀬香穂, 影山隆之, 岩崎香子：一地域における救急搬送自傷例の性・年齢階級・重症度・曜日別発生数の分析, 厚生指標, 71(1), 10-15, 2024.

田中生弥子, 影山隆之：中学生の自殺予防のための教職員向けゲートキーパー校内研修の実態―実施状況と校長の意識に関する調査. 学校メンタルヘルス, 26, 228-234, 2023.

齊籐友子, 影山隆之：知的障害者福祉支援施設で働く福祉職員の職場のストレス要因・勤務状況と精神健康との関連. 産業ストレス研究, 30, 223-234, 2023.

加藤典子：市町村常勤保健師と非常勤保健師との役割分担-乳児家庭全戸訪問事業を例として-. 日本地域政策研究, 32, 52-59, 2024.

大石直之, 高野政子, 草野淳子：A 病院における小児への PICC 挿入と管理上の課題. 日本 NP 学会誌, 7(2), 48-57, 2023.

福田和行, 桑野紀子, 小野美喜：英国プライマリケア領域 Nurse Practitioner の職能拡大推進の要因に関する文献検討. 日本 NP 学会誌, 7(1), 1-10, 2023.

井上千穂, 齋藤信也, 古賀雄二, ローレンス綾子: 我が国の看護師が用いる用語としての「不穏」の概念分析. 日本クリティカルケア看護学会誌, 19, 47-57, 2023.

Tronstad, O., Patterson, S., Sutt, A. L., Pearse, I., Hay, K., Liu, K., Sato, K., Koga, Y., Matsuoka, A., Hongo, T., Rätsep, I., Fraser, J. F., Flaws, D., & eDIS-ICU study investigators: A protocol of an international validation study to assess the clinical accuracy of the eDIS-ICU delirium screening tool. Australian critical care : official journal of the Confederation of Australian Critical Care Nurses, 36(6), 1043–1049, 2023.

Tsubaki, M., Kako, J., Koga, Y., Kobayashi, M., Endo, Y., Kimura, Y., Kiyohara, H., Ishida, M., Nishida, Y., Harada, K., Kajiwar, K., Ito, Y., Wakiguchi, Y., Sasaki, S., Hamanishi, S., Yamanaka, M., & Kakeda, T. : Are There Changes in the Nursing Managers' Expectations of the Professional Quality of New Graduate Nurses after the Emerging of Infectious Disease Pandemic?. JMA journal, 6(4), 532–535, 2023.

後藤成人, 影山隆之: 自殺対策ゲートキーパー(GK)という用語を知る一般住民、および GK 養成研修の受講経験者・受講希望者の特徴—今後の研修計画の一助として. 自殺予防と危機介入, 43(1), 54-60, 2023..

Shinohara A, Ogata A, Kageyama T, Magilvy JK, Murashima S: Learning outcomes from preventive home visit practicum in an undergraduate nursing program: A qualitative study. J International Nursing Research, e2022-0035, 2024. <https://doi.org/10.53044/jinr.2022-0035>

篠原彩, 影山隆之, 荒木章裕, 福田広美, 品川佳満, 堀裕子, 永松いずみ, 佐藤愛, 木嶋彩乃, 村嶋幸代: 地域在住高齢者と看護学生による世代間オンライン交流会の試み. 老年社会科学, 44(4), 359-368, 2023.

秦さと子, 吉田睦史: 袖付きプラスチックエプロンの脱衣方法の違いによる身体汚染の比較. 看護技術学会誌, 22, 1-8, 2023.

中釜英里佳, 吉村匠平: 看護系大学における教養教育の違い: ディプロマ・ポリシー、教養教育のカリキュラムの比較・検討を通して. 日本看護学教育学会誌, 32(3), 103-114, 2023.

佐々木萌, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 妊婦における産後ケア事業の認知度および利用への意識. 母性衛生 64(4), 691-697, 2024.

Higuchi S, Yoshida S, Minimartsu T, Hatano Y, Notsu A, Ichinose T : Comparison of the Effects of Bathing and the Dry Technique on the Skin Condition of Early Neonates: A Prospective Observational Study. *Annals of Dermatology*, 35(4), 256-256, 2023.

森楓, 樋口幸, 小嶋光明 : 清拭素材の特性がヘアレスマウスの皮膚バリア機能に与える影響. 母性衛生, 64(1), 43-50, 2023.

森下麗華, 樋口幸, 姫野綾 : 新生児期のおむつ皮膚炎の炎症に関連する要因の検討 保清・スキンケアと皮膚バリア機能に焦点を当てて. 母性衛生, 64(1), 13-20, 2023.

姫野雄太, 北池正, 池崎澄江 : 術前不安と術前管理に着目した周術期ケアガイドの検証. 日本看護研究学会雑誌, 46(2), 165-175, 2023.

宮内信治: Anne Toner Jane Austen' s Style: Narrative Economy and the Novel' s Growth. Cambridge: Cambridge University Press 2020, xi + 210 pp. 近代英語研究, 39, 93-100, 2023.

高橋慧, 住吉和子, 森加苗愛, 他 : COVID-19 感染拡大下における入院中の糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 27(2), 1-9, 2023.

森加苗愛, 岡佳子, 藤原優子, 他 : COVID-19 感染拡大下における看護師が捉えた患者の療養生活の困難さと心理的苦痛に関する実態調査. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 28(1), 2024.

7-3 その他の論文等

小野美喜：プライマリケア領域の診療看護師は何を総合的に看ているのか．理学療法ジャーナル，58(2)，161-165，2024．

影山隆之：高齢者介護と自殺の関係性．ケアスル介護ホームページ，<https://caresul-kaigo.jp/column/articles/34348/>，2024．

石川幸司，堀友紀子，作田麻由美，岡林志穂，河原崎麻美，佐野加緒里，寺地沙緒里，古賀雄二，村上香織，大江理英，山本真基子，藤野智子：集中治療室における災害時の事業継続計画（BCP）に関する実態調査．日本クリティカルケア看護学会誌，19，166-171，2023．

古賀雄二，伊藤聡子，井上和代，富田亜沙子，山田奈津子，藤野智子：COVID-19 パンデミック開始段階における看護師の心理社会的反応に関する文献レビュー．日本クリティカルケア看護学会誌，19，184-196，2023．

遠藤洋次，木村安貴，古賀雄二，小林成光，清原花，原田紀美枝，石田実知子，椿美智博，西田洋子，脇口優希，伊東由康，角甲純，掛田崇寛，佐々木新介，梶原弘平，濱西誠司，山中真：COVID-19 流行下の教育支援体制を見直すきっかけとなった新人看護師の様相とそれに対して講じられた教育支援策—看護管理者を対象とした質的研究—．日本看護科学会誌，43，654-665，2023．

坂本貴子，福田広美，村嶋幸代：病院に1年以上勤務する看護師の職務継続意思に関連する支援と成果—アウトカムモデルを用いた文献レビュー—．保健の科学，65，631-639，2023．

宮内信治，蔡小瑛，張曉春，前田樹海，小西恵美子，廣瀬理絵：看護倫理における対話の有用性：emic（当事者の視点）と etic（観察者の視点）をめぐって．日本看護倫理学会誌，16，1-4，2023．

村嶋幸代，加藤典子：保健師に求められる「事業化」「施策化」の能力．保健師ジャーナル，79(3)，172-177，2023．

山崎優介，東めぐみ，森加苗愛，他：COVID-19 感染拡大による糖尿病患者への教育・看護に関する実態調査～看護師が捉えた地域連携への影響～．日本糖尿病教育・看護学会誌，27(2)，25-32，2023．

矢野亜紀子，福田広美，荒木章裕，姫野雄太，村嶋幸代：中小規模病院における看護のトップマネージャーの地域の看護ネットワークへの参加と看護管理行動との関連．看護科学研究，21，108-118，2023．

7-4 プロシーディングス

後藤香菜, 後藤成人 : 統合失調症患者の社会参加支援に化粧療法を活かすための課題 これまでの化粧療法に関する報告のレビューをととして. 日本精神科看護学術集会誌, 66(1), 250-251, 2023.6.

牧野治敏, 岩本光生, 和田智雄, 西村靖史, 鈴木照夫, 定金香里, 水戸貴久 : 大分での就職をテーマとした初年次学生へのキャリア教育の実践. 第 71 回九州地区大学教育研究協議会, 大分, 2023. 9.

7-5 報告書

小嶋光明, 恵谷玲央 : 放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 2022 年度放射線災害・医科学研究拠点共同利用・共同研究課題成果報告書, 2023.12.

五十嵐悠, 榎本敦, 小嶋光明, 小田啓二, 高橋賢臣, 飯本武志 : 日本保健物理学会「エックス線被ばく事故検討 WG」活動報告―第 1 分科会 エックス線利用上の安全規制と現場管理―. 保健物理/58 巻, 2023.

加藤典子 : 公益社団法人 日本看護協会 感染拡大に備える看護提供体制の確保に関する調査研究助成事業 新型コロナウイルス感染症の更なる波に向けた保健所の体制整備の充実に関する調査報告書. 2023.12.

吉田成一 : 加熱式たばこについて : 文献レビュー (たばこ業界を含めた動向). 令和 4 年度 第三回加熱式たばこ研究討論会, 2023: 19-22.

7-6 学術講演

小嶋光明：放射線生物学 Up to date ～放射線発がんに関する最新の知見～. 第 39 回日本診療放射線技師学術大会シンポジウム, 熊本, 2023.9.

影山隆之：エコロジーで考える自殺予防：危険因子と防御因子，環境因子と個人因子. 第 47 回日本自殺予防学会総会大会長講演，大分市, 2023.9.

影山隆之：働き盛り世代の自殺予防：働ける人も働けない人も生きるために. 秋田大学自殺予防総合研究センターシンポジウム，秋田市, 2023.10.

影山隆之：苦しさを打ち明けて、生きる. 日本精神保健福祉士協会世界メンタルヘルスデー2023 企画講演会，東京, 2023.10.

影山隆之：自殺予防と生きる希望. 第 43 回大分県緩和ケア研究会，大分市, 2024.3.

影山隆之，瀬戸屋希，小泉典章，後藤成人：MCRT の先にある課題：支援者の支援と学会の役割. 第 39 回日本精神衛生学会，東京, 2023.12.

加藤典子：シンポジウム ポストコロナにおいて、活動領域を超えた看護職間の連携強化に向けて. 令和 5 年度日本看護協会通常総会全国職能別交流集会 全国保健師交流集会，千葉市, 2023.6.

加藤典子：特別企画 1-2 新興感染症の発生に備え看護提供体制を考える. 第 54 回日本看護学会学術集会，横浜市, 2023.11.

上田有香，齋藤建児，工藤修一，末永智子，後藤成人：シンポジウム 3 地域における自殺対策. 第 47 回日本自殺予防学会総会，大分, 2023.9.

村嶋幸代：「公衆衛生を衛る保健師の育成に向けて」. 第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会，福岡県, 2024.1..

森加苗愛：編集委員会教育セミナー 臨床での看護実践を報告してみよう - 実践報告論文の書き方 -. 第 28 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会，岡山市, 2023.9.

吉田成一：加熱式たばこに関する情報について（文献情報）. 第 4 回加熱式たばこ研究討論会. 2024 年 2 月

7-7 学会発表等

足立綾, 草野淳子: 重症心身障害児の摂食嚥下機能のアセスメントにおける看護師の経験年数の比較. 日本小児看護学会第 33 回学術集会, 神奈川, 2023.7.

安部眞佐子, 林猪都子: 妊娠中の体重増加別に見た妊娠授乳期の卵摂取が子どもの食物アレルギー発症に与える影響. 第 18 回大分県母性衛生学会学術集会, 大分, 2023.11.

石田佳代子, 山田貴子, 内倉祐介, 藤内美保: デジタル聴診器を使用した遠隔授業による聴診演習の有用性—予備的調査より—. 第 49 回日本看護研究学会学術集会, Web, 2023.8.

石田佳代子, 山田貴子, 内倉祐介, 藤内美保: 遠隔授業によるデジタル聴診器を使用した呼吸音と心音の聴診演習の有用性. 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 山口, 2023.12.

石丸智子, 高田瑞稀: 大分市の自動体外式除細動器設置についての現状分析. 第 49 回大分救急医学会, 大分, 2023.7.

岩下恵子, 鈴木啓司, 香崎正宙, 恵谷玲央, 甲斐倫明, 小嶋光明: ヘアレスマウスを用いた組織反応から紐解く. 日本放射線看護学会第 12 回学術集会, 長崎, 2023.9.

岩下恵子, 鈴木啓司, 香崎正宙, 恵谷玲央, 甲斐倫明, 小嶋光明: ヘアレスマウスを用いた組織反応から紐解く放射線皮膚炎の進行と回復におけるスキンケア効果の検証. 第 60 回放射線影響懇話会, 長崎, 2023.10.

岩下恵子, 鈴木啓司, 香崎正宙, 恵谷玲央, 甲斐倫明, 小嶋光明: ヘアレスマウスを用いた組織反応から紐解く放射線皮膚炎の進行と回復におけるスキンケア効果の検証. 日本放射線影響学会第 66 回大会, 東京, 2023.11.

岡田悠希, 川崎涼子, 小野治子, 加藤典子, 朝見舞, 岸恵美子, 藁有桂, 佐伯和子, 村嶋幸代: 保健師活動領域調査から見た全国自治体の保健師確保の状況 2020-2022 年の調査から. 第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 北九州市, 2024.1.

小嶋光明, 恵谷玲央, 甲斐倫明: 肺の正常細胞とがん細胞における放射線誘発レスキュー効果の検討. 日本放射線影響学会第 66 回大会, 東京, 2023.11.

五十嵐悠, 秋吉優史, 榎本敦, 小嶋光明, 小田啓二, 笠井篤, 川島恒憲, 古渡意彦, 坂間稔, 高橋賢臣, 辻本忠, 中村美和, 橋本周, 浜田信行, 福士政広, 山口一郎, 飯本武志: エックス線被ばく事故検討 WG の活動—放射線安全文化醸成に資する、教育、線量評価、及び事故情報発信のあり方—. 日本保

健物理学会第 56 回研究発表会, 東京, 2023.11.

高橋志乃, 小野治子: 山間部における後期高齢者の座位時間行動と生活行動の実態. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2024.3.

竹尾千恵, 山口あゆみ, 池田文恵, 小野隆司, 甲斐博美: 診療看護師 (NP) が実践する中山間地域におけるオンライン診療充実の可能性. 第 9 回日本 NP 学会学術集会, 札幌, 2023.10.

影山隆之, 篠原彩: 大分県における COVID-19 患者の日常生活回復度およびトラウマ的症状と関連する要因. 第 82 回日本公衆衛生学会総会, つくば, 2023.11.

田中生弥子, 影山隆之: 中学生の自殺予防のための教職員向けゲートキーパー研修: 知識・スキルへの効果の検討. 第 47 回日本自殺予防学会総会, 大分, 2023.9.

加藤典子: 市町村保健事業のサービス提供者の決定のプロセス. 第 82 回日本公衆衛生学会総会, つくば市, 2023.10.

野村陽子, 石橋みゆき, 小山田恭子, 池田真理, 田中幸子, 西垣昌和, 加藤典子: 看護系大学における政策教育プログラム導入の試みと評価指標の検討. 第 43 回日本看護科学学会交流集会, 下関市, 2023.12.

森永裕美子, 加藤典子, 古田加代子, 高橋香子, 田村麻里子, 宮崎紀枝, 村嶋幸代: COVID-19 発生時の市町村による保健所支援における成果と課題～支援市町村及び受援保健所のインタビュー調査より～. 第 12 回日本公衆衛生看護学会学術集会, 北九州市, 2024.1.

後藤香菜, 後藤成人: 統合失調症患者の社会参加支援に化粧療法を活かすための課題 これまでの化粧療法に関する報告のレビューをととして. 第 48 回日本精神科看護学術集会, 北海道. 2023.6.

草野淳子, 井原健二, 青山昌憲, 齋藤恵理佳, 長濱明日香: 大分県内における相談支援専門員の医療的ケア児に関する知識の認識に関する調査. 第 29 回大分県小児保健学会, 大分, 2023.8.

草野淳子, 足立綾: 検査・処置を受ける子どもへ病棟看護師が行う看護に関する文献研究. 日本小児看護学会第 33 回学術集会, 神奈川, 2023.7.

草野淳子, 井原健二, 青山昌憲, 齋藤恵理佳, 長濱明日香: A 県内における相談支援専門員の訪問看護師との連携と医療的ケア児に関する知識についての自己認識に関する研究. 第 70 回日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023.6.

草野淳子, 井原健二, 竹野晴奈 : 在宅で医療的ケアが必要な子どもを育てる母親の自己実現に関する文献研究. 第 70 回日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023.6.

草野淳子, 井原健二, 佐々木真理子, 岩尾尚子, 佐藤弥生, 若林悦子 : A 県内における医療的ケア児に対して訪問看護師が行う相談支援専門員との連携と情報共有の認識. 第 70 回日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023.6.

金城芳秀, 李廷秀, 西川浩昭, 佐伯圭一郎 : 看護学生が認識するシビリティ典型例に含まれる定義的属性. 第 88 回日本健康学会総会, 弘前, 2023.12.

定金香里, 市瀬孝道, 吉田成一 : フラボノイド複合摂取によるアレルギー性喘息への抗アレルギー効果の検討. 第 30 回日本免疫毒性学会, 神奈川, 2023. 9.

定金香里, 牧輝弥, 吉田成一, 市瀬孝道 : 東大阪市上空で採取された真菌 2 種のアレルギー性気道炎症誘発能の検討. 第 94 回日本衛生学会学術総会, 鹿児島, 2024. 3.

石川良賀, 宮坂奈津子, 赤路佐希子, 佐川友哉, 張珂瑞, 本田晶子, 定金香里, 奥田知明, 市瀬孝道, 高野裕久 : 組織染色ーラマン分光ハイブリッド観察による環境粒子の動態と生体応答の同視野評価. 第 94 回日本衛生学会学術総会, 鹿児島, 2024. 3.

本多楓佳, 佐藤愛 : 通いの場に参加する高齢者におけるオーラルフレイル危険度と会話満足度との関連. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2024.3.

Shinohara A, Kuwano N, Shinagawa Y, Kawasaki R, Ohnishi M : The perception of Vietnamese female technical intern trainees that their menstruation has worsened after migrating to Japan. 第 7 回日本国際看護学会学術集会, 埼玉, 2023.11.

Shinohara A, Kuwano N, Shinagawa Y, Kawasaki R, Ohnishi M : Intercultural sensitivity among persons in charge of female technical intern trainees in Japan. グローバルヘルス合同大会, 東京, 2023.11.

藤内美保, 河尻俊太郎, 山田貴子 : 看護基礎教育における臨床判断能力育成のための学内演習授業計画の実態. 第 49 回日本看護研究学会学術集会, Web, 2023.8.

石川倫子, 藤内美保, 加藤克典, 千田明日香, 瀬戸清華 : 診療看護師 (NP) における在宅療養移行支援に関する質指標の開発. 第 9 回日本 NP 学会学術集会, 札幌, 2023.10.

筑濱浩子, 藤内美保: レーザー血流計で測定した末梢血流の測定値と深部振動覚の相関について. 日本看護研究学会第 28 回九州・沖縄地方学術集会, 鹿児島, 2023.11.

中釜英里佳, 小野美喜: ブログによる闘病記を研究対象にする際の倫理的配慮の実際. 日本看護倫理学会第 16 回年次大会, 東京, 2023.6.

西田欣広, 小野春香, 矢野博之, 濱中良志: β -secretase 欠損マウスに観察される下垂体ホルモン分泌の異常と発育・ネグレクト行動に与える影響の解析. 第 46 回日本分子生物学会, 神戸, 2023.12.

中川まどか, 林猪都子, 永松いずみ: 出生前診断を受ける妊婦に必要な看護に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

吉山未来, 林猪都子, 永松いずみ: 幼児期の性教育に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

佐藤榛香, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 多胎における父親・母親の親意識に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

森迫佑衣, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 10 代母親に対して看護職が行う支援に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

小椋夕華, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 妊娠期から育児期までの父親役割の獲得を促すための支援に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

橋内美音, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: つわりの実態とつわり症状軽減のための対処法に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10.

岡部瑠華, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 看護女子高校生の月経周期に影響を及ぼす要因の検討. 第 18 回大分県母性衛生学会学術集会, 大分, 2023.11.

樋口幸, 梅野貴恵: 妊娠中の栄養摂取および母体環境と胎脂中の脂肪酸組成分布との関連. 第 37 回日本助産学会学術集会, 東京, 2023.10.

Himeno Y, Mizuno M: The support provided by visiting nurses to older adults in depopulated areas during the transition to home care, 27th East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, 2024.3.

姫野雄太, 福田広美, 荒木章裕, 矢野亜紀子: 手術体位に関連する褥瘡に関する海外研究の動向. 第 49 回日本看護研究学会学術集会, Web, 2023.8.

姫野雄太, 水野もえ：訪問看護師による過疎地域在住高齢者への在宅移行期の支援と課題. 第 26 回地域看護学会学術集会, 神奈川, 2023.9.

姫野雄太：日本における周術期褥瘡予防のための研究に関する文献レビュー. 第 37 回日本手術看護学会学術集会, 福岡, 2023.10.

姫野雄太, 福田広美, 藤内美保：中規模病院に勤務する看護師のやりがいの構造 —ジョブ・クラフティングからみた分析—. 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 山口, 2023.12.

藤本優子, 都筑千景, 薮本初音, 渡井いずみ, 尾崎伊都子, 高部さやか, 津下一代：地域・職域連携推進に向けた方策の検討(第 1 報)～自治体における協議会活用の実態～. 第 82 回日本公衆衛生学会総会, つくば, 2023.11.

渡井いずみ, 尾崎伊都子, 高部さやか, 都筑千景, 薮本初音, 藤本優子, 津下一代：地域・職域連携推進に向けた方策の検討(第 2 報)～自治体における ICT 活用状況～. 第 82 回日本公衆衛生学会総会, つくば, 2023.11.

原田千鶴, 折原実加, 藤本優子：乳幼児を養育する親の援助要請行動と関連要因の検討. 第 68 回大分県公衆衛生学会, 大分, 2024.3.

堀裕子, 小野美喜, 中釜英里佳, 林猪都子：向老期女性の認知症に対する認識～予防行動への取り組みに着目して～. 第 12 回日本認知症予防学会学術集会, 新潟, 2023.9.

丸山加菜：性的マイノリティに対する看護師の知識・態度・看護実践に関する文献研究. 第 64 回日本母性衛生学会学術集会, 大阪, 2023.10

丸山加菜, 桑野紀子：看護系単科大学における学生のオンライン国際交流による異文化感受性の変化. グローバルヘルス合同学会 2023, 東京, 2023.11

宮内信治：英国の言語学習における音読の変遷. 日本英語教育音声学会第 3 回大会, 北九州市, 2023.5.

宮内信治, 小野美喜：ナイチンゲールの時代と現代の「取り残された人々」COVID-19 などの感染症に焦点を当てて. 日本看護倫理学会第 16 回年次大会, 東京, 2023.6.

宮内信治：小学校国語学習指導要領における音読の扱いと実践：英国との対比. 日本言語音声学会第 7 回全国大会, 大阪市, 2023.9.

川本利恵子, 村嶋幸代, 樽松久美子, 福永ヒトミ, 山勢博彰: シンポジウム 2「高度実践看護師の展望」, 第 43 回日本看護科学学会学術集会, 山口県, 2023.12.

吉田成一: 加熱式たばこ曝露により生じる雄性生殖機能への影響の可逆性. 日本アンドロロジー学会 第 42 回学術大会, 2023.6.

吉田成一: 加熱式たばこの胎児期曝露による雄性胎児への影響. 第 68 回日本生殖医学会学術講演会, 2023.11.

8 社会貢献

8-1 講演等

足立綾

大分県教育委員会 令和 5 年度第 2,3 回医療的ケア研修. 大分市, 2023.7.

指導案作成演習. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.

石田佳代子

確実に身につくフィジカルアセスメント ～呼吸・循環編～. 令和 5 年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2023.7.

看護過程. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.8.

石丸智子

指導案作成演習. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.

梅野貴恵

助産師教育課程, 母性看護学. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.7.

小野治子

養護概説. 大分県教育委員会免許認定講習, 大分県教育委員会, 大分, 2024.1.

小野美喜

看護専門職論 看護実践における倫理. 令和 5 年度大分県看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修, 大分市, 2023.8.

実習指導計画・指導案作成の実際. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.

甲斐優子

保健師教育課程. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.7.

地域を支える保健師を育てる. 全国保健師教育連絡協議会九州ブロック定例会・研修会, 宮崎市, 2023.9

看護職をつなぐ県保健師の活動～看護の地域ネットワーク事業から～. 第 12 回日本公衆衛生看護学会, 北九州市, 2024.1.

影山隆之

メンタルヘルス不調者への相談員の対応. 大分県警察本部メンタルヘルス相談員研修会, 大分市, 2023.4.

精神科看護の基礎. 日本精神科看護協会大分県支部研修会(初任者研修), 大分市, 2023.5.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター新任課長級研修, 大分市, 2023.5.

惨事ストレス対策について. 大分県警察本部第1回惨事ストレスセミナー, 2023.5.

職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分市, 2023.6.

睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修, 大分市, 2023.7.

睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修, 大分市, 2023.7.

子どもの自傷行為・自殺予防のための理解と対応. 別府市教職員対象子どもの自殺予防ゲートキーパー研修. 別府市, 2023.8.

エコロジーで考える自殺予防: 危険因子と防御因子, 環境因子と個人因子. 第47回日本自殺予防学会総会大会長講演, 大分市, 2023.9.

生きる支援のために地域でできること〜特に青少年を支える. 大津市自殺対策研修会, 大津市, 2023.9.

働き盛り世代の自殺予防: 働ける人も働けない人も生きるために. 秋田大学自殺予防総合研究センターシンポジウム, 秋田市, 2023.10.

苦しさを打ち明けて、生きる. 日本精神保健福祉士協会世界メンタルヘルスデー2023企画講演会, 東京都中央区, 2023.10.

子どもの自傷・自殺予防のための理解と対応. 大分県教育委員会令和5年度健康教育研修会, 大分市, 2023.10.

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防職員幹部教育初級幹部科研修, 由布市, 2023.11.

惨事ストレス対策について. 大分県消防団上級幹部科研修, 由布市, 2023.11.

消防職員・警察職員の後方支援. 日本精神衛生学会第39回大会理事長セミナー MCRTの先にある課題—支援者の支援と学会の役割, 府中市, 2023.12.

労働者の睡眠と健康. 日本精神衛生学会第39回大会教育講演, 府中市, 2023.12.

子どもの自傷・自殺予防のための理解と対応. 日本学校相談学会大分県支部研修会, 大分市, 2023.12.

睡眠とこころの健康. 豊後大野市こころの健康教室, 豊後大野市, 2024.1.

職場の自殺対策と危機対応. 一般社団法人職場のメンタルヘルス支援委員会オンラインセミナー, 2024.3.

加藤典子

アフターコロナの保健師活動で大切なこと. 大分県南部保健所管内地域保健従事者研究会, 大分県南部保健所, 2023.5.

草野淳子

大分県教育委員会主催令和 5 年度第 2 回(教員対象) 医療的ケア研修会. 2023.7.
大分県教育委員会主催令和 5 年度第 3 回(教員対象) 医療的ケア研修会. 2023.8.
大分県教育委員会主催令和 5 年度第 1 回 (看護師対象) 医療的ケア研修会. 2023.4.
大分県教育委員会主催令和 5 年度第 2 回 (看護師対象) 医療的ケア研修会. 2023.8.

古賀雄二

せん妄・認知症患者の対応. 岡山県看護協会井笠支部研修会, オンライン, 2023.6.
術後せん妄の評価. 弘前大学病院集中治療看護セミナー, オンライン, 2023.6.
PICS 対応. 大分大学医学部附属病院看護部研修会, 大分市, 2023.10.
研究指導. 岡山県看護協会, 2023.
看護研究発表会講評. 岡山県看護協会倉敷支部, 2023.
看護研究指導, 岡山市民病院, 2023.

後藤成人

アディクションフォーラムと出会った一人の看護職者の話. 第 22 回大分アディクションフォーラム, 別府市, 2023.10.

定金香里

初年次地域キャリアデザインワークショップ. おおいた地域連携プラットフォーム推進事業, 大分市, 2023.6.

品川佳満

やってみよう看護研究 2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2023.6.

秦さと子

基礎看護学における実習指導. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.

杉本圭以子

やってみよう看護研究 1 テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2023.5.
やってみよう看護研究 4 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2023.8.
精神看護学における実習指導. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.8.
こころの健康と食のつながり. 佐伯市食育コラボレーション企画, 2023.12.
こころの健康と食のつながり. 豊後大野市こころの健康教室, 2024.1.

メンタルヘルスと食事. 日本精神科看護協会大分県支部研修, 2024.2.

関根剛

人材管理 I (看護チームのマネジメント). 大分県看護協会ファーストレベル研修会, 大分市, 2023.5.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター, 大分市, 2023.5.

犯罪被害者支援とは何か. 紀の国被害者支援センター, 和歌山県和歌山市, 2023.6.

チーム力向上に貢献できるコミュニケーション. 大分県教育センター, 由布市, 2023.6.

コミュニケーションを通じて地域とつながる. 宇佐市愛育会, 宇佐市, 2023.6.

カウンセリングの理論と実際(1)電話相談の基本的な関わり方. 大分いのちの電話協会, 大分市, 2023.7.

カウンセリングスキルの基礎・ストレスとサポート・倫理. 山口被害者支援センター, 山口市, 2023.7.

警察安全相談事務専科教養「相談対応の基本」. 大分県警察, 由布市, 2023.7.

青年期のメンタルヘルスとコミュニケーション. 大分工業高等専門学校, 大分市, 2023.7.

ボランティア相談員養成講座「支援技術・支援スキル・ロールプレイ」. かがわ被害者支援センター, 高松市, 2023.7.

信頼関係を作るコミュニケーション. 大分県教育庁体育保健課, 大分市, 2023.7.

カウンセリングの理論と実際(2)カウンセリングスキル. 大分いのちの電話協会, 大分市, 2023.8.

看護の地域ネットワーク推進会議. 東部保健所, 別府市, 2023.8.

犯罪被害者等相談窓口担当者研修会「あなたの市や町の犯罪被害者をどう支援するか」. 山口県, 山口市, 2023.6.

自殺予防のために地域だからできること. 臼杵市保健所, 大分市, 2023.10.

性犯罪捜査専科「性犯罪被害者の心理と支援」. 大分県警察, 由布市, 2023.9.

チャイルドライン受け手養成講座「ロールプレイー聴くということ」. 大分チャイルドライン, 大分市, 2023.9.

消防職員専科教育警防科「惨事ストレス」. 大分県消防学校, 由布市, 2023.10.

自殺予防のために地域だからできること. 大分市保健所, 大分市, 2023.10.

育成される側から育成する側へ. 全国被害者支援ネットワーク, 大津市, 2023.11.

国東市こころの健康づくり研修会「地域だからこそできる自殺予防」. 国東市, 2024.2.

育成される側から育成する側へ. 全国被害者支援ネットワーク, 熊本市, 2024.2.

電話受け手ボランティア継続研修. チャイルドライン大分, 大分市, 2024.2.

消防職員専科教育救急科「惨事ストレス」. 大分県消防学校, 由布市, 2024.3.

藤内美保

日常生活に必要なフィジカルアセスメントを確認しよう. 大分赤十字病院新人看護師公開研修, 大分市, 2023.8.

大学教育課程. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.7.

実習指導案・指導計画. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.
確実に身に付くフィジカルアセスメント. 大分県看護協会, 大分市, 2023.7.
フィジカルアセスメント呼吸・循環・消化器. 別府医師会看護職研修会, 大分市, 2023.10.

樋口幸

新生児の皮膚の特徴とスキンケア. サラヤ株式会社, 2024.3.

福田広美

組織管理論. 令和 5 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分県看護協会, 大分市, 2023.8.
統合演習. 大分県看護協会令和 5 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分県看護協会, 大分市, 2023.9.

藤本優子

今こそ創ってあげたい！！こころの基地. みつばこども園, オンライン, 2023.8.
お口の機能を育てるコツ～気づいてる？口腔機能発達不全～. みつばこども園, オンライン, 2023.11.
集団の場で子どもをのばしてあげるために～おうちで助走・伴走を～口腔機能発達不全～. みつばこども園, オンライン, 2023.12.
祖父母にも、ママとパパにも知ってもらいたい 祖父母向け講座. 高槻市, オンデマンド配信, 2023 年度通年

村嶋幸代

保健師の人材育成について ～市町村の人材育成の課題と県の役割～. 令和 5 年度市町村担当課長及び保健師合同研修会, 福岡県・福岡県国民健康保険団体連合会・福岡県地域保健師研究協議会, オンライン, 2023.5.
研究は看護実践向上の武器である. 島根県立大学大学院看護学研究科 特別講義, 島根県, 2023.6.
変革の時代における看護の多様性と NP の可能性. 島根県立大学出雲キャンパス 特別講義, 島根県, 2023.6.
新時代のための保健師活動 ～人々と一緒に未来を創っていこう～. 令和 5 年度全国保健師長会九州ブロック研修会, 全国保健師長会熊本県支部, 熊本県, 2023.9.
DX 社会における健康な地域づくりを担う保健師への期待. 令和 5 年度保健師職能研修会, 宮崎県看護協会, 宮崎県, 2023.10.
育ち・育ち合うために. 令和 5 年度人材育成会議, 竹田市ヘルスアップの会, 竹田市, 2023.11.
保健師活動における ICT 活用の取組と課題. 保健師実践能力向上研修会, 石川県看護協会, オンライン, 2023.12.
大分県の保健師活動について思うこと・期待. 令和 5 年度全国保健師長会大分県支部研修会, 全国保健師長会大分県支部, 大分市, 2024.2.

大分県内の保健師への感謝と期待. 令和 5 年度大分県市町村保健活動研究協議会・大分県在宅保健師等虹の会専門研修会, 大分県市町村保健師活動研究協議会, 大分市, 2024.2.

大分県立看護科学大学での 12 年 看護の科学で豊かな未来を拓く. 村嶋幸代理事長・学長最終講義, 大分県立看護科学大学, 大分市, 2024.2.

「大分県を看護する」を志した 12 年. 大分県立看護科学大学村嶋幸代学長退任記念講演会, 大分県立看護科学大学, 大分市, 2024.3.

森加苗愛

質的研究のポイント！ インタビューの劇的ビフォーアフター. 第 28 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 岡山, 2023.9.

看護研究を始めよう, 大分赤十字病院キャリア開発ラダーレベルⅡ. 大分赤十字病院, 大分, 2023.1.

新人看護職員研修 2 看護記録の基礎. 大分県看護協会, 大分, 2023.4.

やってみよう看護研究 3 質的研究と分析. 大分県看護協会, 大分, 2023.8.

外来における在宅療養支援能力向上のための研修. 大分県看護協会, 大分, 2023.11.

日本における糖尿病網膜症の看護. 横浜市立大学グローバル都市協力研究センター (GCI) YUSS (Yokohama Urban Solutions Study) 留学プログラム, オンライン, 2023.11.

吉村匠平

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習 (1) 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修, 大分市, 2023.6.

勇気づけのコミュニケーション. 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修, 大分市, 2023.7.
大分県教員育成ガイダンス. 大分県立大分日田高校, 佐伯鶴城高校, 杵築高校, 中津南高校, 別府鶴見ヶ丘高校, 2023.10.

人間関係づくりプログラム体験講習. 大分養護教諭部会 (高等学校) 研修, 大分市, 2023.11.

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習 (2). 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修, 大分市. 2023.11.

Sleep well live well. 令和 5 年度安全運転管理者講習, 大分市, 2023.11

思春期講演会. 大分市立佐賀関中学校, 大分市, 2022.12.

人権講演会 (こどもの人権). 九重町隣保館, 九重町, 2024.2.

8-2 非常勤講師

石田佳代子

中津ファビオラ看護学校 基礎看護技術Ⅰ

稲垣敦

大分医学技術専門学校 運動学

梅野貴恵

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

恵谷玲央

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線防護

小嶋光明

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

影山隆之

別府大学文学部人間関係学科 精神保健の課題と方法Ⅰ、Ⅱ

別府市医師会看護専門学校 精神看護学概論, 精神看護の方法Ⅰ

加藤典子

聖隷クリストファー大学 看護政策論

東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生看護学活動論Ⅱ 国レベルの公衆衛生看護活動

自治医科大学大学院看護学研究科 看護管理・政策論

群馬大学大学院 看護政策論

桑野紀子

藤華医療技術専門学校 看護の統合と実践Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎県立看護大学看護学部 国際看護論

古賀雄二

日本看護協会研修学校クリティカルケア看護学科 合併症および機能低下の予防技術

金沢医科大学大学院クリティカルケア CNS コース セン妄ケア・PICS ケア

後藤成人

中津ファビオラ看護学校 看護研究、看護師国家試験対策

定金香里

大分リハビリテーション専門学校 生理学Ⅰ、生理学Ⅱ、生理学国試対策補講

佐伯圭一郎

神戸薬科大学 医療統計学Ⅰ

別府医師会立別府青山看護学校 情報科学、情報科学演習

藤華医療技術専門学校 情報科学Ⅱ

品川佳満

別府市医師会立別府青山看護学校 情報科学

関根剛

大分大学医学部医学科 導入Ⅱ

大分大学医学部看護学科 臨床心理学

大分臨床工学技士専門学校 コミュニケーション学

大分医学技術専門学校 心理学

藤内美保

森ノ宮医療大学 診療看護師とは

中津ファビオラ看護専門学校 基礎看護技術Ⅰ（1年生）

中津ファビオラ看護専門学校 ヘルスアセスメントの実際（3年生）

広島大学保健学科 5技法を用いたヘルスアセスメント

名桜大学 包括的健康アセスメント

濱中良志

大分大学 国際健康コンシェルジェ養成講座

平松学園臨床検査技師学校 生化学

後藤学園社会福祉士・精神福祉士 医学一般

樋口幸

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

丸山加菜

藤華医療技術専門学校 看護の統合と実践Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎大学医学部看護学科 統合看護論Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎県立看護大学看護学部 国際看護論

宮内信治

大分県立芸術文化短期大学 英語Ⅰ

村嶋幸代

聖隷クリストファー大学大学院博士前期課程 看護政策論

8-3 研究指導

大分県立病院

小嶋光明

荒木章裕

大分赤十字病院

秦さと子

石田佳代子

定金香里

大分医師会立アルメイダ病院

恵谷玲央

杉本圭以子

衛藤病院

影山隆之

堀裕子

別府医療センター

樋口幸

吉田成一

大分医療センター

品川佳満

小野治子

8-4 学会役員等

石田佳代子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 副委員長
日本看護系大学協議会 災害支援対策委員会 災害連携教員

石丸智子

日本救急看護学会雑誌 専任査読委員

稲垣敦

日本体育測定評価学会 名誉会長
日本スポーツ救護看護学会 顧問
日本体育・スポーツ・健康学会 評議員
九州体育・スポーツ学会第 72 回大会 実行委員

梅野貴恵

日本助産診断実践学会 理事・編集委員
大分県母性衛生学会 理事・副会長
第 18 大分県母性衛生学会学術集会 実行委員

恵谷玲央

日本保健物理学会 コミュニケーション委員会 委員
日本保健物理学会 医療被ばく国民線量評価委員会 委員
日本放射線影響学会 キャリアパス・男女共同参画委員会 委員
日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会 委員
日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員会 委員
日本アイソトープ協会 第 32 期放射線安全取扱部会 広報専門委員会 委員

小嶋光明

日本放射線影響学会 理事
日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会 委員長
日本保健物理学会 倫理委員会委員
日本保健物理学会 エックス線事故検討 WG メンバー
放射線生物研究 編集委員会委員

小野治子

全国保健師教育機関協議会 教育評価準備委員会 委員

小野美喜

日本看護倫理学会 評議員
日本看護倫理学会 課題検討委員
日本 NP 教育大学院協議会 理事
日本 NP 教育大学院協議会 制度検討委員会 委員長
日本 NP 教育大学院協議会 資格更新制度委員会 委員
日本看護協会 ナースプラクティショナー（仮称）制度検討委員会 委員

甲斐博美

日本 NP 学会 九州ブロック理事
日本 NP 学会 学術推進委員

甲斐優子

第 12 回日本公衆衛生看護学会 企画委員

影山隆之

日本精神衛生学会 理事長
日本精神衛生学会 編集委員
日本自殺予防学会 常務理事
日本自殺予防学会 編集委員長
第 47 回日本自殺予防学会総会 大会長
日本学校メンタルヘルス学会 評議員
日本学校メンタルヘルス学会 編集委員
日本産業ストレス学会 評議員
日本産業精神医学会 評議員
日本看護科学学会 編集委員

草野淳子

一般社団法人日本小児看護学会 評議員
一般社団法人日本小児看護学会 災害対策委員
一般社団法人日本小児看護学会 研究奨励賞選考委員
一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会 委員
第 44 回日本看護科学学会学術集会 プログラム委員

桑野紀子

日本国際看護学会 代議員
日本国際看護学会 研究委員会委員

古賀雄二

日本看護科学学会 和文誌専任査読委員
日本クリティカルケア看護学会 理事
日本クリティカルケア看護学会 評議員
日本クリティカルケア看護学会 せん妄ケア委員会委員
日本クリティカルケア看護学会 専任査読委員
日本救急看護学会 評議員
日本救急看護学会 国際交流委員会委員
日本救急看護学会 専任査読委員
日本看護学会 日本看護学会誌査読委員

後藤成人

一般社団法人日本精神科看護協会大分県支部 教育委員長

佐伯圭一郎

日本テスト学会 編集委員

定金香里

日本生理学会 評議員
日本大気環境学会 健康影響分科会 幹事
日本大気環境学会 九州支部会 役員

杉本圭以子

第 47 回日本自殺予防学会総会 実行委員

関根剛

九州心理学会第 84 回大会 大会副会長

藤内美保

日本看護科学学会 社員（代議員）
看護師の特定行為に係る指定研修機関連絡会 理事
特定行為研修制度の普及促進に関する委員会 委員
日本 NP 教育大学院協議会 監事
日本 NP 教育大学院協議会 NP 教育課程審査委員
日本看護研究学会九州・沖縄地方会 役員
大分県立看護科学大学 特定行為管理委員会 委員
大分県立病院 特定行為管理委員会 委員

大分岡病院 特定行為管理委員会 委員
第 43 回日本看護科学学会学術集会 査読委員
第 44 回日本看護科学学会学術集会 企画委員
中津ファビオラ看護学校学校 関係者評価委員会 委員

徳丸由布子

第 18 回大分県母性衛生学会学術集会 実行委員
2023 年度公益社団法人日本助産師会九州・沖縄地区研修会 実行委員

永松いずみ

第 18 回大分県母性衛生学会学術集会 実行委員
2023 年度公益社団法人日本助産師会九州・沖縄地区研修会 実行委員
第 54 回（2023 年度）日本看護学会学術集会 査読審査委員

濱中良志

癌・炎症・抗酸化研究会 評議員

林猪都子

第 18 回大分県母性衛生学会学術集会 実行委員長
2023 年度公益社団法人日本助産師会九州・沖縄地区研修会 実行委員長

樋口幸

看護理工学会 評議員
看護理工学会 将来構想委員会 委員
日本助産学会学会誌 専任査読委員
全国助産師教育協議会 助産師国家試験プール問題作成・登録協力員

姫野綾

大分県助産師会 教育委員
日本助産師会 九州・沖縄地区研修会実行委員

姫野雄太

千葉看護学会 査読委員
看護科学研究 査読委員

福田広美

大分県看護協会 令和 5 年度認定看護管理者教育課程運営委員

藤本優子

在宅ケア学会 実行委員

地域看護学会 国際交流推進委員

堀裕子

一般社団法人日本放射線看護学会 編集委員

宮内信治

日本言語音声学会 常任理事

日本英語教育音声学会 常任理事

村嶋幸代

日本 NP 教育大学院協議会 副会長

全国保健師教育機関協議会 理事・教育評価準備委員会委員長

日本看護系大学協議会 APN グランドデザイン委員会 委員

日本看護科学学会 監事・代議員 (2023 年 6 月まで)

日本 NP 学会 監事

日本地域看護学会 監事・代議員 (2023 年 6 月まで)

日本在宅ケア学会 監事・代議員

日本公衆衛生学会 評議員

日本公衆衛生協会 評議員

日本看護管理学会 評議員

森加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会 理事

日本糖尿病教育・看護学会 評議員

日本糖尿病教育・看護学会 研究推進委員会 委員長

日本糖尿病教育・看護学会 編集委員会 委員

日本慢性看護学会 評議員

大分県看護協会 教育委員

吉田成一

日本アンドロロジー学会 理事

精子形成・精巣毒性研究会 評議員

吉村匠平

九州心理学会第 84 回大会 大会副会長

8-5 その他委員等

石田佳代子

大分県リハビリテーション協議会 委員

石丸智子

大分市救急業務検討委員会 委員

梅野貴恵

おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループメンバー

日出町子ども子育て会議 委員・会長

小嶋光明

放射線影響懇話会 世話人

大分大学医学部付属病院 臨床研究審査委員会委員

小野治子

大分市鶴崎駅周辺整備基本構想策定委員会 委員

大分市鶴崎駅前広場整備基本計画策定委員会 委員

大分市建築審査会委員 委員

大分市風俗関連営業建築物審査会委員 委員

大分市開発審査会 委員

大分県国民健康保険団体連合会 情報公開および個人情報保護審査会 委員

大分県国民健康保険団体連合会 介護サービス苦情処理委員会 委員

大分県保健師連絡会 委員

小野美喜

大分県立病院 地域医療支援病院運営委員会 委員長

甲斐優子

大分県介護保険審査会 委員

大分市社会福祉審議会 委員

大分市行政評価・行政改革推進委員会 委員

大分市高齢者福祉計画及び第8期介護保険事業計画策定委員会 委員

大分市地域福祉計画策定委員会 委員

社会福祉法人大分市社会福協議会地域福祉活動計画策定委員会 委員

大分市活き活きプラザ潮騒等指定予定者選考委員会 委員

大分県ナースセンター運営委員会 委員

おおいた地域連携プラットホーム地域人材創出部会地域包括ケアシステム人材育成 WG 委員

影山隆之

大分県ギャンブル等依存症対策推進協議会 会長

大分県自殺対策連絡協議会 副会長

大分県精神疾患医療連携協議会 委員

大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員

大分県公害審査会調停委員会 委員

大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員

大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長

別府市自殺対策計画策定推進委員会 委員長

豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者

中津市自殺対策連絡協議会 委員長

第3次健康ここのえ21計画策定委員会 委員長

日出町自殺対策連絡協議会 委員

大分産業保健総合支援センター 産業保健相談員

加藤典子

大分県後期高齢者医療審査会 委員

大分県国保連合会保健事業支援・評価委員会 委員

草野淳子

大分県障害児適正就学指導委員会 委員

大分県立特別支援学校第三者評価委員

大分県立看護科学大学特定行為管理委員会 委員

おおいた医療的ケア児等支援関連施設連絡会 委員

大分県小児保健協会 役員

九州沖縄小児看護教育研究会 幹事

桑野紀子

JICA 中小企業・SDGs ビジネス支援事業 基礎調査 外部人材

大分県・大分市日中友好協会 大分武漢学生オンライン交流会実行委員会委員

別府市外国人患者対策検討委員会 委員

古賀雄二

日本医療安全調査機構センター調査個別調査部会員

後藤成人

九州アルコール看護研究会 委員
大分アクションフォーラム 実行委員
第 47 回日本自殺予防学会総会大分大会 大会事務局長

佐伯圭一郎

ホルトホール大分選定委員

定金香里

大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県リサイクル認定製品審査会 委員

佐藤愛

大分県公衆衛生協会 評議員

品川佳満

大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員

杉本圭以子

大分地方労働審議会 委員
大分県医療費適正化推進協議会 委員

関根剛

総務省消防庁緊急時メンタルサポートチーム・メンバー
大分県こころの緊急支援チーム 運営委員・メンバー
大分県 DPAT 運営委員・メンバー
(公社) 全国被害者支援ネットワーク 理事 (九州・沖縄ブロック担当)
(公社) 大分被害者支援センター 副理事長
(社福) 大分いのちの電話協会 スーパーバイザー

藤内美保

大分県国民健康保険運営協議会 委員
大分県医療費適正化推進協議会 委員

中釜英里佳

一般社団法人日本看護学習支援協会 理事

樋口幸

大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会 委員
おおいた地域連携プラットフォーム地域交流・課題検討部会 産学官成果共有 WG
JICA 中小企業・SDGs ビジネス支援事業 基礎調査 外部人材

福田広美

大分県訪問看護出向研修支援事業
大分県アドバイザー派遣事業推進会議
大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会
大分県在宅医療連携協議会
大分県社会福祉審議会
大分県医療計画策定協議会
大分県公立学校教員育成協議会

藤本優子

地域・職域連携の推進および青壮年期におけるヘルスリテラシー向上のためのプラットフォーム
開発に関する検討会 委員

宮内信治

大分市立横瀬小学校 学校評議員
大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問

村嶋幸代

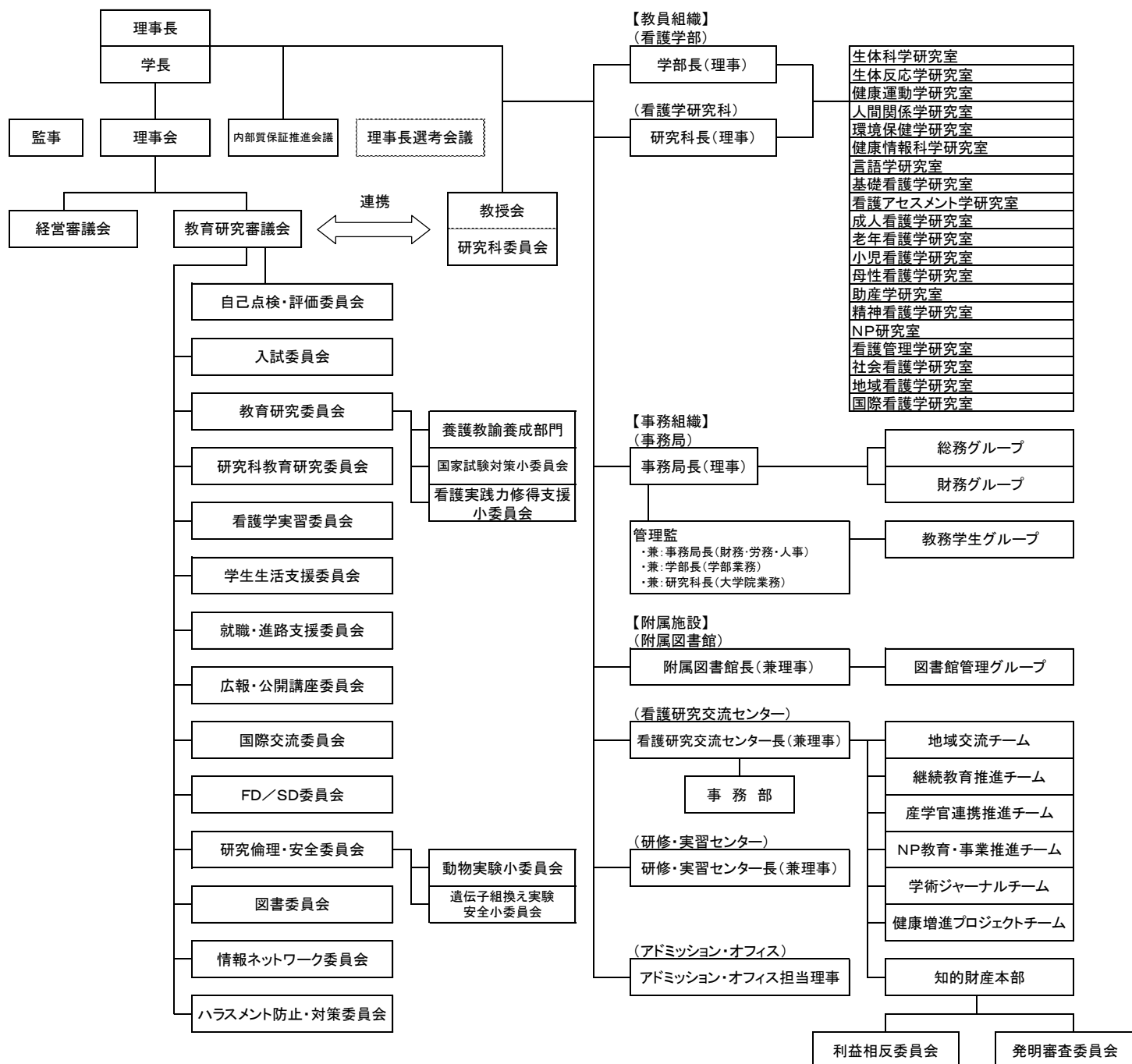
国立保健医療科学院 評価委員会 委員
宮崎県地方独立行政法人評価委員会 評価委員
ヘルシー・ソサエティ賞 審査委員
社会福祉法人 三井記念病院 評議員
大分県都市計画審議会 委員
大分県医療審議会 委員
健康寿命日本一おおいた創造会議 委員
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員
大分県国民保護協議会 委員
大分県公私立学校教育協議会 委員
大分県石油コンビナート等防災本部員 委員
大学コンソーシアムおおいた 理事
おおいた地域連携プラットフォーム 監事
野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議 委員

吉田成一

大分県 第二次生涯健康県おおいた21 喫煙対策部会 委員

9 教学・事務組織

9-1 法人組織図



9-2-1 理事会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、首藤圭

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

監事 福田安孝、中野洋子

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は 5 回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第 1 回は、2023 年度の主な課題について審議を行った。また、2022 年度大学機関別認証評価の結果、令和 5 年度在学生の状況、令和 4 年度卒業生・修了生の進路状況の報告を行った。第 2 回は、大分県立看護科学大学大学院学則の一部改正として学部の保健ボランティアの改定、令和 4 年度事業年度業務実績報告書および決算、理事長選考会議委員の選出について審議を行った。その他、大分県立看護科学大学名誉教授の授与について報告が行われた。第 3 回は、教員の採用や大学機関別認証評価結果への対応等について審議を行った。また、令和 5 年度大分県地方独立行政法人評価委員会評価結果、大学院入学者選抜試験の結果と二次募集の状況、令和 4 年度決算及び利益処分、慶弔基準の策定、海外危機管理マニュアルについて報告された。第 4 回は、教員の採用、第 4 期中期計画案、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則、職員の通勤手当の支給に関する細則の一部変更について審議を行った。その他、大分県立看護科学大学大学院健康科学専攻廃止に関する学則の一部改正、令和 5 年度中間決算についても審議が行われた。合わせて、理事長選考結果、学部及び大学院二次募集の入学者選抜試験実施、個人短期海外研修支援奨学金について報告が行われた。第 5 回は、大分県立看護科学大学人事基本計画、教員の採用と昇任、第 4 期中期計画、令和 6 年度予算について審議が行われた。その他、令和 5 年度卒業、修了生の状況や入学者選抜試験の状況について報告が行われた。

大学の円滑な運営のために活発な意見をいただいております、今後も引き続き、外部理事の方々の意見をいただき議論をして決定するよう進める。

9-2-2 内部質保証推進会議

議長 村嶋幸代（学長）

構成員 首藤圭（事務局長）、福田広美（学部長）、稲垣敦（研究科長）、佐伯圭一郎（自己点検・評価委員長）、小野美喜（学生生活支援委員長）、梅野貴恵（FD/SD 委員長）、尾割勇作（総務グループリーダー）、伊東美穂（財務グループリーダー）、長瀬英子（教務グループリーダー）

当会議は、当大学の内部質保証に関する総括的な評価を行うことである（大分県立看護科学大学内

部質保証推進会議設置要綱第1条)。また、分掌事項は、(1)内部質保証に関する規程第4条第2項、第5項及び第6項に関する自己点検・評価委員会への指示に関すること、(2)内部質保証に関する規程第4条第5項に定める認証評価及び公立大学法人評価において、自己点検・評価委員会が作成した評価原案の承認に関すること、(3)内部質保証に関する規程第4条第6項に定める評価に対する改善及び向上の取組案の承認に関すること、(4)その他内部質保証に関し必要なこと、である(大分県立看護科学大学内部質保証推進会議設置要綱第2条)。

今年度は2回会議を開催した。第1回(6/16)は、公立大学法人評価における評価原案について審議し、これを承認した。また、第2回(3/15)は、外部認証評価結果を受けた改善への取り組み状況について審議し、これを承認した。

次年度も、法人評価原案及び外部認証評価結果を受けた改善について審議し、承認する。

9-2-3 経営審議会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、首藤圭

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、渡邊規生

経営審議会委員 千野博之、吉村充功、佐藤政昭、大戸朋子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

9-2-4 教育研究審議会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

研究科長 稲垣敦

事務局長 首藤圭

委員 犀川哲典（学外委員）、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、甲斐優子、加藤典子、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、佐伯圭一郎、秦さと子、藤内美保、濱中良志、林猪都子、宮内信治、吉田成一、吉村匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、規定等の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項等として、第1回は、新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの一部改正、カリキュラム・ポリシー（案）、学部2年次生の奨励賞について検討を行った。また、令和5年度学内競争的研究費審査結果及び4月募集分、令和5年度臨床教授、修学支援制度に基づく日本学生支援機構給付型奨学金及び授業料減免の適格認定について承認された。第2回は、名誉教授の選考、生成系AI（Generative AI）の利用に関する注意事項、入学者選抜の基本方針、カリキュラム・ポリシー修正案、学部2年次生の学生表彰の基準案が承認された。第3回は、令和4事業年度における業務の実績、令和4年度決算、令和5年度授業料等減免、令和5年度日本学生支援機構の奨学金推薦者などが承認された。その他、海外危機管理マニュアル、新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの一部改正、31講義室の改装や理事長選考会議委員の選出が検討された。第4回は、海外危機管理マニュアル、新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの一部改正が承認された。その他、令和5年度目的積立金による教育研究備品等整備要望審査結果が報告された。第5回は、大学機関別認証評価への対応として大学院健康科学専攻の募集停止の検討を行った。その他、実務家教員の採用基準検討に関するタスクグループの設置が承認された。第4期中期計画案の策定、裁量労働制の休日勤務の取扱いなどについて報告が行われた。第6回は、教員の選考経過報告及び結果、実習記録の電子化（eポートフォリオ）WG策定、養護教諭課程開講科目（選択）のコマ数変更が承認された。第7回は、令和5年度卒業研究発表優秀賞の選出方法、同窓会四つ葉会による学部生への支援、令和5年度日本学生支援機構奨学金（二次採用）に係る推薦者が承認された。その他、令和5年大分県人事委員会勧告について報告された。第8回は、職員給与規程、役員報酬規程、期限付雇用職員就業規則、職員の通勤手当の支給に関する細則の一部変更について審議を行った。その他、令和5年度中間決算についても審議が行われ、学長選考結果について報告が行われた。第9回は、修士論文・博士論文の審査委員が承認された。その他、休日勤務にかかる時間外勤務手当について報告が行われた。第10回は、令和6年度学内競争的研究費審査員、令和5年度日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除候補者選考にかかる評価者、大学院特待生授業料免除評価にかかる審査員、大分県立看護科学大学における研究の倫理・安全に関する指針の変更について承認された。第11回は、教員の昇任、基

本人事計画および知的財産関連規程の一部改正、令和 6 年度の委員会構成、予算、令和 5 年度進級判定等について審議された。

以上、令和 5 年度の審議会運営を行った。令和 6 年度は新学長のもとで第 4 期中期計画が開始となる。大学の教育研究に関する重要事項の審議を行い、目標を達成できるよう取り組みを行う。

9-2-5 教授会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

事務局長 首藤圭

委員 安部眞佐子、足立綾、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、稲垣敦、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、影山隆之、甲斐博美、甲斐優子、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭子、関根剛、藤内美保、濱中良志、林猪都子、樋口幸、藤本優子、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 5 回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。看護師国家試験は合格率 100%であった。4 年次の学生表彰は、学長賞 1 名、優秀賞 2 名、卒業研究発表優秀賞 6 名、学生賞 1 名の計 10 名、在学生は、新 2 年次生の表彰は 2 名、新 3 年生の表彰は 2 名が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

令和 6 年度入学生は 80 名、卒業生は 85 名を予定している。今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、今後も優秀な学生の輩出に向けて努力する。

9-2-6 研究科委員会

学長 村嶋幸代

研究科長 稲垣敦

事務局長 首藤圭

委員 足立綾、安部眞佐子、荒木章裕、石田佳代子、石丸智子、梅野貴恵、恵谷玲央、小嶋光明、小野治子、小野美喜、甲斐博美、甲斐優子、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭以子、関根剛、藤内美保、濱中良志、林猪都子、樋口幸、福田広美、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

当研究科は、看護学及び関連領域の理論及び応用の教授研究を通して、より高い専門性を有し、看護の実践、教育及び研究において指導的役割を果たすことのできる人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の進展に寄与することを目指しており（大分県立看護科学大学大学院学則第1条）、当委員会の分掌事項は、(1)学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項、(2)学位の授与に関する事項、(3)学生の表彰及び懲戒に関すること、(4)前3号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項である（大分県立看護科学大学大学院研究科委員会規程第8条）。

本年度も、特別選抜と進学審査、2回の入学試験の可否判定、進学・修了判定等について審議した。但し、今年度は、審査が長引いた修士論文が1件あったため、臨時の委員会を3月29日に開催した。この結果、今年度の学位授与者は、修士が29名、博士が3名となった。また、次年度の入学予定者は、博士課程前期が31名（募集人員37名）、博士課程後期が3名（募集人員4名）となった。

認証評価での指摘もあり、大学院設置基準に基づいて、大学院の研究指導体制を再検討する必要性が生じたため、次年度はこの件を研究科教育研究委員会で検討し、教育研究審議会に諮る予定である。

9-2-7 理事長選考会議

議長 千野博之

委員 稲垣敦、影山隆之、佐伯圭一郎、藤内美保、大戸朋子

教育研究審議会から選出された委員3名、経営審議会から選出された委員3名の計6名で構成する理事長選考会議を3回開催し、理事長予定者を選出し、議長から理事長に通知した。

第1回理事長選考会議 令和5年6月21日（水）

- ・委員の推薦によって、千野委員が議長に選出された。
- ・理事長選考会議日程を審議し、7月12日（水）に選考を行う理由や選考日程等の公表、9月1日（金）から9月11日（月）まで理事長候補者の推薦受付、9月20（水）に第2回選考会議で候補者審議（推薦書等書面審査）、10月に候補者審議（面接）することを決定した。

- ・公表内容について、理事長選考を行う理由、選考日程及び選考手続等の確認を行い、決定した。

第2回理事長選考会議 令和5年9月20日（水）

- ・学内教員3名から、聖路加国際大学大学院看護学研究科長・教授 麻原きよみ氏の推薦があった。
3名の推薦者から提出された推薦書、履歴書及び所信表明書を受理したことが報告され、この推薦書の正当性について書面審査をし、書面は正当である旨決議され、次回、候補者の面接審査等を行うことを決定した。

第3回理事長選考会議 令和5年10月12日（木）

- ・理事長候補者の麻原きよみ氏から資料を基に所信表明の説明を受けた後、委員から質疑を行った。
- ・理事長予定者について審議を行った結果、選考会議として、麻原きよみ氏を理事長予定者として選出することに全会一致で決定した。

9-3-1 自己点検・評価委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 宮内信治

委員 小嶋光明、樋口幸、小野治子、尾割勇作、吉野美穂、安部翼

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。2023年度の活動としては、例年の活動に加えて、前年度に受審した大学機関別認証評価の結果を分析し、学内の他の委員会等と連携して改善の方向性や案を検討することが大きな事項となっている。

1) 大学機関別認証評価の結果のうち「改善を要する点」3項目、「今後の進展が望まれる点」6項目について主に研究科長、学部長と連携しながら改善の実施、改善策の検討を行った。2) 大学の中期目標・中期計画：年度当初に令和4年度実績報告を取りまとめた。年度末には令和5年度計画に基づく実績報告について各種委員会等からの資料収集を開始した。令和6年度からの中期計画について、各種委員会等の計画を取りまとめた。3) 年報の編集・発行：2022年度年報を編集し公開した。例年より早めのスケジュールで編集作業を進め、8月に学外ウェブに掲載した。4) 議事録の学内への公開状況および記載等を随時チェックして、整備を推進した。5) 大学教育質保証・評価センターのオンラインによる研究会に5名が参加するなど、自己点検・評価に関するスキルアップに努めた。

来年度も自己点検・評価活動を継続的に進めることはもちろん、外部認証評価の評価結果を受けた改善を継続し、各部署と連携しながら2024年度からの中期計画に沿って自己点検・評価を継続していくことが課題である。

9-3-2 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和6年度入学者選抜の全体及び大学入学共通テストの実施を統括するとともに、入学者選抜の方法及び入試広報について検討した。新型コロナウイルス感染症の状況に応じた運営方法を検討・実施し、ウェブ出願システムや面接評価システムの運用状況を確認した。

令和6年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会（オンライン開催）に6名が参加し、国の方針、令和7年度からの大学入学共通テストの科目変更、及び各大学の感染対策や入試システム改革の取組みについて情報を収集した。また、大学入試センターより令和8年度から大学入学共通テスト電子出願システムを導入することが示され、それに伴う本学ウェブ出願システムとの連携についての

情報を収集した。

入試に関する広報活動を、広報・公開講座委員会と協力して行った。延べ 23 会場で業者主催進学説明会に参加し、高校生・保護者等延べ 392 名の相談を受けた。過去問題について従来は、問題 3 年分と解答例 1 年分を配付していたが、他大学の配付状況を分析し、ともに 3 年分を配付するように改善した。大分県内の高校教員に対する進学説明会を、コロナを契機としてオンライン開催としていたことから、今年度は九州各県からの新入学生の出身高校まで対象を広げ、6 月 8 日に開催し 27 校 33 名の教諭が参加した。またオープンキャンパスの対面開催が再開されたので、その中でも進学説明会を開催した。

県外からの志願者数を増やすため、教育コンサルタント業者から模試における本学志望者の動向等を聴き取って広報戦略に活用し、九州地区で看護系国公立大学を志望する受験生にターゲティングを行って、本学の魅力を PR するデジタルメッセージを 775 名に送信した。

新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴い、大学入学共通テストの追試験は大分県内で実施されることはなくなったので、大分県内で会場を提供する大学等との協議の結果、本学は通常の試験実施に会場を提供することとなった（1 月 13、14 日）。

受験者向けの大学ホームページ情報を一括して見やすくまとめたページを公開した。入学者選抜の実施にあたっては、前年同様の感染症対策（試験会場環境・人員配置・受験生への対応等）に努めたが、感染拡大が収まりつつある中で、受験できなかった受験生のための特別な追試験の実施はとりやめた。

ウェブを活用した出願システム及び主体的活動に関する得点評価システムを前年度から導入したので、これがトラブルなく運用するためシステム事業者と綿密に連絡をとり、出願開始前に入念な連携テストを実施した。ウェブ出願状況をモニターし、円滑な利用ができていることを確認した。画面表示についての希望を事業者に伝達し、可能な範囲で視覚的な改善を図った。

面接試験については、タブレットからの評価入力を効率的に行えるよう画面を改善し、入試監督者説明会と合わせて面接担当者説明会を開催して、評価と記録方法の統一を図った。総合問題（筆記試験）に出題ミスの発生を予防するよう、作問手順書に沿って慎重に作業を進めた。

本学の令和 6 年度入学者選抜は、別項（2.入学試験等 2.1 学部入試）に整理したとおり実施した。志願者数は、学校推薦型選抜では前年度より 11 名の増加、社会人選抜では前年度より 1 名の減少、一般選抜前期日程では前年度より 47 名の減少、一般選抜後期日程では前年度より 28 名の減少で、総計では昨年比 65 名減少であった。志願者数減少対策を講じるため、入試改革タスクグループを立ち上げ、次年度に向けて幅広い対策を急ぎ検討することとした。

今後も入試の広報と運営方法の両面について改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動していく予定である。

9-3-3 教育研究委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 石田佳代子、石丸智子、定金香里、品川佳満、首藤圭、大東直子、濱中良志、吉村匠平

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回の会議を開催した。

1. カリキュラム

平成27年度カリキュラムから令和4年度カリキュラムへの移行期間に伴う対応を科目ごとに予定している計画に沿って実施した。4年間の看護師基礎教育の評価として、平成27年度カリキュラムのディプロマポリシー達成度評価を、本年度4年次生を対象にアンケート形式で実施した。前年度の4年次生の評価と比較すると、9つの項目で評価点が上昇した一方、低下した項目はなかった。平成27年度カリキュラムを受講した4年次生が4年間でディプロマポリシーに示す能力を身に付けることができたとして自己評価した。

2. 教学マネジメント・IR

学生自身が学修成果を把握するために、自身のディプロマポリシー達成度を評価するツールとして、教務情報システム「キャンパススクエア」の機能「キャリアカルテ」を導入した。これにより学生自身がディプロマポリシー達成度を年度ごとに可視化できるようになった。年度末にキャリアカルテに各学生がディプロマポリシー達成度評価を入力し、振り返りをする時間を設け、次年度の目標設定をする機会とした。

大学全体の教育成果の可視化については、アセスメントポリシーに基づき作成したアセスメントチェックリストに沿って、データを集約し、年度末の教職員対象の研修会の中で共有した。データに基づいた教育成果から、次年度の教育において教員が改善すべき点を確認した。

令和4年度の機関別認証評価の結果をもとに、中教審のガイドラインを参考にカリキュラムポリシーを改善し、学習者目線の内容に変更したものを大学のホームページに掲載した。看護教育における本学の特色についてカリキュラムポリシーの内容を更新し社会にアピールするとともに、教育の質保証を目指した学習成果のエビデンスをホームページに掲載した。

3. 入学前教育

「生物学」を入学前学習の重点科目とし、入学前に必要な学習内容をまとめた「わかば通信」を合格者に対し Web で配信した。入学者対象のアンケート調査の結果、入学前に「生物基礎」「生物」を学習した割合が昨年度より増加していた。また、1年次1学期に開講される生物関連3科目のうち、「生命科学入門」に関して、昨年度より難しさを感じる学生が大きく減少した（35.1%→1.7%）。

「生体構造・機能論Ⅰ、Ⅱ」に関してもそれぞれ6.5、10.2ポイント減少した。「わかば通信」の周

知方法やアクセス方法に特に問題はみられなかった。

4. シラバス関連

令和 6 年度の学部シラバスの作成を行った。シラバスの記載内容について機関別認証評価の指摘事項を改めると同時にシラバス作成マニュアルを新たに改正した。

5. 総合人間学

様々な分野で活躍されている県内外の講師による講義から構成される科目として運営した。教職員から講師を募り、教育研究委員会で検討し、計画、調整した。大分県内他大学との単位互換制度の科目として受講ができるよう他大学と連携した。

6. 感染対策・教育環境

新型コロナウイルス感染症が 5 類となり、文科省の方針を確認しながら授業における感染対策を実施した。学内の協力を得ながら感染対策を行い、感染クラスターを起こすことなく経過した。

7. 卒業研究

令和 5 年度の卒業研究は、文献研究や二次データを活用した研究が、調査や実験研究に比べて多かった。本年度も担当教員による卒業研究および原著講読のルーブリック評価を行い、一定レベルに到達し単位を修得できた。また、学生による自己評価も実施した。卒業研究発表優秀賞は、卒業研究発表会の 3 分科会から 2 名ずつ、合計 6 名の優秀賞を選出することとし、本年度は合計 6 名が選出された。

卒業研究発表会運営について、卒論の要旨・論文は、Google フォームでの提出とし、発表会は、Zoom によるオンライン方式で実施した。3 つの分科会を同時に進行させ、トラブルはほとんどなく 1 日間で全演題の発表が終了した。

8. 学生表彰

卒業式に表彰する 4 年次生の学長賞 1 名、優秀賞 2 名、卒業研究発表優秀賞 6 名、学生賞 1 名の計 10 名を表彰した。

国家試験対策小委員会、看護実践力習得支援小委員会、進級試験 WG、養護教諭養成部門の活動は、別途項目により記載しているため、ここでは省略する。

今年度の課題と次年度の取組

令和 5 年度で第 3 期中期計画が終了した。本委員会の役割である教育の質向上等をはじめ学部教育における様々な改善を進めてきた。本委員会の活動を今後も引き続き発展させる必要がある。令和 6 年度より第 4 期中期計画が開始となる、教育研究委員会の目標達成に向けて計画を実行する。

9-3-4 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

部門員 秋本慶子、小野治子、草野淳子、佐伯圭一郎、関根剛、中釜英里佳、長瀬英子

教職課程（養護教諭一種養成）の運営を担当した。主な業務は、履修生に対する履修カルテ面談、1年生希望者を対象としたガイダンス、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び遠隔講義の実施対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（令和5年度は21名中19名に履修許可）、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習（臼杵市1校、別府市1校、日田市1校、佐伯市1校、宇佐市1校で実施）調整業務、教員採用試験一次対策の遠隔配信での実施、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、採用試験終了後の就職活動の支援、教員免許の一括申請、新カリキュラムの施行に伴う教職課程変更届の文部科学省への提出、大分県教委が実施する教員育成ガイダンスへの参加である。今年度は、全国的な教員採用試験実施時期の前倒しを受けて、一次試験対策の実施時期を調整した。がオンデマンドで実施できるよう環境を整備した。また、大分県公立学校教員育成指標（養護教諭）を策定する協議会に参加した。

令和5年度卒業生は、11名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は5名、1次試験合格者は3名、最終合格者は2名（大分県、京都市）だった。免許取得者の進路は、大分県養護教諭1名（正規）、京都市養護教諭1名、大分県非常勤講師1名、大学院等進学2名、医療機関就職者6名、教員就職率は33.3%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は66.6%だった。

今年度の課題は、養護実習Ⅰを近隣校での学校ボランティアの形で実施するための事前調査、関係機関との連携であった。令和6年度の4月に、大学近隣の学校で健康診断時のボランティアを行うよう、関係する学校と調整中である。また、2単位20コマ、1単位10コマで運用していた講義・演習科目の授業回数を、2単位15コマ、1単位で8コマで実施するよう調整した。

9-3-4 2) 看護実践力修得支援小委員会

委員長 石丸智子

委員 足立綾、荒木章裕、内倉佑介、後藤成人、佐藤栄治、徳丸千恵、徳丸由布子、堀裕子、丸山加菜、吉村幸永、渡邊一代

看護実践力修得支援小委員会の主な活動目的と役割は、①1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）および看護スキルアップ演習を企画・運営・評価すること、②学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地および学内における実習に関する環境整備を行うこと、③臨地実習に関する指導指針、ガイドブック等の作成・見直しである。7月を除く月1回の定例会議および臨時会議1回を開催し、前述に基づき主に以下の活動を行った。

1. 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第1～3段階看護技術演習（基礎看護援助技術演習：2年次後期・新カリキュラム、セカンドステップ：3年次前期・旧カリキュラム、サードステップ：4年次前期・旧カリキュラム）を実施した。基礎看護援助技術演習・第2段階看護技術演習では、課題事例に対して適切な技術適用を評価する内容である。そのため学生に、評価日に照準を合わせて、グループワークと実技練習を計画的に取り組ませた。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと評価した。また、学生のグループワーク等での取り組み状況が適正に評価に反映されるように、学生による自己評価方法を取り入れ実施した。新カリキュラムへ移行するため、第2段階は今年度が最後の実施となり、来年度は臨床看護援助技術演習に移行予定である。第3段階看護技術演習（4年次前期）では、学生が主体的・計画的に学習する環境の提供としてeラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができていた。今後も学生の取り組み状況を適正に評価する方法について検討していく。

2. スキルアップ演習の企画・運営・評価

本演習は4年次生を対象に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしている。今年度も発表会はオンラインで実施した。昨年度同様に、演習方法について、事前に動画または写真、パワーポイント資料等でコンテンツを作成し、事例に対して適切かつ安全安楽な看護技術をどのように提供しようと考えたかが伝わる発表にするよう指示した。その結果、実施後の学生からのアンケートではディスカッションの充実等の意見があり、教員から見せ方の工夫により学生の学びがわかりやすかったなど好評であった。次年度も同様の方法での開催を継続する。今後も学生が主体的に演習に取り組み、学生の取り組み状況を適正に評価する方法について検討していく。

3. 新カリ看護技術演習検討

令和4年度改正のカリキュラムで本委員会が担当する2年次3学期『基礎看護援助技術演習（選択科目）』、3年次1学期『臨床看護援助技術演習（必修科目）』、4年次2学期『応用看護援助技術演習（選択科目）』に関する授業内容、および具体的な運用システムの検討を実施した。今年度、基礎看護援助技術演習が初開講され、来年度以降も順次開講に向けて具体的な運用システム等について計画的に取り組んでいる。

4. 実習環境の整備

1) 南大分キャンパス

今年度は、特に、臨地実習中に利用する実習関連物品の整備と利用簿等の修正を行い、スムーズな運用につなげた。また、ネット環境整備の要望に対して、モバイルWi-Fiを6台、月割でレンタルし対応した。

2) その他実習施設環境整備

各実習終了後に担当研究室のメンバーから実習時の環境状況について報告してもらい、必要な環

境整備を行った。また、実習施設に保管されている図書について使用状況、発行年などを調査し、使用頻度の低いものに関しては回収・図書館への移管を順次行っている。今後も各研究室間で情報共有しながら必要な環境整備を行っていく。

3) 学内実習環境の整備

導入2年目の教育用電子カルテ (Medi-EYE) について、運用、導入への意見収集、トラブル対応、継続活用意向調査、教材検討などを行った。臨地実習が学内実習に変更された場合や学内演習で活用されていたが、使用が限定される領域もあったため、次年度の契約を一部見送り、必要な領域のみの契約とした。また、看護技術修得支援のため e-learning 教材 (ナーシングスキル) においては、年度初めに新入学生及び教員の登録、変更および年度末削除を行い、相談窓口を担い、年度内トラブルに対応した。また、活用状況の評価を行い、本教材は広く活用されていることが確認された。今後は、安定した運営環境の保持と適切な学習事例や技術種目の検討が必要である。その他、学内実習等で必要な消耗品、備品等の購入により演習環境の調整を行った。

5. 実習関連マニュアルの内容検討および整備

1) 看護技術習得確認シート

4年間で計画的に技術修得が図れるように、1年次生に看護技術修得確認シートの説明と配布を行った。また、4年次生に対し卒業時看護技術確認アンケートを実施した(2023年7月実施、回収人数75名/75名中 回収率100%)。卒業時まで全員が単独で実施できることが望ましい技術項目: 20項目のうち、8割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は5項目で、昨年度より増加した。新型コロナウイルス感染症の影響が継続しており、各臨地実習での基礎看護技術の実施状況を把握しながら、経験できる機会を増やすような支援を検討する必要がある。

2) 実習ガイドブック・実習指導指針の見直しと作成

実習ガイドブックの一部見直しを行った。ハラスメントの項目の追加やWeb上での実習記録の作成・保管に関する内容の修正を行った。実習ガイドブックは500部作成し、310部を学生および実習施設への配布を行った。来年度は内容の見直しに加え、Web上での運用が可能かについて検討する予定である。

9-3-4 3) 国家試験対策小委員会

委員長 石田佳代子

委員 岩下恵子、定金香里、佐藤愛、大東直子、姫野綾

①組織の分掌: 国家試験受験に関すること、模試に関すること、補講に関すること、不合格者への対応に関すること、教育研究委員会との連絡・調整に関すること。

活動目的: 国家試験に向けて学生が主体的に取り組めるように支援し、高い合格率を目指す。

教育研究委員会と密接に連携・調整して進める。

②年間の活動実績等の報告

本委員会では、看護師の国家試験合格率 100%を目指し、学生が主体的に学べる教育環境を整備する役割を担っている。本年度の年間実施計画については、年間模試計画の早期立案、実施、結果分析を行い、個別・少人数指導体制の整備、国試ガイダンスの充実、学習開始のきっかけづくりや学習習慣の継続を支援するための企画の工夫、本学の国試結果および模試結果から得られた傾向の活用、学習環境の工夫などにより、学習への動機づけを高めることとした。

2024 年 2 月に実施された第 113 回看護師国家試験の合格率は、全国の 87.8%に対し、本学は 100%であった。

【模試計画の早期立案、実施、結果分析、個別指導等】学生の新委員の引継ぎを早期に行い、前年度の 3 月中に年間 7 回の模試を計画し、実施した。各模試の実施後は結果分析を行い、全国正答率に比べ本学正答率が下回っている問題の一覧表を作成し、本学が苦手な部分を把握して全教員に周知した。また、模試の成績などを所属研究室と共有した。模試の結果からスクリーニングした成績低迷者には個別対応を行った。

【国試ガイダンスの充実】国試ガイダンスを 4 月（全学生対象）、12 月・1 月・2 月（4 年次生対象）に実施し、今年度は 9 月にも実施した。「秋から始める国試対策」というテーマで国家試験に向けての秋からの効果的な学習方法・学習スケジュールの立て方、模擬試験の活用方法について、業者によるガイダンスを追加することで、学生が早期に開始するように支援した。

【学習開始のきっかけづくりや学習習慣の継続を支援するための企画の工夫】7 月のスタートアップチャレンジでは、「とにかくやってみる＝始めてみる」をテーマとし、①対策用テキストを用いた勉強方法、②勉強計画の立案、の 2 つを学生が体験できる場を設けた。具体的には、本学の国試結果から得られた傾向を活用した国試合格者のデータ解説、参考書の使い方の解説、模試結果票の解説、業者による勉強法セミナー（オンライン）の聴講、模試の解き直しの演習、卒業生の体験談を聞く機会を設けた。12 月のレベルアップチャレンジ（必修・状況設定問題対策を中心に実施）では、昨年度よりも期間を延長し、また、対策コースを新設して 2 コースのいずれかを学生が自身の進み具合に応じて選択できるように変更した。その結果、1 日の平均的な参加者数は 20～30 名で、参加者は固定される傾向があったが、1～3 割程度の学生が新設したコースを選んで実施していたことから、次年度も 2 コースを準備することとする。

【学習環境の工夫等】国試に向けての学内の雰囲気づくりとして、9 月から 2 月まで毎月 1 回、低学年層を含む多数の学生が参加できる問題を国試の過去問題等から精選して全学生にメール配信した。新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染対策下で国試対策に関する学習が困難な時期には、例えば模試を各自の自宅で受験できるように学生委員が研究室ごとに配布して対応した。また、自己学習場所の確保については、徹底した感染対策の下で利用できるように演習室等を確保して支援した。

③活動の自己評価と今後の計画、展望

次年度以降の国試対策に役立てるために、2 月の国試終了後に 4 年次生にアンケートを実施した。その結果、国試対策の勉強開始時期で最も多かったのは「卒論終了後から」（37.2%）で、勉強を始めればよかったと思う時期で最も多かったのは「総合実習終了後から」（25.6%）であったことから、学生の対策開始が遅延化していることが明確になった。なお、大学の国試対策については、「個別面

談、個別対応」以外のいずれの対策についても回答者の半数以上が「とても役に立った」「まあまあ役に立った」と回答していた。これらの学生からの意見などを参考にしながら、合格率 100%を目指して取り組む。

次年度の課題は、学生の国試対策へのより主体的な学習を支援するために、国試対策の開始が特に遅い学生に対して早期の開始を促す有効な対策を多角的な視点から検討し実施することである。

9-3-4 4) 進級試験ワーキンググループ

リーダー 濱中良志

メンバー 佐伯圭一郎、後藤成人、古賀雄二、田中佳子

進級試験の実施に関する一連の業務を担当している。

2月26日(月)に本試験を実施し、85名受験、71名合格、14名不合格であった。平均点は71.2点を前年度の65.9点より上昇していた。不合格者14名は3月4日(月)の再試験を受験し、全員が合格した。その後、本試験問題の正答率や解答分布などを分析した資料を学内に公開し、出題を担当した全教員にフィードバックした。

今後は、ある程度の規模となったプール問題の活用法の検討や良問を作成するための学内教員への情報提供なども進めていく予定である。

9-3-5 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦(研究科長)

委員 梅野貴恵、甲斐優子、影山隆之、藤内美保、福田広美、神崎正太

オブザーバ 村嶋幸代(学長)

当研究科は、看護学及び関連領域の理論及び応用の教授研究を通して、より高い専門性を有し、看護の実践、教育及び研究において指導的役割を果たすことのできる人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の進展に寄与することを目指しており(大分県立看護科学大学大学院学則第1条)、当委員会の分掌事項は、①アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの企画、調整及び教育の改善に関すること、②カリキュラムの編成(シラバスの作成を含む)に関すること、③大学院教育に関すること(講義・演習・実習を含む)、④教育環境の整備に関すること、⑤成績、進級及び修了に関すること、⑥修了認定、学位授与方針(ディプロマポリシー)に関すること、⑦大学院の入学者選抜に関すること、⑧授業料減免及び大学院奨学金に関すること、⑨博士課程後期の進学に関すること、⑩他大学院との単位互換に関すること、(11)研究生、聴講生に関すること、(12)大学院生のティーチングアシスタントに関すること、(13)大学院生の表彰に関すること、である(公立大学法人大分県立看護科学大学各種委員会規程別表1)。

認証評価での指摘に対する改善については、【改善を要する点①】大学院課程における収容定員の超過について、引き続き教育研究の質の保証・向上の観点から適切な研究指導体制の整備を図りつつ、定員管理についても組織的に検討することが求められる」については、①本学の学生に（時間的余裕のない）社会人学生が多いこと、②文部科学省が社会人の入学やリカレント教育を推進し、これに対応して、本学も長期履修制度を導入したこと、③コロナの影響で調査等ができなかったことが関係している。これに関しては、認証機関に意見申立の前に事務的に連絡を行い、認証機関も一定の理解は示した。博士号については、直近3年間は12名（2020年度4名、2021年度2名、2022年度は6名、2023年度3名）に学位を授与し、留年生は減少中である。また、副論文として、Scopusに登録されているジャーナルを認め、さらに、副論文の名称・性質・数、単位取得退学の制度等を検討中である。【改善を要する点②】「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」について、中央教育審議会のガイドラインを踏まえ、『学習成果を評価する方法に関する方針』を明示することが求められる。」については、カリキュラム・ツリーやマップではなく、専攻・コース毎に「学修成果の評価」の原案を作成し、2月の教育研究審議会及びメールで教員に意見を求めた。「教育課程の編成方針」、「学修方法・学修過程」とともに、HPで公開する予定である。【改善を要する点③】「入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）」について、中央教育審議会のガイドラインを踏まえ、「入学者選抜の基本方針」を明示することが求められる。」については、AP自体が入学者選抜における評価の観点となるため、今後、DPや入試方法を考慮してAP自体を再検討する。この際、本学のAPはコース毎に異なり、また、他大学と比較すると非常に具体的であるため、入試における評価基準として使いにくい。文部科学省によれば、大学院の最小単位は専攻であり、APは専攻毎に抽象的にシンプルに記載することが望ましい。これらの点を考慮して、APを再検討する。【今後の進展が望まれる点①】「大学院課程における収容定員の未充足について、引き続き定員充足に向けた取組みを行うことが望まれる。」については、健康科学専攻の廃止を決定した（第5回教育研究審議会9/13、第3回理事会・経営審議会9/20）。また、遠方に在住する学生や勤務を続けながら修学を目指す学生を考慮して、Zoomの活用を推進、開講曜日を調整、特別選抜制度等を導入した。さらに、博士課程後期については、修了要件（副論文）や単位取得退学後の学位論文申請等について検討中である。【今後の進展が望まれる点②】「シラバスの記載内容について、組織的な点検・確認の体制を整備することが望まれる。」については、研究科教育研究委員会でチェックすることとし、今年度は科目とDPとの関係（カリキュラム・マップに相当）について確認した。次年度は項目について検討する。【今後の進展が望まれる点③】「大学として定める成績評価基準について、学習到達目標の達成度をどのような観点から評価するのかが学生に明確に伝わるよう到達目標を考慮した記述とすることが望まれる。」については、観点については、上の「改善を要する点②」で対応し、達成度については、他の多くの大学を参考にして、以下のようにした。A：到達目標を達成し、優秀な成績をおさめている、B：到達目標を達成している、C：到達目標を最低限達成している、D：到達目標を達成していない。【今後の進展が望まれる点④】「卒業又は修了の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）」と、「教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）」の関係を明確化し、学生に明示することが望まれる。」については、カリキュラム・ツリーやマップではなく、専攻・コース毎に文章（「教育課程の編成方針」、「学修方法・学修過程」、「学修成果の評価」）で説明することとし、研究科教育研究委員会で原案を作成して、2月の教育研究審

議会及びメールで教員に意見を求めた。【今後の進展が望まれる点⑤】「教育情報の公表について、組織的な検討・運用を行う体制を整備し、わかりやすく情報公表を実施することが望まれる。」については、自己点検・評価委員会がチェックし、今後、教育研究委員会、研究科教育研究委員会、広報委員会と連携して、改善を進める予定である。【今後の進展が望まれる点⑥】「人組織と大学組織の関係、学内組織間関係の整理などにより、内部質保証を担う組織体制の明確化が望まれる。」については、法人組織図に内部質保証推進会議を位置づけた (https://www.oita-nhs.ac.jp/uploaded/life/6142_7664_misc.pdf)。以上については、令和5年度第2回内部質保証推進会議(3/15)で承認された。

令和5年度計画では大学院に関連する計画が9つあるが、コース毎の年度計画以外の共通の年度計画について、1-(1)-ア-3-ウ「指導体制、学位申請要件、在学期間等について検討する。」については、認証評価での指摘も考慮して、全教員で看護学専攻学生を指導してゆくこととし、健康科学専攻の廃止を決定した。また、学位申請要件については博士論文の副論文の取り扱いについて、在学期間については博士課程後期の単位取得退学後の課程博士授与の制度について他大学の現状を調査し、継続審議中である。同じく1-(1)-ア-3-ウ「新型コロナウイルス感染予防対策は、社会の動向を捉え、徹底した予防策を継続する。」については、論文レビュー報告会、研究計画報告会、研究中間報告会、研究成果報告会を、引き続きZoomで実施した。大学院入試については、COVID-19が5月8日付で5類に移行したことを受け、6月2日の文部科学省の大学入学者選抜実施要項に従い、コロナ前の形に戻したが、予備受験室は準備し、受験室の換気は時刻を決めて実施した。1-(2)-1-6-ウ「NP研究室を設置して、NPの教育・研究の質の向上を図る。」については、実習・研究棟2階に、定員3名からなるNP研究室を設置して、講師と助手2名を配属した。教授には、看護研究交流センターのNP教育・事業推進チームリーダーを担当している看護アセスメント研究室教授が暫定的に兼任とした。次年度4月には、NPの資格を有する講師が着任予定である。1-(2)-1-6-エ「大学院では、社会情勢や需要を考慮して、定員を検討して調整する。」については、認証評価での指摘及び受験生の減少を考慮して、健康科学専攻の廃止を決定し、まずは次年度から博士課程前期健康科学専攻の募集を中止することとした。博士課程後期については、文部科学省の指導で後期に進学を希望する在学生がいなくなった時点で募集を停止する予定である。

次年度は、主研究指導教員と研究指導補助教員を明確に分け、これに対応して大学院調整費と論文指導手当の改正を行う。また、認証評価で指摘された点を改善するため、単位取得退学後の課程博士申請や副論文、情報公開等について引き続き検討してゆく。

9-3-6 看護学実習委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 藤内美保

委員 小野美喜、甲斐優子、影山隆之、加藤典子、草野淳子、桑野紀子、古賀雄二、秦さと子、
林猪都子、福田広美、村嶋幸代、佐藤英

看護学実習委員会は、学部及び大学院の看護系実習の内容及び運営について協議し推進することを目的とした委員会である。令和 5 年度の年度計画は、「看護教育における DX を進めるため、基礎看護学、看護アセスメント学、成人看護学、老年看護学で、それぞれに実習室の効果的な活用方法を検討し、高機能シミュレーションを活用して、臨場感のある実践に即した演習の実施を計画する。臨床判断能力、臨床実践能力を高め、臨地実習の効果を高めるため、演習から実習へのつながりを考慮し、さらに、各科目間の連携を意識した授業計画を作成する」であった。令和 5 年度の本委員会の活動内容は、以下の 1)～6)である。

1) 看護教育における DX の推進は、基礎・成人老年実習室の近代化が進み、ICT 機器を備えたシミュレーション教育を実践することが可能となり、新カリキュラムより導入し、学生自ら主体的に演習に取り組み、良い効果が得られている。また、基礎看護学実習から次の実習へのつながりを考慮するため、基礎看護学実習における記録様式の改訂について、共通認識を図るために担当教員の説明会を実施した。

さらに、地域・在宅実習室の改修工事を行い、地域在宅・NP 実習室とし講義・演習ができ、また自主的に学生がスキルアップ向上のために実習室を活用できるようにした。また小児・NP 実習室にシミュレーターやエコーを整備し、臨床推論能力向上のための教育環境の整備を行った。

2) 看護教育における DX の推進を実習記録にも活用するため看護学実習記録デジタル化ワーキングを発足させる検討を行った。学生は実習の学びを積み上げ振り返り、次の課題を明確にするため、また教員と学生相互の実習における情報の共有を効果的・効率的に行うことを目的に、ワーキングを設置することが承認された。構成員は、本委員会より 2 名、看護実践力修得支援小委員会・基礎看護学研究室より 1 名、アセスメント学研究室より 1 名、成人看護学研究室より 1 名、情報ネットワーク委員会より 1 名、財務グループ 1 名である。10 月 24 日に第 1 回の看護学実習記録デジタル化 WG 会議が開催され、計 5 回開催された。次年度に向け、本学内で実現可能な方法でトライアルを行う準備中である。

3) 実習科目間のつながりを考慮し、学生個々の実習状況や課題を本委員会の専任教員間で引き継ぐこととした。

4) 令和 5 年度の実習受入れはほぼ可能となったが、一部感染拡大が発生した施設では、急遽受け入れ困難となり、学生の実習施設を変更または学内実習に振り替えるなどの対応があった。「新型コロナウイルス感染症に係る看護学実習の大学の方針と注意事項」も実態に合わせ、4 月は濃厚接触者を同居者に変更した。令和 5 年 5 月の感染症 5 類移行後も検討し、「アルバイト及び会食の禁止」の実習開始 10 日前を 7 日前に変更し、他は継続した。令和 6 年度からの大学の方針の「アルバイト及び会食の禁止」の期間について検討したが、実習施設では現状を維持することを確認し、with コロ

ナとして現行通りとなった。令和 5 年度は抗原検査等の費用を予算化し、一部施設で利用した。令和 6 年度予算からは抗原検査等費用や消毒物品等の感染対策費を予算化せず、個人購入とすることを決定した。

5) 実習指導者・大学教員交流会の開催：コロナウイルス感染症拡大により令和 2 年度～4 年度は中止となり、令和 5 年度は Zoom を用いて開催し、講演とブレイクアウトルームに分かれたグループディスカッションを行った。ディスカッションの参加者は、実習施設 2 か所（大分県立病院、大分日赤病院）から 26 名、大学教員 19 名の計 45 名で、実施後参加者の満足度は高かった。

6) 大分県立病院の実習指導者短期教育プログラムの開催：令和 5 年度は対面で講義と演習の 4 回シリーズを実施し、各自で指導案作成を行う従来の形式で実施した。参加者は、大分県立病院 10 名で、全員指導案を提出し、本委員会の実習責任者が添削指導を実施した。

7) 予防的家庭訪問実習については、2 月 27 日にグループでの振り返りの時間をとり、担当教員も参加する方式をとった。次年度は、担当教員が年度末訪問を実施することが承認された。

今後の課題

実習記録デジタル化 WG は発足し活動を開始したので、第 4 期中期計画中に看護学実習記録のデジタル化への進捗を推進する必要がある。令和 4 年度末に提案された「学生の自律性、主体性を引き出す効果的な実習指導」「学内及び臨地実習の充実、演習から実習への効果的な継続指導」「インシデント事例活用システムの構築」の 3 点につながる検討を行う必要がある。

9-3-6 1) 看護学実習記録デジタル化ワーキンググループ

リーダー 秦さと子

メンバー 梅野貴恵、佐伯圭一郎、石田佳代子、石丸智子、佐藤栄治、品川佳満、小野逸郎

本 WG は、学生の看護実践力を効果的、効率的に育成するために、ICT を活用して各段階実習の学習成果を積み上げに連動させるシステムの構築を目的として、2023 年 10 月に設置された。システム構築にあたり、本学に期待されるシステムイメージを確認したうえで、企業や既に Web システムを導入している看護系大学、および本学学外委員の弁護士等から情報収集を行った。その結果、まずは、本学が利用可能なクラウドを活用して、学生個人ごとに全ての実習における看護学実習記録を保存でき、全教員が必要な時にアクセスできるシステム（e-ポートフォリオ）の構築を目指すこととし、検討を重ねてきた。同時に、看護学実習記録を電子化し、Web 保存するにあたり必要な安全管理措置として、アクセス制御方法と学生および教員の情報リテラシー教育に関する対策を検討し、適所への提案を行った。次年度は、看護実践力習得支援小委員会、情報ネットワーク委員会と連携して、システムの試行を段階的に進める予定である。

9-3-7 学生生活支援委員会

委員長 小野美喜

副委員長 関根剛

委員 内倉佑介、後藤成人、篠原彩、長瀬英子、永松いずみ、丸山加菜、
釘宮由美子（令和6年1月まで）、安東悦子（令和6年2月～）

学生生活支援委員会は、一人ひとりの学生の生活を支援する体制を充実させ、大学での学修に向けた効果的な支援や健康面の支援（メンタルサポートを含む）を行っている。

令和5年度の重点課題は学生交流を活発にすることであり、ポストコロナの学生生活を整えるため、個々の学生に対するメンタルサポートや学習支援を強化し、若葉祭や学生自治会、サークル活動の再開支援を行うことであった。具体的な活動は以下である。

1) 学年担任によるサポートと保健室を中心とした健康支援

各学年の担任が学生の生活や学修および健康に関する相談に適宜応じた。担任への相談面談件数はのべ30件、保健室への健康相談はのべ94件であり、前年度とほぼ同様の件数であった。学内カウンセリングの活用はのべ37件と昨年と大きな変化はなく、進路・生活・健康面に関する個々の学生への支援体制は今後も強化継続が必要である。

2) 新入生・全学オリエンテーション

全学生集合によるオリエンテーションを準備運営した。感染予防のため会場を分散し、ライブ配信を活用実施した。4月12日には新入生親睦オリエンテーションを実施し、1年生の親睦が図れた。

3) コンタクトグループによる交流促進

4月11日に上学年による1年生の学内ツアー、全学年によるコンタクトグループの交流会を企画実施し、学生間の親睦交流ができた。

4) 自治会活動・サークル活動など学生関連イベント支援

自治会活動再開にあたり、大学自治会の経験のない学生に対する事業計画の支援・助言を行った。活動を円滑にするためのマニュアルを整備した。またキャンパスクリーンデイや若葉祭を再開した。若葉祭では若葉祭実行委員会を中心とした学生をサポートし、企画運営の支援・助言を行った。3年ぶりとなる若葉祭は5月20日、21日両日とも盛況に終了した。サークル活動については、休止サークルの廃止や新規サークルの立ち上げがあり、各サークル長と協議しサークル室の再配置を実施した。交流棟の学生利用を活性化することが課題である。

5) 生活安全のための研修会やトラブル対応

1年生を対象としたデートDV研修会を7月10日に実施し学外講師を招聘した。自動車通学許可申請者を対象とした交通安全講習会を12月20日に実施し、対面およびオンデマンド配信による受講とした。DVトラブルおよび通学時の交通事故防止対策を講じた。また学生の生活マナーに関する苦情対応と学生への生活指導を行った。

6) 学生生活実態調査の実施

12月にGoogleフォームを用いた実態調査を実施した。回答率は35.3%と昨年より低下し、生活把握のためには回収率向上が課題である。学生からの大学生活上の要望は各関係部署に伝え回答を

得た。結果はキャンパススクエアの掲示板にて公開した。

7) 九州地区学生指導研究集会、九州地区公立部長会議の参加

九州地区公立部長会議は9月8日（福岡）に開催され、委員2名が出席した。学生部長会議は9月22日（沖縄県）で開催され委員1名が参加した。各大学との意見交換および承合事項について検討した。

次年度の課題は、学生交流のある大学生活の促進である。個々の学生への生活・学修サポートについては継続支援を必要としており、学年担任、保健室、教務との連携支援体制を継続し、相談しやすい環境づくりを行っていく。さらに若葉祭や自治会等の学生による企画の円滑運営が課題であり、担当学生集団への継続支援をする。

9-3-8 就職・進路支援委員会

委員長 甲斐優子

副委員長 森加苗愛

委員 佐藤愛、中釜恵里佳、姫野綾、首藤圭、神崎正太、藤川桂子

①組織の分掌と、活動目的

就職・進路支援委員会は、学生自身が自らの適正に応じて就職・進学、及びキャリア形成するため本学の社会的使命を考慮した支援を行うことを目的とした委員会である。第3期中期計画では、学生等への支援として、就職を希望する学生については、就職率100%、県内就職率50%以上を目指して、県内の就職先拡大の取組や就職相談等を強化する。また、同窓会と連携し卒業後のUターン支援を行うとしている。この計画を達成するために、令和5年度の年度計画では、一つ目に、「1年次生には、大学ナビ講座、2年次生、3年次生には、看護職キャリアガイダンスを実施し、県内に就職している卒業生や県内施設の現役の方々との交流を通して県内施設の魅力を伝える。併せて、キャリア形成や進路選択に向けた活動の動機づけを図る」としている。

二つ目に、「3年次生には進路面接、4年次生には就職や進学の模擬面接を行い進路に合わせた支援を行う。また、日常的に就職進路について考えられるよう、上位の学年との交流する機会と場所を創出できないか検討する。そのほかに、卒業生へのUターン支援がシステム的で継続的な取り組みとなるよう検討する」としている。

②年間の活動実績等の報告

一つ目の活動内容としては、1年次生は大学ナビ講座(7/7)を、2年次生(1/22)と3年次生(7/12, 2/9)に看護職キャリアガイダンスを行った。講師には、県内施設の看護部長、学部卒業生や大学院の各コースの修了生を招き、看護のやりがいや県内施設の魅力を含めた内容にした。ガイダンスの満足度は、いずれも90%以上であった。アンケートの記述では、県外の急性期施設でなく県内施設の慢性期病院で働くことや、地域で働くことも考えたいなど進路選択の広がりが見られ、学生自身の

キャリア形成を動機づける機会となっていた。また、3年次生を対象にカフェテリア方式の自己分析セミナー（2/21）を今年度初めて開催し、7名が参加した。ジョブカードを用いた自己分析講座で、グループ形式で記述と共有を繰り返しながら進めるため、理解が深まったとの意見があった。

二つ目の活動内容としては、3年次生には12月から2月の間に全員の進路面接を行い、今後の進路相談の目安ができた。また、4年次生には4月から7月の間に、就職希望者50名・進学希望者11名の模擬面接を行い、希望する進路への支援を行った。3月19日の時点で未定者は2名となり、就職・進学先がほぼ決定した。県内就職率は、令和6年3月19日の段階で、50.9%である。昨年度60%であった県内就職率から今年度減じた理由と今後の対策を考えるために、4年次生にアンケート調査を行った。就職希望者58名中30名から回答があった。就職先の決定理由は、県内外共にほぼ同じ傾向で、給与や福利厚生、教育体制であった。県内就職率向上のためのデータとして県内施設と共有するなど活用していくこととした。

また、就職資料室の配置を交流棟のオープンスペースに変更したことにより、日常的に進路情報が収集しやすくなるとともに、上位の学年との交流も期待できる。そのほかに、県内の施設調査により、本学出身のUターン勤務者が8施設に22名いることや施設への就職支援策も把握できた。この支援策は、卒業生向けに情報提供を行った。このように定期的な施設調査と情報提供を行うことでUターン支援につなげたい。

③活動の自己評価と今後の計画、展望

低年齢層から学生自身がキャリア形成を考える場を提供し、年間を通じて進路支援を行う体制が整った。また、県内就職率は50.9%となり、目標であった50%以上は達成できた。

今後は、学生の多様なニーズを把握し、進路支援の充実を図る必要がある。具体的には、一つ目は第4期中期計画で目標とする県内就職率55%を推進のための検討をするとともに県外就職者にとっても、自らのキャリア選択ができるように支援する。二つ目として、社会人基礎力などの自己の特徴を捉え、具体的な就職や進学活動が行えるように支援する。例えば、カフェテリア方式のセミナーによる個別支援の実施などである。三つ目として、各種就職進学情報の環境整備を行うとともに、ガイダンスにおける学生の満足度やニーズの把握し、支援内容に還元していく。

9-3-15 広報・公開講座委員会

委員長 小嶋光明

委員 石丸智子、吉田成一、甲斐博美、矢野亜紀子、岡田悠希、大島操、渡邊一代、久保紘子、安部翼

1) 若葉祭教員企画

5月20日（土）に開催された若葉祭において、教員企画の募集を行い、5企画を開催した。

2) オープンキャンパス

7月15日（土）に対面開催した。学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、授業料・奨学金等の説明、在

校生による合格体験談・メッセージ、模擬授業、キャンパスツアー実施した。開催に先立ち、事前に朝日新聞と読売新聞に広告を掲載し、広報活動を行った。当日は高校生他 234 名、保護者 141 名、合計 375 名の参加があった。参加者からは「合格体験談」や「在校生メッセージ」が進路を選ぶ際の参考になったという意見が多かった。しかし、キャンパスツアーについては「ひとつの場所にもう少し時間をかけて説明して欲しい」等の意見もあり、本学の魅力が伝わるように方法を検討していく必要がある。また、予約開始後すぐに定員に達してしまったため、当日参加できない方に向けて、キャンパスツアーは随時行っていることを、大学ホームページや SNS (Facebook、Instagram) でお伝えした。来年度は定員を増やすことを予定している。

3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。今年度は看護系の教授 1 名、准教授 2 名、講師 1 名を派遣した。日田三隈高校 1 年生(5 月 19 日)、大分南高校 2 年生(10 月 3 日)、三重総合高校 1,2 年生(2024 年 2 月 20 日)、佐伯豊南高校 2 年生(2024 年 2 月 21 日)の 4 件であった。

4) キャンパスツアー (大学見学)

高校生や保護者からの大学見学の申し込みに随時対応した。7 月に 1 組 10 名、8 月に 4 組 8 名、10 月に 1 組 2 名の申し込みがあり、大学の概要説明、施設見学等を行った。

5) 大学 HP、SNS およびマスメディアによる広報

大学のイベント案内を掲載(Web オープンキャンパス、オンライン講義、看護国際フォーラム、ホームカミングデイなど)し、それらの実施報告として大学アルバム 50 件を掲載した。また、本学公式 Facebook と Instagram を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生、一般の方々などに発信した。今年度は、204 件を掲載した。また、昨年度、各研究室・委員会の活動、受賞やメディア掲載等の情報を効率的に収集するために作成した広報情報投稿フォームを活用し、定期的に教職員へ情報提供の協力依頼を行うなど学内からの情報収集強化を図った。教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 2 回(4 月、11 月)更新した。

6) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員 7 名が大学案内パンフレット WG に参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2025 年度版が次年度 5 月中に納品されるように WG の支援を行った。2024 年度版の大学案内パンフレット約 3,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。

7) 公開講座

9月23日(土)に対面(大分県立看護科学大学講堂)とオンラインで同時開催した。今年度のテーマは「睡眠と健康ー豊かな人生のためにー」と題して、琉球大学教育学部保健体育専修准教授の笹澤吉明氏が「元気で賢い子どもを育てる沖縄の眠育の実践例」について、本学精神看護学研究室教授の影山隆之氏は「高齢になっても快適睡眠を」についてそれぞれ講演した。告知のチラシは、県内の小学校、中学校、高等学校、保育施設、病院や各種施設等に配布した。また、大分合同新聞と SNS 広告にも記事を掲載し広報した。参加者の年代は 10 代から 60 代以上と幅広かった。また、職業も医療従事者に限らず、高校生、会社員、大学教職員など様々で、総勢 179 名の参加があった。終了後のアン

ケートでは、「大変良かった」、「良かった」が97%と高い評価が得られた。参加理由は「テーマに興味があったから」が最も多く95%であり、情報源は「大学からの案内」、「チラシ」、「本学のHP」、「SNS」の4つで約8割を占めた。中でも「SNS」は60代以上の集客につながっていた。今後の開催方法としては、対面希望とオンライン希望がそれぞれ60%と多かったため、次年度も対面とオンラインの同時開催を計画する。また、大分県民に関心の高いテーマを選定して開催できるよう企画する。

8) 大学オリジナルグッズの作成

各グッズの残数を確認し、風呂敷 15 枚、クリアファイル 500 枚を作成した。

9) 広報誌「風のひろば」

広報誌「風のひろば」は後援会と共同で年 2 回(7 月 Vol.22、12 月 Vol.23)作成した。県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに各号 1,900 部を配布した。掲載内容は、卒業生インタビュー、教員の研究紹介等であった。次年度も年 2 回のペースで作成し、本学の学部生や卒業生、教員の活動等について紹介していく。

10) 活動の課題

令和 6 年度の当委員会の継続課題は、以下の通りである。

- (1) 受験生にわかりやすい大学ホームページに改修する。
- (2) 大学の教育研究活動の状況やその活動の成果に関する情報等を随時ホームページで広報する。
- (3) イベントの開催情報や学生の諸活動等を、メディア（テレビ、新聞）、ホームページ、SNS、広報誌等で発信する。
- (4) 一般県民(高校生含)、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。
- (5) 対面方式で 7 月にオープンキャンパスを開催する。
- (6) 県内の高校へ教員を派遣する出前講義で看護学の魅力を伝え、本学への進学希望につなげる。
- (7) 大学院の広報の充実を図る。

9-3-9 1) 大学案内パンフレット WG

リーダー 吉田成一

メンバー 安部翼、岩下恵子、岡田悠希、久保紘子、永松いずみ、橋本志乃

本 WG は大学案内パンフレットの制作を行う業者選定、内容構成等について検討し、大学案内パンフレットを完成させることが分掌である。2025 大学案内パンフレットを制作あたり、過年度より継続しているコンセプト「未来創造」は本年度のパンフレットでも継続することとした。パンフレットの内容として、次の事項を反映させることを念頭に作成することとした。1. TOPIC のページは「学生の 1 日の過ごし方」にする。2. 特集ページ「コロナを超えて」のページは廃止する。3. 学生・教員の声は可能な限り盛り込む。4. 毎年の変更が不要なページについては、大きな変更を行わない。特集ページを大学が定める「MVV (ミッション・ビジョン・バリュー)」とする案も出たが、今年度中に策定されるか不明であったため、最終的に特集ページではなく、パンフレット冒頭に目次に相当するパンフレットの概要ページとすることとした。

パンフレット制作に関わる業者は小野高速印刷株式会社が選定され、制作過程では、WG と複数回合同会議を行い内容について検討した。大学側のアンケート結果（学生・教員）と小野高速印刷株式会社からの提案の一部に齟齬があったが大学側（特に学生）の意見を優先した構成とした。また、パンフレットの掲載者について、例年 WG が推薦した者（学生、卒業生、教員等）のみをパンフレットに掲載していたが、自薦を募り、WG が確認した者を掲載する形式も採用した。パンフレット内容を調整するにあたり、時間が要したこと、学長交代に伴う写真撮影日程が遅い時期になったこと、撮影した写真に関し、大学側で確認したところ、再撮影を要する状況であったことなど、今後、相当の余裕をもってスケジュールを作成する必要がある。また、写真撮影について学外での写真撮影は所属勤務機関との綿密な調整確認が必要な場合もあり、個別に確認していく必要がある。

2024 年度 4 月にパンフレットが完成するため、次年度 WG では完成した 2025 大学案内パンフレットについて、改善点、評価できる点などの議論を一定期間かけて行った上で 2026 大学案内パンフレットを作成することがより魅力的なパンフレットを作成する上で重要と考える。

9-3-10 国際交流委員会

委員長 桑野紀子

副委員長 恵谷玲央

委員 伊東美穂、神崎正太、橋本志乃、姫野雄太、丸山加菜、矢野亜紀子、G.T. Shirley

国際交流委員会は、本学の国際的活動を推進し、グローバルな視点の育成を図ることを分掌し、姉妹校・MOU 締結校との国際交流事業と看護国際フォーラムを実施、短期海外研修を希望する学部学生への支援事業を始動するとともに、海外渡航に関する安全管理体制の整備に努めた。また、諸外国からの研修生や留学生を積極的に受け入れるための基盤づくりとして、本学の情報をまとめた英語パンフレットを刷新し英語版学外 Web で発信した。

学部生および教員間の国際交流を促進する事業として、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程から学部生 6 名と同行教員 2 名を 7 月 17 日から 7 月 21 日までの 5 日間受入れ、県内 2 箇所の施設訪問や学内での学生交流を実施した。特に学内交流では学生が日本の文化や看護教育についてプレゼンテーションする等新たな試みを組み込んだ。実施後の蔚山大学学生へのアンケートでは、施設見学や学生との交流について、全員が「満足」と回答していた。また、8 月 21 日から 8 月 25 日までの 5 日間、本学の学部生 6 名が同行教員 2 名と共に韓国の蔚山大学校医科大学看護学部を訪問した。現地では大学での講義や周辺地域の施設見学等に参加し、プログラム全体を通しての経験について、全員が「満足」と回答した。参加学生は学生交流プログラムの目的、および派遣前に学生自身が立てた目標を達成できた。

また、インドネシア ムハマディア大学と、国際交流の一環として国際看護学演習の授業時間を活用し、オンライン学生交流を実施した。本学から 2 年次生 41 名、UMY から 42 名が参加し、互いの文化や看護について学んだ。さらに、今年度は COVID-19 感染拡大の影響で令和 3 年度から延期となっていた韓国インハ大学医学部看護学科の本学訪問が実現し、インハ大学の学部生 6 名と教員

1 名を 2 月 12 日から 16 日の 5 日間受入れ、県内 3 箇所の施設訪問と学内での学生交流を実施した。本交流ではテレビ局と新聞社から取材を受け、本学の国際交流活動について県民に向けて情報発信する機会となった。双方の参加学生は交流内容について全員が「満足」と回答していた。

開学以来毎年開催している看護国際フォーラムは今年度で第 25 回を迎え、10 月 28 日（土）に Zoom ウェビナーで開催した。テーマを「看護の未来を拓く企業という視点 一地域における看護実践から」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 227 名と大盛況であり、参加者背景は高校生、看護職、教員等であった。参加者アンケートの結果では講演内容について 97%、質疑応答について 94%が「満足」と回答しており、全体として参加者の満足度は高かった。

短期海外研修を希望する学部学生への支援事業として、令和 4 年に策定後 COVID-19 感染拡大の影響で実施を延期していた個人単位海外研修プログラムを見直し、募集要項や応募書類を改訂した。12 月に説明会を実施、オンデマンドで配信し、プログラムを周知、募集を開始した。

学部生、大学院生及び教職員の海外渡航に関する安全管理体制の整備として、海外留学生安全対策協議会（JCSOS）に継続加入し、学部生、大学院生及び教職員の海外渡航に関して安全管理について情報収集した。

諸外国からの研修生や留学生を積極的に受け入れるための基盤づくりとして、本学の情報を集約した英語版パンフレットを刷新、4 月に完成版を上梓し、pdf 版を英語版学外 Web で発信した。姉妹校である蔚山大学、MOU 締結校である仁荷大学来学時、本学を紹介する際に英語版パンフレットと英語版学外 Web を活用した。

今年度は新型コロナウイルス感染症の 5 類以降に伴い、対面での国際交流事業を再開することができ、実り多い一年となった。

今後も姉妹校や MOU 締結校との定期的な交流を積極的に進め、教員及び学生同士の国際交流を促進していく予定である。

9-3-11 FD/SD 委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 古賀雄二

委員 小野逸郎（5 月～）、杉本圭以子、長瀬英子（4 月まで）、姫野雄太、藤本優子、吉田成一

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的とした委員会である。主とする分掌は、①FD/SD の研修、②教員の授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究等に関する資質向上、①～③の企画及び推進に関することである。令和 5 年度の本委員会の活動内容は、以下の 1)～9)である。

1)FD/SD 研修活動実績：

(1)新任教職員研修：4 月 3 日 14:00～17:10、4 月 4 日 9:00～12:10 に、感染対策の上、新任教員 4 名、新任職員 4 名を対象に対面で実施した。内容は、大学組織概要、カリキュラム概要など、9 領域

に関する学内教職員による対面研修を実施した。

(2)科学研究費説明会・研修会・ピアレビュー：今年度は例年通り、6月19日10:00～11:20 (Zoom) で開催し、参加者は教員39名、職員4名の計43名（録画視聴含む）であった。科研費申請の説明を申請事務担当者1名（久保紘子主任）、採択者2名（藤本優子講師、樋口幸准教授）のミニレクチャーを実施した。また、先立って4月4日に新採用教員向けに、科研費申請のインターネットサイト等の資料提供とサポート実施についてメールで案内した。令和6年度科研費申請にむけたピアレビューは12件行われた。さらに、学外講師（大分大学研究マネジメント機構 知的財産管理部門 部門長 総括 URA 松下幸之助教授）による添削指導を受講できるように、申請書や予算補助を整備し2名が活用した。

(3)教育に関する研修：7月28日10:00～11:30 (Zoom) に開催した。参加者は教員45名、職員5名の計50名（録画視聴含む）。テーマは「DXを活用した新たな基礎看護技術演習」で、講師は本学基礎看護学の秦さと子教授と石丸智子准教授であった。令和4年度、基礎・成老年実習室に新たに整備されたICTやシミュレーション機器を用いた学生の自律的な技術演習の実際について演習方法や学生の達成状況を踏まえた講義内容であった。実際の授業の様子を見学することもアナウンスした。

(4)学生理解の研修：①新任教職員研修の2日目（4月4日9:00～9:30）に全教職員を対象に本学保健室職員より本学学生の保健室利用状況やカウンセラーとの連携等についてのミニレクチャーを実施した。②令和6年3月15日（金）10:00～11:00 (Zoom) に開催した。参加者は教員50名、職員の計9名。テーマは「社会人基礎力の育成について」で、講師は本学成人看護学の古賀雄二教授であった。

(5)人権に関する研修会：12月25日10:30～11:30に対面で開催した。参加者は教職員80名（動画視聴含む）。テーマは、「部落差別問題およびインターネットによる人権侵害に関する内容」で、部落差別問題や身近なSNSの問題などの調査データなどを用いてわかりやすく説明され、人権に対する意識を改めて考えたなどの感想があった。講師は、大分県人権教育・啓発協議会 人権啓発講師のマックビー光子氏であった。

(6)職位・経験別の研修は自己の課題や関心が異なるため、自主的な活動にしている。研究・教育・大学運営に関わるような研修への参加を促進する目的で参加費の自己負担を軽減するため研修費用を補助することとし、1名が参加し研修報告書の提出があった。

令和5年度大分県自治人材育成センター県職員研修の募集案内はおこなった（前年度3月）が、派遣希望はなかった。

2)学内競争的研究費の活用促進：

昨年度から科研費の採択期日が2月末となったことを受け、令和4年度中の3月6日にメールにて学内競争的研究費の募集を開始した。3月31日締切までに奨励研究1件の新規応募があった。4月6日にFD/SD委員会主催の審査会（審査員7名：FDSD委員会から5名、教育研究審議会メンバーから1名、担当理事1名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。さらに、4月着任の新任者にむけて4月1日に募集案内を行い、5月10日締め切りまでに奨励研究1件、先端研究1件の新規応募があった。5月10日にFD/SD委員会主催の審査会（同メンバー7名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。そのうち奨励研究1件は、研究テーマの変更に伴い辞退があり研究費は

未使用となった。令和 4 年度採択分の 2 年目の研究課題 9 件と合わせて、令和 5 年度は、計 11 件への助成を行った。これらの研究成果（進捗状況）は、令和 6 年 3 月 15 日のアニュアルミーティングで報告された。

令和 6 年度の学内競争的研究費の募集は 1 月 17 日から開始した（締切 3 月 27 日）。

3) 科学研究費補助金等外部研究費の獲得促進：

科学研究費助成金申請の促進のために、全教職員対象に上記 1)-(2)のとおり研修会を実施した。令和 5 年度の新規採択課題は 9 件（31%）で、レビューを受けたのは 4 件であった。科研費継続課題も含めて厚労科研、受託研究、共同研究、奨学寄附金等外部研究費獲得者は 34 名（64%）である。令和 6 年度科研費申請書のピアレビューは、新規申請 25 件のうち 12 件であった。2 月 29 日に採択結果が一部公表され、新規採択課題は 6 件で、そのうちレビューを受けたのは 3 件であった。

4) 国内/海外派遣研修の募集：

12 月に国内派遣研修の応募が 1 件（姫野雄太助教）あった。書類を確認し承認した。研修期間が 1～3 月にわたることから研修途中であったが、令和 6 年 2 月 29 日に対面での研修報告会が実施された。教員 15 名の参加がありディスカッションが行われた。年度末に研修終了し研修報告書の提出があった。海外派遣研修への応募申請者はなかった。

5) 授業評価アンケート：

実施方法は、昨年度同様 Google フォームを使用した方法で実施した。1 年次生 37 科目、2 年次生 39 科目、3 年次生 33 目、4 年次生 14 科目の全 123 科目（2 クラスのため、のべ 130 回）であった。担当教員は、Google Drive 上で結果を閲覧し、学生の自由記載への回答をキャンパススクエアの掲示板「授業アンケートの広場」に掲載するか、メールでの返答を促した。全体の科目ごとの回答数と平均値一覧は、FD・SD 委員会事務担当者が集計し学期毎にキャンパススクエアの掲示板にアップした。1 年次生の回答率は、1st は 8 割を超えており、3rd でも 6 割以上であった。2～3 年次生の回答率は、科目によるばらつきがあり 2～4 割、4 年次生は 2 割程度であった。今年度は、入学時オリエンテーションや学年の初め、長期休暇後に、FD/SD 委員会のアンケート担当委員がアンケート協力の趣旨説明等メールを送付し学生へ依頼した。また、科目担当教員が授業時間の最後にアンケート協力を口頭で伝えるだけでも 3 年次生の回収率が高まった科目があった。これは効果があるため次年度も継続する。大学院科目の授業評価は、Google フォームを用いた web アンケート又は、担当教員自作のアンケート実施を科目責任者に依頼した。授業アンケートの実施は 15 科目であった。

6) 教員相互の授業参観を促進するために、上記 1)-(2)の研修前後にメールで周知した。

7) アニュアルミーティングは、令和 6 年 3 月 15 日に開催した。2 日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧、当日は質疑を行う昨年度と同様の方式とした。当日は、Zoom を用いて発表者による簡単な説明と質疑応答（1 人 8 分）を実施し、教職員 53 名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表 11 題、一般演題 10 題が、ポスターやパワーポイント資料を用いて発表された。

8) おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループには委員長がオンライン会議（メール稟議含む）に 3 回参加した。第 6 回大分合同 FD・SD フォーラムは、「学生のネット依存症対策（NPO 法人日本次世代育成支援協会代表 鷲津秀樹氏）」のテーマで、3 月 6 日と 13 日に大分工業高等専門学校が担当し開催（オンライン配信）された。本委員会メ

ンバーや教員 5 人が参加した。

9)学内全教職員へ他機関からの FD・SD に関する情報提供を 44 回行った。

今後の課題

令和 6 年度以降、科学研究費補助金等外部研究費の獲得者の目標は、教員の 50%以上である。今年度からの学外講師による科研費申請書の添削指導受講のシステムを活用できるよう周知を図る。学部の授業評価アンケートは、昨年度に引き続き Google フォームで実施した。1 年次生は、3rd でも 6 割以上の回答が得られたことから、次年度以降もアンケート担当委員が趣旨の説明等を繰り返し実施することを継続する。特に 2 年次生以上は、科目担当教員が協力依頼の声掛けをすると回答率を上げることが期待される。教育に関する研修については、大学としてどのような看護師を育成したいのか、新カリにおける AP/CP/DP 作成の経緯を全学で共有し、そのための教育の在り方を議論する。また、各科目群の考え方の相互理解を深め各科目群の目標達成のための授業設計の方法などを議論する機会とするなど検討する必要がある。また、教育・研究・大学運営のための研修参加や国内・海外派遣研修費の利用者が少ないため、周知して研修参加を促進することとする。

9-3-14 研究倫理安全委員会

委員長 草野淳子

副委員長 濱中良志

委員 加藤典子、小嶋光明、森加苗愛、荒木章裕、二宮孝富（外部委員）、野村文宏（外部委員）、吉野美穂（事務局）

研究倫理安全委員会は令和 5 年度は 11 回開催した。1 月が休会であった。各月ごとに教員や大学院生等から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は 84 件で、そのうち 83 件が承認された。A 判定 6 件、B 判定 77 件、C 判定 1 件、審査前取り下げ 2 件であった。採択率の向上を目指すために、大学院生や教員からの記載要領の相談を受け入れた。大学院生の研究計画の記載内容が充実するように今後も申請時には「研究計画の申請の手引き」を熟読し、担当教員の指導を十分に受けることをアナウンスしたい。

研究倫理教育に関しては、日本公正推進協会の e ラーニング APRIN を導入して、教員全員が受講するように年度計画を立てた。3 月末日までに教職員・大学院生が全員受講するようアナウンスした。令和 6 年 3 月 31 日での修了者は教員 56 人、事務 5 人、大学院生 37 人であった。研究計画の提出時には、研究責任者・共同研究者の APRIN の修了書の提出を義務づけている。教職員と大学院生全員の受講が課題である。

令和 5 年 6 月 19 日（月）に、大分県立看護科学大学開学 25 周年記念講演会「研究倫理と実践における倫理」を計画・実施した。教員・学生・外部からの参加者は、研究倫理の歴史、基本的考え方など多くの学びを得ることができた。また、今年度より委員会開催時には外部委員も同席し、審議の方法を変更した。問題はなかった。来年度も基本的に令和 5 年度の方法で委員会運営を行う。

9-3-12 1) 動物実験小委員会

委員長 小嶋光明

委員 吉田成一、恵谷玲央、定金香里、岩下恵子、吉野美穂(事務局)

令和 5 年度の動物小委員会は含めて 5 回開催した。動物実験研究計画書 10 件の審査（新規審査件数 8 件;変更・追加件数 2 件）を行い、10 件が学長によって承認された。令和 5 年度では計画に沿った動物実験が 10 件実施され(うち 2 件は健康科学実験)、使用動物匹数はマウスが 244 匹、ラットが 71 匹で、総使用匹数は 315 匹であった。前年度の総使用匹数 349 匹に比べて今年度は 10%減少した。令和 5 年度に使用された動物実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長に報告する。使用動物の慰霊祭は 12 月 13 日に 3 年ぶりに対面で実施した。動物実験教育訓練に関しては動物実験講習会(小嶋・恵谷)を令和 5 年 4 月 13 日(12 名)に、人獣共通感染症の教育訓練は令和 5 年 5 月 9 日(10 名)にオンラインで実施した。

来年度も実験計画書の審査に加えて、実験実施中の状況や動物の健康状態について定期的に監視を行い、必要に応じて修正を加えることで、動物の福祉を考えた実験が行われるよう継続的な取り組みを行っていく。

9-3-12 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 吉田成一

委員 小嶋光明

本小委員会は、遺伝子組換え実験の研究計画書の審査および必要に応じて教育訓練等を行う。

今年度は遺伝子改変動物等を使用する教員等がいなかった。

遺伝子組換え実験を行う教員等が生じた場合、必要な教育訓練等を行うとともに、研究計画書の審査が行える体制を維持する。

9-3-13 図書委員会

委員長 林猪都子

副委員長 安部眞佐子

委員 伊東美穂、白川裕子、堀裕子、吉村幸永

委員会選定及び学生リクエストによって新たに1,689冊の蔵書を整備した。また、「図書館だより」（発行回数2回<Vol.19(2023年7月)、Vol.20(2024年1月)>）の発行、図書企画展示（企画展示6回、オープンキャンパス特別展示1回、ミニ展示3回）の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を継続し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。書庫狭隘化対策としては、今年度は研究室の図書125冊視聴覚資料1点の除籍を行い、オープンキャンパス時には「図書リユースデー」を開催し、図書館の除籍図書及び学生・教職員の不要図書のリサイクルを行った。また、研究・教育がより効果的に行えるよう、文献デリバリーサービス「RepintsDesk」、医学映像情報センターの映像配信サービス「ビジュランクラウド」を継続している。更に今後のデータベース導入の参考とするため、医学文献の検索・閲覧ができる株式会社メデオの「メディカルオンライン」のトライアル（10月～12月）を行い、トライアル後は利用アンケートを実施した。その他に読売新聞記事検索ができる「ヨミダス歴史館」のトライアル（11月～2024年1月）も行った。学修支援としては、授業科目ごとに担当教員に参考図書の推薦を依頼し、「講義の理解を助ける図書・視聴覚資料」として案内を行い、リストを図書館HP上で公開している。購読雑誌に関しては、為替の影響等による価格上昇のため洋雑誌3タイトルを購読中止とすることで予算の削減を図った。昨年から再開した休日開館を2023年度も引き続き行っており、卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくこととした。

9-3-14 情報ネットワーク委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 品川佳満

委員 恵谷玲央、岡田悠希、佐藤英治、小野逸郎、大東直子

本学のネットワーク運用支援、新入生オリエンテーションでの情報関連ガイダンスや教職員へサポートなどのユーザー支援、メール管理、サイボウズなどによる手続き支援などの定常的に行う業務を各委員がWGごとに担当して行なった。

定常的な業務の他、本年度の活動としては、教職員用PCの更新と旧PC等の廃棄、無線LANおよびネットワークスイッチの更新によるネットワーク環境の改善、財務サーバのクラウド移行、情報処理教室更新計画の作成を行った。セキュリティ対策関連では、パスワード漏洩検知サービスの運用案の作成、学生を対象とした情報セキュリティ講習会の開催を行った。学生を対象とした情報セキュリティ講習会は7～8月にオンデマンド配信で実施し、対象とした2～4年次生の89%から受講済み

の報告が得られた。

今後も定常的業務をつつがなく担当していくが、情報機器の価格や保守費用の上昇傾向にある状況において、経費を抑制しつつ、業務効率やセキュリティの向上などを配慮して、活動を進めていく必要がある。

9-3-15 ハラスメント防止・対策委員会

委員長 首藤圭

委員 稲垣敦、小野美喜、久保紘子、田中保之（外部委員、弁護士）、永松いずみ、吉村匠平
関根剛（オブザーバー）、尾割勇作（事務局）

令和 5 年度のハラスメント防止・対策委員会として 1)～2)の活動を行った。

1) 委員会の開催

7 月 5 日（オンライン）、2 月 19 日（オンライン）に委員会を開催した。

2) 教職員向けハラスメント研修会の開催

8 月 24 日に対面及びオンラインで、総務グループからハラスメントの防止等に関する規程の概要の説明と社会保険労務士 篠原事務所 代表 篠原 丈司氏を講師として、「ハラスメントの基礎知識」の演題で、ハラスメント研修会を開催し、65 名の参加があった。

令和 6 年度からのハラスメント相談員の推薦を決定した。

次年度も委員の知識を深めるため、第 1 回委員会で弁護士の田中委員より、最新の裁判例の紹介を行う。

9-3-16 衛生委員会

1 号委員 首藤圭

2 号委員 角匡幸（産業医）

3 号委員 小野治子

4 号委員 佐伯圭一郎、尾割勇作

オブザーバー 釘宮由美子、安東悦子

事務局 吉野美穂

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計 9 回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

(1) 定期健康診断を 4 月 12 日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当

該精密検査受診を勧奨した。

(2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを 5 月 18 日から 5 月 31 日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（65 名受検、受検率 87.8%、前年度比 0.2%増）。

(3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、10 月 23 日に学内接種を行った（希望者 35 名）。

(4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を 5 月 26 日と 11 月 28 日に実施し、共に測定結果は適切であった。委員会で測定結果を報告した。

(5) 夏季休暇、年次有給休暇の積極的な取得を教職員へ呼びかけ、取得状況を教育研究審議会等で報告した。

(6) 公立学校共済組合が実施する人間ドックは 17 名、器官別健診は 18 名が受診した。

2 健康増進活動支援事業

(1) 教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員 48 名（12 チーム）が参加した。

(2) 各種スポーツイベントへの参加負担金助成事業は申請がなかった。

3 職場巡視

12 月 8 日と 1 月 22 日に屋外を巡視した。その結果、路面タイルの破損、路面ブロックの隆起、グラウンドのゴミ等を確認した。職場巡視の結果は事務局財務グループと共有し、緊急を要するものは速やかに修繕等を行った。すぐに対応不可能な部分については、今後状況を見て検討する。

来年度も職場巡視を行い、必要な箇所において整備を行う。

9-3-17 評価委員会

委員長 稲垣敦（研究科長）

委員 福田広美（学部長）、首藤圭（事務局長）、藤内美保（学長が指名する職員）

評価委員会は、(1)大学の基本理念を実現する、(2)教員の研究・教育などの活動をより活性化するための目標を与える、(3)教員が自律的・主体的に活動の点検・評価をすることで今後の目標をより明確化するために、理事長及び理事以外の常勤教員の年間の活動に関する教員評価を行い、理事長・学長に報告する。また、評価方法の改善や昇任人事の提案及び準備も当委員会の分掌事項である（公立大学法人大分県立看護科学大学教員評価の実施に関する基本的な方針）。

本年度は、学長の指名により看護アセスメント学研究室教授の藤内美保氏を委員に迎えた。また、昨年度の評価方法を踏襲し、学生による授業アンケートの結果を自己評価書に記載し、次年度の目標を記載する欄を継続したが、評価点には加えなかった。一方、記入方法に誤解が生じないように、説明を若干変更した。今年度は 12 月 18 日に自己評価書等の資料の提出（〆切：1 月 15 日）をメールで教員に依頼したところ、1 名からの提出が遅れ、1 月 25 日に 45 名からの提出が完了した。その

後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、学長に評価結果を報告した後、学長より差し戻しがあったため再検討し、修正した。基本的な方針では教員評価通知の返却は3月3日であるが、今年は教員からの提出が遅れたため、3月11日に学長名で返却した。その後、今年度着任した教員1名とC判定の教員1名については、学長が個人面談を行った。なお、今年度も教員からの問い合わせや疑義はなかったが、評定値の度数分布表に訂正があったため、3月11日に教員に訂正メールを送った。この教員評価結果を受けて、人事基本計画及び昇任基準に基づいて昇任の可能性を検討し、准教授1名、学内講師2名の昇任案を理事長に提案した。この結果、全員の昇任について学長の承認が得られたため、推薦書や業績目録等の必要書類を準備し、3月13日の教育研究審議会、3月21日の理事会及び経営審議会で理事長・学長が昇任案を諮り、最終的に候補者の昇任が確定した。

今年度は、研究室メンバーによる研究室主任の評価、授業アンケート結果の評価点への反映、評価結果の公開等について検討する予定であった。しかし、それ以前に自己評価書を作成する教員の負担が極めて大きい等の理由で、個人の年度目標に対する到達度によって評価する等の抜本的な改革が必要ではないかという意見が以前より評価委員会内であり、次年度はこちらを優先して検討する予定である。

9-4-1 総務グループ

総務グループは、教育研究審議会、理事会及び経営審議会に関する業務、中期計画・年度計画に関する業務、大学の組織・定数、理事長選考、教職員の採用・人事、給与、福利厚生、健康診断等に関する業務を行っている。

教育研究審議会は、大学の教育研究に関する重要事項の審議のため、8月を除く年11回開催し、理事会及び経営審議会は、法人の経営に関する重要事項の審議のため、4月、6月、9月、12月、3月の年5回開催した。

令和5年度は、第3期中期計画の最終年度であり、令和6年度から6年間の第4期中期計画の策定を行った。第4期中期計画は、大分県が策定した第4期中期目標のコンセプトである「看護教育機能の強化による、専門性と豊かな人間性を持つ看護職の育成」と「看護学教育研究拠点としての機能の充実強化による社会的な課題への対応と、地域の健康・福祉につながる社会貢献の充実」に沿って策定した。制度改正により、第4期中期計画からは第3期中期計画では必要であった年度計画が成果指標の作成を条件に不要となったため、項目ごとに成果指標を設定し、管理を行う。

第4期中期計画では、これまでの取組に加え、教育のDXや教学マネジメント及びIRの推進、県内の就職先拡大の取組や就職相談等の強化（県内就職率55%以上を指標として設定）、大分県看護職者の現行教育体制の強化等の取組を計画に盛り込み、中期目標達成を目指している。

教員の採用は、定年退職等によって空席となる研究室の教員補充のため、生体科学、基礎看護学、小児看護学、母性看護学、助産学、NP、地域看護学の6研究室8名の公募を行い、選考を行った。選考の結果、6名の採用を決定し、採用が決まらなかった2名分については、臨時助手を採用することに決定した。

理事長任期の最終年度であり、次期理事長を選考するための業務を行った。理事長選考会議を開く前に、理事長選考会議の委員を教育研究審議会から3名、経営審議会から3名選出した。

理事長選考会議は令和5年度は3回開催した。第1回は議長の選出、今年度の理事長選考会議日程、公表内容を審議するため、令和5年6月21日に開催した。第2回は学内3名の教員から聖路加国際大学大学院看護学研究科長・教授 麻原 きよみ氏の推薦があり、3名から提出された推薦書等を基に候補者の書面審査を行うため、令和5年9月20日に開催した。第3回は理事長候補者である麻原 きよみ氏の面接審査を行うため、令和5年10月12日に開催した。

理事長選考会議で麻原きよみ氏を理事長予定者として選出することが決定され、議長から理事長に通知され、その後、理事長から大分県知事に理事用任命の申し出をした。

9-4-2 財務グループ

財務グループは、予算、決算の作成、施設設備等の維持管理、収入や支出に関する事務、外部資金の経理事務等を行っている。

令和5年度は、第3期中期計画に基づき、自己収入の確保や外部資金の獲得、経費の効率化、資産の適正管理・有効活用、施設・設備の整備と活用、剰余金を活用した教育研究の質の向上及び組織

運営の改善等の取組を進めた。

自己収入を確保するため、納入が遅れる可能性のある学生や保護者に対し、分割による計画的な納入を促し、授業料の滞納を防止できた。また、令和 5 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症となったことに伴い、体育館の貸し出しを再開し、大学施設等の貸出件数は 258 件（対前年度 126%）、財産貸付収入は 279 千円（対前年度 171%）となった。これらの成果を受け、引き続き、きめ細かな債権管理を実施し、貸倒損失及び徴収不能引当金繰入額のゼロを目指す。また、教育研究に支障のない範囲で、積極的に施設等を適正な料金で貸し付け、自己収入の確保を図る。

外部資金については、公募情報を積極的に収集し、全教職員に周知したほか、「科研費申請に関する研修会」では、科研費の公募要領の変更点や期限、不正使用事例などを紹介した。引き続き、研究費等外部資金に関する情報収集やレビュアー制度等による助成申請の個別支援を強化し、外部資金の獲得を促進する。

経費の効率化では、情報機器等の廃棄予定物品に関する情報を共有して、再利用を促すなど教職員のコスト意識の涵養に取り組んだ。また、節電を呼びかけ、最大需要電力を 300kW から 286kW に抑えたことで、基本料金の削減につなげた。さらに、学内の照明器具や屋外街路灯の LED 化や、断熱効果のあるガラスフィルムへの貼り替えなどの節電・省エネルギー対策を行い、電気の年間使用量は対前年度 96.7%となり、近年で最も低くなった。今後も、教職員及び学生の省資源・省エネに関する意識の向上を図り、光熱水費等の節減に取り組む。また、契約内容等を適宜見直し、管理経費の抑制に努める。

資産の管理・運営については、目的積立金を教育研究の質の向上を図るために積極的に活用し、X 線照射装置の更新や、講義室のアクティブラーニング化、床タイルカーペットの張り替えなどを行った。また、余裕資金は定期預金で運用した。引き続き、収支計画や資金計画を勘案しながら適正かつ効率的な資産の管理運用を行う。

施設・設備の整備では、県の計画的保全工事 5 ヶ年計画に基づき、県施設整備事業費補助金を得て、空調設備外改修設計委託や、非常用発電機分解整備工事を実施した。今後も施設・設備の機能を将来にわたり安全かつ確実に発揮させるため、点検・診断を定期的に行い、適切な時期に補修・補強対策等を実施する。

9-4-3 教務学生グループ

教務学生グループは、学部及び大学院の入学試験、入学手続き、入学式及び卒業式、授業料・入学料制度、シラバス、奨学金、教育システムの運用、学生生活の支援、学生及び職員の健康管理に関する業務を行っている。

入学式は、令和 5 年 4 月 7 日（金）に大学内の講堂で行われた。学部の入学生 82 名、大学院の入学生 28 名に対して、村嶋学長から入学許可が行われた。

卒業式は、令和 6 年 3 月 18 日（金）に大学内の講堂で行われた。学部の卒業生 74 名、大学院の修了生 32 名ひとりひとりに、村嶋学長から学位記が手渡された。

教育システムの運用では、学生の基本情報・履修登録科目や成績、進級状況等の情報を管理してい

る「Campus Square」の中に、「キャリアカルテ」という学生自身が DP 自己評価を行うための機能を新たに追加し、年次単位（学期・通年）の目標と日々の活動記録に関する情報を管理できるように改修を行った。

学生生活の支援では、長引くコロナ禍において、学生等のアルバイト収入が減少していることや、ウクライナ情勢など緊迫した国際情勢に端を発する資源価格上昇に伴う物価の高騰が学生の生活にも影響を与えていることから、学生等が安心して修学していけるように、物価高に対する経済対策として、令和 5 年 4 月に学部生 331 名と大学院生 79 名の計 410 名に、食堂及び売店で利用できる 2,000 円分のチケット等の配布を行った。

教務学生グループの業務は、教務関係の各委員会の業務を担っている側面もあるので、業務を通して必要な提案及び執行を行い、大学の諸目標を達成するために尽力していく。

9-5-1 附属図書館

・ 2023 年度利用者数	
図書館入館者数（延べ人数）	20,099 人
学外からの利用者数（実人数）	291 人
・ 2023 年度受入図書冊数	1,689 冊
うち購入数	1,655 冊
・ 2023 年度受入雑誌タイトル数	152 点
うち購入数	120 点
・ 図書等資料蔵書数（2024 年 3 月 31 日現在）	
蔵書冊数	87,052 冊
所蔵雑誌タイトル数	649 点
電子ジャーナル購読タイトル数	599 点
電子ブック購読タイトル数	15 点
視聴覚資料	2,330 点

9-5-2 看護研究交流センター

センター長 稲垣敦（研究科長）

メンバー 影山隆之、加藤典子、神崎純子、定金香里、篠原彩、藤内美保、林猪都子、篠原彩
（以上、推進会議メンバー）

当センターの目的は、本学の教育・研究を通しての地域貢献、地域の看護職者の研究能力の開発と質的向上、並びに看護に関する国際協力・支援の拠点施設としての役割を果たすことである（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第1条）。また、当センターの分掌事項は、(1)予防的家庭訪問実習の運営、(2)看護職者の研究支援、(3)看護職者を対象とした継続教育、(4)地域、産官学との連携、(5)知的財産の管理、啓発、保護及び活用等、(6)NP(診療看護師)の教育推進と社会貢献、(7)学術ジャーナルの編集・刊行、(8)健康増進に寄与する地域貢献、(9)その他である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第3条）。

今年度は、知的財産アドバイザーを雇用し、知的財産関連規程を改正した。また、学術ジャーナルチームは、インターネットジャーナル看護科学研究について国内の看護系学術雑誌では2番目となるプレプリントサーバー／プレプリントリポジトリ（Jxiv）やデータ公開（J-STAGE Data）の導入の準備を進めた。NP教育・事業推進チームは、NP研究室の新設を決定し、初めてNP資格を有する専任教員の雇用を決定した。健康増進プロジェクトチームでは、学生とともに13の地域のイベントでボランティアとして活躍した。その他については、各チームの項をご参照ください。

次年度は、看護科学研究でプレプリントサーバーやデータ公開を開始し、引き続き、利益相反に関する届出等について検討する。

9-5-2 1) 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 荒木章裕、甲斐優子、神矢恵美、神崎純子、篠原彩、永松いずみ、福田広美

本チームは予防的家庭訪問実習を運営するとともに、おおいた地域連携プラットフォームに対する窓口となり、チーム会議を年11回開催した。

今年度は新型コロナウイルス感染症が5類とされたことから、予防的家庭訪問実習で本来予定していた学生による家庭訪問を、通年実施することができた。このための、実習協力者への依頼、実習要項の作成と学生・教員へのオリエンテーション、本実習における感染対策の実施、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）等を行った。上記事情を考慮して、感染対策の一部を見直した。今年度は下横瀬地区も訪問対象とし、自治会へ説明を行い、学生の訪問地域を拡大した。協力者が年度途中で辞退となったチームの学生は、別チームに合流して訪問する方式とした。協力者が住む地域について学生が理解を深められるよう、市の支所長や地域包括支援センター長に学生講話を依頼した。年度末に協力者訪問を行った。

これらのために、地域ステークホルダーとの運営会議を 2 回開催し、実習報告、地域の状況についての情報共有、新規協力者開拓のための方法に関する協議等を行った。今年度から下横瀬地区においても協力者を募ることとした。様々な変更を余儀なくされたものの、実習全体としてはスムーズに進行した。担当教員の役割など、実習運営の細部について改善を検討し、次年度の実習要項を取りまとめた。

コロナ禍における本実習の運営について報告資料をまとめ、学術誌に投稿した。また、本実習の協力者を十分得るための対策を検討する資料として、野津原と富士見が丘の一部地区において 60 歳以上の住民（市データによれば 2,830 人）を対象としたアンケート調査を行った。882 人から得られた回答を集計分析したところ、本実習の知名度が高くないことや、潜在的には本実習に協力してもよいと考える人が少なくないことが明らかになった。これを参考として次年度以降、本実習のあり方に関する検討を深める予定である。

おおいた地域連携プラットフォームでは主に地域交流・課題検討部会と教育プログラム開発部会に参加し、県内の高等教育機関・地方自治体・産業界団体と交流・協議を行った。九重町から要請があった地域課題解決への協力として、「第 3 次健康ここのえ 21 計画」策定委員会に本チームリーダーが参画し、住民調査と計画策定に協力した。

次年度は、感染症対策に留意しつつ予防的家庭訪問実習の活動を継続しながら、並行して、協力者確保の戦略や実習運営方法の改善を検討することが、課題である。

9-5-2 2) 継続教育推進チーム

リーダー 林猪都子

メンバー 足立綾、神崎純子、佐藤愛、姫野雄太

1. 地域貢献としての看護研究支援

6 施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、衛藤病院、国立病院機構別府医療センター、国立病院機構大分医療センター）から研究支援の依頼があり、各施設に講師を 2～3 人派遣し、看護研究支援を実施した。各施設の研究支援は 2 月までに終了し、3 月末までに研究成果発表会が実施され、派遣講師による講評が行われた。2023 年度の支援については、Zoom やメール等での支援が多く行われ、施設によっては、派遣講師による看護研究に関する講義を実施した。研究支援に関して、全施設から満足の回答があり、次年度以降も全施設から継続希望があった。3 月 14 日、大分赤十字病院にて継続教育推進チーム担当者と施設管理者が話し合いの機会を持ち、今年度の研究支援について情報交換を行った。

2. 看護研究交流会の開催

2023 年 7 月 11 日（火）に看護研究交流会をオンラインにて実施した。研究支援を受けている看護管理者、学長、看護研究交流センター長、派遣講師、継続教育推進チームが参加した。アルメイダ

病院甲斐看護部長による「看護部長としての看護研究を通じた人材育成の経験」の講義を受けた後に各施設管理者と看護研究支援体制について意見交換をした。実施後、講義の満足度は高く、ディスカッションの内容について事前に資料がほしいとの希望があったことが次年度の課題である。次年度は、施設から院内で研究ができる看護師の育成について講義をしていただき、各施設管理者と意見交換をする予定である。

3. ホームカミングデイの実施

5月20日(土)、ホームカミングデイを若葉祭1日目に対面にて実施した。参加者は卒業生14名、修了生8名、同窓会副会長1名、旧教員1名、教職員22名であった。ホームカミングデイは卒業生4名の近状報告を聞きながら、なごやかに進められた。終了後のアンケートの結果、大学からの継続支援の希望は「就職・転職相談」66.7%であった。次年度は、在学生在がホームカミングデイに参加して、卒業生、修了生と交流の機会を得、卒業後の学びと進路選択の機会とする。

9-5-2 3) 産学官連携推進チーム

リーダー 加藤典子

メンバー 尾割勇作、神崎純子(10月～3月)、佐藤栄治、篠原彩、野尻忍(4～9月)、樋口幸

産学官連携推進チームでは県内企業等との共同及び受託研究を促進し、地域企業の活性化を図ることを使命としており、県内外の企業等からの研究依頼・技術相談の窓口となっている。チーム会議は月1回開催し、企業等からの依頼や本学研究者からの相談等について情報共有を行うとともに、本学の強みを生かした産学官の連携を推進できるよう展開している。

本年度は、県内の企業等のニーズと教員のシーズのマッチングをより推進するため、昨年度の議論をもとに、教員シーズ集を改訂し、ホームページに掲載するほか、シーズ集にアクセスできる内容を含めたチラシを5月に県内外の企業150か所に送付した。またR5年度大分県医療ロボット・機器産業協議会 医療関連産業参入促進セミナーにも参加し、大学、行政の関係者にも配布した。本年度のホームページへのアクセス件数は約1,200件であった。また、本年度の企業等からの受託研究は1件、共同研究は1件、相談件数は3件であった。

本年度からは、民間企業等との製品開発につながる共同研究等の推進及び外部機関からの相談対応強化のため、学内に知的財産アドバイザーが採用された。本チームでは、教員等が相談しやすくなるよう様式等見直しを行い、周知を図った。また、知的財産に関する規程集等の見直しを行った。

人材育成の一環として、教職員及び大学院生の知的財産権に関する仕組みについての理解を深めることを目的に知的財産アドバイザーに講師を依頼し、著作権に関する研修会を開催した。当日受講者数は教職員50名、大学院生15名、4年次生6名の計71名、後日録画視聴者は4年次生10名、大学院生2名の計12名であった。

今後の活動としては、シーズ集を基に県内企業との受託研究、共同研究の推進を図ると共に、研究成果物や特許等の知的財産の仕組みについて教員や大学院生に理解を深めるための研修会等を継続して行うことや、本年度改訂された規程集等の周知を行う必要がある。

9-5-2 4) NP 教育・事業推進チーム

リーダー 藤内美保

メンバー 足立綾、石田佳代子、内倉祐介、大島操、甲斐博美、神崎純子、草野淳子、橋本志乃、濱中良志、山田貴子、吉田成一、吉村幸永

1. 令和 5 年度 NP 研究室創設の運営

令和 4 年度に NP 研究室が創設されることが決定し、令和 5 年度 4 月より NP 研究室が立ち上がり、運営開始となった。藤内が看護アセスメント学研究室と兼担し、甲斐講師、大島非常勤助手、吉村臨時助手の構成である。NP 教育、口頭試問や進級試験、修了試験などの質担保に関わること、NP 資格認定試験の手続き、特定行為実習など新規実習施設などへの丁寧な説明、調整、学生へのオリエンテーションや連絡、NP 実習室をはじめとする教育環境の整備、また医療費確保基金の採択により購入したシミュレーターやエコーなどの整備、学生への周知、また就職や学生相談など多岐にわたり NP 教育に関連した業務を遂行した。次年度は常勤 2 名の教員で、うち 1 名は念願の診療看護師が教員として NP 教育に関わることができるため、学生への支援はもとより、業務内容の充実が一層図れると期待している。

2. 新規実習施設における NP 実習

令和 5 年度の新規実習施設として、臼杵コスモス病院、津久見中央病院、大東よつば病院、ヒカリノ診療所、グリーンケアやまが（杵築市山香病院関連施設の老人保健施設）の 5 施設で実施した。そのために各施設に対して具体的な実習内容・方法の説明をして受け入れしてもらった。特定行為実習としても、気管カニューレ交換や胃ろう・膀胱瘻カテーテル交換の特定行為について大分協和病院に依頼し、1 月から実習を開始し順調に経験ができています。令和 6 年度もさらに三愛メディカルセンターの関連施設のたばるクリニックとたばる老健施設及び津久見中央病院の老健施設にも協力の承諾をもらっている。実習施設を拡大することにより、診療看護師（NP）の理解が広がっているため、実習施設の負担も勘案しながら施設拡大を検討していく。

3. 特定行為補講実習および特定行為実習

特定行為補講実習は 2 年次生 10 名に対して、5 月～8 月にかけて実施した。2 年次生は 21 区分 38 行為のすべてを経験する。そのため大分大学医学部附属病院には 2 クール計 8 週間、厚生連鶴見病院には 1 クール 4 週間、その他、PICC、胃ろう・膀胱瘻のカテーテル交換、抗精神病薬の調整などで、大東よつば病院、豊後大野市民病院、別府発達医療センターに交換日などに実習を行い、学生全員が 5 症例以上の経験が十分に経験できた。3 月の特定行為管理委員会で厳正な評価を行ったが、全員認定された。補習実習は今年度で終了となる。

特定行為実習は 1 年次 9 名が 1 月～3 月にかけて実施した。大分大学医学部附属病院で 2 クール、厚生連鶴見病院で 1 クールの実習終了後に、大分協和病院（呼吸器関連、膀胱瘻、胃瘻）、大東よつば病院（PICC など）、大分岡病院（創傷関連）を学んでいる。2 年次での実習を含め、特定行為実習でおおかたの経験をして NP 実習につなげる予定である。

4. 質担保の教育について（実習前試験、進級試験、口頭試問、修了試験など）

大学院カリキュラムの展開と質担保のための段階的な試験を次のように実施した。1 年次生は 12

月 12 日に口頭試問、2 月 20 日に進級試験を実施し、9 名が両試験に合格した。2 年次生は 6 月 14 日に実習前筆記試験、6 月 15 日に OSCE 試験、1 月 25 日に修了試験を行い 10 名が修了した。この 10 名は日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格認定試験を受験した。今後、抗精神病薬の特定行為の経験施設の開拓が必要であるため、検討していく。

5. 特定行為筆記試験・OSCE、フィードバック、e ラーニング

特定行為筆記試験と厚生労働省が定める特定行為 6 項目の OSCE を 11 月 16 日に実施した。到達目標は知識、技術及び態度や実践能力を身につけることである。OSCE の 6 行為については独自に作成した事例を用い、厚生労働省の手順書をもとにして学生はアセスメントした。教員は観察評価表と到達目標評価表を用いて評価を行い、最終確認は第 3 者評価者に依頼した。後日、OSCE を行った 6 行為について、担当教員から学生にフィードバックを行った。

特定行為の学習ツールとして、e ラーニングシステムを導入している。映像教材の視聴や学習前後のテスト受講など自己学習に使用している。

6. 地域枠確保の推進（リクルートなど）について

大分県内の地域枠の学生確保受のために、大分県内の病院を訪問した。対象病院は東部医療圏（国東市民病院、新別府病院）、南部医療圏（南海医療センター、長門記念病院）、北部医療圏（中津市民病院）、豊肥医療圏（大久保病院、竹田医師会病院）、中部医療圏（大分三愛メディカルセンター）、西部医療圏（日田済生会、日田中央病院）であった。NP コースの説明を行い、病院の状況・進学希望者の有無を確認した。

7. NP 広報活動について（ホームページ、チラシ、SNS など）

前年度作成したパンフレットの課題を検討し、修了生の活動内容と在学中の履修の進め方を具体的に記載し、また最近の活動（オンライン診療）も更新して活用しやすいものとした。大学院の HP では実習先を更新し、それぞれから施設の HP にリンクできるように変更した。また、実習施設合同会議にて施設からの NP に関する広報（SNS の活用）に関する情報発信の依頼をし徐々に広がってきている。

8. NP 実習室整備について

令和 4 年度大分県地域医療介護総合確保基金の獲得により、実習室に「NP シナリオシミュレーションユニット」の導入と、教育用エコー装置（リニアリニアプローブ、コンベックスプローブ）と超音波ベーシックファントム、ポケットエコーを購入し、前年度の実習室改装と合わせて、講義・演習・スキルアップトレーニングができるように整備した。

9. 実習施設合同会議

7 月 13 日（木）と 2 月 6 日（火）に 2 回実施した。第 1 回目では、草間朋子前理事長・前学長がこれまでの NP 及び放射線に関する功績が認められ、ナイチンゲール記章を受章することが報告された。今年度の実習計画案、特定行為補講実習の進捗状況、厚労省の特定行為関連の手続きの強化に向けての体制整備などについて報告した。また地域枠確保のためにリクルート活動を行い地域枠 5 名が確保できるようになったことを報告した。2 回目は NP 実習の報告、次年度の計画、2 年生 10 名全員が 21 区分 38 行為すべて特定行為の項目で 5 症例の経験ができる見込みであることが報告された。実習受け入れの指導者からも肯定的な評価で、非常に積極的にコミュニケーションをとって実習しているとの評価であった。

また実習指導者への指導の具体的なフィードバックが欲しいという意見もあったため、今後、さらに実習施設の意見交換を行い改善していく。

10. 特定行為管理委員会

1 回目は 7 月 13 日（木）に Zoom で実施した。実習計画の報告した。特に実習施設を新規開拓したこと、特定行為補講実習をすること、また 1 年次生はカリキュラム改正で特定行為実習を正規の科目としたことを報告した。2 回目は、3 月 5 日（火）に対面で 2 年次生 10 名の特定行為の評価を厳正に行った。昨年度改正した 3 つの評価基準により評価した。1 学生毎にファイル化し膨大な資料を確認してもらい、10 名が申請した特定行為について全て認定できると評価し、村嶋理事長に報告された。今後は厚労省に届け出する計画である。

11. NP 修了生生活動推進施設交流会開催について

今年度は、新規実習施設が 6 施設あり、NP の活動や能力の理解を広めるためと実習施設同士の交流を目的に実施した。修了生の活動紹介として、国東市民病院訪問看護ステーションの清原小百合氏、臼杵市医師会立臼杵コスモス病院の上野聖子氏に発表いただいた。新規施設の医師や看護部長などの参加があり、実習開始に向けての準備が促進された。参加者からは毎年開催してほしいとの声も聞かれ、大分県の NP の活動を知っていただく機会になり施設からの進学や雇用にも良い影響をもたらす可能性もある。NP 実習施設合同会議の場における開催は継続の検討をしていく。

12. 修了生と大学教員との交流会

本年度は「プライマリ・ケア領域の診療看護師（NP）としての活動の現在（いま）」というテーマで、令和 6 年 2 月 9 日（金）に、本学 2 3 講義室での現地開催（対面）とオンライン（Zoom）を併用して実施した。参加者数は 47 名だった。参加者アンケートの結果から、講演や対談などを通して、プライマリ・ケア領域の NP としての活動を理解でき、今後の活動に活かそうだとの意見や、今後交流会を継続してほしいとの意見などを得た。

13. 入学前オリエンテーション

入学前の学習や入学後の学習環境調整のために 2 月 7 日（水）16：00～1 時間で Zoom で実施した。参加者は 8 名であった。遠方からの通学や実習などの休職が必要な期間や履修調整に関する質問があり、入学前の準備がスムーズにいくよう支援した。

14. 特別推薦枠合格者との交流会

本学在籍中の 4 年次に特別推薦枠で合格した卒業生 3 名と交流会を 8 月 31 日 16：00～1 時間程度 Zoom で開催した。特別推薦枠で合格後 5 年もしくは 6 年後に NP コースに入学予定となるため、年に最低 1 度は交流し、情報を共有したり質問に対応することを目的に、昨年度から開始した。臼杵コスモス病院の診療看護師にも参加してもらい、診療看護師の活動など含めてフリーディスカッションした。卒業生はさらに診療看護師を目指す意思が明確になった、診療看護師の話を聞けてとても良かったという言葉が聞かれた。

15. NP 先端研究

「プライマリ領域の診療看護師（NP）の実践知から得られたコアコンピテンシーの探求 ―経験年数別にみた重要性の分析―」のテーマで進めた。前年度のデータ分析に時間をかけ、経験年数に応じた能力向上のための実践を医学と看護の統合へと昇華させ、一つ一つの能力が単独ではなく、相互作用もおこしながら積み重ねて深化させる発展のプロセスが示唆された。この結果を修了生研修プ

プログラムの構築と NP 教育課程のカリキュラムに反映させていく。

16. 医療費確保基金申請

医療費確保基金の医療従事者の確保に関する事業の看護職員等の確保のための事業に 8 月 31 日に事務局を通じて申請した。申請事業名は、NP 教育における特定行為研修強化のための学習環境整備と県内特定行為研修の拠点化である。これまで特定行為に係る演習の機材や物品等は病院や企業に依存していること、学生の自主的なスキルアップの練習もできなかったことなどがある。また本学が大分県の特定行為の OSCE などの拠点としての役割を担えることが求められているため、拠点としての役割を果たすことができるシステムの構築が必要である。

17. 厚労省関連（事務局との連携、報告書、施設等登録、変更手続き等）

特定行為研修実習協力施設について、新規 6 施設の追加登録を行った。結果、実習協力施設は、前年度登録の 18 施設と合わせて、24 施設となった。併せて、指導者変更の登録手続きを行った。新たに配置された看護研究交流センターの事務職員 1 名が、教員と連携・協力しながら、特定行為研修実習に関する事務手続きを滞りなく行った。

9-5-2 5) 学術ジャーナルチーム

リーダー 定金香里

メンバー 秋本慶子、恵谷玲央、神崎純子、白川裕子、田中佳子、徳丸由布子、中釜英里佳、山田貴子、G. T. Shirley (学外)

本チームは、インターネットジャーナル「看護科学研究」の編集事務局の業務を担っている。それぞれの担当メンバーが、投稿論文の受付、確認作業、編集担当委員の選定、委員・査読者・著者間の連絡作業、英文校正、編集作業、Web ページの作成、J-STAGE へのデータ登載、運営費の管理といった実務を行った。なお、「看護科学研究」の運営は、外部組織である「看護科学研究」編集委員会が行っている。

1. 21 巻の発行

本年度から、採択された論文から順次、J-STAGE 上に掲載することにし、21 巻（2023 年 1 月～12 月まで）には、12 本の論文を掲載した。内訳は、原著：3 本、総説：2 本、研究報告：4 本、資料：3 本である。12 本のうち、英論文は 1 本だった。近年、新規投稿数が増加しており、その結果、「看護科学研究」と改称してから最も多くの論文を掲載することができた。

2. 論文の受付、編集業務

2023 年の新規投稿数は 15 件、前年から継続処理している論文は 10 件であった。近年の新規投稿数増加や、J-STAGE における論文アクセス数の上昇（昨年度比 50.8%増）から、本誌の認知度が上昇していることがうかがえた。一方で、担当者の業務オーバーフローの改善が喫緊の課題であったが、本年度、メンバーの増員が叶い、また、規程を変更し、受付担当業務の一部を削減することができた。また、One Drive を利用し、編集担当委員と事務局との間でファイル共有ができるようにした

り、論文著者宛に送る様式の不具合を修正したり、編集担当委員業務の利便性を図る体制を整えた。

3. ジャーナルのオープンサイエンス化に向けて

オープンサイエンスとは、オープンアクセスと研究データのオープン化を含む概念である。「看護科学研究」は創刊当初からオープンアクセス制を採ってきた。そこで、研究データのオープン化推進を目標に、制度を整えていくことが「看護科学研究」編集委員会にて決定した。本年度、プレプリントサーバーに掲載された論文の投稿を許可する規程を新規に追加した。学術ジャーナルチームはこれに伴う事務作業を遂行した。

今年度の課題と次年度の取り組み

今年度の課題は、投稿者への査読結果報告が遅延したことである。結果、事務作業においても著者や編集担当委員との連絡が増えることとなったり、編集すべき論文が一時に偏ったりするなど業務多忙の解消に繋がらなかった。次年度は、結果報告の遅延がなるべく生じないよう工夫したハンドリングが必要である。

次年度は、オープンサイエンス化を推進するため、**J-STAGE Data** の利用開始に向けて、投稿規定の改定を行う。また、人を対象とした介入臨床研究に関する論文については、事前登録申請が必要である旨、規定に追加することとした。これら新しい制度に対応するため、ハンズオントレーニングを受講するなど、編集事務局の体制を整えていく。

2024 年 12 月に「看護科学研究」が創刊 25 周年を迎えるにあたり、記念特集号を発刊する。また、「看護科学研究」の特長を掲載した Web ページを新たに作成する。

9-5-2 6) 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣敦、

メンバー 荒木章裕、石丸智子、岩下恵子、小野治子、甲斐博美、桑野紀子、佐藤愛、篠原彩、
秦さと子、田中佳子、濱中良志、樋口幸、姫野雄太、堀裕子、丸山加菜、森加苗愛、
矢野亜紀子

当チームの目的は、本学の教育・研究を通しての地域貢献である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第 1 条）であり、分掌事項は、健康増進に寄与する地域貢献である（公立大学法人大分県立看護科学大学看護研究交流センター規程第 3 条）。

研究に関しては、サウナ入浴の心理的効果と睡眠に及ぼす影響を検討した。また、社会貢献活動としては、①大分市地域おこし協力隊文化芸術振興部門「ななせ美術館事業」『春のアート縁日 ♪』（6/4）、②大分市社会福祉協議会主催「世代間交流健康づくり事業」『スカットボール大会』（9/2、12/2、2/3）、③富士見が丘連合自治会主催「夏まつり」（7/22）、④河川協力団体ななせ交流会主催「ちっちゃなちっちゃな花火大会」（9/2）、⑤富士見が丘団地わかば老人クラブ主催「わかば会サロン」（9/23）、⑥大分トリニータ「大宮アルディージャ戦」（9/30）、⑦野津原商工会・大分市主催「ななせの里まつり」（11/5）、⑧大分県教育委員会・大分県スポーツ協会主催「総合型地域スポーツクラブ交流会」

(11/23)、⑨河川協力団体ななせ交流会主催「親子凧あげ大会」(1/27)、⑩九州陸上競技協会・大分県・大分県教育委員会・別府市・別府市教育委員会・大分市・大分市教育委員会・毎日新聞社・RKB毎日放送・OBS大分放送主催「別府大分毎日マラソン」(2/4)、⑪富士見が丘連合自治会・大分市主催「森林探検ウォーキング」(3/30)の11(13回)のイベントで学生延べ194名と共にイベントの運営や健康・体力チェック等の活動を行なった。これらの活動はコロナ禍以前と比較すると半数程度であるが、昨年と比較すると約2倍になっており、今後、徐々に増加すると考えられる。なお、これらの活動は、本学の学外HP、Facebook、Instagramに掲載した。また、大分県の保健福祉に特化した政策立案できるようなシンクタンクを目指して調査を実施した。

令和5年度計画の実施状況に関しては、2-(1)-ア-14「大分県のシンクタンクを目指して準備を開始する。」に対しては、第4期中期計画の【11】に「研究の動向に、地域の課題を解決する研究を行なっていくこと及び企業や行政、非営利団体等との連携や研究成果の社会実装化を推進する」ことを盛り込んだ。また、3-(1)-ア-17「自治体等と連携し、県民を対象とした健康増進活動に学生・教員が取り組む。」については、上述のように県内11(13回)の健康関連イベントに、学生延べ194名と教員が参加して、イベントの運営や健康・体力チェック等の活動を行った。

次年度も引き続き、学生と共に県民の健康増進に寄与する活動を推進し、研究を通して大分県や地域の課題解決に貢献することを目指す。

9-5-2 7) 知的財産本部

本部長 稲垣敦（看護研究交流センター長）

本部長 加藤典子、首藤圭、樋口幸、藤本優子

当本部の目的は、本学における発明等の研究成果の管理を行うとともに、これらの研究成果を法人の知的財産として保護育成及び活用することにより、社会の発展に寄与することを目的としており（公立大学法人大分県立看護科学大学知的財産本部規程第1条）、分掌事項は、(1)知的財産の管理に関すること、(2)知的財産の普及及び啓発に関すること、(3)知的財産の権利化に関すること、(4)知的財産の保護及び活用に関すること、(5)技術移転事業者その他の関係者との連携に関すること、(6)利益相反及び責務相反に関すること、(7)その他知的財産に関すること、である（公立大学法人大分県立看護科学大学知的財産本部規程第3条）。

今年度は、知的財産アドバイザーを雇用し、同アドバイザーの利用方法を規定し、相談申請書を作成した。また、同アドバイザーからの指摘を受け、知的財産関連規程（職務発明等規程、共同研究取扱規程、受託研究取扱規程、研究成果有体物取扱規程）を改正し、教育研究審議会及び理事会・経営審議会に諮り、承認された。また、厚生労働科学研究費に関する利益相反に関する自己申告書を確認した。

次年度は、利益相反に関する申告について再検討する。また、該当する事例が発生した時に備え、知的財産の管理、普及、啓発、権利化、保護及び活用や技術移転事業者その他の関係者との連携に対応できる体制を整える。

10 名簿

10-1 役員

理事長（学長）		村嶋幸代
理事	学部長	福田広美
理事	研究科長	稲垣敦
理事	事務局長	首藤圭
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	三股浩光
理事（非常勤）	大分県立病院長	佐藤昌司
理事（非常勤）	富士甚醤油(株)代表取締役社長	渡邊規生
監事（非常勤）	公益社団法人認知症の人と家族の会	
	大分県支部 代表	中野洋子
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝

10-2 審議会委員

経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代
学内委員	理事	福田広美
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	首藤圭
学外委員	理事（非常勤）	三股浩光
学外委員	理事（非常勤）	佐藤昌司
学外委員	理事（非常勤）	渡邊規生
学外委員	弁護士	千野博之
学外委員	日本文理大学副学長	吉村充功
学外委員	大分合同新聞社取締役	小田圭之介
学外委員	大分県看護協会長	大戸朋子

教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代
学内委員	学部長	福田広美
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	首藤圭
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学准教授	吉田成一
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学准教授	小嶋光明

学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎
学内委員	言語学准教授	宮内信治
学内委員	基礎看護学教授	秦さと子
学内委員	看護アセスメント学教授	藤内美保
学内委員	成人看護学教授	古賀雄二
学内委員	老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	草野淳子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	社会看護学教授	加藤典子
学内委員	地域看護学教授	甲斐優子
学内委員	国際看護学教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

10-3 教職員

10-3-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志		
	准教授	安部眞佐子	R6.3.31	退職
生体反応学	准教授	吉田成一		
	准教授	定金香里		
健康運動学	教授	稲垣敦		
人間関係学	准教授	吉村匠平		
	准教授	関根剛		
環境保健学	非常勤助手	秋本慶子		
	准教授	小嶋光明		
	学内講師	恵谷玲央		
健康情報科学	教授	佐伯圭一郎		
	准教授	品川佳満		
	助教	岡田悠希		
言語学	准教授	宮内信治		
基礎看護学	教授	秦さと子		
	准教授	石丸智子		
	助教	田中佳子		
	臨時助手	神矢恵美		
	臨時助手	亀山真由美	R5.4.17	採用
			R5.7.31	退職
	臨時助手	荒木庸輔	R5.8.1	採用
			R6.3.31	退職
看護アセスメント学	教授	藤内美保		
	准教授	石田佳代子		
	助教	山田貴子		
	助教	内倉佑介		
成人看護学	教授	古賀雄二	R5.4.1	採用
	准教授	森加苗愛		
	助教	佐藤栄治		
	助教	岩下恵子	R5.4.1	採用
老年看護学	臨時助手	森崎久美	R5.4.1	採用
	教授	小野美喜		
	講師	堀裕子		
	助教	中釜英里佳		

小児看護学	教授	草野淳子		
	講師	足立綾		
	助手	橋本志乃	R6.3.31	退職
母性看護学	教授	林猪都子	R6.3.31	退職
	助教	永松いずみ		
	助教	徳丸由布子		
助産学	臨時助手	今村知子	R5.4.12	退職
	教授	梅野貴恵		
	准教授	樋口幸		
精神看護学	助教	姫野綾		
	臨時助手	渡邊一代	R6.3.31	退職
	教授	影山隆之		
NP	准教授	杉本圭以子		
	助教	後藤成人		
	講師	甲斐博美		
看護管理学	臨時助手	吉村幸永	R6.3.31	退職
	非常勤助手	大島操		
	教授	福田広美		
社会看護学	講師	荒木章裕		
	助教	姫野雄太		
	助教	矢野亜紀子		
地域看護学	教授	加藤典子		
	教授	甲斐優子	R6.3.31	退職
	講師	小野治子		
	講師	藤本優子		
	助教	佐藤愛		
	臨時助手	徳丸千恵	R5.4.1	採用
国際看護学			R6.3.31	退職
	教授	桑野紀子		
	助教	丸山加菜	R6.3.31	退職
看護研究交流センター	助教	篠原彩		

10-3-2 就職相談員

就職相談員 藤川佳子

10-3-3 非常勤講師（学部）

小川伊作	音楽とこころ
澤田佳孝	美術とこころ
伊東郁子	大学ナビ講座
竹永祐子	大学ナビ講座

Gerald Thomas Shirley

	英語 I-B1、英語 I-B2、英語 II-B1、英語 II-B2、 国際看護学演習
松田美香	言語表現法
黄昞峻	韓国語
深田修	社会保障システム論
平野互	哲学入門、看護の倫理、医療福祉と人権
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
足立恵理	文化人類学入門
松本昂	微生物免疫論
松久美	災害看護論
麻生良太	教職概論、教育方法論
堀本フカエ	教職概論
横山秀樹	教職概論
赤星琴美	養護概論 I、養護概論 II
鈴木篤	教育学概論、道徳、総合的な学習及び特別活動
藤村晃成	生徒指導
飯田法子	教育相談
河野伸子	教育相談
中島暢美	教育相談
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
大渡文子	学校保健学
手嶋康深	学校保健学
吉田知佐子	学校保健学
古賀精治	特別支援教育論
藤野陽生	特別支援教育論

10-3-4 非常勤講師（大学院）

伊東朋子	基盤看護学演習
長谷川健美	NP 特論
庄山由美	NP 特論、NP 実践特論
光根美保	NP 特論、老年 NP 実践特論、老年探究セミナー
上野聖子	プライマリ NP 演習
清原小百合	プライマリ NP 演習
佐藤健誠	プライマリ NP 演習
後藤愛	NP 実践特論
管谷愛美	NP 実践特論
高根利依子	NP 実践特論
廣瀬福美	NP 実践特論、老年探究セミナー
伊東弘樹	臨床薬理学特論
龍田涼佑	臨床薬理学特論
大仲將美	老年薬理学演習
塩月成則	老年薬理学演習、老年疾病特論
佐藤博	医療安全実践演習
谷山尚子	医療安全実践演習、プライマリ NP 演習、 老年探求セミナー
田村委子	医療安全実践演習
藤谷悦子	医療安全実践演習
古川雅英	医療安全実践演習
松久美	医療安全実践演習
山本真	医療安全実践演習
小坂聡太郎	老年疾病特論
一万田正彦	老年疾病特論
糸永一朗	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
財前博文	老年疾病特論
竹内山水	老年実践演習
中村雄介	老年実践演習、老年診察診断学特論
平井健一	老年実践演習、老年診察診断学特論
安東優	老年診察診断学特論
加隈哲也	老年診察診断学特論
佐分利能生	老年診察診断学特論
永瀬公明	老年診察診断学特論
中村朋子	老年診察診断学特論
西水翔子	老年診察診断学特論

藤谷直明	老年診察診断学特論
溝口博本	老年診察診断学特論
宮崎美樹	老年診察診断学特論
立川洋一	老年アセスメント学演習
宮川ミカ	老年アセスメント演習
小栗沙織	小児疾病特論
池内真代	小児疾病特論
糸永知代	小児疾病特論
井上真紀	小児疾病特論
井原健二	小児疾病特論
清田晃生	小児疾病特論
久我修二	小児疾病特論
小林修	小児疾病特論
佐藤亮介	小児疾病特論
末延聡一	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
保科隆之	小児疾病特論
前田知己	小児疾病特論
山本大貴	小児疾病特論
原卓也	小児疾病特論、小児アセスメント演習
江口春彦	小児診察診断学特論
長濱明日香	小児診察診断学特論
別府幹庸	小児診察診断学特論
松本康弘	小児薬理学演習
飯田浩一	周産期特論
後藤清美	周産期特論
小山尚子	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
上野桂子	母子成育支援特論
井上祥明	母子成育支援特論
佐藤敬子	母子成育支援特論
平野互	母子成育支援特論、看護倫理学特論
穴井麻友美	リプロダクティブ・ヘルス特論
大神達寛	リプロダクティブ・ヘルス特論
島本久美	リプロダクティブ・ヘルス特論
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルス特論

生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
實崎美奈	ウイメンズヘルス特論
安部真紀	周産期診断技術演習、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
川井梨沙	地域母子保健学特論、広域看護展開特論
佐藤由美子	地域母子保健学特論、広域看護展開特論
戸高佐枝子	助産マネジメント論
川崎涼子	広域看護学概論Ⅰ
藤内修二	広域看護学概論Ⅰ、疾病予防学特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
玉井文洋	健康危機管理論
本山秀樹	健康危機管理論
藤野里紗	広域看護アセスメント学演習
池邊淑子	疾病予防学特論
三浦源太	疾病予防学特論
井上真	薬剤マネジメント特論
黒川竜紀	病態生理学特論
黒木雪絵	フィジカルアセスメント学特論
大田えりか	看護科学研究特論、健康科学研究特論
甲斐仁美	看護管理学特論
山崎清男	看護教育学特論
竹村陽子	看護コンサルテーション論
小池智子	看護政策論
小山秀夫	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
Gerald Thomas Shirley	英語論文作成概論
甲斐倫明	放射線健康科学、特別演習

10-3-5 事務職員

総務グループ	局長	首藤圭	R5.4.1	採用
			R6.3.31	退職
	主幹	尾割勇作	R6.3.31	転出
	主査	松尾美沙	R5.5.14	転出
	副主幹	吉野美穂	R5.5.15	転入
	主任	安部翼		
	事務員	木下明美		
	事務員	花本真弓		
	事務員	木村水紅	R5.4.1	採用
	国際交流アドバイザー			
財務グループ	Gerald Thomas Shirley		R5.4.1	採用
	知的財産アドバイザー			
		松下幸之助	R5.4.1	採用
	主幹	伊東美穂	R6.3.31	転出
	主幹	小野逸郎	R5.5.15	転入
	主任	久保紘子		
	事務員	岸田美由紀		
教務学生グループ	主幹	菊池誉志	R5.5.14	転出
	主幹	長瀬英子	R6.3.31	転出
	副主幹	原田千夏	R5.5.14	転出
	副主幹	佐藤英		
	主査	神崎正太		
	主任	大東直子	R5.5.15	転入
			R6.3.31	転出
	事務員	松尾京子	R6.1.1	採用
			R6.1.17	退職
	事務員	久保友恵	R6.3.1	採用
図書館管理グループ	保健室職員	釘宮由美子	R6.1.31	退職
	保健室職員	安東悦子	R6.1.25	採用
	サブリーダー	白川裕子		
	非常勤司書	中野智子		
	非常勤司書	甲斐史織	R5.4.1	採用
看護研究交流センター	事務員	神崎純子		
	事務員	野尻忍	R5.4.1	採用
			R5.9.30	退職